

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

增

鏡

岡
一
男
校
註

朝日新聞社刊
日本古典全書

岡 一男(をかかずを)

明治三十三年福井市生。大正十三年早稻田大學文學部卒業。文學博士。早稻田大學名譽教授。主著「竹取物語評釋、道綱母、源氏物語の基礎的研究、源氏物語事典、平安朝文學事典、日本古典全書・大鏡等。

日本古典全書

「増鏡」 岡 一男校註

昭和二十三年十月二十五日初版發行

昭和四十九年三月三十日第十三刷發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社(東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮)

定價 八四〇圓

目次

解 說……………三

一、歴史文學としての増鏡の地位……………三

二、書 名……………五

三、作 者……………五

四、著作年代……………八

五、増鏡の諸本、特に古本と流布本について……………二

六、増鏡の文藝形式とその傳統……………一六

七、増鏡の史觀と文藝的價值……………二五

八、註釋・評論の文獻……………三六

系 圖……………四

梗 概……………五

凡 例……………六

本 文……………空

目次

第一	序……………	六	第九	章・枕……………	一八九
第二	おどろの下……………	九	第十	老のなみ……………	二〇三
第三	新島守……………	九	第十一	さし櫛……………	二〇三
第四	藤衣……………	二〇九	第十二	浦千鳥……………	二〇四
第五	三神山……………	二二三	第十三	秋のみ山……………	二七三
第六	内野の雪……………	二三〇	第十四	春の別れ……………	二九〇
第七	おりゐる雲……………	二四〇	第十五	むら時雨……………	三〇三
第八	北野の雪……………	二五〇	第十六	久米のさら山……………	三三七
	飛鳥川……………	二六六	第十七	月草の花……………	三五二

增

鏡

岡

一

男

解 説

一、歴史文學としての増鏡の地位

増鏡は大鏡系統の歴史物語であつて、いはゆる「鏡物」と稱せられる一類の文藝に屬する。大鏡、水鏡とあはせて三鏡と呼び、さらに今鏡を加へて、四鏡と稱することもある。

大鏡は大體鳥羽天皇の頃に出て、文徳天皇から後一條天皇の萬壽二年までを、ついで高倉天皇の頃今鏡が出て、後一條天皇から高倉天皇までを、ついで後鳥羽天皇の頃に水鏡が出て、神武天皇から仁明天皇までを物語つたが、このつぎに來るのが増鏡で、文治二年後鳥羽天皇の御即位から始めて、元弘三年（正慶二年）後醍醐天皇が隠岐から京都に還幸なされるまでの十五代百五十一年間の編年體の歴史物語である。

もつとも、増鏡の序によると、藤原隆信の「いや世繼」といふのがあつて、高倉・後鳥羽兩天皇の御代のことを記し、今鏡と増鏡とのあひだの橋掛りとなつてゐたとのことであるが、それは早く滅んだ。その缺を補うたのが、近世の荒木田麗女の「月の行方」で、高倉・安徳兩天皇時代の事蹟を敘してゐる。なほ

麗女には「池の藻屑」の著があつて、増鏡の後を承けて、後醍醐天皇の元弘三年から後陽成天皇の慶長八年までの二百七十一年間の歴史を載せてゐるが、この二著は擬鏡體の歴史物語といふべきで、眞正の鏡類に入れるのには、年代が新らしすぎる。また、順徳天皇時代の「秋津島物語」は、水鏡を承けて、鹽土翁しほつちのおきなに天地開闢から神武天皇降誕までの物語を聴く趣向になつてゐるが、實は日本書紀の神代の卷を假名で抄したものに過ぎなかつたためか、餘り流布しなかつたので、普通鏡物のなかに數へられない。また藤原茂範の著した「唐鏡」といふ支那の歴史を伏羲氏より宋の太祖建隆元年まで敘してゐる書もあるが、これは日本の歴史ではないから、やはり高閣に束ねられて來た。それで結局、鏡物といふと、大鏡・今鏡・水鏡・増鏡の四鏡をさすこととなり、そのうちの傑作としては、大鏡・増鏡の二鏡が擧げられる。といふのは、今鏡は、文章は王朝風の優艶な雅語で綴られてゐるが、中心となる人物も事件もなく、對象となつた時代も單調な平安季世であるから、部分としておもしろい箇所があつても、全體としては平板で弛緩してゐるし、水鏡は、また單に扶桑略記を稚拙な雅語に譯したに過ぎないので、後者の闕文を考證する際の資料にはなるが、文藝としての價値は最も低いからである。もし、廣く國文の歴史物語といふ觀點に立てば、これに榮花物語を加へて、榮花・大鏡・増鏡をわが代表的歴史文學と稱することができよう。そして、これをやはり國文の史論の三大傑作である愚管抄・神皇正統記・讀史餘論とあはせて觀るのもおもしろからうし、また和漢混淆體の軍記物語の三大代表作である平家物語・源平盛衰記・太平記と比較しても、啓發

されるところが多いであらう。ことに史學的價值からいふと、榮花物語と大鏡とが、共に藤原氏全盛の世を寫してゐるに對して、増鏡が單獨で、公武對立し波瀾重疊たる鎌倉時代を對象としてゐるのは、ユニークであつて、他に比類がない。

二、書名

増鏡といふ書名は、序の老尼の「愚かなる心も見えんます鏡古き姿に立ちは及ばで」といふ謙遜した詠と、それに和した筆者の「今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる世世の跡に重ねん」といふ激勵の歌から出て、大鏡・今鏡などの書名に倣らつて、「眞澄鏡」マコソノカガミすなはち老尼の昔話をそのまま寫した曇りのない鏡、あるいは、鎌倉時代の歴史を明瞭、微細にその眞實相を描いた書物の義であらうが、それとともに前の三鏡に一鏡を増す意味もかけてある。また、増鏡は古く増鑑（應永古寫本）眞寸鏡（看聞日記・椿葉記御草本・親長卿記）ますかゞみ（宣胤卿記）益鏡（親長卿記）ます鏡（前田侯爵家藏永正十八年本）とも記してゐて、宛て字が區區であつたが、近頃では増鏡と書くやうに統一されて來た。

三、作者

この書の作者に關しては、從來一條冬良説（東見記・本朝通鑑・扶桑集・群書一覽）及びその父の一條

兼良説（指南抄）があつたが、これらの人人は増鏡の成立が確證せられる永和二年より遙か後に生まれてゐるから、夙に屋代弘賢・伴信友らによつて破棄された。また僧慈延は「隣女晤言」で、屋代弘賢はその校本の奥書で、兼良の父である一條關白經嗣説を提唱したが、經嗣は永和二年に十九歳であつて、増鏡の著者であるためには若過ぎる。さらに經嗣の實父二條良基に遡らせた説も彰考館目錄別本に見えてゐて、「増鏡校所藏應永本云、園攝政良基作」と記してある。この應永本といふのは、現存の増鏡の最古寫本である應永九年本（すなはち永和二年本を寫したものと一致するかどうか不明であるが、一應その著者とする二條良基について考へてみる必要はある）。

良基は、後醍醐天皇が隱岐から京都に還幸あらせられた際、特にお召し出しになり、氏長者たるべき宣旨と都の管領をすべき仰せを蒙つた二條前關白道平の嫡男で、やはり後醍醐天皇に仕へ、妹はその女御となり天皇南狩の後は北朝に志を致し、光明・崇光・後光嚴・後圓融の四朝に歴事し、關白・氏長者・従一位・太政大臣に陞り、後小松天皇の御代に攝政となり、その嘉慶二年に六十九歳で薨じてゐるから、永和二年には五十七歳で、年次のうへからはさしつかへない。しかし、良基は和歌よりも連歌を好んで、菟玖波集・連歌新式・連理祕抄などの著があつて、この方面で有名であるから、増鏡の著者としてはどうかといふ説もあるが、かれは歌道にも思ひを致し、新後拾遺和歌集の假名序も書いてをり、近來風體抄・愚問賢註などの歌學書を著して、近世和歌の古體をうしなつたことを慨嘆し、心の幽玄と詞の洗煉とを主張してゐる。

るし、また累葉攝關の家に生まれ、宮廷の事情にも精通し、文獻も豊富であつたらうから、かならずしも増鏡の著者として不適任ではない。増鏡は源氏物語を非常に模倣してゐて、著者が源語をよく讀んでゐたことが知られるが、良基ほどの學者が増鏡の著者程度ほどにも源氏物語に通じてゐなかつたとは考へられないので、この點ではかれを増鏡の著者に推すのに不安はない。また文藻からいふと、かれの遺著の文章のやや雄勁なのと、増鏡の文章の優艶なのと、多少の相違が感ぜられるが、これは女性の筆に假托したからで、増鏡のなかにどうかすると、和漢混淆文が顔を出すのは、その馬脚があらはれたと見てよい。また、増鏡のなかに勅撰集の歴史や歌壇の消息や二條家の内情やが比較的にこまかに述べられてゐるのも、二條爲世の弟子の頓阿を擧用した良基にふさはしい。なほ、増鏡が後鳥羽院の北條氏討伐の決意を示された「おどろのした」に始まつて、後醍醐天皇の建武の中興を描いた「つき草の花」で終つてゐるのは、武家に反感をもつ者、あるいは大覺寺統に傾倒してゐる者の著になるからだといふ説もあるが、正中の變が勃發して、後醍醐天皇の討幕計畫が發覺した條に「故院後宇多おはしまししほどは、世ものどかにめでたかりしを、いつしか、かやうのことも出で來ぬるよ」といつた時人の評をひき、獲麟の卷を「つき草の花」と名づけてゐるのは、そのうつろひやすいことを示してをり、新田義貞が、足利尊氏の子の義詮の四歳なるを大將軍にして義兵を擧げたなど記してゐるのは、足利幕府に媚びを呈してゐる觀がある。護良親王らの御還俗に對しても、幾分皮肉の眼で見えてゐるところがある。また、持明院流の後深草上皇や光嚴天皇に對

しても、決して悪意は持たないで、かへつて謳歌してゐる。これらの點から考へて、良基を増鏡の著者と
してかならずしも妥當でないとはいへないと思ふ。あるいはさきにもいつたとほり、良基が増鏡の著者と
なるほど源語に通曉してゐたか疑がはしいと思ふ人があるかも知れないが、「おどろのした」にあるやう
に、秦何某といふ御隨身さへ、源氏には通じてゐた時代である。良基ぐらゐな學者が、増鏡程度に源氏物
語をこなされないことはない。殊に増鏡の源氏物語の引用のしかたは連歌的などころがあつて、當時の連
歌師の聖典が、また源氏物語だつたことも参考すべきである。

ところが近年、和田英松氏・中村直勝氏・荒木良雄氏らによつて、それぞれ二條爲明説・四條隆資説・
丹波忠守説が主張されて來たが、いづれも根據薄弱で、そのうち四條隆資は「すみぞめの色をもかへつ」
と増鏡の卷末に最も手きびしくやりこめられてゐるし、丹波忠守は建武の中興後まもなく歿してをり、二
條爲明は後光嚴天皇の貞治三年に新拾遺集編纂の途中薨じてゐて、共にそれが私の考へてゐる増鏡の成立
年代の遙か以前であるから、にはかに賛成しにくいのである。それで私は、ここでは假りに塙本奥書に従
つて、松本愛重氏や坂井衡平氏らと共に、増鏡の著者を、二條良基としておく。

四、著作年代

つぎに増鏡の成立年代について述べると、この書が元弘三年六七月頃をもつて獲麟としてゐるから、そ

れ以後のものであることには疑ひない。なほ、序の二月の嵯峨の清涼寺の涅槃會における老尼の物語とする著者の意圖によると、翌建武元年以降の書に擬してあることも明らかである。また、この校註書の底本とした尾張徳川家藏の古寫本の奥書には、

永和二年卯月十五日

この本、女房のうつしがきにて侍るを、そのままうつし侍るほどに、如法不審なることども侍り。いとど僻書もおほく侍らむ。よき本をたづねて、靜かになをし侍るべし。

應永九年六月三日うつしをはりぬ。

といふ識語があるから、増鏡が遅くも永和二年四月十五日までには成立してゐたことが知られる。それで、本書成立の上限は建武元年であり、下限は永和二年であつて、その間四十二年のあひだに著作されたことは疑ひがない。ところで、文保初年の二條富小路新内裏移御を述べて「近きこと人みな御覽ぜしかばなかなかにて止めつ」（うら千鳥）といひ、元徳三年の北山行幸について「この中に御覽じたる人もおはすらん。うけたまはらまほしくこそ侍れ」（むら時雨）などといつてゐるのは、本書を建武ころのものとするにふさはしい。伴信友は、比古婆衣卷六において、増鏡に南北朝對立の意識の出てゐないところから、兩朝對立の形勢が確然としない以前に置かうとするのであるが、これは解釋のしやうで、近藤瓶城のやうに「信友大人は、北朝以前の書の様にいはれたれど、京師を復したる、高氏ひとり功の様に、義貞

の家を高氏が末家の様に、鎌倉攻めを高氏が子をもりたてて兵を擧げる様にかけるも、大塔の宮の復飾を意にみたぬ様に書けるも、自ら高氏が地をなせるかとも見ゆ。かの人、世を得ぬ先のふみとのみも定め難くなむ」(史籍集覽校正本巻尾)と反對にもいへる。ことに巻末に、

誰にかありけむ、そのころ聞きし、

墨染の色をかへつ月草のうつればかはる花のころもに

とあるのを見ると、「そのころ聞きし」の語によつて、この書の獲麟の正慶二年は、その執筆當時から相當年月を経てゐる趣きが知られ、「月草のうつればかはる」といふ歌は、建武の中興がまもなく瓦解したことを示唆してゐるやうに思はれる。もつとも、本書の著者を従來の解釋のやうに南朝に甚深な同情をよせてゐた者の作とすると、後醍醐天皇の隱岐還幸をもつて終つてゐるのは、暗に南朝の天子がふたたび吉野から歸京される日を期待する心からともとれるし、巻末の歌は、それとなく、いまの北朝の榮華もうつるぞと示唆したとも見られよう。

それに和田英松博士が「増鏡の研究」(改造社版日本文學講座所收)で指摘されたやうに、「久米のさら山」に、光嚴天皇の皇子たちがあまた三條の御腹にお生まれになつたことを記してゐるが、これは建武・延元以後のことであるから、本書が延元三年(曆應元年)以後に成立したことがわかる。

なほ、これにつけ加へて、私は「さしぐし」の巻の、つぎの言葉に注意したい。それは、老尼が龜山院

の後の新陽明門院の御行跡を語つた後に、

「さのみかかるとも御ことどもをさへ聞ゆるこそ、もの言ひさがなき罪、さり所なけれど、よしや、昔もさることありけりと、このごろの人の御有様も、おのづから輕きことあらば、思ひゆるさるるためしにもなりてんものぞと思へば、遠き人の御ことは、今は、なにの苦しからんぞとて、少しづつ申すなり」と、老尼うち笑ふもはしたなし。記者「いづら、このごろは、誰かあしくおはする」と問へば、老尼「否否、それはそら恐ろし」とて、頭をふるもさすがをかし。

といふ問答のあつたことを記してゐるところである。これによると、増鏡の執筆當時に、どなたか新陽明門院のやうなふしだらな皇妃がをられたことがわかるが、いま大日本史の「后妃列傳」によつて、建武以降永和以前において、その例を求めると、北朝の後光嚴院の後宮にただ一つある。すなはち、同書に、

後光嚴院、晩に權大納言藤原資名が女を召して、これを幸し、命じて後圓融院の保母となし、二位を授け、呼びて二品の局といへり。二品の局、自らその寵をたのみて、すこぶる不法多し。かつて北面の土藤原懷國と私通し、請ひて備前守に拜す。懷國、勢ひをたのみて同列を凌忽しければ、後光嚴院稍稍これを悪みて、食邑・給人を收めたり。後光嚴院崩じて、僅かに十餘日に及び、懷國害に逢ひ、二品の局も、また外に出でて尼となりぬ。

とある、その二品の局をさしてゐるのではなからうかと思ふ。増鏡の記者が「いづら、このごろは、誰か

あしくおはする」と問うたのに對して、老尼が「否否、それはそら恐ろし」と答へたのは、懷國が勢ひをたのんで、同列を凌忽するといふやうな亂暴者であつたからだらう。それで、わたくしは増鏡を後光嚴院の應安末に成立したのであらうと思つてゐる。二條良基の五十代の初めの著作であらう。

五、増鏡の諸本、特に古本と流布本について

増鏡の最古の寫本としての應永九年本は、上中下三冊からなり、十七帖に分かたれてゐる。これに尾張徳川家本と圖書寮本とがある。これにつぐのが永正十八年本で、前田侯爵家と圖書寮とに藏せられてゐてその奥書に、

此三冊上中 三宮豐前守入道 釋宗觀俗名藤原忠胤所持本也宗觀目 式部卿邦高親王有一覽、外題令書給返給云々、可謂面目、

傳子孫莫處聊爾者乎、余逐覽之次、相違所々加筆爲後證記之、

中御門 一位大納言入道春秋
八旬

永正十八曆仲旬春夾鐘天 桑門 乘 光

とあるが、桑門乘光は、中御門宣胤である。この他、近衛公爵家藏本・谷森善臣氏舊藏本・桂宮本は、いづれもこの系統の十七卷本である。この十七卷本は、のちにいふ二十卷本とは異つて、年次の錯亂や、記

事の重複が無く、本書の原形をさながらに傳へてゐるものである。この十七帖の卷名は、

- | | | | |
|----|-------|-----|--------|
| 第一 | おどろの下 | 第十 | 老のなみ |
| 第二 | 新島もり | 第十一 | さし櫛 |
| 第三 | ふぢ衣 | 第十二 | うら千鳥 |
| 第四 | 三神山 | 第十三 | 秋のみ山 |
| 第五 | 内野の雪 | 第十四 | 春のわかれ |
| 第六 | おりゐる雲 | 第十五 | むら時雨 |
| 第七 | 北野の雪 | 第十六 | 久米のさら山 |
| 第八 | あすか川 | 第十七 | 月草の花 |
| 第九 | 草まくら | | |

である。そして第六までが上冊、第十までが中冊、第十一以下が下冊に收められてゐる。

二十卷本系統の諸本は、この十七卷本の一部を増補したものである。その原形と見なされる前田家所藏の延寶書寫の後崇光院御自筆本について、その主要な異同點を考へると、(1)「内野の雪」を大幅に増訂し、(2)これに「煙のすゑすゑ」の一篇を増加してゐる。(3)「北野の雪」にも新たに續篇一篇を加へてゐるなどのことが知られる。もつとも卷次は舊のまま、「煙のすゑすゑ」は第五に、「北野の雪」

の續篇は卷名を附けないで、第七に添へてある。なほ、後嵯光院の看聞御記の永享四年卯月三日から六月十七日の條に「眞寸鏡」書寫のことが出てゐるが、「此間書寫畢三帖^{上中}又一帖^{第四}、七」と記されてゐて、三帖^{上中}とあるのは永和應永本の十七卷で、又一帖^{第五}、七とあるのは、(1)の「内野の雪」の増訂本(2)「煙のすゑすゑ」(3)の「北野の雪」の續篇の三卷らしく思はれる。永和應永本の書寫された應永九年から、この永享四年までの三十年間に何人かによつて、この三篇の増修がなされたらしい。

いま、その増修のあとを見ると、(1)の「内野の雪」では、仁治三年九月の順徳院崩御から寛元五年二月の後嵯峨院の石清水參籠までが増修してある。その追加の記事は、寛元元年五月の最勝講・源通光鳥羽八講・普賢寺基通佛事、六月の大宮院の皇子(後深草天皇)誕生の一層詳細な記事。それに、宗尊親王の御五十日、寛元二年十二月の石清水・賀茂行幸、仁和寺法助灌頂などである。(2)の「煙のすゑすゑ」では、寶治二年十月二十二日の閑院殿内膳屋の火事で、神代より傳はつた平野・忌火・庭火といふ釜のうち、二つは圓融天皇の永觀ごろ盗み取られ、忌火だけが残つてゐたのが焼けたこと、宗尊親王の御書始め、建長元年正月一日院の拜禮、二月一日閑院内裏の火事、三月二十三日からの京都の大火、蓮華王院の焼亡などの新らしい記事が見えるが、寶治二年十月二十日の宇治紅葉御覽の行幸の記事などは「内野の雪」よりは精細ではあるけれども重複してゐる。また「煙のすゑすゑ」の年紀は、寶治二年十月二十日から建長元年三月晦日までで、年紀も「内野の雪」と重複し、しかも「内野の雪」は建長七年頃までの記

事があるので、錯亂もするのである。(3)の「北野の雪」續篇は、文永三年四月蓮華王院供養御幸、文永四年二月淨金剛院涅槃會、四月後嵯峨院大宮院如法經書寫、五月大雨、九月兩上皇大宮院日野山庄御幸、文永三年八月の京師大風、文永四年十月西園寺太政大臣公相薨じ、その葬送の夜、首が盗まれたこと。(これは公相の顔の下短かで、目が顔の中央にあるやうであつたので、外法の料にといつて盗み去られたのである)。十二月左大臣近衛基平に攝籙(關白職)が渡つたことなどが、新らしい記事としてつてゐる。しかし、宗尊親王の將軍退職や、公相の薨去前後のことや、皇后御産(後宇多天皇降誕)の條などは、舊篇と重複してゐる。年紀も文永三年、四年と重複してゐる。

この「内野の雪」の増訂、「煙のすゑすゑ」と「北野の雪」續篇の新添は、原本の十七帖を二十帖にみたさうとして、その方法が拙劣であつたために、年紀や記事の錯亂を招いたものであるが、近世に入つてからは、この二十卷本が寫本・古活字本・印本として流布した。しかし、篇次が一定しないし、卷名も小異があるが、大體、烏丸本や米山本に依據して、「内野の雪」は、原本を捨て、増訂本の方を取り、「煙のすゑすゑ」を「内野の雪」のつぎにして、「北野の雪」は「山のもみぢ葉」と改稱し、そのつぎに續篇を置き、これに「北野の雪」の卷名を移し、(4)第十一「さし櫛」を「今日の日かけ」「つげの小櫛」にわかつた二十卷本が、明治三十年十月、和田英松・佐藤球兩氏共著の「増鏡詳解」の本文に採用されてから、この方が十七卷本より一般に流布した。しかし、この増鏡詳解の本文が、史實によつて、年紀を正

し、「内野の雲」の末文を「煙の末末」の終りに移してあるのは、後に和田博士が自認されたやうに武斷であり、十七卷本の「内野の雪」を捨てて、増修本の方のを取つたのも、原本の面目を傷つけるものである。（増鏡の研究）

そこで、近來では、應永古寫本による覆刻が行はれ、昭和六年刊行の和田英松博士校訂の岩波文庫本、昭和九年刊行の佐成謙太郎氏の新訂要註増鏡、昭和十五年刊行の黒板勝美博士編輯の新訂増補國史大系は、前田家藏の後崇光院御自筆本によつて、「内野の雪」の増補せられてゐる部分と、「煙のすゑすゑ」及び「北野の雪」の續篇をも附載してゐる。しかし、わたくしはこの三篇は後人の修補に係り、原作の眞面目を損ふものと思ふので、この校註の本文は、やはり永和應永本・永正十八年本系統の十七卷本によることとしたが、その方が文藝的價值も高く、原著者の史觀もはつきり把握できると思ふ。

六、増鏡の文藝形式とその傳統

増鏡が大鏡の系統をひいてゐることは既にいつたが、大鏡が雲林院の菩提講の講師の來る間のつれづれを場面にとり、大宅世繼を主な語り手として、これに夏山繁樹夫妻、及び二十歳許りの生侍を配して、あるいは合ひ箱を打たせたり、質問させたり、批判させたりしてゐるのに反して、増鏡の方は、ただ二月の

中の五日に嵯峨の清涼寺に詣でた著者が、「八十にもや餘りぬらむ」と見えて、實は「百とせにもこよなく餘」つた老尼と本堂の佛前の局に參籠することとなり、その老尼の昔話を筆記したのが本書であるよし、序に斷つてあるだけで、本文にはその尼のことや、記者のことは、ほとんど出て來ない。ただ、後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの歴史が、源氏物語・榮花物語式の優艶な擬古文で編年體で記されてあるだけで、決して、大鏡のやうに、語り手の口吻をさながらに寫すといふこともない。もつとも、さすがに、

かやうのことは、皆人知ろし召したらん。こと新らしく聞えなすこそ、老いのひが言ならめ。(おどろの下)

かやうの類ひ、すべて多く聞ゆれど、さのみは年のつもりにえなん。いままた思ひ出せば、ついで求めてとて。(新島もり)

皆人知ろし召したらん。なかなかこそ。(内野の雪)

御返りごと忘れたるこそ、老いのつもり、うたて口惜しけれ。(北野の雪)

近きことは、人みな御覽せしかば、なかなかにてとどめつ。(うら千鳥)

なにかはさのみ、皆人もゆかしからず思さるらんとてなむ。(久米のさら山)

などいふ言葉が散見してゐて、多少老尼の口吻を思はせないではないが、擬古文であるから、大鏡の翁の言葉のやうになまなましく響かない。鎌倉時代の普通の文章は方丈記・平家物語・太平記のやうな和漢混

清文であつて、これらの書の對話の箇處には時代人の俗語もあらはれるが、それは増鏡の文章とはすこしも似てゐない。それにかういふ言葉は、大抵省筆の便宜のために用ゐてあつて、大鏡のやうに積極的に對話を活かし、全篇をドラマテイクに構成する意圖がない。以上のほかに、増鏡の本文のなかに、著者の地の文として、老尼の態度や、老尼と著者との對話や、老尼の具してゐた若い侍女の質問などが、二三箇處挿入されてあるが、それは唐突であつて、反つて讀者の感興をうすくするほどのものである。

その一つは「三神山」の卷に、四條天皇の崩御の後、まだつぎの帝が決まらなかつたとき、順徳院の母宮の修明門院と土御門院の母宮の承明門院との御二方が、御めいめいに、あるいは御孫宮の即位といふことになりはしないかと、さまざまに祈禱されたり、あるいは白川に人を立てて、關東の使者の入京後の動靜を偵察せしめられたりしたことを敘した際に、突然「例の口すげみてほほゑむ」の語を挿んで、それを物語つてゐるとき老尼の話しぶりを形容して、折角、本文に熱中してゐる讀者をまごつかせて、急に序の清涼寺の局の場面を想起させるなどは罪である。その二に、とりわけひどいのは「さしぐし」の卷の初めの、西園寺大納言實兼の姫君の入内を述べたところで、主上の御使ひとして姫君のもとに頭中將爲兼朝臣が御消息を持つて來たと老尼が語ると、「また、この具したる女、いつぞや實教の中將とこそは語り給ひしかといふ」などあるのは、随分だしぬけで、大抵の讀者が混亂させられるのも無理がない。「この具したる女」といふのは、序にある老尼の「具したる若き女房」で、老尼の命令で、僧坊へ佛前にささげる御燈明の

ことをいひつけに行つたのが、すでに局に歸つて來て、著者と共に老尼の話を聽いてゐて、それが突然口を挿んで、「いつぞや御使は實教の中將であつたとお話しなされたではありませんか。爲兼朝臣はお間違ひでせう」と反問したのである。

その三は「むら時雨」の卷に、元徳三年三月後醍醐天皇の北山行幸を叙したところに、「その日のこと見給へねば、さだかにはなし。幼なき童などの、しどけなく語りしままなり。この中に御覽じたる人もおはすらん。承らまほしくこそ侍れといふ」などとあるのも、かなり唐突であらう。もつとも、序にことはつてあるやうに、時は二月十五日の釋迦入滅の日であり、場所はインド傳來の如來像を安置した清涼寺の本堂の佛前の局であるから、參籠の人人の多かつたことはいはずと知れたことであるし、老尼が昔話をしてくれさへすれば、「今宵、誰も御とぎせむ」と著者がはげましたことも記してあるのだから、よいやうなもの、他の人人が聽衆になつたかどうかは明瞭には述べてなかつたのだから、ちよつと驚かされる。なるほど、前に擧げたやうに「皆人知ろし召したらん」とか「近きことは人みな御覽ぜしかば」といふ句もあつたけれど、それは著者一人に對してもさしつかへない言ひ方である。が、「この中に御覽じたる人もおはすらん」はどうしても多數の聽衆を豫想した口振りで、序のことなど忘れてゐる結末に近い部分に、たつた一回多數の聽衆のあつたことを持ち出すなどは、餘り良い趣味でもなからう。なほ、この北山行幸の條は、舞御覽記によつてゐることが一般に知られてゐる。この書は八十餘りの老尼が「鳩の杖」に

よつて參會した見聞記になつてゐて、それが増鏡の序の老尼のモデルとなつたらしいから、わざわざこゝでは「幼なき童などの、しどけなく語りしままなり」とそらとぼけて、舞御覽記の老尼と別人であることを示したといふ平田俊春氏の吉野時代の研究の考へはおもしろい。

その四に老尼と著者との問答を記したところを擧げると、「さしぐし」の卷に、龜山院の女御新陽明門院の行跡を物語つたのちに、老尼が「さのみかかる御ことどもをさへ聞ゆるこそ、ものいひさがなき罪、さり所なけれど、よしや昔もさることありけりと、このごろの人の御有様も、おのづから輕きことあらば許さるるためしにもなりてんものぞと思へば、遠き人の御ことは、いまはなにの苦しからんぞとて、少しづつ申すなり」とうち笑ひながらいひわけするのを「はしたなし」と思ひながらも、著者が「いづら、このごろは誰か悪しくおはする」と一步突込んだ質問をすると、老尼が「否否、それはそら恐ろし」と頭をふつたのもさすがにをかしかつたとある條である。これはわれわれに、増鏡の成立年代に大きな示唆を與へた箇處であり、老尼の身ぶりも、臺詞も生きてゐて、なかなかおもしろい。が、こんな長い物語のなかで、ほんの二三行では、かへつて目ざはりであるといつてよい。

それと反對に、増鏡が老尼の昔話の速記でなく、著者の編纂した史書にすぎないことを示すものもすくなくない。例へば、

また修明門院のおんはらからの甲斐の宰相中將範茂など、つぎつぎあまた聞ゆれど、さのみは記し

がたし。(新島もり)

例のことなればうるさくて、さのみもえ書かず。(老のなみ)

よろづ哀れなることのみ、書きつくしがたし。(うら千鳥)

誰も誰もこの筋にのみまとはれて、花のみゆきの外は、めづらしきふしもなければ、さのみも記しがたし。(むら時雨)

などいふ地の文があつて、折角、序において讀者に抱かせた嵯峨の清涼寺で、老尼の物語りを聴いてゐるのだといふイルージョンをたたき壊してゐる。かういふことから、従來の文學史家は、増鏡が大鏡を模倣しながら、それにもかかはらず大鏡の問答文學・對話文學としての大きな特色を忘れて、ただ古老の昔話といふ形式だけを承け繼いだことを非難するが、これは増鏡ばかりでなく、今鏡、水鏡もさうなのである。

そこでわたくしの問題にしたいのは、なぜ今鏡以下の鏡物が大鏡の問答文學としてのおもしろさを失なつて、ただ古老の昔話といふ形式だけを學んだかといふことである。これに對するもつとも簡單な答へは、大鏡以後の人人が問答文學としての大鏡の面白さを解さなかつたとすべきであらうが、鎌倉時代の初期に出た無名草子や、秋津島物語などは大鏡の問答文學としての方面を發展させてゐるやうであるから、その考へは成り立たない。

それに、今鏡にしても増鏡にしても、書名と、老人の昔話といふ點だけは大鏡に似せてあるが、卷名、文章、多数の和歌の挿入などは、すべて榮花物語の亞流である。だから、問題は今鏡以下の鏡物がなぜ大鏡の老人の昔話といふ形式だけを學んで、問答文學としての方面を閑却したかでなく、全然、榮花物語の模倣をこととする今鏡などの鏡物が——今鏡はまだしも大鏡の紀傳體にならつてゐるからよいとしても、特にまつたく編年體である水鏡・増鏡などが、なぜ書名と老人の昔話といふ形式だけを大鏡から學んだかである。それにはたつた一つの答へしかない。

それは日本の古代の歴史といふものが、舊辭から出發してをり、口誦的な性質を持つてゐて、語り部の老人たちによつて傳へられ、一般民衆も、老人から昔話を聴くのを悦んだといふ事情によるのである。萬葉集卷三の持統天皇と志斐姫との贈答歌はこれを證する。また古語拾遺の序文には、「蓋聞ク、上古之世、未_レ有_二文字_一、貴賤老少、口口相傳_ヲ。」とあるし、そのつぎに、「書契以來、不_レ好_レ談_ヲ、古_{ヘテ}、浮華競_ニ興_リ、還_テ嗤_フ舊老_ヲ。」とあるから、やはり書契以前は舊老が故事を説き、少者がこれを傳へたのであらう。なほ、風土記撰進の勅令のなかには、古老の相傳ふる舊聞遺事を言上せしめよ、との言葉があるが、おそらく古事記・日本書紀のもつとも端初的な形態は、宮廷・貴族・豪族に附屬せる語造_{（かたりのきむろ）}・語臣_{（かたりのおみ）}らの古老の傳承した舊辭であつたらう。それが支那の史書を模倣した國史の官撰が行はれるやうになつて久しく忘れられてゐたのであるが、一度大鏡の中で翁の昔話といふ形式で復活されると、それ以後の歴史物語はみ

なこの形式に従ふこととなつたのである。

といつて、古老の昔話といふ形式は、なにも大鏡の著者が突然再興したわけではない。竹取物語・宇津保物語・落窪物語・今昔物語集などは別にことわつてないが、やはり古老の昔話の形式となつてゐる。これらは男性の手になつたのだが、女性の筆になる源氏物語のやうなものも、著者が源光の嫡妻である紫の上の侍女と、養女である玉鬘の侍女から傳承した源一家の榮華や戀愛の物語を記述した體裁になつてゐる。ただこの形式を歴史物語に、より效果的に、よりヴィヴィッドに活用したのが、大鏡の著者である。

普通、大鏡は支那の史書の紀傳體に擬したとされてをり、今昔物語集の本朝の部の影響をうけてゐると考へられるが、また、その對話體の記述は、五十嵐力博士によつて、源氏物語の「帚木」の雨夜の品定めヒントを獲た（新潮社版日本文學講座所収大鏡研究）といはれ、あるいは堤中納言物語の「このついで」や、佛教の經典の構想にならつたとも稱せられるが、これらは、大鏡の作者が創意を出した點ではなかつた。そのゆゑに今鏡以下の鏡物が、概して、大鏡の獨得の點には眼もくれないで、ただ古老の昔話といふ傳統形式を墨守したのであつた。それとともに、かやうな民衆に親しみやすい、歴史敘述の形式を復活させたのが、大鏡であるから、その書名に模した何鏡といふのが續出したのである。

さて、増鏡は大鏡の問答文學としての方面を發展させなかつたので、形式的には、大鏡よりも文學的價値が低いとされるのであるが、五十嵐博士が前記の論文で説かれたやうに、大鏡にも、あの百數十年間に

わたる長物語を、雲林院の菩提講の講師の來るのを待つ間にさせたといふ無理がある。増鏡の方は、一夜語り明かすのだから、その難は救はれてゐる。が、もう一つ増鏡に救ひようのない缺陷があるのは、大鏡の大宅世繼なり夏山繁樹なりは、いづれも皇后の宮なり、攝關の家なりに仕へてゐて、宮廷の内情や、貴顯の裏面に通じてゐる理由があるが、増鏡の老尼は、ただ百年にこよなう餘る老嫗だといふことだけがわかつてゐて、その履歴が知れないから、いくら「何となく、なまめかしく、心あらむかし」と見えたにしろ、それだけでは、どうしてかやうな朽尼が當時の公家の内外の事情に通じてゐるのか疑問になることである。その點では、大宅世繼の孫で、少女の時に紫式部に仕へたといふ老嫗を話し手とした今鏡や、また聞きではあるが葛城山の仙人の物語をうつした水鏡の方が、もつともらしくてよい。ただ、増鏡のとりえとされるのは、この物語の記者の手柄が「おのづから、古き歌など書きたる物の片はし見るだに、その世に逢へる心地するかし」といつた、ちよつとした口吻にも、その尙古的な文學少女的性格がほの見えて、好感がもてるのは、他の鏡類にまさつてゐる。しかし、卷末は尻切れで、序をむすんでゐない。あるいは原著者はもう三巻ばかり書き續けるつもりで果たさなかつたのか知れないが形式上、他の鏡類に劣るところである。

なほ、増鏡が辨内侍日記、中務典侍日記・とはすがたり（とはすがたり覺書、山岸徳平氏、國語と國文學十七の九参照）などの諸家の日記や、五代帝王物語以下の諸書によつて、その資料を得て來たことを知ら

れてゐるが、それが十分消化されないで、例へば「老のなみ」に、北山准后記をそのまま和文に引き直してのせたり、「むら時雨」の元徳三年三月北山行幸の條に舞御覽記をそ知らぬ顔で拜借したり、その他これに類する記録のなまなましい轉載のあるのは、老尼の昔話といふ折角の構想を臺なしにするものであることはいふまでもあるまい。ただし、そのため、今日湮滅した諸記録の増鏡に残るものがあつて、本書の史料的价值を高めてゐるといへよう。

七、増鏡の史觀と文藝的價值

増鏡は、後鳥羽天皇の御即位に始まつて、後醍醐天皇の隱岐からの還幸に終つてをり、その間承久の亂や、蒙古の來寇があつて、京の公家と東の武家との交渉のすこぶる面倒な時代であるから、非常に波瀾に富んでゐて、おもしろさうであるが、事實は案外平板であつて、血なまぐさい戰爭の記事などはほとんどなく、承久の亂も、元寇の役も、加持祈禱の記事がおもであつて、戰爭の狀況などは後者には一行もなく、ただ伊勢の神風や、石清水の神異によつて、異國の船六萬艘がみな吹き破られて、水に沈んだ（老のなみ）と記すのみであり、前者については、

攻め上る武者ども、……つひに都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分かち遣はす。世の中響きののしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深

き山へ逃げこもり、遠き世界におちくんだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかがあらんと、君（後鳥羽院）も御心亂れておぼしまどふ。かねては猛く見えし人人も、まことのきはになりぬれば、いと心あわただしく、色をうしなひたるさまども、頼もしげなし。六月二十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂にみかたの軍敗れぬ。荒き磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はん方なくあきれて、上下ただ物にぞあたりまどふ。（新島もり）

とあるだけで、あつけないことおびたらしい。卷末の元弘の亂は、さすがに「むら時雨」「久米のさら山」精緻な敘述の足もとにも及ばない。それゆゑに、軍記物語として増鏡を見るとき、保元物語・平治物語・平家物語に及ばないことは勿論のこと、同時代のことを記した東鑑・承久記・北條九代記・太平記などの戦争描寫にも比較することが出来ないばかりか、軍記物語の祖といはれるあの稚拙な將門記にすら追いつきさうもない。しかし、戦亂に遭遇した京の貴族の驚愕ぶりや、事件に連座して、あるいは配流され、あるいは刑死した貴顯の人人の心理は、微に入り細をうがつて描かれてゐて、到底、太平記などの粗雑な和漢混淆文であらばせないデリケートな心のくまぐまを明瞭に寫し出してゐる。「久米のさら山」における具行の中納言と佐々木前佐渡判官入道譽との柏原の一夜の對話などは、討つ者と討たれる者の悲しい心理が精細に描かれてゐて、彷彿としてそのシーンが讀者の眼に浮かんで來る。佐々木道譽は、太平記など

で見ると、後年は榮耀人の目を驚かし、驕奢に誇り、あるいは妙法院座主の御所に亂暴したり、あるいは尾張入道を讒言したりして、憎い奴だが、増鏡で見ると、隱岐への護送役を奉仕して、後醍醐天皇に對し奉つても、源中納言にむかつて、なかなか人間味があつて、ことに、さきに述べた具行と柏原で一夜酒を酌みかはしてしみじみ語る場面など、どこかに素朴さと數奇心と眞實性を持つた、源氏物語の明石入道を聯想させる愛すべき風貌が描かれてゐる。かういふ點にこそ、わたくしは増鏡のヒューマニテイがあり、リアリティがあつておもしろいところだと思ふ。

増鏡の本文が榮花物語を模倣してゐることはしばしば説いたが、それと同時に、非常に源氏物語に追従してゐて、十七帖のうちに源氏物語を引用するか、まねするか、暗示するかしないのは、一帖もない。無論増鏡の粉本である榮花が源氏物語を模倣してゐることはいふまでもないが、それ以上に、増鏡の著者は源氏物語に私淑してゐて、うるさいまでになにかにつけて引き合ひに出す。後鳥羽院や後醍醐天皇の隱岐の小島のわびしい御生活を描いた「新島もり」や「久米のさら山」「つき草の花」などに、「須磨」「明石」の巻卷が聯想されるのは自然であるが、その他に、源氏物語にちなんだ宮廷の遊びや出來ごとはずくならず取り入れられてゐて、また自分の描かうとする事件が、源氏物語のある情景に似かよつてゐる場合には、かならずその筆致をまねてゐる。かうして、増鏡に引用されてゐる源氏物語の詞句は、ほとんど五十四帖の全部にわたつてゐる。そのため餘程、源氏物語に博通してゐないと、増鏡の本文をとき謬るほ

どである。一二例を舉げてみると、「あすか川」の文永八年正月の條に、後嵯峨法皇と後深草上皇とが御勝負事をされて、法皇が負けられた賭の物として、伊勢物語にちなんで、銀の伏籠の富士山に模したのと、銀の舟に簀着たる男をのせて隅田川を利かせたのを上皇に贈られると、その返禮に上皇から源氏物語にちなんで、唐風の箱に金剛子の數珠を入れて、五葉の松の枝につけて「若紫」の卷の北山の聖ひじりの源氏の君への贈り物をおもはせたのや、また「梅が枝」の卷にある、ももがは 檀の齋院から黒方くろほうといふ香を梅の花の半ば散つた枝につけて源氏の君に贈られたのをまねた御引出物を法皇に獻られたことが記されてあるが、後者の場合、本文に「また、齋院より黒方、梅の散り過ぎたる枝につけなど」とあるので、その齋院を當時の齋院禮子内親王とし、源氏物語の檀齋院とは氣づかないで、從來その解釋が混亂してゐた。また「浦千鳥」のはじめに、後宇多院が、基俊大納言と關係のあつた一條攝政實經の女瑣子たなこを、大納言が關東下向後寵愛されて、尙侍なうしのかみに任ぜられたのを、本文に「昔おぼえておもしろし」と評してゐるが、諸註この「おぼえて」を「基俊に愛せられた當時、あるいはその以前に既に院の御寵幸があつたのである」と解してゐるが、さうではなく、源氏物語の朧月夜内侍が源氏の君と關係があつたのに、その須磨左遷後、朱雀院に参り、尙侍に任ぜられたのに似てゐてをかしいといふのである。その他「老のなみ」に、後深草院・龜山院が、またの日は、伏見津にいでさせたまひて、……二三日ふつかみかおはしませば、兩院の家司ども、われ劣らじと、いかめしきことども調じて参らせあへるなかに、揚梅やまゐしの二位兼行、ひわりごどもの、心ばせあり

て仕うまつれるに、雲雀といふ小鳥を荻の枝につけたり。源氏の松風の巻を思へるにやありけん。爲兼の朝臣を召して、本院（後深草院）「かれはいかがと見る」と仰せらるれば「いと心得侍らず」とぞ申しける。まことに定家の中納言入道が書いて侍る源氏の本には荻とは見え侍らぬとぞうけたまはりし。

とあるやうなことは、楊梅の二位が氣取つて、源氏物語「松風」の巻のなかの詞句によつて、荻の枝に小鳥をつけて奉つたのを、後深草院が御覽になつて、京極爲兼を召され、「かれはいかがと見る」と御下問あつたに對して、爲兼が「いと心得侍らず」と御奉答申し上げたのを、定家本の源氏物語の本文によつて正當化してゐるとともに、著者自身當時流布してゐた河内本源氏のほかに、定家の青表紙にも關心をもつてゐたといふ源氏通を誇示したところである。和田英松博士の増鏡の研究（改造社刊行日本文學講座所收）は増鏡の書誌的研究としてはもつとも勝れた文獻であるが、そのなかにここを引き、増鏡の著者がとさらに爲兼の失策を取り上げたやうに説かれたが、わたくしは反對に爲兼を辨護したやうに取れるのである。おそらくこれは博士の増鏡の著者を二條爲明にしたいといふ成心からの千慮の一失であらう。増鏡の著者は、武家には反感をもつが、皇室に對しては大覺寺統にも、持明院流にも公平であつたとともに、前者の庇護をうけた二條家にも、後者の親近された京極家にもまた公平であつたやうである。前者に關して後者よりもややくはしい記事があるのは、著者當時に二條家が勢力があり、著者もその影響下にあつた

に過ぎない。

このやうに、増鏡の著者は、源氏物語の心酔者ではあつたが、源氏學者ではなかつたらしく、この本文——「松風」の巻の「小鳥しるしばかりひきつけさせたる荻の枝など、つとにして」も、源氏播磨坊となる者が、草に枝あるべからずといつて、河内本校訂者源親行の家にねぢこみ、「木の枝」でないといけないと争つたことが、紫明抄に見えてゐて、本文校訂史上の一挿話となつてゐるけれども、現存の青表紙系諸本はすべて「荻の枝」となつてをり、「木の枝」とあるは、かへつて河内系である一本に見えるだけである。また、著者は弘安四年十月六日に行はれた源氏論義なども擧げてゐないのであつて、「おどろの下」にあるやうに、後鳥羽院が、

夏のころ、水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、水水みづづ召して水飯やうのものなど、若き上達部、殿上人どもに賜はせて、大御酒參るついでにも、「あはれ、いにしへの紫式部こそ、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの、御前に調じて、と書けるなむ、勝れてめでたきぞとよ。ただいま、さやうの料理つかまつりてんや」など宜ふを、秦のなにがしとかいふ御隨身、勾欄のもと近く候ひけるが、承はりて、池の汀なる篠ささをすこし敷きて、白き米あはを水に洗ひて奉れり。「拾はば消えなんとにや。これもけしかるわさかな」とて、御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。といつた風な、「帚木」の巻の「拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の篠」といふ、うつろひやすきあえか

な女性を形容した名譽喩を、笹の上の白き米で利かせたといふやうな、源氏物語のなかの詞句―それも主として當時の註釋家などによつて取り上げられて高名になつたものであるが―をもちつて機智をみせたやうなもの、いかにも嬉れしさうに舉げてあるのである。これは當時流行の連歌が、源氏物語の本文に對して取つた態度と同じであつて、源氏物語のおもかげのかけらを現實生活に見出して興する心を増鏡の著者も持つてゐたのである。しかし、この著者の根本精神は、源氏物語の眼をもつて、鎌倉時代の宮廷生活を描くにあるので、「草まくら」などの諸篇に挿話として描かれた高貴な女性のいくつかの悲戀などは、夜半の寢覺の女主人公の數奇な生涯や、堤中納言物語の「思はぬ方にとまりする少將」の姫君たちの哀切な宿命を想はせて、千載の後も讀者の心琴にふれるものがあると思ふ。かつて田山花袋氏が「増鏡あたりにもいかに自然と人事との交錯が描かれてあるよ」（明治の小説、新潮社版日本文學講座所収）と嘆賞したのも、一に増鏡が全體的にも部分的にもできるだけ源氏物語の手法・筆致・精神を學んで、多少大きな破綻を見せながらも、柔軟にして陰影に富む文體で、優雅な自然や、艶麗な宮廷生活や精緻微妙な心理描寫に、ある程度まで成功したからであらう。

さて、この源氏物語の心酔者は、また貴族的榮華の渴仰者である。「内野の雪」に、西園寺入道前太政大臣公經の北山の寺の莊嚴なさまを描いてのち、「かの法成寺（御堂關白藤原道長の寺）をのみこそ、いみじきために、世繼もいひためれど、これはなほ山の景色さへおもしろく、都はなれて眺望そひたれ

ば、いはん方なくめでたし」と讚美し、またその子實氏の夫人の准後の九十の賀を記して、「むかし御堂殿の北の方、鷹司殿ときこえしにも劣りたまはず（老のなみ）」と、その「いとやんごとなかりける御さいはひ」を感嘆し、さらにその女大宮の院の幸運を説いて、

すべて古より今まで、后・國母多く過ぎ給ひぬれど、かばかり取り集めいみじきためしは、いまだ聞き及び侍らず。御位のはじめより擇ばれ参りたまひて、争ひきしろふ人もなく、三千の寵愛、一人にをさめたまふ。兩院（後深草・龜山）うちつづき出でものしたまへりし、いづれもたひらかに、思ひのごとく二代の國母にて、いまはすでに御孫（後宇多）の位をさへ見たまふまで、いささかも御心にあはず、おぼしむすぼるる一ふしもなく、めでたくおはしますさま、來し方もたぐひなく、行く末にもまれにやあらん。……御堂の御女上東門院、後一條・後朱雀の御母にて、御孫後冷泉・後三條まで見奉りたまひしかども、皆先立たせたまひしかば、さかさまの御嘆き絶ゆる世なく、御命餘り長く、なかなか人眼をはづる思ひ深くおはしませしき。……されば今（大宮院）のやうにただ人の御身にて、三代國のおもしといつかれ、兩院（後深草・龜山）とこしなへに仰ぎ捧げ奉らせたまへば、前の世もいかばかりの功德おはしまし、この世にも春日大明神をはじめ、よろづの神明・佛陀の擁護厚くものしたまふにこそ、有難くぞおしはかられたまふ。

と、讚嘆してゐることなどは、かの榮花物語、大鏡に口を極めてたたへてある法成寺の輪奐の美も、鷹司

殿の御宿世も、かがやく藤壺の榮華も、望月のかけたることもなかつた藤原道長の權勢も、西園寺實氏一家の光榮にくらべると、なにほどでもないといふに誇つてゐるのであつて、著者の氣焰萬丈のところであるとともに、著者が世はずでに武家時代となつたのにかかはらず、やはり、甘美な、公卿道華やかであつた昔の夢を忘れえない舊時代人であることを示す。

現代的にいふと、増鏡の著者は公卿イデオロギーの保持者なのである。それゆゑ、かれは天台、眞言の既成宗教には多くの言を費しても、當時勃興の非貴族的な宗教である日蓮宗や眞宗には一言も觸れない。關東のことは、なかでもなるべく無視したのであるが、なにぶん世は武家のものであるから、どうしてもそれに觸れないわけには行かない。で、やむなく觸れるのである。だから、戦争の記事などは、もつとも筆にするのを好まないところであつて、承久の敗因は後鳥羽院が山の御輿を防いで、日吉ひよぎの神の怨みを買はれたからであり（新島もり）、元寇の勝因は伊勢・石清水の御利益として（老のなみ）あつさり片附けて、勇敢な武士の、戦場での壯烈な奮闘などは、むくつけしとして願みられなかつたのである。「新島もり」のなかの北條義時と泰時との問答などは、割合に武士的精神を發揮してゐるとされてゐるが、それもほんのわづかなページを占めてゐるだけで、決して本書の主眼ではない。いな、これさへ著者は、義時父子の武士的精神を表現するといふよりも、實は義時が「まさに君の御輿に向かひて弓を引くことは、いかがあらん。さばかりの時は兜かぶとを脱ぎ、弓の弦をきりて、ひとへにかしこまりを申して身をまかせ奉るべし」と

いつたことを記して、この義時ほどの東夷さへ、かく公家を恐れる心のあつたのを、せめて悦んでゐるのである。一體、亂後當代を廢して三上皇を遷し奉つた不忠不義の義時が、軍事行動を起す前になぜこんな殊勝なことをいつたか（事實そんなことをいつたとすると）は絶対に増鏡の著者の考へえないところであることは、この亂の結果について、「ふりにしことを思ふにも、なほ、さりとて、いかでか、三皇・今上、あまたおはします皇城の、いたづらに亡ぶるやうはあらむと、頼もしくこそ覺えしに、かく、いとあやなきわざの出で來ぬるは、この世一つのことにもあらざらめども、迷ひのおろかなる前には、なほ、いとあやし」と述べて、その歴史的洞察力の皆無なことを、みづから暴露してゐるのでもわかる。だから、その眼前に、承久・弘安・元弘といふ好箇の敘事詩的題目をもつてゐても、これを劇的に表現して、保元・平治・平家の壘を摩さうとしないで、ただ源氏式、榮花式の感傷的抒情にふけつたり、でなければ、西園寺の榮華を御堂關白のそれにまされりとするやうな架空な矜誇を構成して、わづかにみづからを慰めてゐるのであつて、兩者のよつて來たるところの相違などは氣が附かないで、いたづらに現象の類似にのみ迷はされてゐるのは、増鏡の著者が武家史觀を持ち合はさず、どこまでも公家本位の榮花・大鏡の史觀に立脚してゐるからである。

しかし、世は武家時代である。ことに承久以後は、經濟的にも公家は窮迫してゐる。京都の文化は、もはや唯一の文化でなくて、關東にも新らしい文化が創められてゐる。それなのにこれを無視して、京都の

文化を絶對とし、公家の榮華を禮讚して、王朝時代の榮花・大鏡式に表現しようとするとき、かならずそこに破綻が生じ、矛盾が起こる。鎌倉幕府を斥けて、東夷とか荒きえびすとか賤稱しても、皇位御繼承の際などは、關係者は、その使ひの一舉一動にさへ心をときめかさなければならなかつたり、親王將軍が東下されるとなると、急にいままでの野蠻扱ひを忘れて、「まことにおほやけとなりたまはずば、これよりまさること何かあらんと、にぎははしく、花やかさは、ならぶ方なし」(内野の雪)とか、「關の東をみやこの外とて、おとしむべくもあらざりけり」(さし櫛)とか讚へたりする。なほ、日ごろはむくつけく思つた武士も、後醍醐天皇の京都還幸の供奉など申し上げてゐるのを見ると、「頼もしくめでたき御まもりかな」と覺えるのであるが、さすがに「うちつけめなるべし」とその現金なことにわれながらあきれてゐる。(月草の花)

また、當時の公家の生活を藤原氏全盛の世にも劣らない美的なものとして、全力を擧げて、あるいは歌合、あるいは行幸、あるいは節會、あるいは管絃、あるいは饗宴、賀儀、戀愛、八講、建築、撰集、入内、うぶやしなひ産養と、眼もあやに繪卷物のやうに十七帖を彩つてゐるのであるが、しかしながら、この時代の公家の精神は墮落してゐて、とても、源氏物語や枕草子時代のそれと比較することが出来ない。さすがの公卿心酔者である増鏡の著者でも、それは感じてゐて、龜山院の後宮の争ひを記した際に、「いづれも離れぬ御中に挑みきしろひ給ふほど、聞きにくきこともあるべし。宮仕への習ひ、かかるこそ昔人はおもし

ろくはえあることにしたまひけれど、今の世の御心どもは、餘りすくよかにて、みやびをかはずことのおはせぬなるべし」(北野の雪)といふ嘆きを洩らさないわけにはいかなかつた。公家の戀愛でも中納言公宗などの、同母妹に對するものではあるが、どこか狹衣の主人公の源氏の宮へのしたたく煙など想起されるところがあつて、艶であるが、後深草院などの御事に關しては餘りにらうがはしく、和田博士のやうに「作り物語」と見なしても、やはりおそれ多い氣がする。また龜山院の御情事や、後宇多院・後醍醐天皇の後宮のみだれてゐることを赤裸裸に物語つてゐるのを見ても、この増鏡の著者を從來のやうに南朝の勤王の士と考へるのはやめなければならぬと思ふ。また、ことにやんごとなき貴顯の女性たちがあやしの下臈とあだし夢を結ばれたり、物のまぎれがかさなつてその結果がよこさまの死となられたり、攝關ともある人が、男籠をほしいままにして、薨じて後も執念が絶えなく、これを取り殺したといふに到つては、實にあさましく、とても源氏物語が一行も記さなかつた汚らはしい邪戀である。しかし、増鏡の著者は、これを見だりがはしいことと思ひながら、やはり、増鏡執筆當時にも行はれてゐたことであるから、昔も同じことだつたと知らせるためにといふ口實のもとに、かなりくはしい描寫をしてゐるのであるが、これはその時代のデカダン相の實寫と見ると、史的興味が深い。

なほ、増鏡を時世粧の繪卷として見ると、幼ない帝と攝政とが、女房のなかにまじつて、亂碁・貝おほひ・手まり・偏つぎなどをして日を暮らされたり、女房たちを關白、その他の男の官職にあてて、男

装させて、節會・臨時の祭、何くれの公事どもをまねばせて御覽になつたりされるさま（内野の雪）や、昨日までは、天下の武士を従へて、勢ひ猛におはした親王將軍が突如廢せられて、都へ流され、「虎とのみもてなされしはむかしにて今は鼠のあなう世のなか」と嘆ぜさせられたこと（北野の雪）が見える。あるいは淺原爲頼の禁中亂入事件（さし櫛）や、綾小路宰相有時の暗殺事件（秋のみ山）や、さては遠島における後鳥羽院・順徳院・後醍醐天皇の御わびすまひなど、さまざまにあはれ深いこと限りない。ことに、われと罪なくて配所の月を眺められた土御門院の御孝心や、父帝の後嵯峨法皇にすさめられたのに、後深草天皇は法皇の御生前には、「さるべき御こととは申しながら、なににつけても御心ばへのうるはしくなつかしうおはしまして、院（後嵯峨）のおぼいたるすぢのことは、必ずおなじ御心に仕うまつり、いささかも、いでやと思さるる一ふしもなくものしたまふを、法皇もいとうつくしうかたじけなしと思されけり」（あすか川）といふ風であり、法皇崩御の後は、御指の血を出して御手づから法華經をお書きになつて、御追善を遊ばされるなど、「御遺言おきての思はずなりしつらさを思し知らぬにはあらねど、それもさるべきにこそあらめと、いよいよねんごろに孝うやうやじさせ給」（草まくら）うた後深草院の御孝心にうたれるものである。また御十三頃から好色の方に進まれ、御入道後もやまなかつたといふ龜山院が、元寇のことが起ると、伊勢の神宮に「わが御代にしもかかるみだれ出で来て、まことにこの日本ひのもとそこなはるべくは、御命をめすべき」よし宸筆をもつて祈願され、大宮の院をして「いとあさましきなり」と諫めさせ申したな

どあるのは、大日本史などの身をもつて國難に代らんと祈らせられたといふことではないが、國家が滅亡してもおめおめ生きようとされるのではないから、主權者として立派な覺悟をおもちになつたといふべきであらう。その他、新古今集から續後拾遺集にいたるまでの九代の勅撰集の成立の事情や、それをめぐる歌壇の動きを精細に物語つたり、元弘の亂前、日野資朝が山伏姿になつて、東國に下向し、幕府を偵察したり、官軍を募つたりした話や、後醍醐天皇の隱岐遷幸の道すがらの御ことなど、他書に見えない史料もあるが、要するに、この書の中心興味は、公家時代から武家時代への推移の歴史的必然性に背を向け、幕府の獨裁政治の下にも、王朝の甘美な夢を忘れないで、得意のときは花紅葉にあたら時を費し、不滿のときは幕府に反噬して、かへつて没落の期を早めた鎌倉時代の貴族のアナクロニズム的な生活の種種相を、それにつきづきしいアナクロニズム的な源氏式の擬古文で、萬華鏡的に表現したところにある。それとともに、かやうな頹廢的な生活の底にも、民族精神や人間精神は嚴存してゐて、困難に際會したり、苦楚に遭逢すると燦然と輝き出る趣きを、無意識的に明示したところに、増鏡の不朽の歴史的價值がある。これらの點から考へると、増鏡の文藝的價值は、水鏡・今鏡などよりも高く、優に大鏡に匹敵しうらと思ふ。

八、註釋・評論の文獻

増鏡の註釋は、明治以前には岡本保孝の増鏡攷（未刊國文古註釋大系第十四冊所收）のやうな簡單な覺

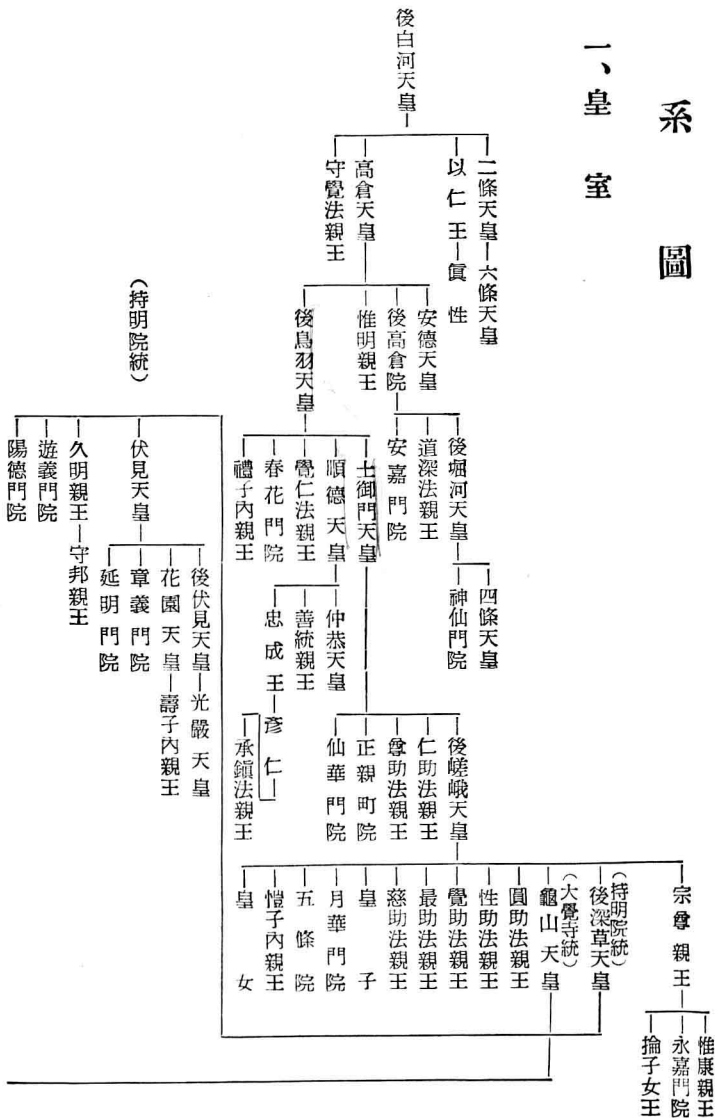
え書き風のものしかなかつたが、明治以後になつてはじめて和田英松・佐藤球兩氏によつて増鏡詳解が著された。(明治三十年十月刊行、大正十四年重修刊行)その前後から増鏡の文章が中學の國語讀本に引かれ、専門學校の入學試験や、文檢の必讀書とされたところから、種種の註釋書が雨後の筍のやうに出てゐるが、「詳解」以上のものはまだ出てゐない。もつとも部分的には、詳解の不備を訂したものはあつて、大正以後に出た永井一孝・竹野長次兩氏の校定増鏡新釋、高木武氏の新釋増鏡、佐野保太郎氏の増鏡新釋、内海月杖氏の口譯増鏡、吉川秀雄氏の新譯増鏡精釋、小林好日氏の増鏡新釋、倉園好文氏の増鏡評釋、塚本哲三氏の増鏡解釋など、どれもそれぞれ特色をもつてゐる。これらは二十卷本系統の増鏡の註釋であるが、永和・應永本系統の十七卷本の註釋としては、拙譯増鏡(昭和十二年刊現代語譯國文學全集第十七卷)と、佐成謙太郎氏の増鏡通釋(昭和十三年刊)がある。しかし、これらの諸著にも、詳解以來の誤謬がところどころに残存してゐて、完璧とはいへないが、わたくしはこの日本古典全書のための増鏡の校註をもとめられるに際して、出来るだけこれら先學の名著の妥當な註釋は、もれなく採摭するとともに、自分でも史實・出典・文脈を精査して、從來の誤謬を一掃して、本文の眞義を現代の讀者の心胸に直ちにひびかせうるやう努力した。

また、増鏡の書誌的研究は、屋代弘賢・伴信友・谷森善臣・近藤瓶城などによつて著手されてゐたが、和田英松博士の「増鏡の研究」で一應完成してゐる。ただ評論の出色なものがなく、故芳賀矢一博士の歴

史物語の所説などを、既出のものとしては白眉であるとしなければならぬのは遺憾であるが、近時、石田吉貞、益田宗・時枝誠記・木藤才藏諸氏によつて、舊説にたいする反省と新しい展開が見られるのは、著者のよろこびとするところである（拙著、大鏡・増鏡―古典日本文學全集―昭和四十一年刊・岩佐正、木藤才藏、神皇正統記・増鏡―日本古典文學大系―昭和四十年刊。なほ本書の底本永和應永本系本文が原形にもつとも近いことは、鈴木知太郎著、平安時代文學論叢―附、岩瀬文庫藏應永九年奥書本ますかゝみについて―昭和四十三年刊、その他、日本文學研究資料叢書刊行會編―歴史物語Ⅰ・Ⅱ―昭和四十八年刊―参照）。

系圖

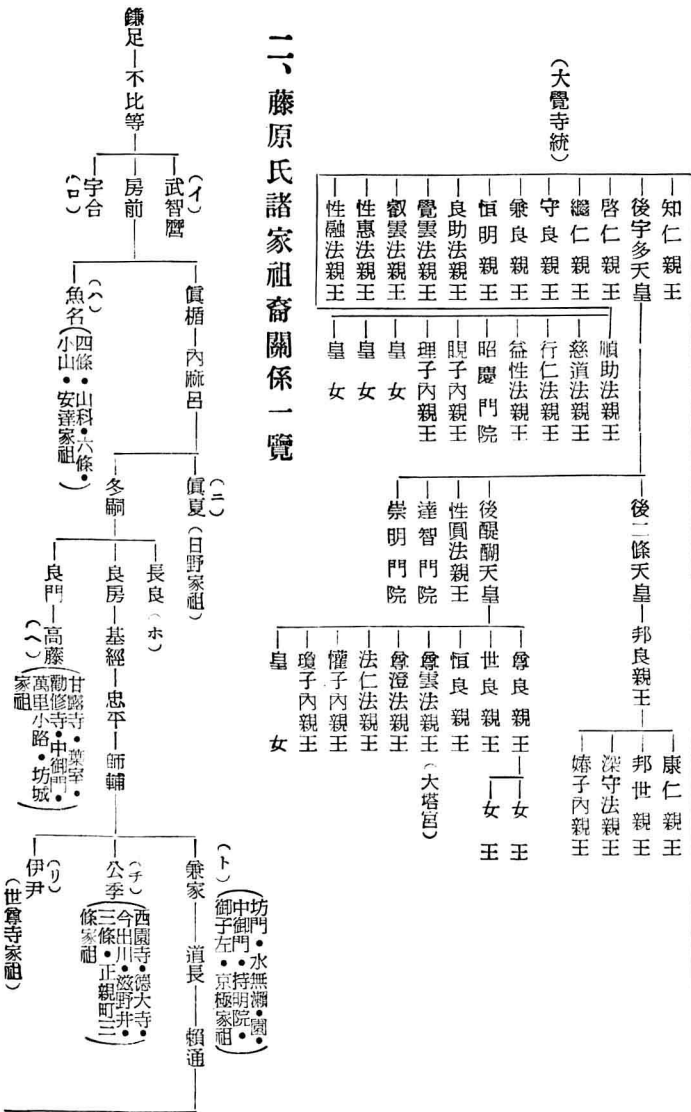
一、皇室

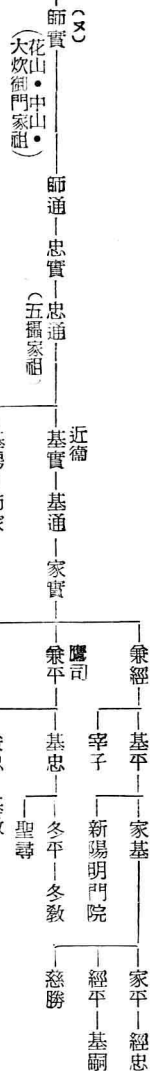


(持明院統)

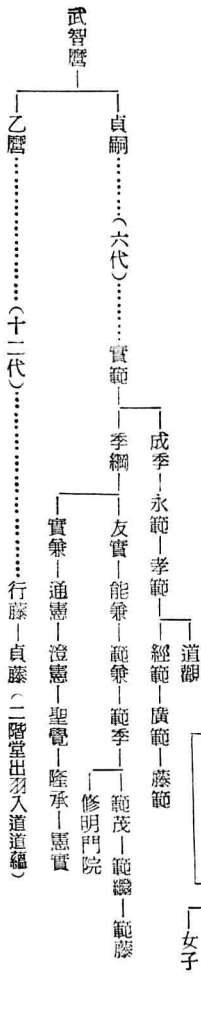
系圖

二、藤原氏諸家祖裔關係一覽





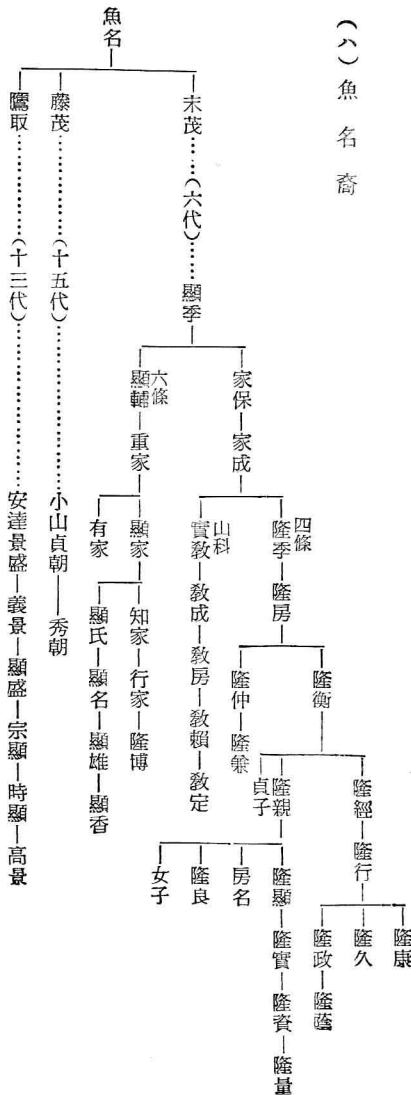
(イ) 武智鷹裔



(口) 宇合裔

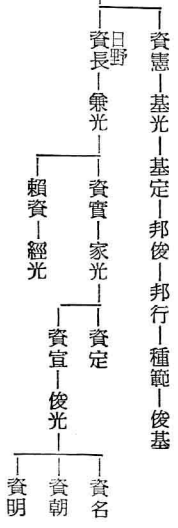
宇合……(十一代)……光輔—長倫—光兼—兼倫—女子

(八) 魚名裔

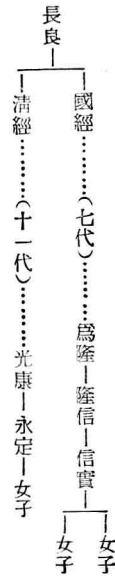


(三) 眞夏裔 (日野家)

眞夏……(十一代)……資業—實綱—有信—實光

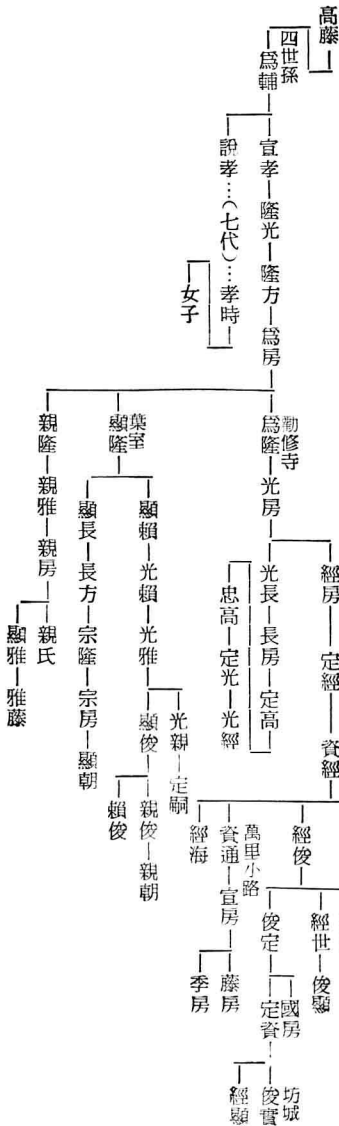


(亦) 長良裔

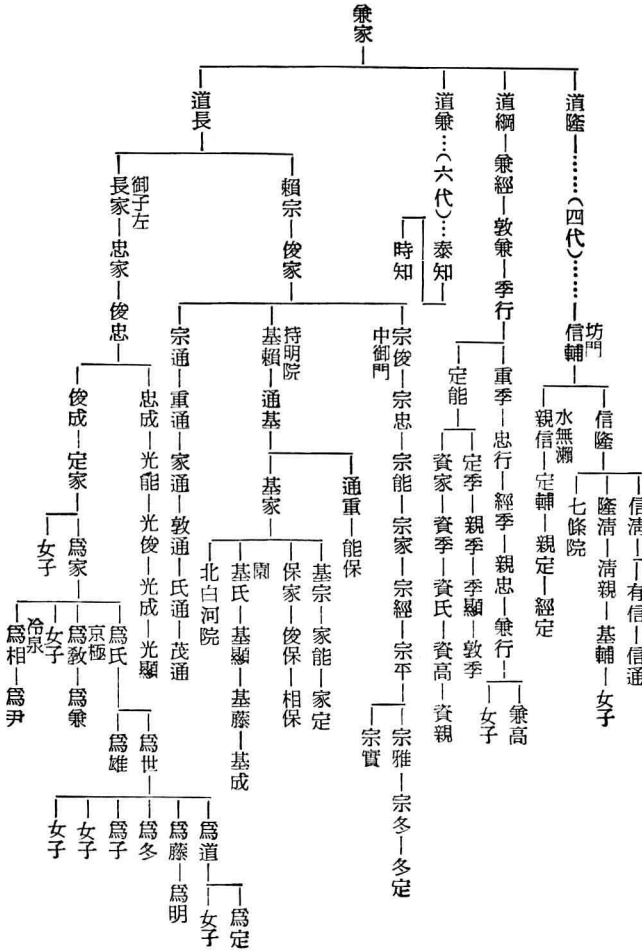


(一) 高藤裔

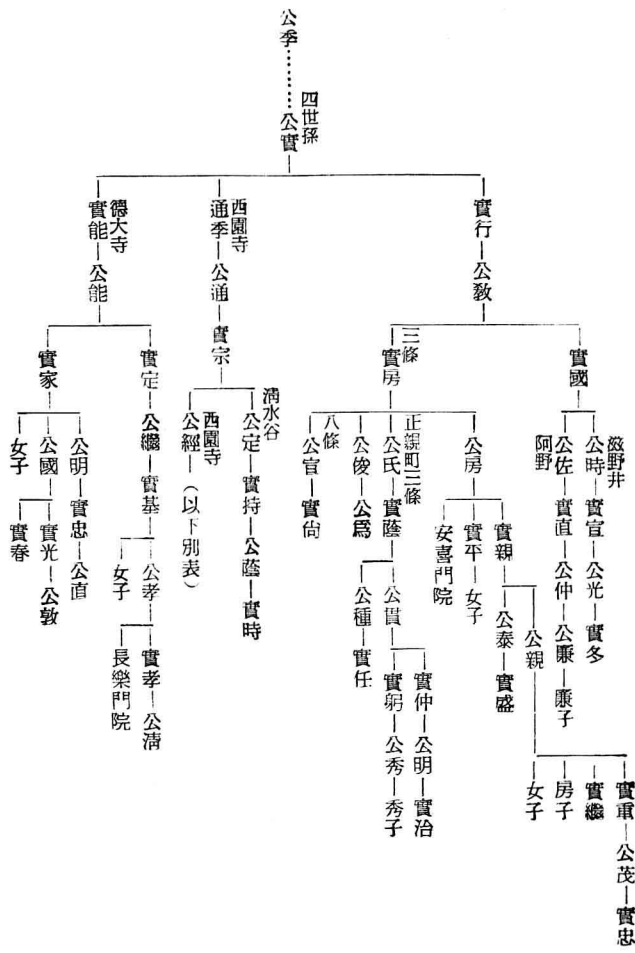
(甘露寺・葉室・勸修寺・坊城・萬里小路家)



(下) 兼 家 裔 (坊門・水無瀬・中御門・園・持明院・御子左・京極家祖)

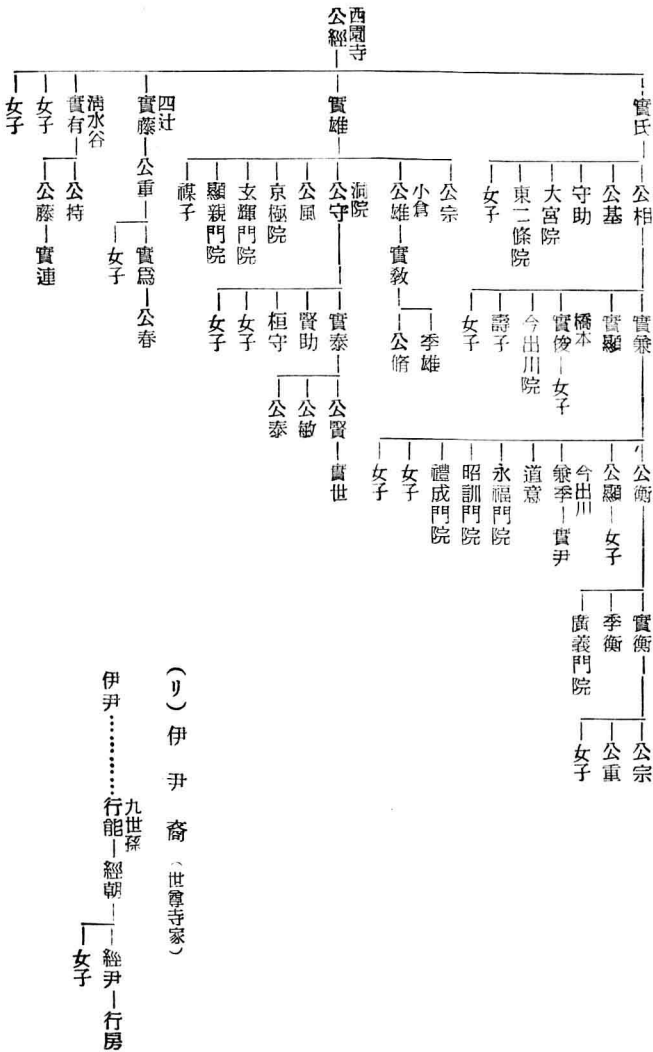


(子) 公季 齋 (三條・西園寺・徳大寺・今出川・正親町三條・正親町・姦野井家)

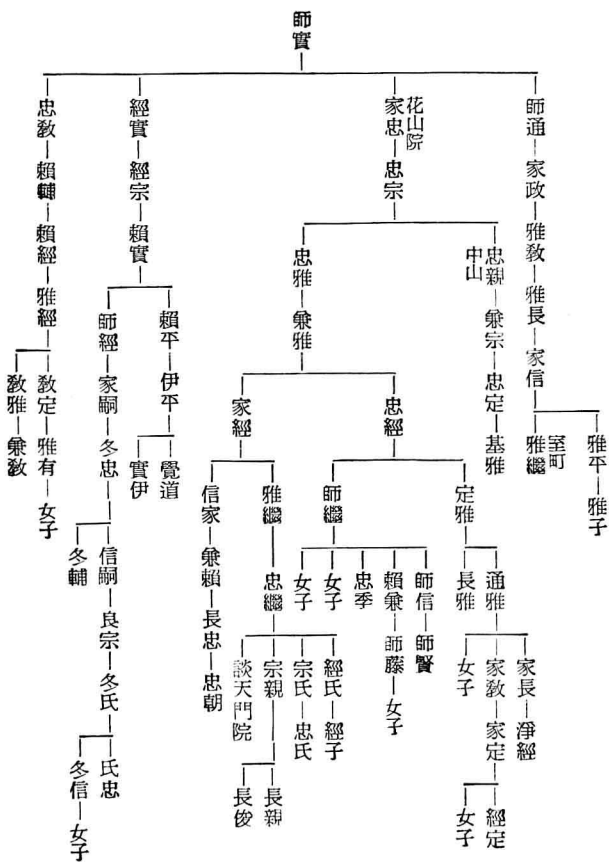


系圖

別 表 (西園寺高諸家)

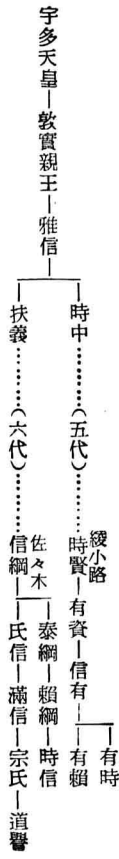


(又) 師實裔 (花山院・大炊御門・中山家祖)

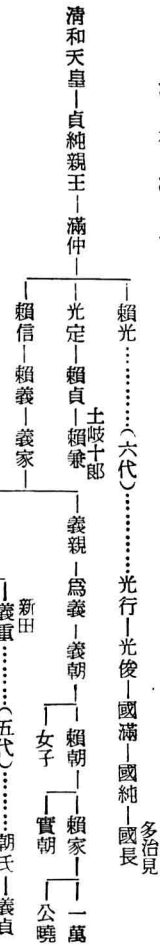


系圖

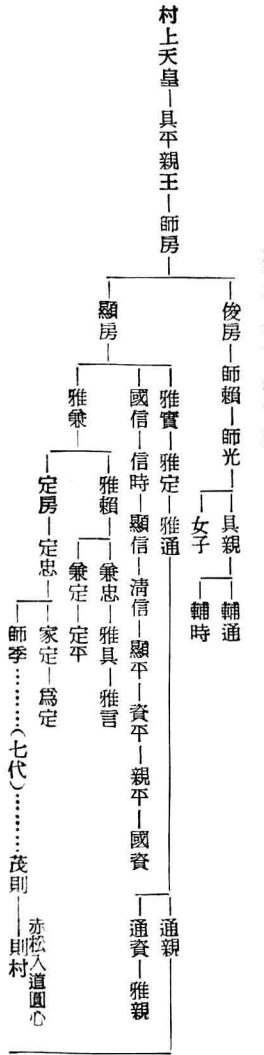
三、宇 多 源 氏 (緩小路・佐々木氏家祖)



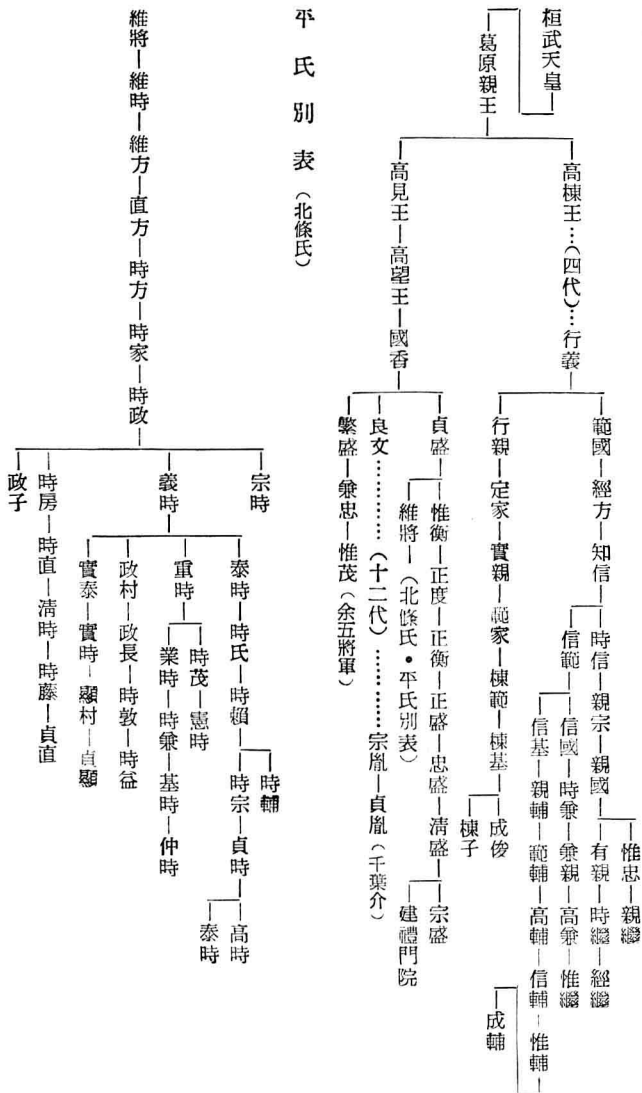
四、清 和 源 氏 (新田・足利氏家祖)



五、村 上 源 氏 (堀河・久我・中院・六條・土御門・北畠・赤松家祖)



六、平氏一族



平氏別表 (北條氏)

梗概

第一 おごろの下 壽永二年—建保六年

安徳天皇が平家の一族とともに西海に赴かれたのち、壽永二年八月二十日に後鳥羽天皇が踐祚され、後白河法皇崩御ののちは、ひとへに世を見そなはされて、古への聖代にも恥ぢない太平の世を現出されたが、「奥山のおどろの下も」の御製にも拜されるやうに、帝の御心には、武家政治に對する反感の抑へがたいものがあつた。建久九年正月、土御門天皇に御讓位、院政をみそなはせられたが、その間、水無瀬離宮の造營、千五百番歌合、新古今集の勅撰、などの風流韻事があつた。そのうちに、後土御門天皇が御不満を忍んで御退位になり、順徳天皇が御即位、その皇子仲恭天皇が立太子されて、後鳥羽本院と土御門新院との間が次第に御不和になられた。

第二 新島もり 建保七年—承久三年

武士が起つて以來、平家の興亡について源氏が擡頭し、頼朝は榮達して諸國の總追捕使に補せられた。

「日本國の衰ふるはじめはこれよりなるべし」と話し手は考へてゐる。ついで、頼家・實朝・政子が續いて政治の實權を握つた。藤原頼經を將軍に選定するに際し、西園寺公經が議にあづかつた。それから後鳥羽院がひそかに討幕計畫を實行に移された。承久の亂勃發の際、幕府のとつた處置方針は嚴重なものであつて、戰後、後鳥羽院は隱岐へ、順徳院は佐渡へ、土御門院はこの亂には無關係であらせられたが、父帝後鳥羽院への御遠慮から土佐へ遷られた。仲恭天皇も退位された。後鳥羽院の隱岐での御生活はわびしいものであつた。御母七條院・御妃修明門院・從二位家隆らと音信をかはして、わづかに御心を慰めてをられた。

第三 ふぢ衣 貞應元年—延應元年

仲恭天皇の突然の御退位によつて、守貞親王の御子の後堀河天皇が擁立された。守貞親王は後鳥羽天皇の御兄で、御弟のために越えられてさびしく暮らしてをられたのが、かういふおめでたいことになり、御身も太上天皇に准ぜられたまうた。貞永元年十月後堀河天皇讓位、御二歳の幼帝四條天皇が即位せられる。時の人はこれを不祥のことだとした。

第四 三神山 仁治二年—三年

仁治三年正月、四條天皇御年十二で崩御。その後嗣について、順徳院の御母修明門院と、土御門院の御母承明門院と、それぞれ御孫の宮たちの即位を期待し、御祈念もあつたが、幕府は土御門院の皇子後嵯峨天皇を擁立した。これは土御門院が後鳥羽上皇の討幕計畫に御反對であつたからである。

第五 内野の雪 仁治三年—建長七年

西園寺家は榮華をきはめた。北山西園寺の結構の限りをつくし、當主實氏は顯達、その女姑子（後嵯峨天皇・大宮院）は皇子を生み奉り、その方が立太子された。ついで寛元四年正月、後嵯峨天皇讓位、後深草天皇が御四歳で即位された。幼帝は無邪氣な日常生活を送られ、後嵯峨天皇と大宮院の御氣樂な御遊び御幸がたびたび行はれた。鎌倉では泰時に代り時頼が執權となり、天下も靜穩である。將軍には後嵯峨院の第一皇子宗尊親王が威風堂堂と下られ、前將軍三位の中將藤原頼嗣はさびしく入浴した。

第六 おりゐる雲 康元元年—正元元年

西園寺實氏は、むすめ大宮院姑子が後嵯峨院中宮となり、後深草天皇及び東宮恒仁親王（龜山天皇）の御母となつてゐるうへに、姑子の妹公子が後深草天皇に入内し、また中宮に冊立されただけでなく、實氏の子二人、兄公相は右大臣左大將に陞り、弟公基は内大臣右大將に任ぜられ、實氏自身は太政大臣であ

り、この一家の榮花は攝關家を壓するものがあつた。特に正元元年三月五日、西園寺の花盛りのをりの大宮の院の一切經供養には、天皇・上皇・東宮の行幸啓があり、主人實氏の得意は絶頂に達した。ところが、後深草天皇は皇弟恒仁親王に讓位を強ひられる事情となり、その間一沫の不安が生じた。

第七 北野の雪 正元元年—文永四年

正元元年龜山天皇即位。その後宮には實氏の弟の洞院實雄の女京極院信子がゐたが、實氏はむりに孫の今出川院嬉子（公相の女）のまだ幼ないのを入内させた。天皇は嬉子には冷やかであつたので、嬉子の兄實兼は天皇に不満を抱き、後深草上皇の皇子伏見天皇に接近するに到つた。文永三年七月、將軍宗尊親王はことによつて廢せられて上洛し、その第三皇子惟康親王がその後をついだ。四年十月には公相薨去、十二月一日に世仁親王がお生まれになつた。御母は京極院信子である。

第八 あすか川 文永五年—十一年

文永五年閏正月に、明年は後嵯峨院の五十の御賀があるといふので、その試樂があり、後嵯峨院・後深草院、その他女院・宮たちをはじめ、貴顯のかたがたが臨場して、盛大であつた。しかし、蒙古襲來の事件があつて、御賀はお取りやめになつた。八月には世仁親王の立坊があり、嬉子中宮の父の洞院實雄は悦

んだが、その兄の實氏一家は憂鬱であつた。實氏の女の後深草院中宮東二條院公子は懐妊したが、姫君を産んだ。文永九年二月、後嵯峨法皇は崩御されたが、御遺勅は、龜山天皇が御親政になることと、その御子孫が皇位に即かれることであつた。そして、皇兄後深草院には長講堂領・播磨の國衙領・熱田の社領を譲られ、永く天下の政事には干與されないやうにとのことであつた。

第九 草まくら 文永十一年—建治二年

正月二十六日、龜山天皇は後宇多天皇に讓位、爾後院政を御覽になり、餘暇には諸方に御幸がしばしばである。後深草院は御孝心は深かつたが、父院の御遺勅に望みを失ひ、出家入道し、尊號・兵仗を辭退されようとしたので、執權時頼は後深草院に御同情し、その皇子灑仁親王を今上の東宮とし、御兩統で皇位を迭立なされるやうに奏した。この時頼は入道後諸國行脚して、愁ひのある者を救つた。建治元年龜山院の異母妹齋宮愷子内親王が上京されたが、この前齋宮をめぐつり後深草・西園寺實兼・二條左大臣師忠らの情事があつて、結局、大納言實兼がこの薄命な姫宮の最期を見とつた。

第十 老のなみ 建治三年—弘安十年

龜山院には后妃が多かつたが、今上の後宮はさびしい。西園寺家にも適當な姫君がをられるが、今出川

院嬉子が龜山院に冷遇されたのをふくんで、その皇子にあたる今上には入内させない。龜山院は御兄後深草院と表面親しく交際してをられ、その御所である持明院の花盛りを訪はれたり、御同道で伏見に御幸されたりした。弘安四年に蒙古が來襲し、大騒ぎしたが、七月一日颱風のために損害をうけ退散した。弘安八年の春、實氏の室北山の准後の九十の賀が西園寺で行はれた。天皇・兩院・春宮はじめ、后妃たちの行幸啓あり、貴顯が參集して、一代の盛儀であつた。弘安十年關東からの催促で、後宇多天皇は、御位を伏見天皇に譲られた。その結果、院政は伏見天皇の御父後深草院が御覽になることとなつた。

第十一 さし櫛 正應元年—嘉元三年

伏見天皇が即位されると、西園寺實兼の女鐙子（永福門院）が入内した。やがて鐙子は立后、實兼は正二位、右大將に陞つたが、かれのはからひで、東宮には今上の皇子（胤仁、中園准后腹）が立たれる。すると、まもなく正應三年三月九日夜、淺原爲頼が宮中に亂入し、六波羅の兵に圍まれて、太政大臣源爲頼と書した矢を放つたが、力が及ばないでその一味とともに自害した。その所持してゐた刀が三條宰相中將實盛の家から出てゐるといふので、實盛は武家へ捕へられ、龜山院の身邊も危険が迫つた。實兼の子の公衡は、後深草院の御前で、この事件の背後に龜山院のおはすことを力説し、院を六波羅に幽閉しようとしたが、龜山院は幕府に誓書を遣はし、やがて禪林寺で入道された。あとにのこされた后妃たちは、それぞ

れ身の振りかたに苦慮されたが、なかには身分の低いものとしぎられたかたもあつた。そのうち、ことにあつて將軍惟康親王が廢されて、都へ流され、代りに今上の久明親王が鎌倉に下られた。永仁六年七月、伏見天皇は讓位、後伏見天皇が即位された。東宮には後宇多院の若宮（後二條天皇）が立たれた。やがて正安三年正月、今上御十四歳で退位、後二條天皇即位、後宇多上皇が院政を見られた。東宮には伏見院の第二皇子（花園天皇）が立たれる。龜山法皇はまた亂脈な生活をなされ、後宇多院の第二皇子（後醍醐天皇）の御母談天門院をも寵愛されたが、嘉元二年七月御兄後深草院崩御の後、まもなく翌三年九月に崩ぜられた。後醍醐天皇はそのころ帥宮と申したが、御祖父龜山院の崩御をとりわけ悲しんで、御妹の芥子内親王と追悼の御歌を贈答された。

第十一 くら千鳥 徳治元年—文保元年

徳治二年後宇多院の後遊義門院が崩ぜられ、院も落飾された。延慶元年八月後二條天皇崩御、花園天皇が即位された、東宮は後宇多院の第二皇子、すなはち後醍醐天皇である。文保元年九月伏見院崩御、後伏見院が院政を御覽になる。

第十三 秋のみ山 文保二年—正中元年

文保二年二月花園天皇讓位、後醍醐天皇即位。しばらく後宇多院が院政をみられたが、吉田定房が鎌倉に下向して、元亨二年から天皇親政のことにとり計らふ。後醍醐天皇は學藝にも精進され、侍臣も緊張した。

第十四 春のわかれ 正中元年—嘉暦二年

今上の東宮は後二條院の第一皇子邦良親王であるが、帝と御なからひがよくない。御祖父後宇多院はそのことを憂慮されながら、正中元年六月つひに崩ぜられた。正中二年九月正中の變が突發、日野資朝・俊基が捕へられたが、宣房が鎌倉に下向して主上は御關係ないと取りなした。東宮からは有忠中納言が關東に立ち、御即位の運動をしてゐたが、嘉暦元年三月東宮は薨ぜられた。その代りとして後伏見院の第一皇子量仁親王（光嚴）が立坊された。

第十五 むら時雨 嘉暦元年—元弘元年

今上は詩歌管絃の御遊びにふけつてをられたが、その間、討幕計畫をこらし、元弘元年夏それが發覺すると、笠置に行幸、比叡山では大塔宮護良親王らが兵を擧げられたが、いづれも苦戦で、主上は笠置を落ちて金剛山下の楠木正成の館に行幸途中捕へられたまうた。一方京都では光嚴天皇が即位され、前朝の要

人は官位を奪はれた。

第十六 久米のさら山 元弘二年（正慶元年）

元弘二年三月後醍醐先帝は都を出て隠岐へ遷幸された。隠岐の御生活はさびしい御精進の日日であつた。一方、源具行、萬里小路藤房・季房、日野資朝・俊基らが刑死したり、流されたりした悲劇が続いた。

第十七 月草の花 元弘三年（正慶二年）

隠岐の天皇は瑞夢を御覽じ、大塔宮の消息をえられて、密かに隠岐を脱出、伯耆の名和長年に頼られ、船上山に錦旗を挙げさせられたが、諸國に勤王の志士が起り、赤松圓心・足利尊氏らによつて六波羅が陥り、新田義貞は鎌倉を覆滅したので、後醍醐天皇は京都に還幸、大塔宮をはじめ、四條中納言隆資らも還俗した。かうして、後鳥羽院以來の皇室の武家に對する御憤りは散じて、大政は復古し、天皇の御親政がはじまつたのである。その内裏還御の鹵簿の盛儀を拜して、「昔だに沈むうらみをおきの海に波たち返る今ぞかしこき」と詠んだ者がある。

凡例

この校註書増鏡の本文は、現在諸本のうち最古・最善の寫本と一般に認められてゐる永和二年の奥書のある應永九年書寫の尾張徳川家傳來の本をもつて底本とし、同系統の宮内省圖書寮御藏の永和十八年奥書本、前田家所藏の後光嚴院御自筆本などによつて校合し、その脱誤を訂正した。

本文の制定にあたつては、和田英松博士・黑板勝美博士らの權威ある校訂本を絶えず参考として恩顧を蒙つたが、一般讀者の便宜を考へ、用字・假名遣ひ・句讀・段落などは、現代の標準的用法に従つて、原文の理會を容易ならしめるやうに配慮した。

頭註は、著者のもつとも苦心したところであつて、單に故事・出典・史實・風俗などに關することや難解な語彙の註釋をもつて満足としないで、その語法・文脈・文體の解明に力をつくし、紙面のゆるす限り周到綿密な解釋を施して、讀者がただちに原作の複雑微妙な匂ひや陰影を鑑賞できるやう努力した。特に和歌はみな現代語譯を施して、初學者の参考とした。また頭註のうちには私見もすくなくないので、識者の叱正を仰ぎたいと思つてゐる。

巻頭の解説は、増鏡に關する書誌的解題と、文藝史的な評論を主としてゐるが、著者年來の持論で、世

間普通の見解と相違してゐるところがあるので、これも讀者の虚心にして公平なる批判を仰ぎたいと思つてゐる。

また、増鏡にあらはれる諸人物の系圖を付けておいた。文學士金子大麓氏が著者の意をうけて作製せられたもので、讀者の参考となるならば、幸ひである。

原稿作製中、種種好意ある御忠言を賜はつた恩師五十嵐力博士は昭和二十二年一月十一日都下西多摩郡成木村の疎閑地で永眠された。いまこの筆を擱くにあたつて、先生の學恩を思ふこと切なるものがある。

昭和二十二年九月三十日

岡

一

男

増鏡

序。本物語述作の假構的縁起。

(一)二月十五日、釋迦印度拘尸那城外沙羅樹林に入滅の日。この時常縁の沙羅突如枯れて、鶴の林と化した。西紀前約四八五年。

(二)釋尊の示寂の日。法華經序品「佛此夜滅度、如薪盡火滅」

(三)阿蘭陀木の釋迦立像で、印度から支那を経て日本に再傳した。

(四)御尊像がしたはしいので。

(五)京都市右京區。俗稱釋迦堂、右如來像を本尊とする。

(六)法華經壽量品の偈。「佛陀の色身はかりに滅度の相を示せども、法身は今のごとく永遠にこの靈鷲山に在りて、法華經を説く」

(七)頭に鳩を刻んだ老人用の杖。

(八)暫らくして「氣丈に……」

(九)「僧坊へ行つて、佛前の御燈明のことなどお言ひ」といつて。

(一〇)とももの若い年ごろの侍女をいまま来た僧坊に遣つたやうだ。

(一一)物によりかかつてゐる様子。

(一二)品よくて、情がありさうよ。

(一三)先刻の人の歸り來るまで。

二月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺に詣でて、「常在靈鷲山」など、心のうちに唱へて拜み奉る。かたはらに、八十にもや餘りぬらんと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかかりてまぬれり。とばかりありて、尼「たけく思ひ立ちつれど、いと腰痛くて堪へがたし。今宵は、この局にうちやすみなん。坊へ行きて、御燈のことなどいへ」とて、具したる若き女房の、つきづきしきほどなるをば返しぬめり。

尼「釋迦牟尼佛」と、たびたび申して、夕日の花やかにさし入りたるをうち見やりて、尼「あはれにも山の端近くかたぶきぬめる日影かな。わが身の上の心地こそすれ」とて、よりぬたる氣色、なにとなくなまめかしく、心あらんかしと見ゆれば、近く寄りて、作者「いづくより詣でたまへるぞ。ありつる人の

- (一)年とつたせぬか。
 (二)いやはや、情ないもので。
 (三)いや。「いさ」は不知の意。
 (四)判断のつかないほどになりましてね。「たまへ」は「たまふ」の下二段活用で、「侍り」と同意の謙讓語。
 (五)この上なく。よほど。
 (六)後先きにも類のないと思はれた天下の大亂にも。(元弘の亂)
 (七)尊い如來様の御威光ですよ。
 (八)昔風で、都雅である。
 (九)するといふことだ。
 (一〇)齒がぬけて、頬がすぼんだ口付きで。

歸り來むほど、御伽せんはいかが」などいへば、^尼「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遙けき心地し侍る。あはれになむ」といふ。作者「さても、いくつにかなりたまふらん」と問へば、^尼「いさ、よくもわれながら思ひたまへわかれぬほどになむ。百とせにもこよなく餘り侍りぬらん。來し方ゆく先ためしもありがたかりし世の騒ぎにも、この御寺ばかりはつつがなくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし」などいふも、古代にみやびやかなり。

年のほどなど聞くも、めづらしき心地して、かかる人こそ昔物語もすなれと、思ひ出でられて、まめやかに語らひつつ、作者「昔のことの聞かまほしきままに、年のつもりたらん人もがなと思ひたまふるに、嬉しきわざかな。すこしのたまはせよ。おのづから古き歌など書き置きたるものの片はし見るだに、その世にあへる心地するぞかし」といへば、^{一〇}すげみたる口うちほほゑみて、^{二二}「いかでか聞えん。若かりし世に見聞き侍りしことは、ここの年ごろに、むば玉の夢ばかりだになく、おほほれて、なにの辨へか侍らん」とはいひながら、けしうはあらず、あへなんと思へる氣色なれば、いよいよいひはやして、作者「かの

(一五)あの世繼翁の孫女とかいふ老
嫗の物語(今鏡)も、世の人の愛
玩の書となつてゐるが、その話
手の蓬髪のお嫗も。
(一六)おだてると、さうと知つて
も。

(一七)昔はなるほど人の壽命も長く
機根も強かつたから。

(一八)精神もはつきりしてゐて、そ
の様に残りなく話したのだらう。

(一九)經る事、古言。古い史書。

(二〇)ざつと目を通した本は。

(二一)神武天皇から仁明天皇嘉祥三
年までの歴史物語。

(二二)文徳天皇から後一條天皇萬壽
二年までの歴史物語。

(二三)榮花物語、宇多天皇から堀河
天皇寛治六年までの編年體物語。

(二四)中山内大臣忠親、あるいは源
内大臣通親ともいふ。

(二五)散佚す。著者隆信は藤原爲隆
の子、元久二年歿。年六十四。

雲林院の菩提講にまゐりあへりし翁の言の葉をこそ假名の日本紀にはすめれ。

またかの世繼が孫とかいひし、つくも髪かみの物語も、人のもてあつかひぐさにな
れるは、御ありさまのやうなる人にこそありけめ。なほ、のたまへなほなど、す
かせば、さは心得べかめれど、いよいよ口すげみがちにて、七「そのかみは、
げに人の齡も高く、機きも強かりければ、それに従ひて、魂たましひもあきらかにてや、
しか聞えつくしけん。あさましき身は、いたづらなる年のみ積れるばかりに
て、昨日きのうけふといふばかりのことだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ま
していとあやしきひがごとどもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めける
ふふるごとどもはいかにぞ」といふ。

「いさ、ただおろおろ見及びしものどもは、水鏡といふにや、神武天皇の御代
より、いと疎とほらかに記せり。そのつきには大鏡、文徳のいにしへより後一條の
帝みかどまで侍りしにや。また、世繼よつぎとか四十帖の草子にて、延喜より堀河の先帝せんたいま
で、すこし細やかなる。またなにがしなにがしの大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡いまかがみに、
後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の、後鳥羽
院の位の御ほどまでをしるしたりとぞ見え侍りし。その後のことなむ、いとお

- (一)お話相手にならう。
 (二)断片的にすこし申しませう。
 (三)傍でお開きになつたら、ひどく滑稽なことでせう。あの昔の大鏡や今鏡などの翁驅たちの立派な物語におくらべ下さるな。
 (四)私のお話は昔の大鏡、今鏡、水鏡などの立派な鏡類に立ちならべなくて、ただいたづらに一鏡を増したといふにすぎない。しかもそれにはよく澄んだ鏡に物の影がはつきり映るやうに、愚かな私の心が明瞭に見えるでせう。増鏡は眞澄鏡と一鏡を増す意を懸く。
 (五)聲をふるはせながら詠じ出す。
 (六)昔の鏡類に。
 (七)いままた昔のことを書くと、明鏡に物のはつきり映るやうにその時代のことがよくわかるから、これを増鏡と名づけて、遠い昔の御代御代を書いた水鏡、大鏡、今鏡などの鏡類の續編としませう。「かけば」は書けばと懸けば、すなはち鏡を懸ける意とをかける。

ぼつかなくなりけり。おぼえたまふらん所ところどころ所までものたまへ。今宵たれも御とぎ伽せん。かかる人に逢ひ奉れるも、しかるべき御契りあらんものぞ」など語らへば、尼「そのかみのことは、いみじうたどたどしけれど、まことにことの續つづきを聞えざらんも、おぼつかなかるべければ、たえだえに少しなむ。備ひがごと事ぞ多からんかし。そはさし直したまへ。いとかたはら痛きわざにも侍るべきかな。かのふるごとどもには、なぞらへたまふまじうなむ」とて、

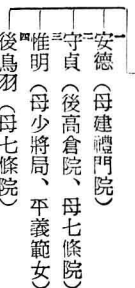
おろかなる心や見えんます鏡古き姿に立ち及ばで

と、五わななかし出でたるもにくからず、いと古こ代たなり。作者「さらば、今のたまはんことをもまた書きしるして、かの昔むかしの面影にひとしからんとこそはおぼすめれ」といらへて、

今いまもまた昔をかけばます鏡ふりぬる代代の跡にかさねん

(一) 卷名、後鳥羽天皇御製「奥山のおどろの下を踏み分けて云云」による。記事は安徳・後鳥羽・土御門・順徳の四朝にわたるが、特に後鳥羽天皇の即位事情、幕政への御不満、讓位後の水無瀬離宮の風流韻事、歌道振興の事蹟を主題とし、新古今時代の歌壇の動きを描いて、もつとも精彩がある。

高倉



- (二) 中納言藤原經忠の孫、左京大夫信輔の子。修理職長官。
- (三) 原註建春門院は誤謬。建禮門院は平清盛の女、高倉天皇中宮。
- (四) 中臈・小上臈の女房名。
- (五) 御寵愛が絶えなかつたからであらうか。
- (六) 位を下りる。御退位。
- (七) 時勢に乗つて、華奢を加へ。
- (八) きはやかに目立つて。格別に。
- (九) 高倉帝の御父、安徳帝御祖父。
- (一〇) 惟明・尊成兩孫宮をお呼び寄

第一 おどろの下

帝はじまりたまひてより八十二代にあたりて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の皇子、御母七條院 殖子と申しき。修理大夫信隆のぬしのむすめなり。高倉院位の御時、後の宮建禮門院の御かたに、兵衛の君とてつかうまつられしほどに、忍びて御覽じはなたずやありけん、治承四年七月十五日生まれさせたまふ。

その年の春のころ、建禮門院後の宮と聞えし御腹の第一の皇子安徳天皇三になりたまふに位を譲りて、帝高倉はおりたまひにしかば、平家一族のみ、いよいよ時の花をかざし添へて、華やかなりし世なれば、掲焉にももてなされたまはず。またの年、養和元年正月十四日、院高倉さへ崩れさせたまひにしかば、いよいよ位などの御望みあるべくもおはしまさざりしを、かの新帝安徳、平家の人人にひかされて、はるかなる西の海にさすらへたまひにし後、後白河法皇、御孫の宮たちわたしきこえて見奉りたまふ時、三の宮 惟明を次第のままにと思さ

せして、お逢ひなされたとき。このとき二の宮守貞親王は安徳天皇とともに西海にをられた。

(二)兄弟の順に従つて即位させようと思し召されたのに。

(一)「ああ、うるさい」とおつしやつて、つれて行かせられて。

(三)即座に。

(四)神鏡。賢所ともいふ。

(五)神璽を納めた筈。

(六)その間の御儀は常例どほり。

(七)先帝と申し上げても新帝の御兄君だから。

(八)とりわけ先帝の御宸慮のほどが大層おそれ多い。

(九)大嘗會の前、天皇が荒見河に行幸、みそぎ祓ひをする御儀式。

(一〇)御即位後、新穀を以て、天照大神と天神地祇を親祭する御儀。

(一一)大嘗會の神饌の稻を作る齋國を悠紀(東國)及び主基(西國)と

いひ、齋場の屏風に兩國の名所を描き、それに因んだ和歌を記す。

れるに、法皇をいいたう嫌ひ奉りて、泣きたまひければ、法皇「あなむつかし」とて、ゐてはなちたまひて、法皇「四の宮後鳥羽ここにいませ」とのたまふに、やがて御膝の上に抱かれ奉りて、いとむつまじげなる御氣色なれば、法皇「これこそまことの孫におはしけれ。故院高倉の兒おひにも、まみなどおぼえたまへり。いとらうたし」とて、壽永二年八月二十日、御年四にて位に即かせたまひけり。内侍所・神璽・寶劍は、讓位の時必ず渡ることなれど、先帝安徳筑紫にゐておはしにければ、今度はじめて三の神器なくて、めづらしき例になりぬべし。後にぞ、内侍所・璽の御筥ばかり歸り上りにけれど、寶劍は、つひに先帝の海に入りたまふとき、御身に添へて沈みたるこそ、いと口惜しけれ。

かくてこの帝後鳥羽元暦元年七月二十八日御即位。そのほどのこと、つねのままなるべし。平家の人人、いまだ筑紫にただよひて、先帝安徳ときこゆるも、御兄なれば、かしこに傳へ聞く人人の心地、上下さこそはありけめと思ひやられて、いとかたじけなし。同年の十月二十五日に御禊、十一月十八日に大嘗會なり。主基方の御屏風の歌、兼光の中納言といふ人、丹波國長田村とか

(二) 遠い神代の昔から、けふのおめでたい大嘗會をお祝ひするためにといふので、この長田の稻が、あれ、あの通り幾握りもある長い穂に實り垂れることを始めたのであらうか。「ながた」に長田村と八束穂の長くと天の長田とを懸けた。この歌新續古今集に見える。

(三) おとなびて。まして。

(四) 始めて御讀書したまふ儀で、博士・尚服を定め、御註孝經を清涼殿に於て讀む。

(五) 九條兼實の姫君、宜秋門院。

(六) 後鳥羽院御女、母宜秋門院、土御門天皇皇后、春華門院。

(七) 古今集序「あまねき御うつくしびの浪八島の外まで流れ、廣き御めぐみの蔭筑波山の麓よりも繁くおはしまし」

(八) 深山の荆棘のはびこつてある下をも踏み分けて道をつけ、いかなる邊鄙にも道のある世ぞと人民に知らせたい。(新古今) おどろは幕府の専横、道は朝廷の政、政道。

(九) 大變に尊い。

やを、

(三) 神世よりけふのためとや八束穂に長田の稻のしなひそめけん

帝^{みかど}後鳥羽^ごいとおよずけて賢くおはしませば、法皇^や後白河^ごもいみじうつくし

とおぼさる。文治二年十二月一日御書^ご始^{はじめ}せさせたまふ。御年七なり。おなじ六

年女御^{むすめ}任子^ままわりたまふ。月輪^{つきわ}關白^せ殿兼實^との御女^{むすめ}なり。后立^{きさきたち}ありき。後には宜^ま

秋門院^{あきかど}ときこえたまひし御ことなり。この御腹^ごに春華門院^{はるは}昇子^{のぼりこ}ときこえたまひ

し姫君ばかりおはしましき。建久元年正月三日、十一にて御元服^ごしたまふ。お

なじき三年三月十三日、法皇^{みかど}後白河^ご崩れさせたまひにし後は、帝^{みかど}後鳥羽^ごひとへ

に世をしろしめして、四方^{よも}の海波^{うな}しづかに、吹く風も枝を鳴らさず。世治まり

民安うして、あまねき御慈^ごしみの浪、秋津島^{あきつしま}の外^{ほか}まで流れ、しげき御惠^ごみ、筑

波山^{なみ}のかけよりも深し。よろづの道道にあきらけくおはしませば、國^{くに}に才^{さい}ある

人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。なかにも、敷島の道なん、すぐれさせ

たまひける。御歌^ご數知らず人の口にあるなかにも、

奥山^{おく}のおどろの下を踏み分けて道ある世ぞと人に知らせん

と侍るこそ政^{まつりごと}大事^{だいじ}と思^{おぼ}されけるほど著^{しる}く聞えて、いとみじうやんごとなく

(一) 昨今二十ばかりの御齡で退位なさるのは、大層早過ぎる御事だが、天皇としていろいろ御窮屈な御地位にをられるよりは、上皇となられた方がかへつて御氣樂で、御行幸など自由になさうといふ御考へなのであらうか。

(二) 山城國紀伊郡。

(三) 同國愛宕郡。

(四) 攝津國三島郡島本村字廣瀬。惟喬親王舊居(伊勢物語)

(五) 御存分に世の評判になる程、盛大な詩歌管絃の御遊びばかり。

(六) 元久二年六月十五日詩歌合。

(七) 特にこの地の風光を賞して。

(八) はるかに水無瀬川を眺めると彼方の山の麓も霞んで、まことに美しい春の夕の景色だ。それをどうして自分は今まで夕景色は秋に限ると思つてゐたのだらう——とお詠みになつたのが光つてゐた。

(九) 寢殿から對の屋・釣殿・泉殿などにつづけた廊をわざと茅ぶきにし、風流に數奇を發らした。

(一〇) 仙洞、上皇御所の異名。

は侍れ。

建久九年正月十一日、第一の皇子土御門院四になりたまふに、御位讓り申させたまひておりわたまふ。位におはしますこと十五年なりき。今日明日、二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御ことなれど、よろづ所狭き御ありさまよりは、なかなかやすらかに、御幸など御心のままならんとにや。世をしろしめすことは、今もかはらねば、いとめでたし。

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせたまひて、つねに渡り棲ませたまへど、なほまた水無瀬といふところに、えもいはず面白き院作りして、しばしば通ひおはしましつづ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世を響かして遊びをのみぞしたまふ。所がらも、はるばると川にのぞめる眺望、いと面白くなむ。

元久のころ、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、

見渡せば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけん

茅ぶきの廊、渡殿など、はるばると艶にをかしうせさせたまへり。御前の山より瀧おとされたる石のたたずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千代をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせたまへるころ、人人あま

- (一) 官位の低きをいふ。
 (二) お庭の築山の頂の松は舊主惟喬親王以來千歳の壽を傳つて來たかと思はれるのに老い朽ちないでなほ若しく、わが上皇様と今後さらに千年生きることをお約束してゐる。
 (三) 君が御代に、このやうに水無瀬川の水をせきとめて、庭に引き入れられたが、その泉水の岩を越して無數の珠となるのを見ると、その珠の數で、君が代の千年もつづくことがわかる。
 (四) 少納言藤原顯憲の子で、法勝寺の執行。法印は僧綱の最高位。
 (五) 源雅通の子。土御門と號す。
 (六) 母刑部卿範兼女從三位範子。
 (七) 範子。もと能圓法印の妻。
 (八) 元來内大臣は繼父だが、門院が一家の光榮である御幸ひまででかされたから、實子同様に世話された。
 (九) 土御門殿、内大臣通親邸。
 (一〇) 弱氣。
 (一一) 六條基通、建仁二年十二月攝政を罷め、九條良經に代る。
 (一二) 月輪殿兼實の子。

た召して、御遊びなどありける後、定家の中納言、いまだ下臈なりしとき獻

あり經けんもとの千年に舊りもせでわが君契る峯の若松

君が代にせき入るる庭を行く水の岩越す數は千世も見えけり

今の帝土御門の御諱は爲仁と申しき。御母は能圓法印といふ人の女在子、宰相の君とて仕うまつられけるほどに、この帝生まれさせたまひて、後には、内大臣通親の御子になりたまひて、末には、承明門院ときこえき。かの大内通親の北の方の腹にておはしければ、もとより後の親なるに、御幸ひさへひき出でたまひしかば、まことの御女にかはらず。この帝土御門もやがてかの殿にぞ養ひ奉らせたまひける。かくて建久九年三月三日御即位、十月二十七日御禊、十一月は例の大嘗會。元久二年正月三日御冠したまふ。いとなまめかしくうつくしげにぞおはします。御本性も、父帝後鳥羽よりは、すこしぬるくおはしましけれど、情深う、もののおはれなどきこし召しすぐさずぞありける。

いまの攝政は、院後鳥羽の御時の關白基通の大臣、その後は、後京極殿良經と

- (一) 文治三年藤原俊成撰進。廿卷
- (二) 御幼少。
- (三) 新古今和歌集で、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經はその撰者である。
- (四) 右衛門府長官。
- (五) 六條重家の子。
- (六) 壬生二品と號す。定家とともに當代歌壇の重鎮。
- (七) 京極攝政師實の孫、賴經の子、參議に任せらる。
- (八) 各撰者の撰進した歌を院御みづからさらに精撰あそびす様。
- (九) 左大臣の誤り。諸兄の萬葉撰進説は榮花物語に見える。
- (一〇) 延喜五年四月の勅撰、紀友則・貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑がその撰者である。
- (一一) 九條右大臣師輔男。
- (一二) 天曆五年七月設置、後撰集を撰進させた。別當(長官)は藏人左近衛少將藤原伊尹。
- (一三) 大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城。
- (一四) 聞きちがひでせうかしら。
- (一五) 二十卷。寛弘三四年頃完成。
- (一六) 二十卷。應徳三年九月勅撰。
- (一七) 藤原經平男。從二位中納言。

院の上おなじ御心に、和歌の道をぞ申し行はせたまひける。文治のころ、千載集ありしかど、院後鳥羽いまだきびはにおはしまししかばにや、御製も見えざめるを、當代土御門位の御ほどに、また集めさせたまふ。土御門の内の大内通親の二郎君、右衛門督通具といふ人をはじめにて、有家の三位、定家の中将家隆・雅經などに宣はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。おのおの獻れる歌を、院後鳥羽の御前にて、親らみがきととのへさせたまふさま、いとめづらしく面白し。このときも、先きにきこえつる攝政殿良經とりもちて行はせたまふ。

おほかた、いにしへ奈良の帝の御代に、はじめて右大臣橋朝臣諸兄勅をうけたまはりて、萬葉集を撰びしよりこのかた、延喜のひじりの御時の古今、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、天曆のかしこかりし御代にも、一條攝政殿謙徳公伊尹いまだ藏人少將などきこえけるころ、和歌所の別當とかやにて、梨壺の五人におほせられて、後撰集は集められけるとぞ、僻聞きにや侍らん。その後、拾遺集は花山の法皇のみづから撰ばせたまへるとぞ。白河院位の御時は、後拾遺、通俊治部卿うけたまはる。崇徳院の詞花集は顯輔三位えらぶ。

(一八)天養元年六月勅撰。十卷。

(一九)六條修理大夫顯輔男。

(二〇)十卷。大治二年撰進。

(二一)大納言源經信男。木工權頭。

(二二)白河院皇弟。その御誦を書きたるを不敬として却下された。

(二三)どうした理由であつたか留聲

にかなはないで、再度却下され

た。

(二四)たまさかのことである。

(二五)今度は。新古今集の場合。

(二六)紀伊國海部郡。ただしここで

は單に和歌のことで、後鳥羽院御

みづから秀歌を嚴撰されたのをい

ふ。

(二七)建仁元年、後鳥羽院をはじめ

男女三十人左右に分かれ各百首歌

を番へ、十人の判者がこれを判じ

た。

(二八)優劣の感じだけを示されたの

は却つて大層洒落れた氣がした。

(二九)後鳥羽院女房。村上天皇皇子

具平親王の裔、正四位下右京大夫

源師光女。

また白河院おりぬさせたまひて後、金葉集重ねて俊賴朝臣におほせて撰ばせた

まひしこそ、初め奏したりけるに、輔仁親王の御なのりを書きたる、わろしと

て返され、また獻れるにも、なにごととかやありて、三度奏して後こそ納まり

にけれ。かやうのためしもおのづからのことなり。おしなべては、撰者のまま

にて侍るなれど、こたみは、院のうへ後鳥羽みづから和歌の浦に降り立ちあさ

らせたまへば、まことに心ことなるべし。

この撰集より先きに、千五百番の歌合せさせたまひしにも、勝れたる限り

を撰ばせたまひて、その道の聖たち判じけるに、やがて院後鳥羽も加はらせたま

ひながら、なほこの竝みにはたち及びがたしと卑下せさせたまひて、判の詞を

ばしるされず、御歌にて、優り劣れる心ざしばかりをあらはしたまへる、なか

なかいと艶に侍りけり。

上のその道を得たまへれば、下もおのづから時を知る習ひにや、男も女も、

この御代にあたりて、よき歌詠み多くきこえ侍りしなかに、宮内卿の君といひ

しは、村上の帝の御のちに、俊房の左の大臣ときこえし人の御末なれば、はや

うは貴人なれど、官淺くて、うち續き四位ばかりにて失せにし人師光の子なり。

(一) 底知れぬ深い感興だけを。
 (二) 宮内はまだ若くて早すぎるかと思ふけれども、歌才から言ふと、悪くはないと見えるやうだから、特に加へた。氣をつけて、推薦者の朕の鼻が高くなるほど。

(三) 歌道にこの上なく執心のほどを。

(四) 彼女の獻詠したる百首歌は、いづれもそれぞれ優れてゐるなかに。

(五) 野邊の若草のみどりが濃淡さまざまに見えて、去年の雪がある處は早く、ある處は遅く、斑に消えて行つた跡までもわかる。

(六) すぐれた歌を作つたことだらう。古今集序に「力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」

(七) 撰集や進講の終つた時に催す賀宴。

(八) 上皇御所京極殿附近、一條の北、春日神を祭ると。

まだいと若き齡にて、そこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそ、いとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合のとき、院の上 後鳥羽宣ふやう、「こたみは、みな世に許りたるふるき道のものどもなり。宮内はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへて、朕が面起すばかり、よき歌仕うまつれ」とおほせらるるに、面うち赤めて、涙ぐみて侍ひける氣色、限りなき好きのほど、あはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとどりなる中に、

薄く濃き野への緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

草のみどりの濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけるほどを、おしはかりたる心ばへなど、まだしからん人は、いと思ひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、げにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いといとほしくあたらしくなむ。

かくて、このたび撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月二十六日、竟宴といふこと、春日殿にて行はせたまふ。いみじき世の響きなり。かの延喜のむかしおぼしよそへて、院 後鳥羽御製、

(九) 古歌と今の歌とを並べて、一部の書として傳へて來た、延喜の昔の事蹟——古今集勅撰の先例をいまだら追ひながら、この新古今集を編纂した。「石の上」は「ふる」の枕詞。

(一〇) 海のやうに量の多い無数の和歌から拾ひ上げられた、珠玉のやうな佳詠は、さらに琢ぎ整へられて、この立派な勅撰集が出来て、おめでたう存じます。

(一一) 以下つぎつぎに御盃がまはるにつれて、歌を詠んだやうだけれど、さうはうるさいので、省略します。

(一二) 後鳥羽院第二皇子守成親王。

(一三) 從二位藤原範季女。後鳥羽院妃。承元元年六月門院と號す。

(一四) 御讓位を大層物足らず。

(一五) 御得心がないのに退位させ申して。

(一六) 鳥羽法皇への拒否の勅使。

いそのかみ古きを今にならべこし昔の跡をまた尋ねつつ

攝政殿良經の大臣、

敷島や大和言の葉海にして拾ひし玉は磨かれにけり

つぎつぎずん流るめりしかど、さのみはうるさくてなむ。

なにとなく明け暮れて、承元二年にもなりぬ。十二月二十五日、二の宮順徳御かうぶりしたまふ。修明門院重子の御腹なり。この皇子を、院後鳥羽かぎり

なくかなしきものに思ひきこえさせたまへれば、になくきよらを盡し、いつくしうもてかしづき奉りたまふことなのめならず、つひにおなじ四年十一月に、

御位に即け奉りたまふ。もとの帝土御門今年こそ十六にならせたまへば、いまだ遙かなるべき御さかりに、かかるを、いと飽かずあはれに思されたり。永治

の昔、鳥羽法皇、崇徳院の御心もゆかぬに、おろしきこえて、近衛院をすゑたてまつりたまひしときは、帝崇徳いみじうしぶらせたまひて、その夜になるま

で、勅使を度度奉らせたまひつつ、内侍所・劍璽なども渡しかねさせたまへりしぞかし。さて、その御憤りの末にてこそ、保元のみだれもひき出でたまへ

りしを、この帝土御門は、いとあてに、おほどかなる御本性にて、思しむすほ

(一)大層はりあひのないことに。

(二)やはり後鳥羽院が天下の政事を御體になることは變らない。

(三)近江國滋賀郡長等山。

(四)近江の長等山は名も「長」と芽出たいが、その上、峰の松に吹いて來る風までも、君が代を祝つて「萬歳」の聲を立ててゐる。

「菅の根」は「なが」の枕詞。

(五)それをいままさらしくわざわざ申し上げることこそ、老いのくさり言といふのでせう。

(六)世に稀れなほど華美を競ひ。

(七)建保三年十月二十四日、順徳天皇御製「名所百首」(御集所收)

ほれぬにはあらねども、氣色にも漏らしたまはず、世にも、いとあへなきことに思ひ申しけり。承明門院土御門御母在子などは、まいていと胸痛く思されけり。

その年の十二月に太上天皇の尊號あり。新院ときこゆれば、父の帝後鳥羽をばいまは本院と申す。なほ御政はかはらず。今の帝順徳は十四になりたまふ。御諱守成ときこえしにや。建曆二年十一月十三日大嘗會なり。新院土御門の御時も仕うまつられたりし資實の中納言に、この度も、悠紀方の御屏風の歌めさる。長樂山、

菅の根のながらの山の峯の松吹き來る風も萬づ代の聲

かやうのことは、みな人のしろしめしたらん。ことあたらしくきこえなすこそ、老の僻言ならめ。

この御代順徳には、いと掲焉なること多く、所所の行幸しげく、好ましきさまなり。建保二年、春日社に行幸ありしこそ、ありがたきほど、いどみつくし、おもしろも侍りけれ。さて、そのまたの年、建保三御百首歌詠ませたまひけるに、去年のことおぼし出でて、内の御製、順徳

(八)春日神社の境内に咲いてゐた去年の三月の櫻花の匂ひとともに、あらたかな御神威に深く印象づけられた朕の心は、人は知らなくとも、春日の神は知つてをられるだらう。

(九)鋭いところがあつて、萬事てきばきしてゐられた。

(一〇)御學問も和漢を兼ねて。

(一一)八雲御抄七卷、歌學書。

(一二)東一條院、母中納言能保女。

承元四年入内、五年正月中宮册立。

(一三)都合よく行つたやうな氣がして。

(一四)東宮におなりなされる。

(一五)生誕五十日の賀宴。生兒に餅をあたへる儀式がある。

(一六)すばやいお取り計らひ。

(一七)安定してしまつた様子。

(一八)いやもう自分の皇子の世は絶望だと御落膽されたことだらう。

春日山こぞのやよひの花の香にそめし心は神ぞ知るらん

御心ばへは、新院土御門よりもすこしかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御ざえも、やまと、もろこし兼ねて、いとやんごとなくものしたまふ。

朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍りける。末の世に、「八雲」などいふもの作らせたまへるも、この帝順徳の御ことなり。攝政殿良經の姫君立子まゐりたまひて、いと花やかにめでたし。この御腹に、建保六年十月十日、一の皇子仲蒸生まれたまへり。いよいよものあひたる心地して、世の中ゆすりみちたり。十一月二十一日やがて親王になし奉りたまひて、おなじ二十六日、坊にゐたまふ。未だ御五十日だにきこしめさぬに、いちはやき御もてなし、めづらかなり。心もとなく思されければなるべし。いまひとしほ、世の中めでたく、定まりはてぬるさまなめり。新院土御門は、いでやと思さるらんかし。

かくて院の上後鳥羽ともすれば、水無瀬殿にのみ渡らせたまひて、琴笛の音につけ、花紅葉の折折にふれて、よろづのあそびわざをのみつくしつ、御心ゆくさまにて過ごさせたまふ。まことによろづ世もつきすまじき御代の榮え、つぎつぎ今よりいと頼もしげにぞ見えさせたまふ。御圍碁うたせたまふついで

(一)あれこれと各自の好みにしたがつて、いろいろな競技をおさせになる。

(二)騒ぎあつてゐるのも。

(三)賭けの物。競技の賞品。

(四)取り出での音使。興へる。

(五)なんでもよいが、廷臣たちに興へるのによい賭物を。

(六)六足ある櫃。それに金物が打つてあつて、大層重さうなのを。

(七)殿上人。すなはち某の中將。

(八)大層不審で。

(九)あきれたといふ様子がありありと見えたので。

(一〇)卿こそひどく情ないよ。

(一) 錢を。

(二)だから、今賭け物を下さいと申し上げたなら、これを特に出されたのだよ。故實を辨へていらつしやるのは、大層えらいことだよ。

(三)では自分が思ひ違ひをしたのだと、使者の中將は、すつかり度を失つて恐懼したやうである。

(四)造詣深く、御心も華奢で。

(五)寢殿造りの池に臨む建物。

に、若き殿上人ども召して、これかれ心のひきひきに、いどみ争はせさせたまへば、あるは、小弓・雙六などいふことまで、思ひ思ひに勝ち負けをさうどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さまざまの興ある賭物ども、取うでさせたまふとて、某の中將を御使にて、修明門院重子の御かたへ、「なににても、男どもに賜はせぬべからん賭物」と申されたるに、とりあへず、小さき唐櫃の金物したるが、いと重らかなるをまゐらせられたり。この御使の上人、なにならんといといぶかしくて、片端ほのあけて見るに、錢なり。いと心得ずなりて、さと面うち赤みて、あさましと思へる氣色著きを、院 後鳥羽御覽じおこせて、「朝臣こそ、むげに口惜しくはありけれ。かばかりのこと知らぬやうやはある。いにしへより殿上の賭弓といふことには、これをこそかけものにせしか。されば、いまかけ物ときこえたるに、これをしも出だされたるなむ、いにしへのこと知りたまへるこそ、いたきわざなれ」と、ほほゑみて宣ふに、さは悪しく思ひけりと、心地騒ぎて覺ゆべし。

おほかたこの院の上 後鳥羽は、よろづのことにいたり深く、御心も花やかに、ものにくはしうなどぞおはしましける。夏のころ、水無瀬殿の釣殿に出で

(二六)水漬けの飯。

(二七)源氏物語の作者、藤原爲時女一條天皇中宮彰子に仕ふ。

(二八)源氏物語「常夏」の一節。近き川は加茂川、西川は桂川、いしぶしは、はげに似た川魚。

(二九)朝廷から高官に賜はる近衛府の舍人。

(三〇)源氏物語「帚木」に「折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えな」と見ゆる玉篋の上の藪などの、艶にあえかなるすきすきしさ」

(三一)これも味をやつたな。

(三二)引出物に賜はる。賜はつた者はこれを肩にかけて拜舞する。

(三三)酒の道にも、大層はめをはずされた。

(三四)精撰の御歌合といつて、限りなく撰びに撰ばれた秀歌合も。

(三五)歌合の席上、參會者の多數で優劣を批判すること。

(三六)おろそか。

(三七)歌合では、歌人を左方と右方とにわけて番へる。

させたまひて、氷水めして、水飯やうのものなど、若き上達部・殿上人どもに賜はせて、大御酒まゐるついでにも、後鳥羽「あはれいにしへの紫式部こそ、い

みじくはありけれ。かの源氏物語にも『近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの、御前にて調じて』と書けるなむ、すぐれてめでたきぞとよ。ただいまさやうの料理つかうまつりてんや」など宣ふを、秦の某とかいふ御隨身みせん勾欄こうらんのもと近くさぶらひけるが、うけたまはりて、池の汀なる篠をすこし敷きて、白き米を水に洗ひて奉れり。「拾はば消えなん」とにや。後鳥羽「これもけしかるわざかな」とて、御衣脱ぎてかづけさせたまふ。御かはらけたびたびきこしめす。その道にも、いとはしたなうものしたまふ。なにごとくも、愛敬づき、めでたく見えさせたまふ御ありさま、千歳を經とも、飽く世あるまじかめり。

また、清撰の御歌合とて、限りなく琢かせたまひしも、水無瀬殿にてのことなりしにや。當座の衆議判なれば、人人の心地、いとどおきどころなかりけんかし。建保二年七月のころ、すぐれたる限りぬき出でたまふめりしかば、いづれかおろかならん。なかにも、いみじかりしことは、第七番に、左、院いん後鳥羽

(一) 明石の海岸の霧が次第に晴れて、浦路がはるばると見えて来る。その朝風ぎの静かな時に、沖のまだ晴れやらぬ霧のなかに、漁夫の釣舟が幾つか漕ぎ隠れゆく。

(二) 院御所警護の武士。

(三) 河内守秀宗の子。十六歳で北面となり殿上をゆるされ、新古今撰定のとき和歌所寄人となる。

(四) 御相手を仕つた。

(五) 山の木の葉が紅葉するころ夫婦にならうと約束しておいたのに、さて秋風が吹いて、その時となつた今、貴女は心變りして私を厭ふやうになつた。衣に頃もをかける。イ本によつて解釋した。

(六) 延喜の御時に御遊びありし夜、御前の御階の下に躬恒を召して、「月を弓張といふ心は何の心ぞ。これがよし仕うまつれ」とおほせ言ありしかば、「照る月を弓張ともしいふことは山べをさしていれはなりけり」と申したるを、いみじう感ぜさせたまひて、大袿賜ひて肩にうちかく。(大鏡)

(七) 九條師輔が父忠平から魚袋を贈られ、その返禮の歌の代作を頼みに貫之の家に出かけ、「吹く風

の御歌、

明石瀉浦路はれゆく朝なぎに霧に漕ぎ入るあまの釣舟

とありしに、北面のなかに、藤原秀能とて、年ごろもこの道に許りたるすきものなれば、召し加へらるることなれど、やんごとなき人人の歌だにも、あるは一首二首三首には過ぎざりしに、この秀能、九首まで召されて、しかも、院の御かたてにまわれり。さて、ありつるあまの釣舟の御歌の右に、

契りおきし山の木の葉の下もみぢ染めしころにも秋風ぞ吹く

と詠めりしは、その身の上にとりて、長き世の面目、なにかはあらんとぞ聞き侍りし。

昔、躬恒が御階のもとに召されて、「弓張としもいふことは」と奏して、御衣賜はりしをこそ、いみじきことにはいひ傳ふめれ。また、貫之が家に、枇杷の大^ハ臣、魚袋の歌の返し、とぶらひにおはしたりしをも、道の高名とこそ、日記には書きて侍れ。近きころは、西行法師ぞ北面のものにて、世にいみじき歌の聖な^ハめりしが、いまの代の秀能は、ほとほと古きにも立ちまさりてや侍らん。このたびの御歌合、大方、いづれとなくうちみだして、勝れる限りをえり出でさせたま

に氷とけたる池の魚は千代まで松の蔭に隠れむ(魚袋が松の枝につけてあつたからである)の詠を得た話が大鏡にある。原文日記とあるは作者の記憶の錯誤。

(八)藤原仲平。これも作者の思ひ違ひ、九條右大臣とあるべきだ。

(九)東帯のとき腰につける革具で三位以上は金の表裏、四位以下は銀の魚の形をその表裏につける。

(一〇)大體誰彼の差別なく、公平に詠草を見渡して、佳作のかぎりを選り出させられたから、各人の出詠の数は區區であつた。

(一一)關白藤原忠通の子、建曆二年以後四度天台座主に補せられ、大僧正となる。吉水に棲んだので、吉水の僧正と稱された。誣號慈嶺。

(一二)比叡山延曆寺の總管職。

(一三)二なく。類なく。

(一四)靈鷲山、釋迦説法の處。

(一五)釋迦牟尼佛のこと。

(一六)釋迦入滅後正法千年、像法千年を経て、末法に入り、「鬪諍堅固」の五百年となつたこと。

(一七)水の泡のやうに。

(一八)佛法に心を澄まして、私は比叡山で専念修業してゐる。

ひしかば、おのおのむらむらにぞ待りける。吉水の僧正慈圓ときこえし、また、たぐひなき歌の聖にていましき。それだに四首ぞ入りたまひにける。そのみは、こと長ければもらしぬ。

この僧正慈圓世にもいと重く、山の座主にてものしたまふことも、年久しかりし、そのほどに、やんごとなき高名數知らずおはせしかば、崇められたまふさまも、になくものしたまひしかど、なほ飽かず思ふことやありけん、院に獻られける長歌、

さてもいかに

鷲のみ山の

月のかけ

鶴のはやしに

入りしより

經にける年を

かぞふれば

二千とせをも

過ぎはてて

後のいつつの

ももとせに

なりにけるこそ

悲しけれ

あはれ御法の

水の泡の

消え行くころに

なりぬれば

それに心を

すましてぞ

わが山川に

しづみ行く。

心あらそふ

法の師は

われもわれもと

青柳の

いとところせく

みだれきて

花も紅葉も

散りゆけば

木すゑ跡なき

み山べの

道にまよひて

(一九) 聞諍堅固の僧侶ども。

(二〇) 「いと」の枕詞。一杯押し掛けて来て、亂暴するので。

(二一) 求道の頼りとするものな

(一) 空しく月日を過しながら。

(二) 甲斐もなきに渚をかけた。

(三) 近江國志賀郡比叡山麓の日吉神社。

(四) 願ひを滿つを比叡山麓の美豆川に掛けた。

(五) 叡山の頂の僧坊さへ、苔の下に荒廢して行くのを、復興する人がないものだらうか。

(六) あな憂を卯の花に懸く。

(七) 「あや」の枕詞。

(八) ここ四句拾遺愚草による。

(九) 心をつくすを常陸の筑波山にかけ、「しげき」の序とした。

「なげきのね」は嘆き(投木)の根、叡山衰退の原因。

(一〇) 開山傳教大師の英靈。

すぎながら

志賀の浦

頼めども

なりぬべし」

むれゆく。

世のなかや、

思ふより

跡絶えん

わが思ひ

思ひつつ、

花の香に

ねをたづね、

深くして

つくづくと

のどかにて

ひとり心を

跡垂れましし

人のねがひを

嶺の聖の

うち拂ふべき

春の夢路は

冬の雪をも

と思ふからに、

消えぬばかりを

暫し都に

しひて心を

しづむ昔の

つとめゆくこそ

わが君が代を

千代に千歳を

とどむるも

日よしのや

みつかはの

棲處さへ

人もがな」

むなしくて

たれか訪ふ。

くれはとり

頼み来て、

やすらひて

つくばやま

魂をとひ

あはれなれ」

おもふにも

そふるほど

かひもなきさの

神の恵みを

流れも浅く

苔の下にぞ

あなうの花の

秋の梢を

かくてや今は

あやしき夜の

なほさりともと

残る御法の

しげきなげきの

救ふ心は

深山のかねを

峯の松風

法のむしろの

(三) 衆生を濟度する方便として。
 (四) 無常の意とあすの序詞。
 (五) 「阿耨陀羅三藐三菩提の佛たちわが立つ所に冥加あらせたまへ」(傳教大師、叡山での作)を踏む。
 (六) 五木こりの斧。院のお蔭で、明日から延曆寺復興の堂塔再建の材木を伐る斧の響きがするやうになり。
 (七) 絶えないやうで絶えてゆく山川の水のやうに心細い叡山の衰運を、さうであつても、もう一度、君の御恩を蒙つて挽回したいと思ふ心がやはり深い。

(一七) 「あめ」の枕詞。日本書紀天孫降臨の神話神勅を踏む。天照大神とともに佛菩薩たちもわが皇室を護れとて。
 (一八) 傳教大師の占めた叡山の。
 (一九) 花盛りの櫻。八重は「へだつ」の縁語ともなつてゐる。
 (二〇) 思ひおきしにの意。

花の色 野にも山にも にはひてぞ 人をわたさん
 はしとして しばし心を やすむべき。 つひにはいかが
 あすか川 あすより後や わが立ちし 木のたつきの
 ひびきより みねの朝霧 はれのきて 曇らぬ空に
 立ち歸るべき」
 反歌
 さりともとおもふ心ぞなほ深き絶えで絶え行く山川の水
 定家の中将、折ふし御前にさぶらひければ、この返しせよとてさしたまはず
 るに、いと疾く書きて御覽ぜさせけり。

久かたの 天地ともに かぎりなき 天つ日嗣を
 誓ひてし 神もろともに 護れとて わが立つ木を
 祈りつつ むかしの人の しめてける 嶺の松むら
 色變へず 幾年年を へだつとも 八重のしら雲
 眺めやる みやこの春を 隣にて 御法の花も
 衰へず 匂はんものと 思ひおきし 末葉の露も

(一)傳教大師の誓ひ。

(二)「ふし」は吳竹の縁語。

(三)樵り集める嘆き。きに木を懸けた。

(四)しひでの序詞。

(五)うらむの序詞。

(六)藤原氏祖神春日社鎮座の地。

慈圓の藤原氏出身なるをいふ。

(七)禁中。「照る日」天子。

(八)大臣。三公を三台星に比す。

(九)釋尊の先蹤を追つて。

(一〇)日吉の神徳を喩ふ。

(一一)行末を滿つを美豆の川に言ひ懸く。

さだめなき

それならぬ

うぐひすの

谷がくれ

かへされぬ

山高み

助け來し

鷲の山

結ぶてふ

濁りなし

月なれば

仰ぎても

たちかへり

のどかにて

松が枝を

かやが下葉に

うきふししげき

古巢は雪に

こりつむなげき

葛の裏葉は

雲井の空に

星の宿を

世にも稀なる

法の清水の

沼の葦間に

なほ山の端を

むなしくなさぬ

心の暗を

君を祈らん

翼にならす

亂れつつ

吳竹に

あらしつつ

椎柴の

うらむとも

交りつつ

ふり棄てて

あたとめて

そこ澄みて

影やどす

行きめぐり

行く末を

はるくべき

萬づ世に

鶴の子の

もとの心の

なくねをたつる

跡絶えぬべき

しひて昔に

君は三笠の

照る日を代代に

ひとり出でにし

深きながれに

濁れる世にも

秋のなかばの

空吹く風を

みつの川なみ

日吉の御影

千代をかさねて

讓る齡は

(一)若やぐを和歌浦に懸く。
 (二)貴方の優れた詠草を集めて。
 (三)和歌の道。言の葉は歌。
 (四)貴僧が皇室の萬歳を祈られる心が深ければ、皇室も延暦寺をお頼みになるであらう。さうすれば寺の復興は期して待つべしである。一體叡山が荒廢したといつて、そのままにしておいてよいはずがあらうか。だから御心配なく皇室の御繁榮を祈り召されよ。
 (五)表だつてなされぬ御性格で。
 (六)建保四年三月、土御門院御百首。
 (七)秋の景色を幾度か宮中で送り迎へて、わが馴れ親しんで來た月よ、宮中を出た今も朕はお前のことが忘れられぬが、お前も物忘れして朕を忘れてくれるな。
 (八)御詠草の裏書に「これは意外でございませす。すつかり御言葉に欺かれてしまひましたよ、まあ陛下の御製であらせられますね」
 (九)上皇さまが宮中を出られるのを不満に思つた月も、さぞ陛下の御心と同じく陛下を戀ひしたつてあるでせう。あの御讓位の時に流した涙もまだ乾かぬ時ですもの。

わか三の浦や 今も玉藻一三をかきつめて ためしもなみに
 み一がきおく わが道一四までも 絶えせずば 言の葉ごとの
 いろいろに 後見のちん人も 戀一五ひざらめかも

反歌

君一五を祈る心深くば頼むらん絶えてはさらに山川の水

新院土御門ものどかにおはしますまに、御歌をのみ詠ませたまへど、よろづのこと一六もていでぬ御本性ほんしやうにて、人人など集めて、わざとあるさまには好ませたまはず。建保のころ、内内百首うちうち一七の御歌を詠みたまへりしを、家隆の三位、また定家の治部卿のもとなどへ、いふがひなき兒このよめるとて、遣はして見せられしに、いづれもめでたくさまさまなるなかに、懷舊の御歌に、
 秋あきの色を送り迎へて雲の上に馴れにし月ももの忘れすな
 とあるところに、定家の君驚きかしこまりて、うらがきに、「あさましくはか
 られ奉りけること」などしるして、

ああかさりし月もさこそは思ふらめふるき涙も忘れぬ世を
 と奏せられたり。院後鳥羽も縁えんありて御覽すべし。げにいかが御心動こころかずしも

- (三) なにかのついでに。
- (三) 土御門院の御心中である。
- (三) 後鳥羽院と御不和の様。

おはしきさんと、その世のことかたじけなくなむ。今もすこし、世三のなかへだたれるさまにてのみおはしますこそ、いといとほしき御ありさまなめれとぞ。

- (一) 卷名は、後鳥羽院の隠岐での御製「われこそは新島もりよ隠岐の海の云云」による。記事は、武士の起原、源平兩氏及び北條氏のことも興つたこと、特に承久の亂、後鳥羽・土御門・順徳三上皇の遠島左遷と、その配所におけるわびしき御生活を委細に描く。
- (二) 坂上田村麿、桓武天皇の時、征夷將軍となり、東夷を平ぐ。
- (三) 藤原時長の男、鎮守府將軍、醍醐天皇の時、下野國高座山の賊を討つた。
- (四) 時代が非常に古くて、事蹟がはつきりしないので、お話ししない。
- (五) 朝廷の守護。
- (六) 山城國伏見、桓武天皇御陵地。
- (七) 平國香の男、鎮守府將軍。
- (八) 貞盛の子は維衡・維將で、維時は維將の子。原文は誤り。
- (九) その一門が減んでしまつたら、現在ではその餘類が辛うじてあるかなきかの哀れなさまで、諸國に流浪してゐるやうである。
- (一〇) 末裔はすつかり名もない民となつて。
- (一一) 清和天皇の皇孫經基王から源姓となつたのを清和源氏といふ。

第二 新島守

たけき武士の起りを尋ねれば、いにしへの田村・利仁などいひけん將軍どものことは、耳遠ければさし措きぬ。そのかみより今まで、源平の二流れぞ、時によりをりにしたがひて、おほやけの御守りとはなりにける。桓武天皇ときこえし帝をば、柏原とも申すなり。その皇子に、式部卿の親王 葛原親王 ときこえしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡、維時とて、二人の子をもたりけり。まぢかく榮えし西八條の清盛の大臣は、かの太郎維衡より六代の末なりき。そのひとつ門亡びしかば、このころは、わづかにあるかなきかにぞまがふめる。さてかの維時がなごりは、ひたすらに民となりて、平四郎時政といふものみぞ、伊豆の國北條の郡とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。

また源氏武者といふも、清和の帝、或は宇多院などの御後どもなり。二條院の御時、平治のみだれに、伊豆の國蛭が島へ流されし兵衛佐頼朝は、清和の帝

- (二)宇多天皇の皇孫雅信から源姓となつたのを宇多源氏といふ。
 (三)平治元年、藤原信賴・源義朝ら叛す。賴朝は義朝の三男。
 (四)伊豆國田方郡韭山村。
 (一)義朝の父、爲義の邸は京都六條堀河にあり、官は檢非違使尉であつたので、六條判官といふ。
 (二)左馬寮長官。爲義の子。
 (三)清盛雅娶して淨海といふ。
 (四)治承元年藤原成親らの平家に對する陰謀があらはれ、清盛は院を鳥羽殿に幽閉した。
 (五)後白河院(法皇)が密かに平家追討の院宣を賴朝に下された。
 (六)征夷大將軍となつて國政を執る。下文「世のかため」も同じ。
 (七)いままさらお話するのも、かへつてどうかと思はれるけれど。
 (八)從二位に敘せられたのも、八島にゐた内大臣平宗盛公をいけどりにした恩賞だとの噂であつた。
 (九)建久元年十月三日、賴朝鎌倉出發、十一月七日京に到着。
 (一〇)遊女、白拍子の類。
 (一一)橋本の遊君たちに何をやらうか。橋と渡すとは縁語。
 (一二)ただなにやららないでおきた

より八代のながれ、六條判官爲義といひし者の孫なり。左馬頭義朝が三郎になむありける。西八條の入道大臣中清盛やうやう榮華衰へんとて、後白河院をなやまし奉りしかば、安からずおもほされて、かの賴朝を召し出でて、軍を起したまひしに、しかるべき時や至りけん、平家の人人は壽永の秋の木枯に散りはてて、遂にわたつ海の底の藻屑と沈みにしのち、いよいよ賴朝權をほどこして、さらに君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里といふ所に居りながら、世をば掌のなかに思ひき。みな人知りたまへることなれば、いままさら申すもなかなかなれど、院の上後鳥羽位につかせたまひしはじめより、世のかためとなりて、文治元年四月、二の階をのぼりしも、八島の内の大臣宗盛生け捕りの賞と聞き。

建久のはじめつ方都に上る。その勢ひのいかめしきこと、いへばさらなり。道すがら、遊女ものどもまゐる。遠江の國橋本の宿に著きたるに、例の遊女おほく、えもいはず装束きてまゐれり。賴朝うちほほをみて、

はしもとの君になにをか渡すべき

といへば、梶原平三景時といふ武士、とりあへず、

い。柚山は材木を伐り出す山で、樽一材木と縁語、また前句の橋とも縁語。後世げぢげちと呼ばれた平三景時の面目躍如としてゐる。

(一三)愛想がない。憎たらしい。

(一四)紺纈纈、紺色の絞りに染め。

(一五)引出物にすると。

(一六)原本「十二月」つぎの句によつて、十一月の誤寫と知られる。

(一七)任官の御禮言上。

(一八)諸國の盜賊等を追捕する官を追捕使といふ。その總監の職。

(一九)諸國の莊園を司る幕府派遣の吏員。租税・課役・檢察を掌る。

(二〇)王威の衰へること。

(二一)たむけの物、贈物。餞別。

(二二)東國にある勿來關の「なこそ」といふ名は、君が關東に來られなくて、永久に都にお住みなされたいふ意味で附けたのですよ。

(二三)都には君に逢ふといふ逢坂の關が近いのですから、近いうちにまた貴僧に肉眼にかかれませう。だから、勿來の關はずつと遠方にあつて、私どもに、關係のないことと知つて下さい。

(二四)治承四年平重衡が奈良東大寺を焼いたのを再建し、建久六年三

ただそま山のくれであらばや
いとあいだちなしや。馬鞍、紺纈纈物など、運び出でて引けば、喜びさわぐことかぎりなし。

その年十一月九日、權大納言になされて、右近大將を兼ねたり。十二月一日ごろ、よろこび申して、おなじき四日、やがて官をば返し奉る。この時ぞ、諸國の總追捕使といふことうけたまはりて、地頭職にわが家のつはものどもなし集めける。この日本國の衰ふるはじめは、これよりなるべし。さて、あづまに歸り下るころ、上下色色のぬさ多かりしなかに、年ごろも祈りなどしたまひし吉水僧正蓋圓かの長歌の座主のたまひつかはしける。

あづまぢのかたに勿來の關の名は君を都に住めとなりけり
御返し、頼朝、

都には君にあふ坂近ければ勿來の關は遠きとを知れ

その後もまた上りて、東大寺の供養にも詣でたりき。かくて新院土御門の御位のはじめつかた、正治元年正月、東にて頭おろして、おなじ十三日に、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちゐられて、二十年ばかりや

月落成の供養法會があつた。

(一) 頼朝の夫人、北條政子。

(二) 落ちつかない。物狂ほしい。

(三) 「つはものども」の誤説か。

(四) 將軍家の執權、朝廷の攝政關白を公の後見といふに對する。

(五) 何でも來いといふ様子。

(六) 才覺もすぐれてゐる者で頼家を將軍として不適當であると思つて、弟の實朝に味方して、かれこれ計畫することなどもあつた。

(七) 狂疾をさへ發して。

(八) 承認する者がない。

過ぎぬらん。

北^一の方は、先きにきこえつる北條の四郎時政が女^女政子なり。その腹に、をのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將頼朝かくれて後、兄頼家はやがて立ちつぎて、建仁元年六月二十二日從二位、おなじ日將軍の宣旨を賜はる。またの年、左衛門督^{左衛門督}になさる。かかれども、少し^二おちぬ心ばへなどありて、やうやう^三つはものもそむきそむきにぞなりにける。時政は遠江守といひて、故大將頼朝のありしときより、私^四の後見^{後見}なりしを、まいていまは孫の世なれば、いよいよ身重く、勢ひそふことかぎりなくて、うけばりたるさまなり。子二人あり、太郎は宗時といふ。二郎義時といふは心も猛^{たけ}く、魂^{たま}まされるが、左衛門督頼家をば、ふさはしからず思ひて、弟の實朝の君につき従ひて、思ひ構ふることもありけり。督頼家は日にそへて人にもそむけられゆくに、いと^七いみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭^{あたま}おろす。世のなかのこり多く、なにごとあたらしかるべきほどなれば、さこそ口惜しかりけめ。幼なき子の一萬といふにぞ、世をば讓りけれど、うけひくものなし。入道頼家は、かの病つくるはんとて、鎌倉より伊豆の國へ、いで湯浴び

(八九) 京都二條南、西洞院西の皇居。

(一〇) 左馬寮御監(ごげん)をも兼ねた。

(一一) 剛毅と温和とをかねて、萬事に難がなかつたので、なみなみならず、武士たちの悦服するさまも父、兄の代にも越えた。

(一二) たとひ山は砕け、海は水の涸れてしまふやうな世になつても、大君に對して異心を自分は抱かぬか、抱きはしない。金槐集に「太上天皇御書下給時歌」とある。

(一三) 僧。原義は高僧。

(一四) 父頼家の討たれたことを、どうして平氣でゐられようか。どんな機會を見つけて仇を討たうかとばかり思ひつづけてゐたところ。

(一五) 任大臣披露の宴で、任官の翌年正月公卿・殿上人を饗應する。

に越えたりけるほどに、かしこの修善寺といふところにて、つひに討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは、實朝と義時と、一つ心にてたばかりけるなるべし。

さていまは、ひとへに實朝故大將頼朝の跡をうけつぎて、官位滞ることなく、よろづ心のままなり。建保元年二月二十七日、正二位せしは、閑院の内裏造れる賞とぞ聞き侍りし。おなじ六年、權大納言になりて左大將を兼ねたり。左馬寮をさへぞつけられける。その年やがて内大臣になりても、なほ大將もとのままなり。父にもやや立ちまさりていみじかりき。この大臣實朝はおほかた心ばへうるはしく、たけくもやさしくも、よろづめやすければ、ことわりにも過ぎて、武士の躋き従ふさまも、代代に越えたり。いかなる時にかありけん、

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心わがあらめやも

とぞ詠みける。

時政は建保三年かくれにしかば、義時ぞ跡をつぎける。故左衛門督頼家の子にて、公曉といふ大徳あり。親の討たれにしことをいかでか安き心あらん。いかならん時にかとのみ思ひわたるに、この大臣實朝また右大臣にあがりて、大饗

(一)大變の上席の客。この時、大納言忠信・中納言實氏・宰相中將國通らが京から鎌倉に下向した。

(二)鶴岡八幡宮。石清水勇山八幡宮を遷座す。

(三)たいした評判だつたから、諸國の武士は勿論で、都の人もお供をした。大聲を立てて騒いだり、見物をする者も多くゐたが。

(四)白い薄物の衣を引き披いて。

(五)うかがふやうに見えた。

(六)その時の騒動の大變さ。

(七)大勢集つた人人。

(八)火の消えたやうである。

(九)右大臣の鶴岡八幡宮神拜の隨從に參議兼近衛中將の西園寺實氏(公經の子)も下つてゐた。この人をはじめ、他の人人も泣く泣く涙の袖を絞りながら歸京した。

(一〇)悲嘆にくれてゐたが、この人を幕府の主人と仰いだ。尼將軍と稱された政子のこと。

(一一)かうはしたものの、このままでは、どうかと思はれたので。

(一二)御令息お一方を關東に御下向願つて、將軍にさせてください。

(一三)承知しようと思し召してゐる矢先。

など、めづらしく東にて行ふ。京より尊者をはじめ、上達部、殿上人多くとぶらひましけり。さて鎌倉に移し奉れる八幡の御社に神拜に詣づる。いと嚴めしき響きなれば、國國の武士はさらにもいはず、都の人人も扈從しけり。立ち騒ぎののしる者、見る人も多かるなかに、かの大徳公曉うちまぎれて、女のまねをして、白き薄衣ひきををり、大臣實朝の車より降るるほどを、さしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首を打ち落しぬ。そのほどのどよみいみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月二十七日なり。そこらつどひ集まれるものども、ただあきれたるよりほかのことなし。京にもきこし召し驚く。世のなか火を消ちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下りたまひき。さならぬ人人も、泣く泣く袖をしぼりてぞ上りける。

未だ子もなければ、立ち繼ぐべき人もなし。こと静まりなんほどとて、故大臣實朝の母北の方二位殿政子といふ人、二人の子をも失ひて、涙乾す間もなく、しをれ過ぐすをぞ將軍にもちぬける。かくても、さのみはいかがにて、「君だち一所下しきこえて、將軍になし奉らせたまへ」と、公經の大臣に申しのぼせければ、あへなんとおぼすところに、九條右大臣殿道家の上は、このおとど

(二四)九條攝政道家公の子、母は西園寺太政大臣公經公の女、嘉祿二年正月廿七日、正五位下右少將となり、征夷大將軍に任ぜられた。

(二五)神をまつるとき神靈の代りとする人形(ひとがた)。

(二六)攝政關白をいふ。一の所とも。
(二七)藤原氏の祖神天兒屋根命。この夢の告げは源中納言雅頼の青侍が嚴島で得た。(平家物語卷五、物怪)

(二八)處理し、下知すること。
(二九)ほんたうに心外なことも。

(三〇)北面とは上皇の院中を護衛する武士、上北面は五位、下北面は六位、下蔭は下北面のこと。

(三一)これも院中伺候の武士で、後鳥羽上皇がはじめて設置された。

(三二)ほのかに御同意した者は。

(三三)刀劍の利鈍の御鑑定さへ、どうしてお習ひになつたのか、その道の専門家よりまなはずぐれて御明察されたので。

公經の御女なり。その御腹の若君賴經の二つになりたまふを、下しきこえんと、九條殿道家宣へば、御孫ならんもおなじこととおぼして定めたまひぬ。

その年の六月にあづまに奉て奉る。七月十九日におはしまし著きぬ。襦袢のなかの御ありさまは、ただ形代などをいはひたらんやうにて、よろづのこと、さながら右京權大夫義時の朝臣心のままなれど、一の人の御子の將軍になりたまへるは、これぞはじめなるべき。かの平家の亡びがた近く、人の夢に「賴朝が後は、その御太刀あづかるべし」と、春日大明神おほせられるは、この今の若君の御ことにこそありけぬ。

かくて世を靡かししたため行ふことも、ほとほと古きには越えたり。まめやかにめざましきことも多くなりゆくに、院の上後鳥羽忍びて思し立つことなどあるべし。近く仕うまつる上達部、殿上人、まいて北面の下蔭、西おもてなどいふも、みなこのかたにほのめきたるは、あけくれ、弓箭兵仗のいとなみよりほかのことなし。劍などを御覽じ知ることさへ、いかで習はせたまへるにか、道の者にもややたちまさりて、かしこくおはしませば、御前にてよきあしきなど定めさせたまふ。

(一) 新帝が前帝から皇位をゆづられること。

(二) 近衛攝政基通の子。

(三) 京極攝政良經の子。

(四) 幕府派遣の京都守護。

(五) とにかく手はじめに彼を血祭りにしようと、勅勘のよし仰せられるから、院の御味方にまゐつた武士どもが、おしよせたところ、光季は。

(六) 前世のしかるべき因縁で。

(七) 思ふものの。

(八) 犬死に同然で、屍をさらすまい。

(九) 官軍とは申しても、天皇御自身遊ばすことでないから、遠慮に及ばないし、それにまた、自分の一生の運をもためすだけだと、考へ直し。

かやうの紛れにて、承久も三年になりぬ。四月二十日帝順徳降^がりさせたまふ。

春宮仲恭四つにならせたまふに譲り申させたまふ。近頃みなこの御齡^{がたよはひ}にて受禪^一ありつれば、これもめでたき御行く末ならんかし。おなじ二十三日、院號のさだめありて、いまおりさせたまへるを、新院順徳ときこゆれば、御兄^{あに}の院をば中の院土御門と申し、父帝^{ふかど}をば本院後鳥羽とぞきこえさす。このほどは家實^{けに}の大臣關白にておはしつれど、御讓位^{おとご}のとき、左大臣道家^{だいか}の大臣攝政^{せいてい}になりたまふ。かのあづまの若君頼經の御父なり。

さても院後鳥羽の思^{おぼ}し構^{かま}ふることに、忍ぶとすれど、やうやうもれ聞えて東^{ひんが}さまにもその心づかひすべかんめり。あづまの代官にて伊賀判官光季^{ひかり}といふものあり。かつがつかれを御勘事^{ごかんじ}のよしおほせらるれば、御方^{みかた}にまゐるつはものどもおしよせたるに、逃^{のが}るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ、院後鳥羽はおほしめしける。

東^{あづま}にもいみじうあわて騒^{さわ}ぐ。襄時^{じやうじ}「さるべくて、身の失^うすべき時にこそあんなれ」と思^{おも}ふものから、「討手^{うつけ}の攻め來たりなるときに、はかなき様にて、屍^{かば}をさらさじ。おほやけときこゆとも、みづからしたまふことならねば、かつは

(一〇)雲霞の如く軍勢をひきつれて。

(一一)お前を。

(一二)敵にうしろを見せるならば。

(一三)うしろぐらい心はもたない。

(一四)非業の死をとげるはずは絶對にない。だから義時のことは心配しないで、氣を強く持て。

(一五)親子たがひに、これが今生の別れかと思ふと、感慨深く、心細い様子である。

(一六)承久三年五月廿二日鎌倉を出發した、その翌日のことである。

(一七)戦の方法や大體の處置については、おほせのとり心得ました。ただ、もし路のほりにでも思ひがけなくて、畏くも天皇の鳳輦をさきに立て、錦の御旗をなびかせて、御親征といふ嚴めしい御儀でもあつて、行き逢ひますならば、その時の進退を、どういたしませうか。

わが身の宿世しゆくせをも見るばかり」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人をかしらとして、雲霞うんがのつはものをたなびかせて、都にのぼす。泰時を前にすゑていふやう、泰時「おのれをこのたび都にまゐらすことは、思ふところおほし。本意ほんいのごとく、清き死しにをすべし。人ひとに後見うしろえなんには、親の顔また見るべからず。いまをかぎりと思へ。いやしけれども、義時、君の御ために後うしろめたき心やはある。されば横よこさまの死にをせんことはあるべからず。心をたけく思へ。おのれうち勝つならば、二たびこの足柄、箱根山は越ゆべし」など、泣く泣くいひ聞かす。「まことにしかなり。また親の顔拜まんこともいとあやふし」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに、いまや限りとあはれに心細げなり。

かくてうち出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時ただ一人、鞭むちをあけて馳せ來たり。父義時胸うち騒ぎて、「いかに」と問ふに、泰時「いくさのあるべきやう、おほかたのおきてなどは、おほせのごとくその心をえ侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦ほうげんをさきだてて、御旗をあげられ、臨幸りんこうの嚴重げんじゆうなることも侍らんに参りあへらば、その時の進退は、いかが

- (一) 暫らく考へて。
- (二) 豫期してゐられたのだから。
- (三) 宇治・勢多二橋を撤去させて
- (四) 一人のみなむは「一方ならず云云」へ續く文脈である。

賴朝 良經室一道家

能保室 公經室一女 賴經

公經公一人だけ、御孫の賴經將軍の關係もあることだし、公の夫人は一條中納言能保といふ人の娘で、しかも、その母の中納言夫人が故大將賴朝の妹だから、ひとかたならず關東を重んじられて、後鳥羽院の御言葉には返事もしないで「院の御心の輕率なことよ」と危なく思はれた。

- (五) 後鳥羽上皇の御生母。
- (六) 御姻戚。
- (七) 清經は清親の誤寫かといふ。
- (八) 中御門中納言宗行の誤か。
- (九) 順徳上皇の御生母。
- (一〇) 參議、右近衛中將兼甲斐守。
- (一一) 關東調伏の御祈禱。
- (一二) 天台・眞言の高僧。
- (一三) 日吉七社の第一。
- (一四) 日吉七社の神殿を金銀で莊嚴しようといふ、壮大な大願。

侍るべからん。この一ことをたづね申さんとて、一人馳せ侍りき」といふ。義時、「かしこくも問へるをのこかな。そのことなり。まさに君の御輿おんこしに向かひて、弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は、兜かぶとをぬぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましたながら、軍兵ぐんびやうを賜はせば、命をすて、千人が一人になるまでも戦ふべし」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。都にもおぼしまうけつることなれば、武士ものぶども召しつどへ、宇治、勢多の橋をひかせて、敵を防ぐべき用心ことなり。公經の大將一人のみなむ、御孫みまごのこともさることにて、北の方公經室一條中納言能保といふ人の女なり。その母北の方は、故大將賴朝のはらからなれば、ひとかたならず、あづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院 後鳥羽の御心の輕ろきことと、あぶながりたまふ。七條院殖子の御ゆかりの殿原、坊門大納言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、また修明門院重子の御はらからの、甲斐の宰相中將範茂など、つぎつぎあまたきこゆれど、さのみは記しがたし。軍にまじり立つ人人、このほか上達部にも殿上人にもあまたありき。

(一) 吾突然ものにおびえて起き上り院の御前に眞直に走りまゐつて。
(二) 愁訴あそばされるから。
(三) 七閉き棄てにしくい。
(四) 去年(建保六年九月)比叡山の衆徒が日吉の神輿を奉じて、都に亂入した時、神輿にも陛下がお防がせになつたので、僧兵どもが、私の神威が薄いからだと恨んで、神輿を六衛府の詰所の邊に。(ここでは皇居閑院左衛門の陣である)
(五) 徒らに牛や馬の蹄にかかつたことは、今でも怨めしく存じてゐますので、こんどの御戦のお味方はよう仕りませぬ。
(六) 山王七社(大宮・二宮・聖眞子・八王子・客人・十禪寺・三宮)の神殿をみな金銀でちりばめて美しく新築しようと思はれても、絶対にお引き受けはいたしません。
(七) 大聲で叫んで。
(八) 警へるにもなく。
(九) 過去の御失策が残念で、なんとか取り返したいと思はれた。
(十) その過意をおわびなさる。
(十一) 山の神輿を追ひ拂はせられたのは、かならずしも叡慮からでなく、廷臣の議によつてであらうが。

御修法ども數知らず行はる。やんごとなき顯密の高僧も、かかる時こそ頼もしきわざならめ。おのおの心を致して仕うまつる。御みづから後鳥羽もいみじう念ぜさせたまふ。日吉の社に忍びて詣でさせたまへり。大宮の御前に、夜もすがら御念誦したまひて、御心のうちに、いかめしき願どもを立てさせたまふ。夜すこしふけしづまりて、御社凄く、燈爐の光かすかなるほどに、をさなき童の臥したりけるが、にわかにおびえあがりて、院の御前にただまゐりに走りまゐりて、託宣しけり。「かたじけなくも、かく渡りおはして、愁へたまへば、聞き過ごし難くは侍れど、一年の興振りの時、情なく防がせたまひしかば、衆徒おのれを恨みて、陣のほとりにふり捨て侍りしかば、空しく馬牛のひづめにかかりしことは、いまにうらめしく思ひたまふるにより、このたびの御方は、え仕うまつり侍るまじ。七社の神殿を金銀にみがきなさんと承るも、専らうけ侍らぬなり」とののしりて、息も絶えぬるさまにて臥しぬ。きこしめす御心地、ものに似ずあさましう思さるるに、ただ御涙のみぞ出でくる。過ぎにしかた悔しう取り返さまほし。さまざまおこたりかしこまり申させたまふ。山の御輿防ぎ奉りけんこと、かならずしもみづから思しよるにはあらざり

(一) すべての責任は上御一人にあるといふ諺のやうなことであらうかと思ふと、實に情ないことだ。論語堯曰篇に「百姓過あるは責め予一人にあり」と。一人は天子。

(二) いやいや御位を退かれたから言葉に出してこそおつしやらないが、世間が面白くないままに。

(三) 後鳥羽院と御心をあはせて。

(四) 下知し宣うた。

(五) いひやうがないほど、大變に水が溢れ凄く奔流するので。

(六) 駿馬も。

(七) 速い田舎に逃げ延び。

(八) 以前には勇敢に見えた人人も、いざといふ場合になると、顔色をなくしてゐる様子など、はなはだ頼りにならない。

(九) ただもうものにぶつつかるほど狼狽する。

けめど、「責め一人に」といふらんことにやと、あぢきなし。中院土御門は、あかで位をすべりたまひしより、言に出でてこそものしたまはねど、世のいと心やましきままに、かやうの御騒ぎにも、ことにまじらひたまはざめり。新院順徳はおなじ御心にて、よろづ軍のことなどもおきておほせられけり。

いつの年よりも、五月雨晴れ間なくて、富士川・天龍など、えもいはずみなぎり騒ぎで、いかなる龍馬もうち渡しがたければ、攻め上る武者どもも、あやしくなやめり。かかれども、つひに都ちかづくよし聞ゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢ひ六萬餘騎とかや、宇治・勢多へ分ち遣はず。世のなか響きののしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかがあらんと、君 後鳥羽も御心みだれて思しまどふ。かねては猛く見えし人人も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたたしく、色を失ひたるさまども、頼もしげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、つひに御方の軍敗れぬ。荒き磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房みだれ入りぬれば、いはんかたなくあきれて、上下、ただものにぞあたりまどふ。

(二〇)相談の上で下知して。

(二一)保元の亂後、崇徳上皇を讃岐國へ遷し奉つた例。

(二二)後鳥羽上皇。

(二三)七條院・承明門院・修明門院・雅成親王・頼仁親王ら。

(二四)その他のかたがたが。

(二五)網代ではつた車、攝關大臣大將らは略儀遠行に用ゐ、以下の人人は常用する。ただし、官位によつて、その裝飾に差違がある。

(二六)「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」(河海抄)木卷引用の古歌)世の中を取り返したい、そして昔どほりのわが身と思ひたい。

(二七)右京大夫藤原隆信の五男、正四位下左京權大夫となる。父子ともに肖像畫に名あり。

(二八)御船に召されて。

(二九)史記始皇本紀に、子嬰が秦王となりて四十六日、楚將沛公に敗られ、降人となつた記事がある。

東よりいひおこするままに、かの二人聚時、時房の大將軍はからひおきてつ

つ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしときこゆれば、女院、

宮宮ところどころにおぼしまどふことさらなり。本院後鳥羽は隱岐の國におは

しますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせた

まふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」と

おぼさるるもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つやあ

まらせたまふらん。まだいとほしかるべき御ほどなり。信實の朝臣召して、御

姿うつし書かせらる。七條院へ奉らせたまはんとなり。かくておなじ十三日

に、御船にたてまつりて、遙かなる浪路をしのぎおはします御心地、この世の

おなじ御身とおおぼされず、いみじう、いかなりける代代のむくいにかと、う

らめし。

新院順徳も佐渡國にうつらせたまふ。まことや、七月九日帝仲菰をもおろし

奉りき。この卯月かとも、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘

日にておりたまへるためしも、これやはじめなるらん。唐土にぞ、四十五日と

かや位におはする例ありけると、唐の書讀みし人のいひし心地する。それもか

(一) 自分ひとり心しづかに都にとどまつてゐることは、おそれ多いことだとお考へになつて、御自身から遠島に移ることを御希望され

(二) 院中の雑役をする者。

(三) 腰興、手で昇ぐ興。

(四) この憂きこと多い世には、かうあれとて自分は生まれたのであらう。それなのに、その因果の理を知らないわが涙が、未練にも流れることよ。

(五) 關東から、都へお歸り願ひたいが、それができないなら、せめて都に近いところにでもと奏上したものだから、土御門院はのちに阿波國にお移りになつた。

(六) 觀無量壽經に、劫初よりこのかた、諸の惡王あり。國位を貪るがゆゑに、その父を殺害せしこと一萬八千なり。いまだかつて無道にして、母を害せしことあることを聞かず。

(七) 一つや二つ理由はあつたら

やうの亂れやありけん。さて上達部・殿上人、それより下、はた残りなく、このことにふれし類ひは、重く軽く罪にあたるさま、いみじげなり。

中院 土御門は、はじめよりしろしめさぬことなれば、東にも咎め申さねど、父の院 後鳥羽、遙かにうつらせ給ひぬるに、のどかにて都にあらんこと、いと恐れありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の幡多といふところにわたらせたまひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮 後醍醐いできたまへり。承明門院在子の御兄に、通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人の女の御腹なり。やがて、かの宰相の弟に通方といふ人の家にとどめ奉りたまひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら、雪かきくらし、風吹きあれ、吹雪して、こしかたゆく先も見えず、いとたへがたきに、御袖もいたく氷りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかかれとてこそ生まれけめことわり知らぬわが涙かな

せめて近きほどにと、東より奏したりければ、後には阿波の國にうつらせたまひにき。

- (八)あるいは血統の異なつた大臣とか、さうでなくても、皇位につかれるはずの身分のかたが、豫期に反してちよつとしたことから政權に離れて、その怨みのはてなどから、事件が勃發するのである。
- (九)まつたくの申しい民。北條義時をさす。
- (一〇)平將門。天慶年間に下總國で叛いて、秀郷・貞盛に滅ぼされた。承平とあるのは彼が伯父國香を殺したのが承平五年だからであらう。
- (一一)藤原純友、南海で叛いて、小野好古に滅ぼされた。
- (一二)源義家の子、鎮西を劫掠し、平正盛に滅ぼされた。
- (一三)勢ひが盛んであつたが。
- (一四)伊勢内宮の神苑を流れる川。天照大神も、おなじ皇統でも、時の帝の方を守護なさることは、やはり一段と強いと見える。
- (一五)平治の亂をさす。
- (一六)僭越至極にも。
- (一七)後鳥羽・土御門・順徳の三上皇。

さてもこのたび世のありさま、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは父の王を失ふためしだに、一萬八千人までありけりとこそ、佛も説きたまひためれ。まして世くだりてのち、唐土にも日の本にも、國を争ひて戦ひをなすこと、數へつくすべからず。それもみな、一ふし二ふしのよせはありけん。もしは、筋ことなる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、すこしの違ひ目に、世に隔たりて、その怨みの末などより、こと起るなりけり。いまのやうに、むげの民と争ひて、君のほろびたまへるためし、この國には、いとあまたも聞えざめり。されば、承平の將門、天慶の純友、堀河の義親、いづれもみな猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に、崇徳院の世をみだりたまひしだに、故院後白河御位にて、うち勝ちたまひしかば、天照御神も、御裳灌川のおなじ流れと申しながら、なほ、ときの國王を護りたまはすることは、強きなめりとぞ、ふるき人人もきこえし。また、信頼の衛門督、おほけなく二條院をおびやかし奉りしも、つひにむなしき屍をぞ、道のほとりに棄てられける。かかれば、ふりにしことを思ふにも、なほさりともしいかでか、三皇、今上仲恭あまたおはします皇城の、いたづらにほろぶるやうはあらんと、頼もしくこそ覺え

(一)このやうに不條理なことが起るの、現世のことだけでなく、過去の因縁にもよることだらうが悟りのない愚痴凡庸の身には、なほ不思議にたへない。

(二)以下後鳥羽院の御こと。

(三)ひまなき(忙しい)の序。「こや」に、來や・小家と、攝津國河邊郡昆陽とをかけた。「津の國のこや」とも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺き(和泉式部)

(四)みだれの序。

(五)仙人の住む山。上皇御所にたとへる。仙洞とも、霞の洞とも。

(六)とうとうお終ひに。

(七)つまらない一事件のために、いまはかう花やかな都をさへ立ち離れ、御一族が各各ちりぢりに諸方に流浪し。

(八)いつ何日までと期限をきつたのであつてさへ、明日の日の命もわからぬ世のなかの氣づかはしさ。に後髪ひかれて、大層心細からう。

して、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつのことにもあらざらめども、迷ひの愚かなる前には、なほいとあやしかりし。

四つにて位につきたまひて、十五年おはしましき。おりたまひてのちも、土佐院土御門十二年、佐渡院順徳十一年、なほ天の下はおなじことなりしかば、すべて三十八年がほど、この國のあるじとして、萬機の政事を、御心ひとつにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりも優れる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御恵み、雨の脚よりも茂ければ、津の國のこやの際なき政事をきこしめすにも、難波の葦のみだれざらんことをおぼしき。貌姑射の山の峰の松も、やうやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、いく春を経ても、空行く月日の限り知らずのどけくおはしましぬべかりつる世を、ありありて、よしなき一ふしに、いまはかく花の都をさへ立ち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣するあま小舟、鹽焼く煙のなびくかたをも、わがふる里のしるべかとばかり、ながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと、月日を限りたらんだに、明日知らぬ世のうしろめたさ

- (九) 日限。期限。
- (一〇) 世を終へらるべき。
- (一一) ほんの形ばかりで、簡素だ。
- (一二) 「いづくにも生まれずばただ住まであらん柴の庵の暫しなる世に」(新古今集、西行法師)
- (一三) それとしては相應に風雅に趣向を凝らしてお造りなされた。
- (一四) 白樂天「三五夜中新月色、二千里外故人心」二千里の外まで、すつかり見える氣がして、いまさらのごとく感慨が深い。
- (一五) 手はなはだしく。
- (一六) 自分こそはこの隠岐の島の新任の島司だ。だから、隠岐の海の激しい波風よ、この新參の島守をいたはつて、注意して吹いて呉れ。
- (一七) 世を變へてならいざ知らず、おなじこの世にまた都に歸り住んで、あの住吉の名月をふたたび眺めることができようか。——いまこそ都をよそにおいて、かうして隠岐の島守となつてゐるが、すみの江におなじ世に住むをかけ、よそに置くを隠岐に言ひかけた。
- (一八) やはりまさかこのままで終ることはあるまいと思つてゐられる。

に、いと心細かるべし。まして、いつをはととか、めぐりあふべき限りだになく、雲の浪、煙の浪、いくへとも知らぬ境に、世をつくしたまふべき御さまども、口惜しいふもおろかなり。このおはしますところは、人離れ里遠き島のなかなり。海づらよりはすこしひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる殿のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに、「柴の庵のただしよし」と、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしくゆゑづきてしなさせたまへり。水無瀬殿おほし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらるる海の眺望、「二千里の外」も残りなき心地する、いまさらめきたり。しほ風のいとこちたく吹き來るをきこしめして、

われこそは新島もりよ隠岐の海の荒き波風心して吹け

おなじ世にまた住の江の月や見むけふこそよそにおきの島守り

貞應元年

年も返りぬ。所所浦浦、あはれなることをのみおぼし歎く。佐渡院順徳あけ

くれ御行ごとのをのみしたまひつつ、なほさりともし思さる。隠岐には、浦より

をちの遙遙と霞みわたれる空を眺め入りて、過ぎにしかた、かきつくしおもほ

(一)はてしのない。

(二)うらやましむ海女も常住ぬれて
 ゐる袂を乾かすであらうに、わが
 袂は絶えない涙に乾く時がない。
 うらやましは、しほ、あまの縁語。

(三)端午の節句の御製で、「しど
 ろに落つる」は、どつと落ちる。

(四)故里の京を別れて来た時、路
 傍に生えてゐた葛の葉は、秋が來
 ると裏返るけれども、自分は、秋
 は來ても、歸京ができる時期もな
 い。繰る・反るは、葛、葛の葉の
 縁語。

(五)嘗へるものないほど。

(六)御母七條院が、都の夜寒に法
 皇の御身を案じられて、墨染めの
 衣・夜具を贈られ、それに添へら
 れたお手紙。

(七)このままで。

(八)母君がいま一度逢へるまでは
 と、死にかねて、私の歸京を待つ
 てゐられる、その風の前の露のや
 うにはかない老いの御身を、無常
 の風の吹いて散らさないうちに、
 どうかしてお訪ねしたい。消ゆ、
 露、風は縁語。

し出づるに、行方なき御涙のみぞとどまらぬ。

うらやまし長き日影の春にあひて汐波むあまも袖や乾すらん

夏になりて、かやぶきの軒端に五月雨の雫いとところせきも、御覽じなれぬ

御心地に、さまかはりてめづらしくおぼさる。

あやめふく茨が軒端に風過ぎてしどろに落つるむら雨の露

初秋風の立ちて、世のなかいとどもの悲しく、露けさまさるにいはんかたな

くおぼしみだる。

ふる里をわかれぢにおふる葛の葉の秋はくれどもかへる世もなし

たとしへなくながめしをれさせたまへる夕暮れに、沖のかたに、いとちひさ

き木の葉の浮かべると見えて漕ぎ來たるを、あまの釣舟かと御覽するほどに、

都よりの御消息なりけり。墨染めの御衣、夜の御衾など、都の夜寒に思ひやり

きこえさせたまひて、七條院よりまゐれる御文ひきあけさせたまふより、いと

いみじく御胸もせきあぐる心地すれば、ややためらひて見たまふに、「あさま

しく、かくて月日へにけること。今日明日とも知らぬ命のうちに、いま一たび

いかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでな

(九)私の歸京を待てるやうにと死にきれないでゐる命を。

(一〇)前漢の蘇武の故事で、雁を信書の使として文を繰なした。

(一一)伊勢に秋好齋宮とともに下向された六條御息所から、須磨の謫所の光源氏への手紙を、紙を幾枚も。

「巻きかさねて」は、紙を幾枚も。

(一二)建仁元年七月、二條殿弘御所北面に設置、基通、良經、通親、通具、慈圓、俊成、有家、定家、家隆、雅圓、具親、寂蓮を寄人とし、ついで清範、隆信、秀能、鴨長明を寄人として、家長を開闔とし、定家、家隆ら日日和歌所に參つて新古今集を撰んだ。

(一三)つれなき命、世の中がいやになつて死にたいのに死にえぬ命。

(一四)ふと夢から覺めて、ほんたうには聴かないのを、幻覺で聴いたやうに思つて悲しいのは、曉け方、荒磯に打ち寄せを濤の音です。かうして私は身は京にありますもの、心は絶えず院のおはず隱岐の荒磯にさまよつてゐます。

(一五)浪の絶え間のないこの絶海の隱岐の小島の濱住まひも、大分も久しくなつた。本歌は「浪間よ

む」など、いと多くみだれ書きたまへるを御顔におしあてて、

た^ハらちねの消えやらで待つ露の身を風よりさきにいかでとはまし

八百萬神^ヤもあはれめたらちねのわれ待ちえんと絶えぬ玉の緒

初雁^{はつかり}の翼につけつつ、ここかしこよりあはれなる御消息のみつねは奉るを御

覽するに、あさましういみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は、新古今の

撰者にも召し加へられ、おほかた、歌の道につけて、むつまじく召し使ひし人

なれば、夜晝戀ひきこゆること限りなし。かの伊勢より須磨にまゐりけんも、

かくやとおぼゆるまで、巻きかさねて書きつらねまゐらせたり。「和歌所の昔

の面影かすかすに忘れがたう」など申してつらき命の今日まで侍ることのうら

めしきよしなど、えもいはずあはれに多くて、

ね^二ざめして聞かぬを聞きわびしきは荒磯浪^{あらいそなみ}のあかつきの聲

とあるを、法皇後鳥羽もいみじとおぼして、御袖いたくしぼらせたまふ。

浪間^{なみま}なき沖の小島の濱びさし久しくなりぬ都へだてて

木枯しのおきの袖山吹^{そでやまふ}きしをり荒くしをれてものおもふころ

をりをり詠ませたまへる御歌どもを書き集めて、修明門院重子へ奉らせたま

り見ゆる小島の濱びさし久しくなりぬ君を逢ひ見で」(伊勢物語)

(一)留守の離宮には人もたづねないで、離は破れ、あたりは野原となつて、荒廢してしまつたらう。

(二)あの杉をかざしに折るやうな風流な都人があればよいなあ。それしたら言葉をかけて三輪山の杉立てる門の歌物語をして、この淋しい心を慰めようものを。

(三)人の命といふものは前世からの約束事であるから、自分勝手にはならず、こんな苦しい目にあつても、なほ生きてゐるこの身の辛さよ、かく賤しき民の藁屋と軒を並べた住びずまひして。

(四)さうは老耄してゐて、より覺えてゐません。そのうちまた思ひ出したら、よい折を見てね。

ふ。そのなかに、

水無瀬山みなせやまわがふる里は荒れぬらん籬まがきは野らと人もかよはで

かざし折る人もあらばやこととはんおきの深山みやまに杉は見ゆれど

限りあればさてもたへける身のうさよ民のわらやに軒をならべて

かやうのたぐひ、すべて多くきこゆれど、さのみは年のつもりに、えなむ。い

ままた思ひ出では、ついで求めてとて。

(一) 卷名は土御門院崩御の時の小宰相の「うしと見し」の歌による。記事は後堀河・四條、二代の御事と後鳥羽・土御門・仲恭天皇崩御の事など。とくに後鳥羽法皇の御晩年の生活に哀痛さがこもる。

(二) 世間からひどく顧みられない年老いた冒険がおはした。源氏物語橋姫の冒険の一文を踏まへる。

(三) 第二皇子の誤り。第三皇子は惟明親王。泣かれたために位に即きそこなはれたのは惟明親王で、増鏡の著者はこの二者を混同し守貞親王お一人のことにしてゐる。

(四) 皇位に即く方をお選びになつた御孫宮たちの人物試験の際。

(五) 尋ね來る人も稀であるから。

(六) 雜草ばかりが生ひ茂つて御門をさし固めてゐる宮の中に。

(七) 物思ひに沈んでをられると。

(八) 順德天皇の御代。

(九) 宮に仕へてゐる侍女の夢に、冠をかぶつたものが多數參殿して「この宮に三種の神器をお遷しすることになつてゐるから、皆様用意して待つてゐて下さい」と告げるのを見たから、大層不思議に思つて、宮(守貞)にお話し申し上げ

第三 藤衣

そのころ、いと數まへられたまはぬふる宮おはしけり。守貞親王とぞきこえける。高倉院第三の御子なり。隱岐の法皇後鳥羽の御兄なれば、思へばやんごとなけれど、昔、後白河の法皇、安德院の筑紫へおはしましてのち、えらび奉らせたまひける御孫の宮たちえりの時、泣きたまひしによりて、位にも即かせたまはざりしかば、世の中もの怨めしきやうにて過したまふ。寂しく人めまれば、年を経て荒れまさりつつ草深く八重葎のみさしかためたる宮の中に、いと心細くながめおはするに、建保のころ、宮のうちの女房の夢に、冠したるものあまたまゐりて、「劍璽を入れ奉るべきに、おのおの用意してさぶらはれよ」といふと見てければ、いとあやしう覺えて、宮守貞に語りきこえければ、「いかでかさほどのことあらん」と思しもよらで、つひに御髪をさへおろしたまひて、この世の御望みは、絶ち果てぬる心ちしてものしたまへるに、このみだれ出で來て、一院後鳥羽の御族は、みなさまさまにさすらへたまひぬれば

げたけれども、「どうしてさういふやうなことがあらう」と御心にもとめられず、とうとう御剃髪までなさつて。(建暦三年三月出家)

(二〇)承久の亂。

(二一)後鳥羽院の御一族は皆諸方に流浪遊ばされたので、御幼少の宮などの都にお残りの方も、自然世間から放置され、皇位に即かれるやうな宮もおはさないのです。

(二二)關東からの指圖で。

(二三)守貞親王。

(二四)後高倉院と號す。

(二五)思ひ懸けぬ御幸運。

(二六)萬機を指圖遊ばすのも、いろいろと昔にもどつた世の中で結構でしたよ。

(二七)國中が喪に服した。

(二八)喪服を召された。御幼少の程に御父君にお別れ遊ばすとは。

(二九)明治三年仲恭天皇と御追號。

おのづからちひさきなど残りたまへるも、世にさしはなたれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりのおきてにて、かの入道守貞の御子後堀河の十になりたまふを、承久三年七月九日にはかに御位につけ奉る。父の宮守貞をば太上天皇になし奉りて、法皇と聞ゆ。いとめでたく、横さまの御さいはひおはしける宮なり。孫王にて位に即かされたまへるためし、光仁天皇より後は絶えて久しかりつるに、めづらしくめでたし。

その十二月に御即位、あくる年貞應元年正月三日、御元服したまふ。御諱茂仁と申す。御かたちもなまめかしくあてにぞおはします。御母基家の中納言の女、北白河の院陳子と申しき。家實の大臣また攝政になりかへらせたまひて、よろづおきてのたまふも、さまざまに引きかへたる世なりかし。またの年五月のころ、法皇後高倉かくれさせたまひぬれば、天下みな黒みわたりぬ。上後堀河も御服たてまつる。きびはなる御ほどに、いとみじうあはれなる御ことなめり。

前の帝仲恭は四つにて廢せられたまひて、尊號などの沙汰だになし。御母后東一條院も、山里の御すまひにて、いと心ほそくあはれなる世を、つきせす

(九) 非常にすぐれてをられたが、
ぜんたい恨み深く、しんみりと落
ち附いた御性格で、一寸したこと
をも、たやすき洩らされぬ。

(一〇) 滅多におすまじなさらず、餘り
なるまで引き籠り勝ちな御態度。

(一一) 御寵愛。

(一二) 冬の衣をそちより貰ふにつけ
昔の宮中生活を思ひ出すが、それ
も何の役にも立たない。順徳院が
御在位で私もお前も一緒に宮中に
ゐて楽しかつた昔とはすつかり世
の中が變つて、途方にくれてゐる
今では。「衣」と「頃も」を懸く。

(一三) お手習のついでにお作りなさ
れたのが、どうかして僅かに世間
に傳はつたのであらう。

(一四) 早く死にたいと思ふのに、な
かなか死ねない命がかへつてつら
く思はれる。背の君の順徳院と同
じ世にありながら、君は遠く佐渡
に我は京のほとりにあつて、再會
の望みのない二人の運命では。

(一五) かりそめの男女の契りでも、
かういふ場合の悲しさは浅いもの
でせうか。まして順徳院の御寵愛
の限りなかつた后宮では。

おぼし嘆く。この宮東一條院は、故攝政殿後京極良經の姫君にてもものしたまへ
ば、歌の道にもいとかしこうわたらせたまへど、おほかた奥ふかうしめやかに
重き御本性にて、はかなきことをもたやすくもらさせたまはず。御琴なども限
りなき音を弾きとりたまへれど、をさをさかきたてさせたまふ世もなく、あま
りなるまで埋れたる御もてなしを、佐渡院順徳も限りなき御心ざしの中に、飽
かずなむ思ひきこえさせたまひける。かの遠き御別れの後は、いみじうものを
のみ思し碎けつつ、いよいよ沈み臥しておはしますに、ふるく仕うまつりける
女房の、里にこもりゐたりけるもとより、あはれなる御消息をきこえて、十月
一日のころ、御衣がへの御衣を奉りける御返りに、

思ひ出づるころもはかなしわれも人も見しにはあらずたどらるる世に
また御手習のついでに、からうじて洩れけるにや、

消えかぬる命ぞつらき同じ世にあるも頼みはかけぬ契りを

さこそはげに思しみだれけめ。おろかなる契りだに、かかる筋のあはれは浅く
やは侍る。いかばかりの御心の中にてすぐしたまふらんといとかたじけなし。
はかなく明けられて、貞應もうち過ぎ、元仁・嘉祿・安貞などいふ年もほど

(一)淨土寺相國と號す。有子は貞應元年十二月女御、二年二月中宮(十七歳)、嘉祿二年七月皇后、安喜門院と號す。

(二)前攝政家實公、猪隈殿と稱す。長子は嘉祿二年七月女御、廿九日中宮(九歳)鷹司院と稱す。

(三)山城國愛宕郡淨土寺村。ここに引きこもつていらつしやる有子中宮のもとに、御手紙ばかりであつたが、日に千度といふほども御音信がありました。

(四)長子姫は御夫婦仲面白くなく思し召していらしたが、さすがに中宮に册立はされたのを、父君家實公の攝政を罷めて、今の道家公が關白に返り咲かれると、またこの道家公の姫君(嬪子)が入内されて、もとの中宮は退立された。(五)どうしてかうも一途なことを遊ばすのであらう。

(六)白樂天の長恨歌に「後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」

(七)猥りがましい。

(八)嬪子、寛喜二年二月中宮。

(九)家に閉ぢ籠めて置き難い。

なくかはりて、寛喜元年になりぬ。このほどは光明峯寺殿道家また關白にておはす。この御女嬪子女御にまゐりたまふ。世の中めでたく花やかなり。これより先に、三條太政大臣公房のおとどの姫君有子まゐりたまひて、后だちあり。いみじう時めきたまひしをおしのけて、前の殿家實の御むすめ長子いまだ幼なくおはする、まゐりたまひにき。これ長子はいたく御覺えもなくて、三條后宮、淨土寺とかやにひきこもりてわたらせたまふに、御消息のみ日に千度といふばかりかよひなどして、世の中すさまじく思されながら、さすがに后だちはありつるを、父の殿家實攝録かはりたまひて、今の峯殿道家なりかへりたまひぬれば、またこの姫君嬪子入内ありて、もとの中宮長子はまかでたまひぬ。めぐらしきがまゐりたまへばとて、などかかうしもあながちにあらん。唐土には三千人などもさぶらひたまひけりとこそ傳へ聞くにも、しなじしからぬ心地すれど、いかなるにかあらん。のちにはおのおの院號ありて、三條殿の後有子は安喜門院、中の度まゐりたまひし殿の女御長子は鷹司院とぞきこえける。今の女御藤原門院もやがて后だちあり。藤壺わたり今めかしくすみなしたまへり。御はらからの姫君至子も、容貌よくおはする、ひきこめがたしとて、尙

(一〇)世間のおもはくも大層尊いのに。

(一一)比叡山延曆寺。

(一二)近江國大津の園城寺の長。

(一三)奈良興福寺の長。

(一四)仁和寺の長。普通は法親王が補せられる。

(一五)國家の要路は悉くこの一門で占めて、他家の人人の混じるは少ないやうに見えた。

(一六)道家公は大層華美を好まれ。

(一七)禁中の宿直室、直廬とも。

(一八)御長男の關白殿も、次ぎ次ぎの御令息たちの大臣などであられる方も、代る代る公の御前に。

(一九)西園寺公經、關東に縁あり。

(二〇)あれこれと物思ひばかりされて。

(二一)まだ生きてゐる命のおいとはしい上に。

侍になし奉りたまふ。

同じ三年七月、關白をば御太郎敦實のおとどに譲りきこえたまひて、わが御

身道家は、大殿とて、后宮囀子の御親なれば、思ひなしもやんごとなきに、御

子どもさへいみじう榮えたまふさまためしなきほどなり。あづまの將軍經繼・

山の座主慈源・三井寺の長吏行昭・山階寺の別當圓實・仁和寺の御室法助、皆

この殿の君達にておはすれば、すべて天下はさながらまじる人すくなう見えた

り。いとよそほしく重重しげにて、内の御宿直所などに常はうちとけさぶらひ

たまへば、關白殿敦實、つきつぎの御子どもも大臣などにて、立ちかはり御前

に絶えずものしたまひて、世の政事などきこえたまふ。北の方道家室は公經の

大臣の御女なれば、まして世の重く靡き奉るさまもいとやんごとなし。

まことや、その年寛喜三十一月十一日、阿波院土御門かくれさせたまひぬ。

いとあはれにはかなき御事かな。例ならずおぼされければ、御髪おろさせたま

ひにけり。ここら物のみ思して、今年三十七にぞならせたまひける。今一た

び都をも御覽ぜずなりぬる、いみじう悲しきを、隱岐の小島御父後鳥羽にも聞し

召し歎く。承明門院御母在子はさまさまのうきこと見つくして、なほながらふ

(一) また御愛子の院のこのやうに自分と生死の境まで隔てられた御嘆きのひやうなく切なるにつけても、「どうして自分が院より先きに死ななかつたか」と情なく思しめし、泣きこがれられる様は道理にも過ぎた。

(二) 一つにしまつてあつたのが。

(三) 土御門院が何かの機會にお眼にとめ、御寵愛遊されたからか。

(四) 土御門院さまが四國にお下り遊ばす時に、私は切に辛いことよと思つてお別れしたのだが、今思つてみると、あの悲しかつた御生別こそ、私が喪服を着けなければならぬ御死別の御門出であつたのだ。藤衣は葛衣で喪服。

(五) 古今以下の八代集は何れも撰進に數年を要した。

(六) 間もなく承久の亂が起つて、世の中も一變したのに、また勅撰集の名に新といふ字が躍いたのは氣味が悪いことだ、などと密かに噂する人もありましたとか。

る命のうとましきに、またかく同じ世をだに去りたまひぬる御歎きのいはんかたなさに、「など先き立たぬ」と、口惜しう思し焦るるさま、ことわりにも過ぎたり。かしこにて召しつかひける御調度、何くれ、はかなき御手箱やうのものを、都へ人のまゐらせたりける中に、たまさかに通ひける隱岐後鳥羽よりの御文、女院承明門院の御消息などを、ひとつにとりしたためられたる、いみじうあはれて、御目もきりふたがる心地したまふ。家隆の二位の女小宰相ときこえしはおのづからけぢかく御覽じなれけるにや、人よりことに思ひ沈みて、御服など黒う染めけり。

うしと見しありし別れは藤衣やがてきるべき門出なりけり

今年もはかなく暮れて、貞永元年になりぬ。定家中納言うけたまはりて、撰集の沙汰ありつるを、このほど、帝後堀河おりさせたまふべきよしきこゆればにや、いと疾く十月二日奏せられけり。一年のうち奏せられたる、いとありがたくこそ。新勅撰ときこゆ。元久に新古今いできて後、ほどなく世の中もひきかへぬるに、また、新の字うち續きたる、心よからぬことなど、ささめく人も侍りけるとかや。

(七)例の世間の人の口悪さは、承久の廢帝が御誕生なさると同時に東宮におなりなされたのは、大層いけなしいことだつたのに、またその不吉な前例におならひになつたとは「などいふやうだ。」

(八)地震などあつて、(九)凶兆多く、御謹慎も御嚴重を要するやうだから、後堀河院の御病狀はどうなられるであらうかと多くの方々の御心は安くない。

(一〇)驚くばかりの御幼少さで、嚴めしい十善の天子の御位におすわり遊ばすことは、あまりにおめでた過ぎて、かへつて氣遣ひに存じ上げられるほどであるとともに、前世にどんな善根をお積み遊ばしたか知りたくなる御有様である。

(一)いづれも御早世遊ばされ、大層面白くない先例である。

(二)閑院の内裏、二條南、西洞院西一町。建保元年新造成る。

(三)着袴の御儀。男女兒三歳から五六歳までに行はれた儀式。

(四)病氣がち。

さて同じき四日、後堀河おりにさせたまふ。御なやみ重きによりてなりけり。去年

の二月、後の宮尊子ミミの御腹に、一の皇子ミコ四條いできたまへりしかば、やがて太子に立たせたまひしぞかし。例の人の口さがなさは、かの承久の廢帝仲恭ナカトヨの、生れさせたまふとひとしく坊にゐたまへりしはいと不用ふようなりしをなどいふめり。

上うへ後堀河はおりさせたまひて、その七日やがて尊號あり。御惱みなほ怠らず、おほかた世も靜かならず。この三年みとせばかりは、天變頻しきり、地震なみふりなどして、さとし繁しげく、御慎み重きやうなれば、いかがおはしまさんと、御心ども騒ぐべし。今上四條は二歳にぞならせたまふ。あさましきほどの御いわけなさにて、

いつくしき十善のあるじに定まりたまふこと、いとゆゆしきまで、前の世ゆかしき御有様なり。むかし、近衛院三つ、六條院二つにて位につきたまへりし、いづれもいと心ゆかぬためしなり。閑院殿二の清涼殿にて、まづ御袴一奉る、十二月五日、御即位はことなくてはねれば、めでたくて年かはりぬ。

中宮尊子も御もののに悩ませたまひて、常はあつしうおはしますを、院後堀河も、いとど晴れまなく思おもひ嘆なげく。卯月うづきのころ年號改まる。天福といふなるべし。その同じころ中宮尊子も位去りたまひて、藻壁門院そうへきえんとぞきこゆなる。

(一) 御産をいふ。

(二) まだ早いうちから騒ぐ。

(三) つきものが強くて大變情ない

(四) お氣の毒と申すのも、あまりに當然すぎる。

(五) 續後撰に「藻壁門院御はての日、誰ともなくて、民部卿典侍の局にさしおかせける、正三位宗衡——この秋もかはらぬ野邊の露の色に苔の袂を思ひこそやれ」とあつて、その「返し、民部卿典侍」として、つぎの歌が出てゐる。

(六) 中宮さまがおかれ遊ばした悲しさは、このいやな世に生きてゐるものの、誰しもまぬかれぬ罪業故だと觀念して、私は世を棄てて佛弟子となつただけけれど、ただ中宮様をお慕ひする心だけは、慰めやうがない。

(七) まつたく御藥などさへ見むきも遊ばされなくて。

今年もまた、例ならず惱ませたまへば、めでたき御ことの數そはせたまふべきにこそと、世の中めでたく聞ゆ。祭祓まつりはらなにくれおびただしく、まだきよりののしる。ましてそのほど近くなりては、天の下やすきそらなく、山山、寺寺、社社、御祈りひびき騒げども、御物の氣けこわくて、いみじうあさまし。つひに九月十八日かくれさせたまひぬ。そのほどのいみじさ推し測られぬべし。今年二十五にならせたまふ。若ききよらにうつくしげにて、さかりなる花の御姿、時の間の露と消えはてたまひぬる、いはん方なし。殿道家・うへ北方思し惑ふさま、悲しともいへばさらなり。院後堀河にさぶらふ民部卿典侍すけときこゆるは定家中納言のむすめなり。この宮藻壁門院の御方にも、けちかう仕うまつる人なりけり。限りなく思ひ沈みて、頭おろしぬ。いみじうあはれなることなり。人の問へる返りごとに、

悲しさはうき世のとがとそむけどもただ戀しさの慰めぞなき

當代の御母后おんははききにておはしつれば、天下、皆ひとつ墨染すみぞめにやつれぬ。この御歎きに、いよいよ院後堀河はしづみまさらせたまひて、うち絶えて御湯などをだに御覽じみいるることなくて月日つもらせたまへば、御修法どもいとこちたく、

(八)すぐ御つぎの弟宮。

(九)かれこれ取沙汰のあるうち。

(一〇)幼帝を後見して、天下のおさへでいらつしやらなければならぬのが、かくあへない御臨終をなされて残念至極だなど申しても申しきれない。

(一一)ものごとくに巧者で。

(一二)かたはでなく。端正なこと。

(一三)御學才も和漢に精通してをられた。

(一四)一周忌も過ぎないうちに。

(一五)不吉で忌まはしい。

(一六)一年足らずで相前後して崩せられるといふ御夫婦の御縁の深さも、大層たぐひまれなことである。

山山寺残りなく勤めのしる。醫師・陰陽師・祭禊など天の下騒ぎみちたり。また年號かはりぬ。文暦元年といふ。承久の廢帝仲恭十七になりたまへるも、五月二十日に失せたまひぬ。いと若き御ほどに、いといとほしうあたらしき御年なりかし。隱岐後鳥羽にも、うち續きあはれることどもを、きこしめし歎くべし。佐渡順徳にはまして心うくあさましと思さる。この御さしつぎの宮・忠成なほおはしますは、修明門院順徳御母皇子養ひ奉らせたまふめり。

かくいひしろふほどに、院後堀河の御惱み日日に重くならせたまひて、八月六日いとあさましろならせたまひぬ。世のおもしにておはしますべきことの、かくあへなき御有様、口惜しなどきこゆるものめなり。おほかた御本性もなごやかにらうらうじく、御かたちもまほにうつくしうとのほりて、二十に三つばかりや餘らせたまふらん。若うさかりの御ほどに、御才なども、やまと・唐土たどたどしからず。なにごとにつけても、いとあたらしうおはしませば、世の人の惜しみきこゆるさま限りなし。ただくれ惑へる心地どもなり。後堀河院とぞ申すなる。故宮・藻巖門院の御はてだに過ぎず、またとりかさねて、諒闇の三とせまでにならんことを、いとまがまがしくゆゆしと皆人思ふべし。御契り

(一)大嘗會の年の十月天子が荒見河で行ふみそぎ。

(二)彦子・家忠の父。

(三)光明峯寺道家、教實の父。

(四)道家は承久三年に攝政、安貞二年に關白、嘉禎元年にまた攝政となり、三度天下の政を執つた。

(五)道家の夫人の御父は太政大臣公經公であるから。

(六)諫闡明けて喪服を脱いだから。

(七)情ない年の積りよと。

(八)お若い時からお嗜みのこと。

(九)舊臣たち。

(一〇)今まで存生の思ひ出に、このたびの法皇様の御歌合にでも奉仕しようと、法皇のお言葉をしみじみ勿體なく感じて思ひ立ち、他の人人の歌をも自分の手もとで取りまゝとめて隠岐にお送り申し上げた。

(一一)嘗ての承久の亂後。

(一二)遠島御歌合。八十番一巻。嘉禎二年七月後鳥羽院判。

(一三)清撰の御歌合など、その昔のことぞぞ思ひ出して、感慨にたへなかつたであらう。

のほどのあはれさもいとありがたくなむ。御禊・大嘗會なども、いとど延びぬ。ただここもかしこも、たかきもくだれるも、都も遠き島島も、涙にうき沈みてぞ過したまひける。

うちつづき、かくのみ世の中騒がしく、天變もしきり、いとあわただしきやうなれば、また年號かはりて嘉禎元年といふ。まことや、三月の末つかたより攝政殿 洞院教實 重くわづらひたまふ。故院 後堀河の御位のほどより大殿道家の御譲りにて關白ときこえしが、帝四條幼なくおはしませば、このころは攝政殿と申すなるべし。御かたちも心ばへもめでたくおはしつるに、いとあへなく失せたまひぬれば、大殿道家の御歎きたとへんかたなし。二十六にぞなりたまひける。いとかなしくしたまふ姫君彦子・若君家思などものしたまふをも、今は峯殿のみひとへにはぐくみきこえたまひけり。攝政にも大殿道家たちかへりなりたまひぬ。かくて三たび政事ををさめたまひぬるにや。北の政所の御父は公經の大臣なれば、かの殿と一つにて、世はいよいよ御心のままなるべし。今年ぞ御色どもあらたまりぬれば、冬になりて、御禊・大嘗會行はる。

さまざまめでたくもあはれにも、色色なる都のことどもを、ほのかに傳へき

(四)例の通り御歌合の歌を澤山は申し上げられないから、ほんの片端だけを——と尼は言つて。

(五)院御製。人の心も變り、花の色もあせてしまつたのに、昔ながら(昔のまま)といふ長良山の「ながら」の名さへもいまだ。平忠度「さざ波や名賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」を踏む。

(六)どうしてかうまで櫻花に思ひそめたのであらう。その思ひが年々に積つて、高く山となつてしまふまでに「山とし高く」に山のやうに高くと、年高くとを懸く。古今集の俳諧歌に、大輔「なげきこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞまづつかれける」の先蹤がある。この「一番山櫻」と題する。(七)獨旅の題で、左道珍(入道大納言さめ)の「しるべせよ旅寢の夢のさめやすくつらき枕に殘る月影」に對する右方の歌。遙か沖の方を往來する釣舟よ、大洋中の多くの島島をとほつて、法皇のおいでなさる隱岐まで私を案内してくれ。古今集小野篁の「わたの原やそ島かけて漕ぎ出ぬと人には告げよ海士の釣舟」を本歌とする。

こしめして、隱岐 後鳥羽にはあさましの年のつもりやと、御齡にそへても盡きせぬ御なげきぐさのみしげりそふ慰めには、思し馴れにしこととて、敷島の道にのみぞ御心をのべける。都へも、たよりにつけつつ題を遣はし、歌を召せば、あはれに忘れがたく戀ひきこゆるむかしの人人、われもわれもと奉れるを、つれづれに思さるるあまりに、みづから判じて御覽ぜられけり。家隆の二位も、今まで生ける思ひ出にこれをだにとあはれにかたじけなくて、こと人人の歌をも、ここよりぞとり集めて參らせける。むかしの秀能は、ありしみだれののち頭おろして深く籠り居たり。如願とぞいひける。それをもこのたびの御歌合に召せば、今さらにそのかみのことさこそは思ひ出づらめ。例の數數はいかでか、ただ片端をだにとて左、御製

人心うつりはてぬる花の色に昔ながらの山の名もうし

右、家隆の二位

なぞもかく思ひそめけん櫻花山とし高くなりはつるまで

秀能

わたのはら八十島かけてしるべせよ遙かに通ふおきのと舟

山家といふ題にてまた、左、御製

軒端あれて誰かみなせの宿の月すみこしままの色やさびしき

右、家隆

さびしさはまだ見ぬ島の山里を思ひやるにもすむ心地して

法皇 後鳥羽みづから判の詞を書かせたまへるに、「まだ見ぬ島を思ひやらんよりは、年久しく棲みて思ひ出でんは、今すこし心ざし深くや」とて、わが御歌を勝とつけさせたまへる、いとあはれにやさしき御ことなめり。かやうのはかなしごと、または阿彌陀佛の御つとめなどに、まぎらはしてぞおはします。御手習のついでに、

われながらうとみはてぬる身の上に涙ばかりぞ面變りせぬ

ふる里は入りぬる磯の草よただ夕汐みちて見らくすくなき

この浦に住ませたまひて十九年ばかりにやありけん、延應元年といふ二月二十一日、六十にてかくれさせたまひぬ。今一たび都へ歸らん御志深かりしかど、終に空しくてやみたまひにしこといと辱なく、あはれになさけなき世も、今さら心憂し。近き山にて、例の作法になし奉るも、むげに人少なに、心細き

(一)院の御製——軒端が荒れてしまつて、誰も見る人のないであらう水無瀬の離宮の月は、自分が長く住んで見て來たどほり、その光は今も寂しいであらうか。水無瀬に見を懸く。

(二)寂しいのは、まだ自分の見たことのない隱岐の島の法皇のお住まいである。その島の山里を都から遙かに想像しても、自分がそこに住んでゐるやうな氣がして、わびしくてならないが、ましてそこにお住まいの法皇様には、どんなにかお淋しくおすごしだらう。

(三)「まだ見ない島を遙かに想像して淋しく思ふよりも、實際に年久しく棲んで回想した方が、もう少し感じが深くないか」とて。

(四)家隆の歌を負として。

(五)自分ながらいやだと思ひ棄ててゐる今のわが身なのに、涙だけが昔と變らず、流れ出るこよ。

(六)私の昔長らく住んでゐた都

は、入江となつてゐる磯に生えてゐる草みだ。ただ入江一面に夕汐がさして来て、その磯の草を見ることがおづかしいやうに、晩年になつた私はふたたび都を見ることは困難である。

(七)例の如く火葬にし奉る。

(八)藤原秀能の子。

(九)山城國愛宕郡。

(一〇)後鳥羽法皇舊領の庄園。

(一一)法華經專念誦料。

(一二)この法華堂には、御後の修明門院の御取り計らひで、故院が特に御愛著なされた水無瀬離宮をお移しになり、御骨を納められた。

(一三)最初の御諡號は。

(一四)御在世の時の御遺言。

(一五)仁治三年後鳥羽院と改む。

御有様、いとあはれになん。御骨をば、能茂といひし北面の、入道して御供にさぶらひしぞ、頸にかけ奉りて都に上りける。さて大原の法華堂とて、今も、むかしの御庄の所所、三昧料に寄せられたるにて、勤め絶えせず。かの法華堂には、修明門院重子の御沙汰にて、故院後鳥羽わきて御心とどめたりし水無瀬殿をわたされけり。いまはのきはまで持たせたまひける桐の御數珠などもかしこに未だ侍るこそ、あはれにかたじけなく、拜み奉るついででありしか。はじめは顯徳院と定め申されたりけれど、おはしましし世の御あらしなりけるとて、仁治の頃ぞ、後鳥羽院とはさらにきこえなほされけるとなむ。

第四 三神山

(一) 卷名は、後嵯峨天皇の大嘗會悠紀方御屏風の歌に「古へに名會のみききて求めけむ三神の山はこれぞその山」とあるによる。記事は四條天皇崩御、御嵯峨天皇踐祚を主とするが、その間皇位繼承に關して關係者が幕府の意向を臆測して一喜一憂する様が具體的に描寫されてゐて、歴史の興味がある。

(二) 土御門院皇子邦仁親王。このことは「新島守」に既出。

(三) 警策の字音、もと詩文の佳句の人の注意をひき、文勢を盛ならしめるのをいひ、轉じて人の利發明敏なことをいふ。御聰明で。

(四) 今の日陰者同前の御境遇を大層惜しいことに思ひ申し上げた。

(五) 世をすてかねて憂き身をやつしていらつしやるのは、御自身でも體裁悪く、面白くなくおぼしめてをられるであらう。

(六) 釋迦の嫡母、釋迦の母摩耶夫人の歿後、釋迦を養育した。

(七) 土御門院の阿波遷幸をいふ。

(八) それでもまだ院がこの世に御存命であると思召してをられたときは、自然お眼にかかれるやうなこともあらうかなど、ひそかに

さても源大納言通方の預かり奉られし阿波院土御門の宮後膳はおとなびたまふまに、御心ばへもいとときやうさくに、御かたちもいとうるはしく、けだかくやんごとなき御有様なれば、なべて世の人もいとあたらしきことに思ひきこえけり。大納言さへ、曆仁のころ失せにしかば、いよいよ眞心に仕うまつる人もなく、心ぼそげにて、何を待つとしもなく、かかづらひておはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母通子は、土御門の内大臣通親の御子に宰相將通宗とて、若くて失せにし人の御女なり。それ通子さへかくれたまひにしかば、宰相のはらからの姫君ぞ、御乳母のやうにて、瞿曇彌の釋迦佛養ひ奉りけん心地しておはしける。二つにて父帝土御門には別れ奉りたまひしかば、御面影だに覺えたまはねど、なほこの世の中におはすと思されしまでは、おのづからあひ見奉るやうもやなど、人知れず、幼なき御心にかかりて思しわたりけるに、十二の御年かとよ、かくれさせたまひぬと傳へ聞きたまひしち

幼なき御心にかけて思ひ續けてをられたのに、御十二歳のころであつたか、院が崩ぜられたと傳聞なさつてからは、一層世のつらさを思つて落膽され、大層沈んでばかりいらつしやるのを、御祖母の承明門院は、お氣の毒にも、いとほしくも御覽あそばされた。

(九)百鍊抄に十四歳とある。

(一〇)左大臣良實、右大臣實經。

(一一)いろいろ世話をして。

(一二)大層美しく好ましい御様子で世の評判も高く、女御として入内された。

(一三)教實は文暦二年三月薨じた。

(一四)たいした威勢である。

(一五)茂仁王の御子、天台座主、大僧正。

(一六)御相談申し上げられたから。

(一七)それは甚だ以てのほかと。

(一八)山城國綴喜郡男山八幡宮。

は、いよいよ世のうさを思しくんじつつ、いとまめだちてのみおはしますを、承明門院在子は心苦しうかなしと見奉りたまふ。

はかなくあけて仁治二年にもなりにけり。帝四條は今年十一にて、正月五日御元服したまふ。御諱秀仁ときこゆ。その年の十二月に、洞院故攝政殿教實の姫君彦子九つになりたまふを、祖父の大殿道家、御伯父良實・實經の殿原などゐたちて、いとよそほしくあらまほしきさまにひびきて、女御まゐりたまへば、父の殿教實ひとりこそものしたまはねど、おほかたの儀式、よろづ飽かぬことなくめでたし。上四條もきびはなる御ほどに、女御もまだかく小さうおはすれば、雛遊びのやうにぞ見えさせたまひける。天の下はさながら大殿道家の御心のままなれば、いとゆゆしくなむ。

土御門殿の宮後嬪は二十にも餘りたまひぬれど、御冠のさたもなし。城興寺の宮僧正眞正ときこゆる御弟子にと語らひ申しければ、さやうにもと思して、女院承明門院にもほのめかし申させたまひけるを、いとあるまじきことのみ諫めきこえさせたまふ。その冬のころ、宮後嬪いたう忍びて石清水の社に詣でさせたまひ、御念誦のどかにしたまひて、すこしまどろませたまへる

(一)新撰朗詠集、大江朝綱の「徳是北辰椿葉之影^科改、尊猶南面松花之色^{十廻}」の句による。ここでは「天子の位に即かれて、永く榮えられる」といふこと。

(二)どうしてこんな夢のお告げをうけたのであらうと不思議に思はれるけれど。

(三)春の初めは一般に身分相應に家家でわが身の祝ひなどして。

(四)満足で得意さうなのに。

(五)白馬の節會。

(六)御帳臺の玉座。

(七)女御もまだままと遊びのやうな御有様で、無邪氣に陸じくお相手申し上げていらしたのに。

(八)思ひのほかには大層悲しいことになつたので、涙ぐんでしよんぼりとしておいでになるのは、大層あどけなくて、かほいいい。

(九)ちやうど天皇と同じお年ごろで、御一緒に騒がしいほどの御遊びばかりして、日を送つていらつしやつたのに。

(一〇)今は仲間の者とひとつそり隅の方にかたまつて、みな鼻をかみ泣いてゐた。

に、神殿の中に、「椿葉の影^{ちんたつ}再び改まる」と、いともあざやかにけだかき聲にうち誦^ぞじたまふと聞きて、御覽じあげたれば、明方の空澄みわたれるに、星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御夢ならんとあやしく思さるれど、人にもなたまはず。とまれかくもあれと、いよいよ御學問をぞせさせたまふ。

〔治三年〕

年もかへりぬ。春のはじめはおしなべてほどほどにつけたる家家の身のいはひなど、心ゆき誇らしげなるに、正月の五日より、内の上四條例ならぬ御ことにて、七日の節會にも御帳にもつかせたまはねば、いとさうざうしく人人思しあへるに、九日の曉かくれさせたまひぬとてのしりあへる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれまどひて、なかなか涙だに^七出で來ず。女御彦子もいまだ童遊^{わらはあそ}びの御さまにて、何心なくむつれきこえさせたまへるに、いとうたていみじければ、うちしめりくんじてゐたまへる、いとをさなげにらうたし。大殿道家の御心のうち思ひやるべし、御兄の若君忠家も殿上^{てんじやう}したまへる、ただ帝四條の同じ御ほどにて、さわがしきまでの御遊びのみにて明かしくらすせたまひけるに、かいひそみて群^{むら}りゐつつ、鼻うちかみうち泣く人より外はな

(一)このやうに御凶事ばかり續くのは、きつと遠い島島で怨を呑んで崩ぜられた御靈などが祟るのではないかと。(おさましき御ことどもは、薄壁門院、後堀河天皇と今の四條天皇の崩御をいひ、御靈は後鳥羽・土御門兩院をいふ、御靈(二)なみなみの事柄ではなく、餘りおいたが過ぎてお怪我遊ばしたのであるとか申すことである。五代帝王物語に「主上あどけなくわたらせたまひて、近習の人女房などを倒して、笑はせたまはんとて、弘御所に滑石の粉を板敷に塗り置かせたりけるに、主上あしくして御願倒ありけるを、御犬の立ち廻り立ち廻り如法に吠えまゐらせたりけるこそ、前表にてありけれ。やがて御惱つかせおはして、取りあへず、御大事に及びけり」とある。

(三)天下はどうなつて行くであらうかと、人人は途方にくれあつてゐる様子である。

(四)しかし、そのままにしては置けないといふので、

(五)執權職は。

(六)叔父時房(仁治元年正月すで

し。

(二)かくのみあさましき御ことどもものうち續きぬるは、いかにもかの遠き浦浦にて沈みはてさせたまひにし御靈どもにやとぞ世の人もささめきける。御惱みのはじめも、なべての筋にはあらず、あまりいわけたる御遊びよりそこなはれたまひにけるとぞ。未だ御つぎもおはしまさず、また御はらからの宮などもわたせたまはねば、世の申いかになりゆかんするにかとたどりあへるさまなり。

(三)さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。將軍頼經は大殿道家の御子、今は大納言殿ときこゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房と一所にて、小弓射させ、酒もりなどして、心とけたるほどなりけるに、「京よりのはしり馬」といへば、何ごとならんと驚きながら、使召しよせて聞くに、いとあさまし。さりとしてあるべきならねば、その席よりやがて神事はじめて、若宮の社にて、くじをぞとりける。

そのほど都には、いとうかびたることども、心のひきひきにいひしろふ。佐渡院順徳の宮たちにやなどきこえければ、修明門院順徳御母重子にも、御心ときめきして、内内その御用意などしたまふ。承明門院土御門御母在子も、もしやな

に死んでゐるから本文は誤り)と一所にゐて、侍臣に小弓を射させ酒宴などして打ち解けてゐたところへ「京から早打ちの使ひ」といふから、何ごとかと驚きながら。

(二七)大層驚いた。

(二八)とはいへ捨て置き申せないの、その場から神事に取り掛り、鶴ヶ岡八幡宮で、どなたを皇位におつけするかおみくじを引いた。(二九)京都ではどなたが皇位につかれるか、めいめいのひいきにまかせて大變な浮説を話し合つた。

(一)鴨河東岸。粟田口から京都に入る要衝。

(二)それをもつとものことで、今すぐわかるはずのことなのだが、ものごとがどう決まるか待ち遠しいことは、そのやうにしてでも一刻も早く知りたいと思はれることですよ——と、老尼は例のやうに口をすぼめて微笑する。

(三)秋田城介の略。

(四)年若い卑官の未熟の侍。

(五)承明門院の御所。

(六)どうかからか開けさせて。(七)もしもことがあらうかと思つて、皺になつた烏帽子、直衣で

どさまさま御祈りしたまふ。あづまの使、都に入るよし聞えける日は、兩女院より白河に人を立てて、いづ方へかまゐると見せられけるぞ、ことわりに、げに今見ゆべきことなれど、ものの心もとなきは、さおぼゆるわざかしと、例の口すげみてほほゑむ。

日ぐらし待たれて、城介^{じやうのすけ}安達義景といふもの三條河原にうち出でて、「承明門院のおはしますなる院はいづくぞ」とかの院より立てられたりける青侍^{あをむらひ}のいとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心地うつとも覺えず。しかじかと申すままに、土御門殿^{とごもん}へまゐりたれど、門は葎^{むら}つよくかため、扉もさびつき、柱根^{はしらね}くちてあかさざりけるを、郎等^{らうどう}どもにとかくせさせて、内にまゐりて見まはせば、庭は草深く、青き苔のみむして、松風より外は答ふるものもなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の御弟を子にしたまへりし定通の大臣^{おとど}ばかりぞ、何となくおのづからのこともやと思ひて、なえばめる烏帽子^{ぶさし}直衣^{たはし}にてさぶらひたまひけるが、中門^{ちゆうもん}に出でて對面したまふ。義景はきり戸のわきにかしこまりてぞ侍りける。「阿波院 土御門の御子後醍醐御位に」と申して出でぬ。

院のうちの人人、上下夢の心ちして、ものにぞあたりまどひける。仁治三年正

伺候していらしたが。

(八)對の屋から南行の廊の中ほどの門、來客の取りつぎをする。

(九)中門の傍の開き戸。

(一〇)うろろろして物につき當る。

(一一)引き返し。

(一二)世間の騒ぎ。

(一三)修明門院の御所。

(一四)なにごとく豫期しなかつた昔より、かへつて御憂ひが増したであらう。

(一五)冠の役。烏帽子親。

(一六)四條大納言隆親の邸。

(一七)御大葬。

(一八)山城國愛宕郡にある。もと法輪寺といひ、齊衡三年右大臣緒嗣造立、建保六年俊祐再興、官寺。

(一九)しつかりと。

(二〇)つまらない妄念。

月十九日のことなり。

世の人の心地、皆驚きあわてて、おしかへしこなたにまゐり集ふ馬車の響き騒ぐ世のおとなひを、四辻殿にはあさまじう、なかなかもの思しまさるべし。

またの日やがて御元服せさせたまひき。ひきいれに左大臣良實まゐりたまふ。

理髮、頭辨定嗣つかうまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜、やがて冷泉萬里小路殿へうつらせたまひて、閑院殿四條より劍墾など渡さる。踐祚の儀式いとめづらし。

そののちこそ、閑院殿には追號のさだめ、御わざのことなどさたありけれ。

廿五日に、東山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめ奉る。四條院と申すなるべし。やがてかの寺へ御庄など寄せて、今に御菩提を祈り奉るも、前の世のゆゑありけるにや。この帝四條未だものなどはかばかしくのたまはぬほどの御齡なりける時、誰とかや、「前の世はいかなる人にてかおはしましけん」とただ何となくきこえたりけるに、かの泉涌寺の開山のひじり俊祐の名をぞ確かに仰せられたりける。また、人の夢にも、この帝四條かくれさせたまひてのち、かの上人俊祐「われ速かに成佛すべかりしを、よしなき妄念をおこして、今一度

(一)この世にもどつて。

(二)上人の死後までも残した妄執が叶つたしるしとして、朝廷から御莊園なども下賜されたのではないかと思はれます。

(三)關白職が移つた。

(四)世間で騒ぎ立つのも、今上の以前の御境遇を考へると、思ひの外のことで大層めたい。

(五)近江國野洲郡三上山。

(六)昔、秦皇帝が名だけ聞いて、人を使つて捜させた不老不死の薬のあるといふ三神山(蓬萊・方丈・瀛洲の三山。史記の封禪書に見ゆ)は、この近江の三上山が、それである。かういふ靈山がわが國にあるとは、まことにめでたいことである。

(七)大嘗會のときその國の國司が歌女をひきゐて、風俗舞を奏する時の歌。

(八)備中國の岩崎に生えてゐる、まだ種から萌え出たばかりの二葉の若松を見ると、その行先長い千代の姿がおもはれて、まことに君が齡ひの長久を祝ふにふさはしい。

(九)西園寺太政大臣公經の子。

人界の生をうけ、帝王の位に至りて、歸りてわが寺 泉涌寺を助けんと思ひしに、はたしてかくなむ」とぞ見えける。まことに、その餘執の通りけるしるしにや、御庄どもも寄りけんとぞおぼえ侍る。

さて仁治三年三月十八日御即位、よろづあるべき限りめでたく過ぎもてゆく。嘉禎三年よりは岡屋の大臣兼經攝政にていませしかば、そのままだに、今の御代のはじめも關白ときこえつれど、三月廿五日、左の大臣良實にわたりぬ。

この殿も光明峰寺殿道家の御二郎君なり。十月になりぬれば、御禊とて世の中ひしめきたつとも、思ひよりしことかはとめでたし。大嘗會の悠紀方の御屏風、三神山、菅 宰相爲長仕うまつられける。

いにしへに名をのみ聞きてもとめけん三神の山はこれぞその山
主基方風俗の歌、經光中納言に召されたり。

未遠き千代の影こそ久しけれまだ二葉なるいはさきの松

當代 後醍醐かくめでたくおはしませば、通宗宰相も左大臣從一位贈られたまふ。御むすめ通子も後の位贈り申されし、いとめでたしや。

まことや、このころ右大臣ときこゆるは實氏の大匠よ。その御女大宮院姫子十

- (一〇)正二位權大納言隆房の子。
 (一一)小がらで。
 (一二)入内されたかひがあつて、天皇の御寵愛がいと濃やかで。
 (一三)萬事満ち足りて理想的な御仲で、なに一つ缺けたことがない。
 (一四)藤姑子は仁治三年四月二十八日從三位、六月十日女御、八月九日中宮となる。大宮院と号す。
 (一五)「今上が源大納言通方卿の御邸に、無品親王といはれて、たいへん心細い状態をられたころには、夢にも、このやうなおめでたい御生活は豫想されなかつたであらう」と天皇のお榮えなさるにつけても、人の口はさがないもので。
 (一六)かく模様なことをお噂申し上げることであらう。

八になりたまふを女御に奉りたまふ。六月三日入内あり。儀式ありさま、になく清らをつくされたり。母北の方は四條大納言隆衡なかつかのむすめなり。女御の君二婿子いとささやかにあいぎやうづきて、めでたくものしたまへば、御おほえいとかひがひしく、よろづうちあひ、思ふさまなる世のけしき、飽かぬことなし。同じ年八月九日一四后一五婿子に立ちたまふ。そのほどのめでたさいへばさらなり。「源大納言通方の家に、無品親王むほんしんちうとて、あやしう心細げなりし御ほどには、たはぶれにも思ひよりきこえたまはざりけん」と、めでたきにつけても、人の口やすからず、さはとかくきこゆべし。

- (一)卷の名は、後深草天皇即位の年の太嘗會の際に太政大臣實氏の歌にこたへた少將内侍の「九重の内野の雪に」の歌による。なほ實氏の歌により、卷名を「大内山」としたのもある。記事は後嵯峨、後深草二朝にわたつてゐる。
- (二)むかし靈夢を御覽になつたことがあつて。
- (三)源氏物語の光君が中將のときおこりをおまじなひになつたといふ北山の附近に（若紫の卷）
- (四)世にたぐひのない立派な御堂を建てられて。
- (五)山城國葛野郡。今の金閣寺あたりがその舊跡である。
- (六)神祇伯、神祇官の長官。
- (七)更に掘り返しくづして。
- (八)雅致のある庭園に造りかへ。
- (九)山の姿は樹深く茂り、池のさまはひろく海を湛へ。
- (一〇)本尊の阿彌陀如來はほんたうに微妙なる御姿をしていらして生身の御佛もかかと思はれるほど莊嚴に顯はされてゐる。
- (一一)この不動は攝津から生身の明王が蓑笠を著て歩いていらした。
- (一二)不動・降三世・大威徳・軍荼

第五 内野の雪

今后大宮院嫡子の御父はさきにもきこえつる右大臣實氏のおとど、その父殿公經の太政大臣そのかみ夢見たまへることありて、源氏の中將わらはやみまじなひたまひし、北山のほとりに世に知らずゆゆしき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり。この所は伯三位資仲の領なりしを、尾張の國松枝といふ庄にかへたまひてけり。もとは田畠など多くて、ひたぶるに田舎めきたりしを、さらうちかへしくづして、艶ある園につくりなし、山のたたずまひ木深く、池の心ゆたかに、わたつ海をたたへ、嶺より落つる瀧のひびきも、げに涙催しぬべく、心ばせ深き所のさまなり。本堂は西園寺、本尊の如來まことに妙なる御姿、生身もかくやと、いつくしうあらはされたまへり。また、善積院は藥師、功德藏院は地藏菩薩にておはす。池のほとりに妙音堂、瀧のもとには不動尊。この不動は、津の國より生身の明王蓑笠うち奉りてさし歩みておはしたりき。その蓑笠は寶藏にこめて、三十三年に一度出ださるとぞ承はる。石橋の上には五

利夜叉・金剛夜叉の五大尊を安置した堂。

(二)愛染明王は忿怒暴悪の相をもつてゐるが、實は戀愛染著を司る佛、その全身赤色である。

(三)長日の修法で、不斷に行ひ、僧座の常に温つてゐるのをいふ。

(四)愛染の秘法を勤める僧。

(五)濃き紅。愛染王の體色にあやかつてである。

(六)また法水院・化水院などいふ堂があるが、無量光院とかいふ御堂では、念佛者往生の際において見られるといふ聖衆來迎の光景すなはち彌陀如來、二十五の菩薩が虚空にお現れになつた御姿を描いた圖もあるやうに聞いてゐる。

(七)御堂の北にある本殿。

(八)周圍の山の常磐木などは恐ろしく年老いてゐるので、なつかしさを感ずるほどの若木の櫻を植ゑならべるとて、公經公はこの歌をくちずされました。

(九)山櫻を峰にも籠にも植ゑておかう、後世の人がこれを見て、その生まれぬ前の世の春がどんなに

大堂。成就心院といふは愛染王の座さまさぬ秘法とり行はせらる。供僧も、

紅梅の衣、袈裟、數珠の絲まで、同じ色にぞ侍るめる。また法水院・化水院、

無量光院とかやとて、來迎の景色、彌陀如來、二十五の菩薩、虚空に現じたま

へる御姿も侍るめり。北の寢殿にぞ、おとど公經は住みたまふ。めぐれる山の

常磐木どもいと舊りたるに、懐かしきほどの若木の櫻など植ゑわたすとて、大

臣公經うそぶきたまひける。

山ざくら峰にも尾にも植ゑおかん見ぬ世の春を人や忍ぶと

かの法成寺をのみこそいみじきためしに、世繼もいひためれど、これはなほ

山の景色さへ面白く、都離れて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし。

峯殿道家の御舅、あづまの將軍の御祖父にて、よろづ世の中御心のままに、飽

かぬことなくゆゆしくなむおはしける。今の右の大臣實氏をささ劣りたまは

ず、世のおもしにていとやんごとなくおはするに、女御大宮院姞子さへ御おぼえ

めでたきに、いつしかただならすおはするときゆる、奥ゆかしき御ほどなる

べし。

仁治三年九月十二日、佐渡院順徳かくれさせたまひぬ。世の中うつりかはり

豪華だつたらうと回想するかと。

(二)藤原道長の建立。近衛の北、京極の東にあつた。

(三)大鏡の大宅世繼翁も述べたやうだけれど。

(三)西園寺は。

(四)公經公は光明峰寺道家公の御舅、鎌倉の將軍頼經卿の御祖父で。

(五)御妊娠。

(一)若しや歸京できるかと。

(二)出産の氣色。

(三)何ともない人でさへ。

(四)いろいろの御怨靈どもが名乗つて出、名乗つて出して、むしやうにお苦しみなさるから。

(五)おろそか。

(六)おしなべてみなこのやうに心配するが、實氏公の場合は、ほんたうに眼前に迫つてゐる天下の形勢に對する憂慮、すなはち、もし皇子御降誕であれば、將來御自身天皇の御祖父として執政の地位に上られるのであるから、類なく御心配なされることであらうよ。

しきざみ、もしやなど思おもされしも空しくて、いよいよへだたりはてぬる世を、心細く思おもし歎なげきけるつもりにや、さしもとりたてたる御惱みなどはなくて、失うせさせたまひにけり。あはれなる御ことどもなり。四十六にぞならせたまひける。

あくる年は寛元元年なり。六月十日頃に中宮大宮院今出川いまでがはのおとどにて、その御氣色ごきしよあれば、殿の内たちさわぐ。白き御装まゝほひに改めて、母屋もやに移らせたまふほどいとおもしろし。おとど實氏・北の方・御せうとの殿原たちそひかしづききこえたまへるさま限りなくめでたし。御修法の壇ども數知らず、醫師・陰陽師・かんなぎ、おのおのかしがましきまでひびきあひたり。いと暑きほどなれば、ただある人だに汗におしひたしたるに、後の宮大宮院姫子いと苦しげにしたまひて、色色いろの御ものもののけども名乗り出でつつ、わりなくまどひたまへば、おとど實氏・北の方いかさまにせんと御心をまどはしたまふさまあはれにかなし。かやうのきざみ、高きも下れるも、おろかに思おもふ人やはあらん。なべて皆かうのみこそあれど、げにさしあたりたる世の氣色けしよをとりぐして、たぐひなく思おもさるらんかし。内うち後睦職よりも、いかにいかにと御使雨おんあめの脚もとよりも繁しげう

(七)もの馴れた老典侍。

(八)伊勢神宮へ安産祈願の奉幣使など遣はされる。諸社へ神馬を獻る使や、諸寺へ御誦經を頼む使などに、四位・五位の官人たちが續續馬に乗り、鞭をあげて出かける緊張したさまは、いはなくとも想像ができてよ。

(九)參詣して。

(一〇)東宮が決めてない際である。

(一一)不吉な豫想をもつさへ。

(一二)一方また御自身の運命の吉凶がはつきりあらはれる場合だ、と思し召されると。

(一三)餘りの嬉しさに、皆皆呆然としてしまつて。

(一四)その感極つた御様子に、居合はず人人も、かかめるめでたき場合不吉とは思つても、貰ひ泣きをした。(言忌一事忌、慎むべき言動)

(一五)醫道、陰陽道、道道の人人にお禮の物を賜はる。

走りちがふ。内の御乳母大納言二位殿、おとなおとなしき典侍など、さべき限りまゐりたまへり。今日もなほ心もとなくて暮れぬれば、いと怖ろしうおぼす。伊勢のみてぐら使など立てらる。諸社の神馬、所所の御誦經の使、四位五位敷をつくして鞭をあぐるさま、いはずともおしはかるべし。おとど賈氏とりわき春日の社へ拜して、御馬、宮大宮院の御衣など奉らる。

内 後醍醐には更衣腹に若宮宗尊おはしませど、この御ことを待ちきこえたまふとて、坊定まりたまはぬほどなり。たとひ平らかにしたまへりとも、もし女宮にておはしませばと、まがまがしきあらましを思ふだに、胸つぶれ口惜し。かつは御身の宿世見ゆべき際ぞかしと思せば、いみじう念じたまふに、すでにことなりぬ。まづ何にかと心騒ぐに、御せうとの大納言公相「皇子後深草誕生ぞや」と、いと高らかにのたまふを、あまりのことに皆あきれて「まことか、まことか」とおとど賈氏のたまふままに、喜びの御涙ぞ落ちぬる。あはれなる御氣色、見る人も言忌みしあへず。御修法の僧どもをはじめ、道道の祿賜はる。したり顔に汗おし拭ひつつまかづる氣色、今一際めでたく、ののしりたちて、さらにものも聞えず。

(一)ほんたうに、このころの大評判に對しても、もし姫宮でいらしたら、どんなに悄然として情なかつたであらうに、よくもえらいことを、おでかしなされたことよ。

(二)後深草院に拜謁する度に。

(三)朝夕二度御産湯を浴びせまつる儀式。

(四)宮中から皇子の御守刀がとどけられた。

(五)お待ちかねであつたままに。

(六)滞りなく。

(七)將軍職を讓つて。

げにこのころのひびきに、女にておはしまさしかば、いかにしほしほと口惜しからまし。きらきらしうもし出でたまへるかし。さればおとど實氏年たけたまふまでも、その折のうれしうかたじけなかりしを思ひいづれば、見奉ること涙ぐまるとぞ、後深草院をば常に申されける。

御湯殿の儀式はさらにもいはず、人人の祿、なにくれ、例の作法にことを添へて、いみじう世の例にもなるばかりとつくしたまふ。御佩刀まゐる。心もとなかりつるままに、二十八日親王の宣旨ありて、八月十日すがやかに太子に立ちたまひぬ。おとど實氏御心おちゐて、すすしうめでたう思ふこと限りなし。

かくてまたの年寛元二年あづまの大納言頼經の君、惱みたまふよしきこえて、御子頼嗣の六つになりたまふに讓りて都へ御歸りあれば、若君にその日やがて將軍の宣旨下され、少將になりたまふ。頼嗣と名乗りたまふべし。泰時朝臣も、一昨年入道して、孫の時頼に世を讓りにしかば、この頃は天の下の御後見この相模守時頼朝臣つかうまつる。いと心かしこく、めでたき聞えありて、つはものも靡き従ひ、おほかた世も靜かに治まりすましたり。

かくて寛元も四年になりぬ。正月二十八日春宮 後深草に御位讓り申させたま

(八)教實、良實、實經の三人。

(九)この兼實公がすなはち今の。

(一〇)關白の旨をいたただいただけで。

(一一)實際に天下の政治を見るに到らなかつた。一條天皇長徳元年薨去。

(一二)父について攝政となつたが、一代だけで終られた。かうしてどなたも御子孫までは攝政とならなかつたのに、この道家公の御子の三人御兄弟は、御子孫が絶えず、藤原氏の嫡流として久しくお榮えになつてゐるのは、類ひのない貴いことであると思ふ。

(一三)御禊、御即位の誤り。

(一四)大嘗會に、悠紀方、主基方の設備に設けられる臨時の司。

ふ。この帝もまた四つにぞならせたまふ。めでたき御例どもなれば、行末もお

しはかられたまふ。光明峯寺殿道家の御三郎君、實經の大臣、御年二十四にて攝

政したまふ、いとめでたし。御兄弟三人まで攝録したまへる例ふるくは謙徳公

伊尹・忠義公兼通・東三條大入道殿兼家、そのまた御子ども中關白殿道隆・粟田

殿道兼・法成寺入道殿道長、これふた度なり。近くは法性寺殿忠通の御子ども

も、六條殿基實・松殿基房・月輪殿兼實、これぞやがて今の峯殿道家の御祖父

よ。かやうのこといとたまたまあれど、粟田殿道兼も宣旨かうぶりたまへりし

ばかりにて、七日にて失せたまへりしかば、天下執行したまふに及ばず。松殿

基房の御子師家のおとど一代にてやみたまひにき。いづれも御末まではおはせ

ざりしに、この三所のながれ絶えず、久しき藤波にて、たち榮えたまへるこ

そ、たぐひなきやんごとなさなめれ。末の世にもありがたくや侍らん。今の攝

政殿實經をばのちには圓明寺殿とぞきこゆめりし。一條殿の御家のはじめな

り。

かくて御即位御禊も過ぎぬ。大嘗會のころ、信實朝臣といひし歌よみのむす

め少將の内侍、大内の女工所にさぶらふに、雪いみじう日ごろ降りていかめし

(一) 禁裏の御様子はどうであらうか。限りもなく積る今朝の雪であるわい。續古今集・冬。

(二) 禁裏のお庭の雪に足跡をつけて、遠くまでつづいてゐる道を見るにつけ、わが君の御代が千年までもお榮えになる様子が忍ばれません。だから、御心配には及びません。新後拾遺集・賀。

(三) いつの間にか方方へ行幸を頻繁になさるやうになり。

(四) お氣樂に、常に上皇と御同車などされ、普通人のやうに華やかなことばかり續き、萬事思ひのままの理想的な御生活振りである。

(五) もつともな話とは言ひながら、やはりえらい御威勢だ。それにつけても、院は御心中に先年まだ御不遇でいらした時、この神の御靈夢を蒙つたことを思ひ出され、殊に謙んで御禮を言上せられたやうである。

(六) 岩間の清水が木蔭にかくれて見えないやうに、自分が世に埋もれてゐた時、この石清水社に詣でて、あらたかな夢のお告げをいただいた昔を思ひ出すと、私の心はずがすがしい。續古今集・神祇。

う積りたる曉、太政大臣賈氏のたまひ遣はしける、

九重の大内山のいかならんかぎりも知らず積る雪かな

御返し、少將の内侍、

九重の内野の雪に跡つけて遙かに千代の道を見るかな

院の上 後嵯峨は、いつしか所所に御幸しげう、御あそびなどめでたく、今め

かしきさまに好ませたまふ。

中宮嬉子も位去りたまひて、大宮の女院とぞきこゆる。安らかに、常はひとつ御車などにて、ただ人のやうにはなやかなることどものみ隙なく、よろづあらまほしき御有様なり。院の上 後嵯峨 石清水の社に詣でさせたまへば、世の人残りなくつかうまつる。さるべきことはいひながら、なほいみじう、御心に一年のこと思し出でられて、ことにかしこまりきこえさせたまふべし。

石清水木がくれたりしいにしへを思ひ出づればすむ心かな

寶治のころ、十月二十日あまりなりしにや、紅葉御覽じに宇治に御幸した

まふ。上達部・殿上人、思ひ思ひ色色の狩衣、菊紅葉の濃き薄き、縫ひ物、織物、綾錦、すべて世になききよらをつくし騒ぐ、いみじき見ものなり。殿上人

- (七) 菊製、紅葉製、服色である。
- (八) 宇治川にある小島。
- (九) 一齊にいろいろの樂器を吹奏した時は、水底の河の神も耳をそばだてたらうと思はれ、何となくぞつとするほどであるのに。
- (一〇) 宇治近くの槇の山から吹く風も激しいのに。
- (一一) 色色の美しい衣を重ねた袖口が、藤の間から、わざとらしくなく見えてゐるのが、夕日の光と燦き合つて、錦を河水でさらすといふ支那の蜀江の光景ではないかと思はれた。
- (一二) 宇治川の網代に氷魚のよる夜も、そのまま騒ぎ明かして。「寄る」と「夜」を懸く。
- (一三) 山城國紀伊郡、白河院以來の離宮で、上皇御所であつた。
- (一四) 上皇が始めて鳥羽の離宮に行幸あらせられた今日を待つて、上皇の御將來をお祝い申す第一日として、千年も榮えさうな松の枝の蔭に、澄んでゐるこの離宮の池の水の佳氣靈氣たる有様よ。續後撰集。
- (一五) 丑けふから私の住み初めた離宮の澄んだ水に影をうつす老松に

の舟に樂器まうけたり。たちばな橋の小島に御舟さしとめてもの音ども吹き立てたるほど、水の底も耳たてぬべく、そぞろ寒きほどなるに、折知り顔に空さへうちしぐれて、槇の山風あらましきに、木の葉どもいろいろ散りまがふ景色、いひ知らず面白し。女房の舟に色色の袖口わざとなくこぼれ出でたる、夕日にかがやきあひて、錦を洗ふ九つの江か見えたり。ひやうどう平等院に中一日わたらせたまひて、さまざまのおもしろきことども數知らず。網代に氷魚のよるも、さながらののしり明かして、歸らせたまふ。

二五鳥羽殿も近ごろはいたう荒れて、池も水草がちに埋れたりつるを、いみじう修理しみがかせたまひて、はじめて御幸なりし時、「池邊松」といふことを講ぜられしに、おほまゝ太政大臣實氏序書きたまへりき。

二四いはひおくはじめと今日を松が枝の千歳の影にすめる池水
院 後嵯峨御製、

二五影うつす松にも千代の色見えてけふすみそむる宿の池水
大納言典侍ときこえしは爲家の民部卿のむすめなりしにや、

色かへぬ常磐の松のかけ添へて千代に八千代にすめる池水

も、千年も榮えるといふ瑞祥があらはれてゐる。「澄む」に「住む」をかく。

(二六)この離宮の池水は四季緑の色をかへないおめでたい常磐の松の影まで添ひ、千年も萬年も永くすむといふ瑞色があらはれてゐる。

(一)御盃の巡るとともに、御列席の方向がつきつぎに歌を詠まれたやうであるけれども。

(二)行幸を仰いで。

(三)神崎川。

(四)門の外の田。

(五)天の下どこをさしても朕が領土でない處はないわけだが、ことにこの吹田の山荘は氣に入つたから、かりの行在所とはいはないで朕が永久の皇居と定めよう。「川舟の」は「さす」の枕詞。古今集の「世の中はいづくかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿と定むる」を本歌とす。建長三年閏九月。

すん流るめりしかど、例のうるさければなむ。御前の御遊びはじまるほど、そり橋のもとに龍頭鶴首よせて、いと面白く吹き合はせたり。かやうのこと、常の御遊びいとしげかりき。

また太政大臣實氏の津の國吹田の山庄にもいとしばしばおはしませせて、さまざまの御遊び數をつくし、いかにせんともてはやし申さる。河に臨める家なれば、秋深き月のさかりなどはことに艶ありて、門田の稻の風に靡く氣色、妻とふ鹿の聲、衣うつ砧の音、峰の秋風、野邊の松蟲、とりあつめ、あはれそひたる所のさまに、鶉飼ひなどおろさせて、篝火どももしたる河のおもて、いとめづらしうをかしと御覽す。日ごろおはしまして、人人に十首歌召されしついでに、院後嵯峨御製、

河舟のさしていづくかわがならぬ旅とはいはじ宿と定めんと講じあげたるほど、あるじの大臣實氏いみじう興じたまふ。「この家の面目今日に侍る」とぞのたまはする。げにさることと、聞く人皆誇らしくなむ。

おりぬたまへる太上天皇などきこゆるは、思ひやりこそおとなびさだ過ぎたまへる心地すれど、いまだ三十にだに満たせたまはねば、よろづ若う愛敬づ

- (六) どういふ遊びをして院の御心を慰めようかと上皇のお氣に入る遊びごとばかり工夫されながら、どうかして、あつとお言はせすることをしてみたいと大騒ぎされるから、大層華やかな時代である。
- (七) 後深草帝八歳、實經廿八歳。
- (八) 碁石の遊戯、石はじぎ。
- (九) 貝合。
- (一〇) 漢字の扇を出して、これに旁をつける遊び。
- (一一) 攝政殿が始終ゐるのが窮屈で氣苦勞のやうに見える。

(一二) 男のたびをはくことは、恥かしくて、どうしてもできませんといつて、自分の局におりたので。

き、めでたくおはするに、時のおとなにて重重しかるべき太政大臣實氏さへ、何わざをせんと御心になふべきことをのみ思ひまはしつ、いかでめづらしからんともて騒ぎきこえたまへば、いみじうはえはえしきころなり。帝後深草まして幼なくおはしませば、はかなき御遊びわざよりほかの御營みなし。攝政殿實氏さへ若くものしたまへば、夜晝さぶらひたまひて、女房の中にまじりつ、亂碁・貝おほひ・手まり・へんつきなどやうのことどもを思ひ思ひにしつ、日をくらししたまへば、さぶらふ人人もうち解けにくく、心遣ひすめり。

節會、臨時の祭、何くれの公事どもを女房にまねばせて御覽すれば、太政大臣興じたまひて、殊更ちいさき笏など作らせてあまた奉りたまへば、上後深草も悦びおぼす。入道太政大臣公經の御女、大納言三位殿といふを關白になる。按察の典侍隆衡の女・大納言の典侍・中納言の典侍・勾當の内侍・辨の内侍・少將の内侍、かやうの人人皆男の官に當てて、その役を勤む。いと辛いこととてわびあへるもをかし。中納言の典侍を權大納言實雄の君になさるるに、「機はくこといかにかなふまじ」とて曹司に下るるに、上後深草もいみじう笑はせたまふ。辨の内侍、葦の葉に書きて、かの局にさし置かせける。

(一) 攝津の國の難波江の葦の下根のやうに、どうしたといふのでそんなに浪にしをれて、困つた顔をしてゐるのですか。葦の下根は足と襪を掛ける。津の國、下根、浪、しをれ、みだれはすべて葦の縁語、足をいふたためです。

(二) 難波江の葦の下根が亂れて浪に浮いてゐるやうに、たびをはくのにすつかりまごつて、氣が氣でなく、御前に落ちついてゐられなくて、ここに逃げてゐますの。波に「無み」をかける。この段辨内侍日記の建長二年九月條參照。

(三) 建長三年。

(四) 紙の兜に花の形などを飾つた遊び道具。

(五) 續命纒とも長命纒とも。種々の香料を玉にして、造花を結びつけ、五彩の絲をたれ、簾や柱などにかけて邪氣を拂ふもの、五月五日に懸け、九月頃まで置く。

(六) 清涼殿の主上の御食事の室。

(七) 菖蒲の根。

(八) 露の置いたままの露が添へられ、その中にねり絲で「ふかき」といふ字形を結んである絲のさまもしやれてゐる。

(九) 何でもよいから歌を詠め。

(一〇) 大人びて。

津の國のあしの下根のいかなれば波にしをれて亂れがほなる返し、

津の國の葦の下根のみだれわび心も波に浮きてふるかな

五月五日、所所より、御かぶとの花、薬玉など、いろいろに多くまわれり。

朝餉にて人人これかれひきまさざりなどするに、三條大納言公親の奉れる根に、露おきたる蓬の中に、ふかきといふ文字を結びたる、絲のさまもなよびかに、いと艶ありて見ゆるを、上後深草も御目とどめて、「何とまれ、いへかし」とのたまふを、人人もおよすけて見奉るを、辨の内侍、

あやめ草そこ知らぬまの長き根に深きといふや蓬生の露

と、ありつる使はや歸りにければ、藏人を召して殿上より遣はしつ。御返し、

公親、

あやめ草そこ知らぬまの長き根を深き心にかがくらべん

またそのころ建長五年天王寺に院後醍醐の詣でさせたまふついでに、住吉へも御幸あり、「神はうれし」と後三條院仰せられけんためし思ひ出でられ侍りき。大宮院姞子も御まゐりなれば、出車ども、色色の袖口ども、春秋の花紅

(一)この蓬生の露——貴方の御志は、底知らぬ沼に生えてある長い菖蒲の根よりも深いと仰しやるのですか。どうもさうは私には思へません。知らぬまに沼を懸く。
(二)先刻大納言から薬玉を獻上來た使は早や歸つたから、藏人を呼んで宮中からこの歌を持たせて使にやられた。

(三)私の深い志には、底知らぬ深い沼にある長い菖蒲の根もどうして較べることができません。

(四)延久五年十二月廿五日後三條上皇住吉行幸の際の御製「住吉の神もうれしと思ふらん空しき舟をさして來つれば」(後拾遺集・雜)「空しき舟」はおりぬの帝と般若の舟を譬ふ。

(五)女房たちが美しい衣の袖口を簾の下から押し出してゐる車。

(六)隨身舎人などの服、表は布、裏は絹つけたる狩衣。

(七)指貫の上を薄く、下を次第に濃く染めたもの。色は多く紫。

(八)歌多く歌を獻られたが。

(九)むけふ院の御臨幸を仰いで、後三條上皇御參詣の昔に若返つた、この住吉の老松は、更に又千年の

葉を一度にならべて見る心地して、いと美しく、目もかがやくばかり眺みつくされたり。上達部、若き殿上人などは、例の狩襖、裾濃の袴などめづらしき姿どもを心にうちませたり。釣殿の簀子に人人さぶらひて、あまたきこえしかど、さのみはいかでか。太政大臣實氏、

けふやまたさらに千歳を契るらん昔にかへる住吉の松

さても院 後嵯峨の第一の皇子宗尊は、右中辨平棟範のぬしの女、四條院に兵衛の内侍棟子とてさぶらひしが、劍璽につきてわたりまぬれりしを、忍び忍び御覽じけるほどに、その御腹に出でものしたまへりしかど、當代 後深草むまれさせたまひにしのちはおしけたれておはしますに、また建長元年、后大宮院腹に二の宮龜山さへさしつづき光りいでたまへれば、いよいよ今は思ひ絶えぬる御契りのほどを私物にいとあはれと思ひきこえさせたまふ。源氏にやなし奉らましなど思すも、なほ飽かねば、ただ皇子にてあづまのあるじになしきこえてんとおぼして、建長四年正月八日、院後嵯峨の御前にて御冠したまふ。帝 後深草の御元服にもほとほと劣らず、内藏寮、なにくれ、きよらをつくしたまふ。やがて三品の位賜はりたまふ。御年十一なるべし。中務卿宗尊親王と申すめり。

壽を院に對し奉りてお約束するであらう。續古今集・神祇。

(二〇)實は棟範の妹。

(二一)後嵯峨院踐祚の時、この内侍が劍璽について移つて來て奉仕したのを。

(二二)壓倒されて、あかるなきかでいらつしやるのに。

(二三)ここまで來ては今第一皇子の皇位に即かれる望みは絶えてしまつた御不運さを後嵯峨院は内内大層お氣の毒に思ひ申された。

(二四)關東の將軍。

(一)三月十九日(白練抄による)

(二)親王の任將軍の前例。

(三)京都守護の探題の役所。

(四)高位の侍臣女官たち大勢親王に奉仕するについても、「仙洞に伺候すると同様に心得るがよい。そなたらが鎌倉に赴任しても、きまつた官職位階の昇進には交障あらせまい」と御おせられた。これといふのも、御愛子が將軍になられたからこそであつて、何ごとも世の中のこととは、ひとへに人柄のいかんによると思はれた。

(五)親王將軍の御下向であるか

同じ二月十九日都を出でたまふ。その日將軍の宣旨かうぶりたまふ。かかる例はいまだ侍らぬにや。上下めづらしく面白きことにいひ騒ぐべし。御迎へにあづまの武士どもあまたのぼる。六波羅よりも名あるもの十人御送り下る。

上達部・殿上人・女房などあまたまわるも、後嵯峨「院中の奉公に等しかるべし。かしこにさぶらふとも、限りあらん官位などは障りあるまじ」とぞおほせられける。何ごともただ人がらによると見えたり。際異によそほしげなり。まことに、おほやけとなりたまはずば、これよりまさること何ごとかあらんと、賑はしく、花やかさはならぶかたなし。院の上後嵯峨も忍びて粟田口のほとりに御車たてて御覽じ送りけるこそ、あはれに辱けなく侍れ。きびはにうつくしげにてはるばるとおはしますを、御母の内侍種子も、あはれに辱けなしと思ひきこゆべし。かかれれば、もとの將軍頼嗣三位の中將は、その四月に都へ上りたまひぬ。いとほしげにぞ見えたまひける。さて、今下りたまへるを、もて崇め奉るさまいはんかたなし。宮の中のしつらひ、御まうけのことなど限りあれば、善見天の珠妙の莊嚴もかくやとぞおぼえける。かやうにて今年は暮れぬ。

明るる年は建長五年なり。正月三日、帝後深草御冠したまふ。御年十一、

ら、格別に立派である。

(六)天皇。

(七)いとけない可愛い御容子で。

(八)できうる限り盡したから。

(九)善見天の殊勝殿(帝釋天の宮殿)の荘嚴もかくやとばかり。

(一〇)御腰がしつかりしてをられぬのが残念であつた。幼なくあらせられたころはもつと情なくおはしたのを、先年閑院内裏の焼けた騒ぎから、ちやんとお立ちになれたので。

(一一)建長二年十月十三日。

(一二)上皇・母后に謁する行幸。

(一三)年老いて、このやうな光榮ある行幸に供奉しえたとは、いかに先例なき幸運なるわが身よ。

(一四)社会的な事象としても、慶すべく、望ましくことなのに、ましてわが子や孫の上に見奉られる公のお心持は。

(一五)供奉の人人は今まで前例のないほど高麗・唐土の綾錦を美しく著飾つてゐる。その中に……。

御諱久仁と申す。いとあてにおはしませど、あまりささやかにて、また御腰の

あやしくわたらせたまうぞ口惜しかりける。いはけなかりし御ほどはなほいとあさまじうおはしませけるを、閑院の内裏焼けるまぎれより、うるはしく立たせたまひたりければ、内裏の焼けたるあさまじさは何ならず。この御腰のなほりたるよろこびをのみぞ上下思しける。

院の上 後醍醐 鳥羽殿におはしますころ、神無月の十日ごろ朝覲の行幸したまふ。世にあるかぎりの上達部・殿上人つかうまつる。色色の菊紅葉をこきませ、いみじう面白し。女院大宮院婚すもおはしませば、拜し奉りたまふを、太政大臣 實氏見奉りたまふに、喜びの涙ぞ人わろきほどなる。

ためしなきわが身よいかに年たけてかかるみゆきに今日仕へぬる

げに、おほかたの世につけてだにめでたくあらまほしきことどもを、わが御末と見たまふ大臣 實氏の心地いかばかりなりけん。來しかたもためしなきまで高麗・唐土の綾錦をたちかさねたり。太政大臣ばかりぞねびたまへれど、裏表白き綾の下襲を著たまへるしもいとめでたくなまめかし。池には麗はしく唐のよそひしたる御船二艘漕ぎ寄せて、御遊びささまのことどもめでたくののしり

- (一) 建長二年十一月十一日。
 (二) 御幸拜觀人の棧敷などでは、上臈たちがわれ劣らじと、念入に化粧美装を凝してゐられる。
 (三) 竹柏は熊野山の名木、これを「折りかざす」は熊野參詣のこと、「竹柏の葉風のかしこさに」は熊野權現の神威をいふ。院の熊野行幸にあつて、神威をかしくみ、行幸拜觀の車を立てることを禁止されたので、大宮院も女官車を従へられず、御自分だけお車で上臈を送り遊ばしたために、道には一輛の車の轍があるだけだ。
 (四) 新宮に下る川船に召して、熊野川に棹さしおくだりになる間、水面が狭ま苦しく感じられる迄にお伴の舟が一杯續いたのも。
 (五) 熊野川の瀬の流れをせきとめるほど、幾艘も並び續いて下る杉舟の舟縁に立つ波に朕が衣の袖の、ぐつしよ濡れたことよ。續古今集・神祇。
 (六) 建長七年三月八日。
 (七) かへつて言はぬが花でせう。

て、歸らせたまふひびきのゆゆしきを、女院媿子も御心ゆきてきこしめす。

そのころほひ、熊野の御幸侍りしにも、よき上達部あまたつかうまつらる。都出でさせたまふ日、例の棧敷など、心ことに挑みかはすべし。車は立てぬことなりしかど、大宮院媿子ばかり、それも出車はなくて、ただ一輛にて見奉りたまひしこそ、やんごとなさも、おもしろく侍りけれ。辨の内侍、

折りかざす竹柏の葉風のかしこさにひとりみちある小車のあと

御幸、熊野の本宮に著かせたまひて、それより新宮の川舟に奉りてさし渡すほど、川のおもてところせきまで續きたるも、御覽じ馴れぬさまなれば、院の上後座敷

熊野川瀬ぎりにわたす杉舟のへなみに袖の濡れにけるかな

そののちもまたほどなく御幸ありしかば、女院媿子もまわりたまひけり。皆人知ろしめしたらんこと、なかなかにこそ。

第六 おりゐる雲

(一) 卷名は後深草帝讓位の時、辨の内侍の詠んだ「今はとておりゐる雲のしぐるれば心のうちぞかきくらしける」による。記事は後深草天皇の康元元年から讓位まで、東二條院公子の入内、龜山院立坊、後嵯峨院高野御幸、嵯峨離宮新造、大宮院の一切經供蓋のことなど。

(二) 帝は十四、女御は二十五で、女の齡のふけすぎてゐること。

(三) 十一月の誤り。

(四) 新嘗祭の翌日行はれる節會で、五節舞などのある宴會。

(五) 帝から公子 姫に御手紙がある。

(六) 夕暮を待ち遠しく思ふよ。今宵はそちが入内して、松の緑が千歳の久しきにわたつて變らないやうな契りを朕と結ぶけふのめでたい儀式を思つて。「待つ」に「松」を懸く。久し千歳、變らぬの縁語。

(七) 紅腫しの薄様の、金銀の箔の押しでないのを八重に重ねたのを結び文にして、別紙に包まれた。(八) 裏の濃い蘇芳色の五衣を七枚重ねて。(普通は五枚)

(九) 裏表ともに紅の五衣を八領疊ねたのである。

(一〇) 普通は四人づつ乗る。

春すぎ夏たけて、年去り年來たれば、康元元年にもなりにけり。太政大臣實氏の第二の御女、女御東二條院公子にまゐりたまふ。女院大宮院婚子の御はらかなれば、過したまへるほどなれど、かかるためしはあまた侍るべし。十二月十七日、豊の明のころなれば、内裏わたり花やかなるに、いとどうち添へて、今めかしうめでたく、その日御消息をきこえたまふ。

夕ぐれにまつぞ久しき千歳まで變らぬ色の今日のためしを

關白 兼平書かせたまひけり。紅のにほひの箔もなきが、八重にかさねたるを結びてつつまれたり。時なりぬとて、人人まう上り集る。女御公子の君、裏濃き蘇芳七つ、濃き單、蘇芳の表著、赤色の唐衣、濃き袴奉れり。准后貞子そひてまゐりたまふ。皆紅の八つ、萌黄の表著、赤色の唐衣着たまふ。出車十輛、皆二人づつ乗るべし。一の車、左に一條殿 大殿の女、右に二條殿 公俊の大納言女、二の左、按察の君 准后の妹、右に中納言の君 實任の女、三の左に民部卿

- (一)牛物と書いて、下女よりやや身分の高い女房。
(二)雑役驅使の役を務める者。
(三)便器を洗ひ淨むる女。
(四)公子は後嵯峨上皇の猶子。
(五)春宮大夫藤原公實の女、白河院の猶子として鳥羽帝の時立后。
(六)帝は院の誤り。皇后宮は門院(仙華門院)子建長三年三月廿七日院號)の誤り。その門院の御かたの内侍が帝の御消息の使ひを承はる。
(七)御香爐。
(八)主上は大層幼ない御年頃であられるのを、女御は夫の君としてはあきたらなくお思ひなさるのが普通であつたらうに、なかなかどうして主上は大層情を解してゐられて、御遠慮なく粹なお言葉を女御にかけられるのを、女御の御母准后は。
(九)紅の絹のよくつやを出した八尺四方なのに、表には組み糸の刺繡がある。
(一〇)鑑宥。
(一一)朝日の光もけふからは一層うららかに照り輝いて、九重の雲の上の空にもわれとそちと千歳まで

殿、右別當殿、そのつきつきくだかしければとどめつ。御童・下仕・御はした・御雑仕・御樋洗などいふものまで、容貌よきを擇りとのへられたる、いみじう見どころあるべし。御兄の殿原、右大臣公相・内大臣公基まわりたまふ。かぎりなくよそほしげなり。院後嵯峨の御子にさへし奉らせたまへれば、いよいよいづかれたまふさま、いはんかたなし。待賢門院璋子の白河院の御子とて、鳥羽院にまわりたまへりしためしにやとぞ、心あてには覺え侍りし。帝後嵯峨のひとつ御腹の姫君璣子、このころ皇后宮とて、その御かたの内侍ぞ御使にまゐる。まうのぼりたまふほど、女御はいとはづかしく似げなきことに思いたれば、とみにえ動かれたまはぬを、人人そそのかし申したまふ。御太刀一條殿、御几帳按察使殿、御火爐中納言持たれたり。上後深草は十四になりたまふに、女御東二條院公子は二十五にぞおはしける。帝後深草きびはなる御ほどを、なかなかあなづらはしきかたに思ひなしきこえたまひぬべかりつるに、いとざれて、慎ましげならずきこえかかりたまふを、准后貞子はうつくしと見奉らせたまふ。御衾は紅うち八四方なるに、上にはうはざしの組あり。絲の色などきよらにめでたし。例のことなれば、准后貞子たてまつりたまふ。太政大

榮えるといふ吉祥が、はつきりと現れてゐる。

(二)朝日の光が射し初めた九重の雲の上に、御妹背の契りが永久に續くといふ瑞兆を見ます。

(三)勅使には、引き出物として女の装束一そろひに、細長(小桂の上)に著る、おほくびのない女衣)を添へて與へられた。

(四)御婚姻後三日目の夜、三夜の餅を獻る使。三夜は披露の儀。

(五)表紅梅に裏薄紅梅の襲(かさね)

(六)薄紫。

(七)衣の上、装束の下に着る廣袖の服。

(八)絹を巻いたもので、退出の時に腰にさす。

(九)身分階級に従つて差がある。

臣實氏も三日がほどはさぶらひたまふ。上達部に勸盃あり。

二十三日また御消息まゐる。御使、頭の中將通世、こたみも殿兼平書かせたまふめり。このころ、殿ときこゆるは、太政大臣兼平のおとど、岡屋殿兼經の御弟ぞかし。後には稱念院殿と申しけり。御手勝れてめでたく書かせたまひしよ。鷹司殿の御家のはじめなるべし。

朝日影けふよりしるき雲の上の空にぞ千代の色も見えける
御返し、太政大臣實氏きこえたまふ。

朝日影あらはれそむる雲の上に行くすゑ遠き契りをぞ知る
女の装束、細長添へてかづけたまふ。

今日はじめて、内の上後深草、女御東二條院公子の御かたにわたらせたまふ。

御供に關白殿兼平・右大臣公相・内大臣公基・四條大納言隆親・權大納言實雄・良教・通成・左大將基平など、おしなべたらぬ人人まゐりたまふ。餅の使、頭の中將隆顯つかうまつる。太政大臣實氏夜のおとどより取り入れたまふ。御心の中のいはひ、いかばかりかとおしはからる。人人の祿、紅梅のにほひ・萌黄の表著・蒲萄染めの唐衣・桂・細長・腰差など、しなじなに從ひて、けぢめ

- (一) 正嘉元年正月二十九日。
 (二) 攝政・關白でない人。
 (三) 天子の御母、大宮院をいふ。
 (四) 右大臣公相、内大臣公基。
 (五) 五月中清涼殿で五日間朝夕最勝王經を器量貫祿十會だど。
 (六) その器量貫祿十會だど。
 (七) さういふ昔の古い人で。
 (八) お子様お二人が左右の近衛大將に相並んで就任せられたのを見ると、同じ藤原氏の御一門でありながら、貴方さまの御幸運は他人に超えていらつしやることよと思ひます。藤波——藤原氏の縁語、三笠山——藤原氏祖春日社を祀つた地、また近衛の大中少將の異稱。さしならぶ・梢は藤波の縁語。
 (九) 愚息二人が相竝んで左右の近衛大將に就任したのを見た時の私の心の中の悦ばしさを推量して下さい。

(二〇) 勿體ない。

(二一) 春雨は天下到る處の草木に公平無私に降りそそいでゐるが、しかし、その雨露の恩を最も繁くうけてゐるのは自分である。皇恩を春雨に喩へ、蒼生を草木になぞらへた。

あるべし。

かくて今年は暮れぬ。正月いつしか後に立ちたまふ。ただ人の御女の、かく后・國母こくもにて立ち續きさぶらひたまへる、ためし稀れにやあらん。おとど實氏の御榮えなめり。御子二人、大臣にておはす。公相・公基とて、大將にも左右ならびておはせしぞかし。これもためしいとあまたは聞えぬことなるべし。わが御身太政大臣にて、二人の大將をひき具して、最勝講なりしかとよ、まわりたまへりし御勢いさまはのめでたさは、めづらかなるほどにぞ侍りし。后 中宮公子・國母大宮院ごご姫子の御親、帝みかどの御祖父にて、まことにその器うつはものに足りぬと見えたまへり。昔、後鳥羽院にさぶらひし下野の君は、さる世のふるき人にて、おとど實氏にきこえける。

藤波のかけさし竝ならぶ三笠山人に越えたる梢こずえとぞ見る

かへし、おとど實氏、

思おもひやれ三笠の山の藤の花咲きならべつつ見つる心は

かかる御家の榮えを、みづからもやんごとなしと思し續けて詠みたまひける。

春雨は四方の草木を分かねども繁き恵みはわが身なりけり

(二)後鳥羽院妃・土御門院御母、後嵯峨院御祖母、在子。

(三)御介抱に力をつくされたのにその甲斐なくて慕ぜられたので。

(四)承明門院の御こと。

(五)後嵯峨院の御心中。

(六)正元三年。

(七)缺點のあるのはなく。

(八)織物の上に縫つたのを二重織物、その上にさらに刺繍を施したものを三重織物といふ。

(九)砧(うづ)つてつやを出した帛。

(一〇)唐織に紋を織り出したものを唐綺といひ、その表白地で、異蘇芳のものを櫻といふ。

(一一)「こ」は衍字か。裾濃、上薄く、下濃く染めたもの。

(一二)各自思ひ思ひの色目・紋柄の下著を著て、その華美な裾を指貫のゆだちからこぼれ出させた。

正嘉元年の春のころより、承明門院御惱み重らせたまへば、院後嵯峨もいみじう驚かせたまひて、御修法なにかと聞えつれど、つひに七月五日御年八十七にて崩れさせたまひぬ。ことわりの御齡のほどなれど、昔の御名残とあはれにいとほしう、いたづき奉らせたまひつるに、あへなくて、御法事など懇ろにおきて宣はする、いとめでたき御身なりかし。

明くる年八月七日、この皇子龜山院坊にわたまひぬ。御年十なり。よろづ定まりぬる世の中、めでたく心のどかに思さるべし。

そのまたの三月二十日なりしにや、高野御幸こそ、また來しかた行く末もためしあらじと見ゆるまで、世の營み、天の下の騒ぎには侍りしか。關白殿兼平・左右大臣公相・公基・内大臣實雄・左右の大將基平・公親・檢非違使の別當隆行をはじめて、残るは少なし。馬・鞍・隨身・舍人・雜色・童の髪・容貌・丈・姿まで、かたほなるなく擇りととのへ、心を盡くしたるよそほひども數數は筆にも及び難し。かかる色もありけりと、めづらしく驚かるるほどになむ。

銀・黄金を延べ、二重三重の織物・うち物・唐大和の綾錦・紅梅の直衣・櫻の唐の綺の紋・裾濃・浮線綾・色色さまざまの直衣・うへの衣・狩衣に、思

(一) 秋の神、染工を司る。龍田姫の錦は紅葉。どんな立派な錦でも。

(二) たがひに相談する人も。

(三) 餘り染めすぎて。

(四) 紺色で、濃く薄く染めた衣。

(五) それがまた珍らしくて。

(六) 場所が場所だけに。

(七) 春秋二季にある定期任官の儀。春は縣召(あがためし)の除目とて地方官を任じ、秋は司召の除目とて京官を任ず。いづれも三夜にわたる儀式、この外に臨時の除目もある。

(八) 邸内の人人も、そのつもりして、おたがひにその決定を今か今かと待ちわびてゐたのに、豫期に反して、前に申し上げた公基卿だつたらうか、大將におなりなされたから。

(九) 庵室を取り拂ひ、跡形もなくして。

(一〇) 山城國葛野郡。

ひ思ひの衣を出だせり、いかなる龍田姫の錦もかかる類ひはありがたくこそ見え侍りけれ。かたみに語らふ人もあらざりけめど、同じ紋も色も侍らざりけるぞ不思議なる。あまりに染めつくして、某の中將とかや、紺むらごの指貫をさへぞ著たりける。それしもめづらかにて、賤しくも見え侍らざりけるとかや。

院 後醍醐の御さま容貌、所がらはいとど光を添へてめでたく見えたまふ。

後土御門内大臣定通の御子顯定の大納言、大將望みたまひしを、院後醍醐もさりぬべく思されければ、除目の夜、殿の内の者どもも心遣ひして、はつるを心もとなく思ひあへるに、引き違へて、先にきこえつる公基の大臣にておはせしやらん成りたまへりしかば、怨みにたへず、頭おろしてこの高野に籠りぬたまへるを、いとほしくあへなしと思されければ、今日の御幸のついでにかの室を尋ねさせたまひて、御對面あるべく仰せられ遣はしたるに、昨日までおはしけるが、夜の間にかの庵をかき拂ひ、跡もなくしなして、いと清げに白き砂ばかりをことさらに散らしたりと見えて、人もなし。わが身は桂の葉室の山庄へ逃げ上りたまひにけり。その由奏すれば、後醍醐「今さらに見えじとなり。いと辛い心かな」とぞのたまはせける。

(一)山城國愛宕郡。吉田院では御歌合が常例だし、鳥羽殿では特に御長滞在のをりが多かつた。

(二)朝顔の行幸。

(三)御蹴鞠をあそばす。

(四)主人の方にむかつて鞠を高からず低からず蹴上げる儀で、名人のする重い役となつてゐた。

(五)宮中の女官。天皇付き侍女。

(六)内部にしきりのある辨當箱。

(七)引き出もの。

(八)そのまま院のお庭の中に取り入れたやうに見えて。

(九)自然と趣きを添へた場所がら。

(一〇)嵯峨天皇の皇后、橘嘉智子。

(一一)原本道覺は誤寫。道觀は文章博士藤原孝範の子。證空・證入に師事し、淨土宗の奥儀に入り、文永九年五月入寂。

(一二)天王寺の本堂をまねて。

(一三)眺望をほしいままにできるやうに高く構へた御殿。

かくのみ所所に御幸繁う、御心ゆくこと暇なくて、いささかも思し結ぼるることなくめでたき御有様なれば、つかうまつる人人までも思ふことなき世なり。吉田の院にても、常は御歌合などしたまふ。鳥羽殿にはいと久しくおはしますをりのみあり。春のころ行幸ありしには、帝後深草も御鞠に立たせたまへり。二條關白良實上鞠したまひき。内の女房など召して、池の御船に乗せて、ものの音ども吹きあはせ、さまざまの風流の破子、引き物など、こちたきことどもも繁かりき。

また嵯峨の龜山の麓、大井川の北の岸にあたりて、ゆゆしき院をぞ造らせたまへる。小倉の山の梢、戸灘瀬の瀧もさながら御垣のうちに見えて、わざと繕はぬ前栽もおのづからなさを加へたる所がら、いみじき繪師といふとも筆も及び難し。寢殿の竝びに乾にあたりて、西に藥草院、東に如來壽量院などいふもあり。橘大後の昔建てられたりし檀林寺といひし、今は破壊して礎ばかりになりたれば、その跡に淨金剛院といふ御堂を建てさせたまへるに、道觀上人を長老になされて、淨土宗をおかる。天王寺の金堂うつさせたまひて、多寶院とかや建てられたり。河に臨みて棧敷殿造らる。大多勝院ときこゆるは、寢殿

(一)このやりに遠方の御堂への道は。

(二)三棟四棟。古今集「この殿はうべもとみけりさき草の三葉四葉に殿づくりせり」による。

(三)一切經(佛經全部)を書寫して供養する法會。

(四)年來女院は一切經書寫の大願を有してゐられたのを、後嵯峨上皇は少しも御存じなかつたのに、女性の御身で、かかる御心願は大層尊く有難い御ことであるから、上皇も女院と御心をあはせられ、進んでさまざまお世話申された。

(五)樂人ら。

(六)袍、正装をつけて。

(七)階隱(はしかくし)の間。御殿の正面にあたる間。階隱とは御殿の階の前に柱を二本立て、上に屋根を算いて、階が雨に濡れないやうに隠す意である。

(八)御容貌がととのつてゐて、おかはゆく。

(九)御外祖父の前太政大臣實氏公が不吉も顧みず、御目を押し拭ひながら、あふれる涙をとどめかねていらつしやるのを、御無理もなしたことだと、もらひ泣きして。

のつづき、御持佛すゑ奉らせたまへり。かやうの引き離れたる道は、廊・渡殿・そり橋などを遙かにして、すべて殿めしう、三葉四葉に磨きたてられたる、いとめでたし。

正元元年三月五日、西園寺の花盛りに、大宮院嬪子一切經供養せさせたまふ。年ごろおぼしおきてけるをもいたく知らしめさぬに、女の御願にて、いとかしこくありがたき御ことなれば、院後嵯峨も同じ御心にわたちのたまふ。樂屋のものども、地下も殿上も、なべてならぬを擇りととのへらる、その日になりて行幸あり、春宮恒仁もおなじ行啓なる、大臣・上達部、皆うへのきぬにて、左右にわかれて、御階の間の勾欄に著きたまふ、法會の儀式、いみじくめでたきことども、まねびがたし。

またの日、御前の御遊びはじまる。帝後深草御琵琶、春宮龜山御笛、まだいとちいさき御ほどに、びんづら結ひて、御容貌まほに美しげにて、吹き立てたまへる音の雲井を響かして、あまり恐ろしきほどなれば、天つ少女もかくやと覺えて、太政大臣實氏言忌みもえしたまはず、目おし拭ひつつためらひかねたまへるを、ことわりに、老いしらへる大臣・上達部など、皆御袖ども括ひわた

(一〇)まして御母君であられる女院の御胸中は居ても立つても居られないお喜びでしたせう。
(一一)御想像申し上げるさへ恐しくなるほどの御繁昌ぶりでした。
(一二)色に櫻花が枝をつらねて美しく咲いたこと。櫻花も朕が御代も今が盛りであるわい。
(一三)四隣を駈して、限りなくお立派に聞えたが。
(一四)上皇の御製に照應して、それはお立派でしたよ。
(一五)櫻の花よ、いろいろな重ね重ね咲き匂へ。そしてわが上皇・天皇・東宮の御代の永遠に榮えます御かざしとなれ。
(一六)えらく天下の耳目を聳動させて、院が御選御になられた翌朝。
(一七)自分は六十年以上も春ごとに櫻の花を見て来たが、今年の春こそはじめて心がはればれし、満足した。以上三首續古今・賀。
(一八)世間ではだんだん今上御讓位のお噂などちらほら申し上げる者があるで、天皇は御不満に寂しく思ひめされ、ある夜お臥しにならぬで宿直の人人と静かにお物語りのあつたついでに、御即位以

りぬ。女院大宮院の御心のうち、ましておきどころなく思さるらんかし。前の世もいかばかり功德の御身にてかくおぼすさまにめでたき御榮えを見たまふらんと思ひやりきこゆるも、ゆゆしきまでぞ侍りし。御遊びはてのち、文臺召さる。院後嵯峨の御製、

色に枝をつらねて咲きにけり花もわが世も今盛りかも

あたりを拂ひて、際なくめでたくきこえけるに、あるじのおとど實氏の歌さへぞかけあひて侍りしや、

いろいろにかさねて匂へ櫻花わが君君の千代のかざしに

末まで多かりしかど、例のさのみはにてとどめつ。いかめしうひびきて歸らせたまひぬるまたの朝、無量光院の花のもとにて、おとど實氏昨日の名殘思し出づるもいみじうて、

この春ぞ心の色はひらけぬる六十あまりの花は見しかど

その年正元元の八月二十八日、春宮龜山十一にて御元服したまふ。御諱恒仁ときこゆ。世の中にやうやうほのめききこゆることあれば、帝後深草は飽かず心細う思されて、夜居の間の静かなる御物語のついでに、内侍所の御拜の數を

來の毎朝内侍所をお拜みになつた日數をかぞへて御覽になつたら、
(一)五千七十餘日も、陛下がお拜み遊ばしたことを、天照大御神はよもやお忘れなさらないでせう。だから大御神はきつと陛下に御加護あらせられるでせう。
(二)昔、宇多天皇に奉仕した伊勢(伊勢守繼蔭の女)といふ更衣が、天皇の御讓位を悲しんで、「別るれどあひも思はぬももしきを見ざらんこと何か悲しき」と詠んだといふ故事までが、他事ならぬ氣持がして、心細く思はれる。
(三)劍璽の新帝へ移御の折は。
(四)今はこれまでと御退位遊ばす主上が御涙をもよほされるので、私どもの胸中も御同情にたへず掻きみだされました。

かぞへられければ、五千七十四日なりけるを、うけたまはりて、辨の内侍、

一 千代といへば五つかさねて七十に餘る日數を神は忘れじ

かくて十一月二十六日におりゐさせたまふに、空の氣色さへあはれに、雨うちそそぎても悲しく見えければ、伊勢の御が、「あひも思はぬももしきを」と言ひけんふるごとさへ今の心地して、心細くおぼゆ。上後深草も思しまうけたまへれど、劍璽の出でさせたまふほど、常の行幸に御身を離れざりつるならひ、十三年の御名殘、ひきわかるるはなほいとあはれに忍び難き御氣色を、悲しと見奉りて辨の内侍、

今はとておりゐる雲のしぐるれば心のうちぞかきくらしける

第七 北野の雪

(一) 卷名は、宗尊親王の御歌「なほ頼む北野の雪の朝ほらけ跡なきことに埋もるる身は」による。記事は正元元年龜山天皇即位より文永四年後宇多天皇隆誕までを敘す。右大臣實雄の姫君倍子とその兄中納言公宗の悲戀、宗尊親王が北條氏の忌諱に觸れ、將軍職を辭して歸京する條の描寫が文藝的に優れてゐて、あはれが深い。

(二) 規定通り行はれて。

(三) 御同居であられて。

(四) 鬱を散じて、御在位の時よりはかへつて大層のんびりしてゐて、人眼にも好もしい御様子なのに、御心も晴れ晴れしてをられる様だ。

(五) 今上の大嘗會の御禊の時、女御代理として供奉せられることになつたのを、そのまま、これを機會に、文應元年入内せられるべくお決めになつた。

(六) 御内意を伺つておかれた。

(七) 公相の女。(實雄の甥の娘)

(八) そんなことは絶對になからうと、無遠慮に入内を決心なさつた。

(九) 御兄實氏公の權勢をものともしない勇敢な御氣象と見える。

正元元年十一月二十六日、後深草院讓位の儀式常の如し。十二月二十八日龜山院御即位、よろづめでたく、あるべき限りにて、年も返りぬ。おりぬの帝後深草は十二月の二日太上天皇の尊號ありて、新院ときこゆ。本院後醍醐と常はひとつにわたらせたまひて、御遊びしげう、心やりて、なかなかいとどのどやかに、めやすき御有様に、思し慰むやうなり。中宮公子も院號の後は東二條院ときこゆ。二條富の小路にぞわたらせたまふ。太政大臣實氏も入道したまひぬ。常磐井とて、大炊御門京極なる所にぞ折折住みたまふ。この入道殿實氏の御弟に、そのころ右大臣實雄ときこゆる、姫君あまた持ちたまへるなかに、すぐれたる京極院倍子をらうたきものに思しかしづく。今上龜山の女御代に出でたまふべきを、やがてそのついで、文應元年入内あるべくおぼしおきてたり。院後醍醐にも御氣色賜はりたまふ。入道殿實氏の御孫の姫君今出川院嬪子もまゐりたまふべき聞えはあれど、さしもやはとおしたちたまふ。いとたけき御心な

(一)長兄。公宗は實雄の長男。

(二)後拾遺、藤原長能の「わが心かはらむものか瓦屋の下たく煙ろきかへりつつ」による。下にくすぼることから、表にあらはれないで、心の底にものを思ふことをいふ。ひそかな戀に胸を焦がし惱まれるのが、おかは、いさうだ。

(三)さうはいへ、それは大層不倫なことよと諦らめようとしても、ままならぬ心の苦しさを。

(四)起きても寝ても、聲を立てて泣いてばかりゐられて。葦の「ふし」(臥し、節)の縁語で、「ね」(根・音)の序詞。

(五)ぼんやりと日を過ごす。

(六)どうしたのかと心配される。

(七)薄紫色の五衣に、女郎花(表經青綿黄、裏青の色目)の表著などをひき纏ねて。

(八)御髪が非常に房房と長く。

(九)繪扇の、兩端の板を五枚重ねて薄様で包んだもの。

(一〇)少し赤味がかつた毛。

(一一)毛癖がなく。

(一二)臣籍の人の妻には。

(一三)實雄公は几帳を片寄せて、打ち解けた御様子で、拍子を取つて、

るべし。

この姫君 信子の御兄あまたものしたまふ中の、このかみにて中納言公宗ときこゆる、いかなる御心かありけん、「したたく煙」にくゆりわびたまふぞいとほしかりける。さるは、いとあるまじきことと思ひはなつにしも、従はぬ心の苦しさを、起き臥し、葦のねなきがちにて、御いそぎの近づくにつけても、われかの氣色にてのみほれすぐしたまふを、大臣實雄は、またいかさまにかと苦しう思す。初秋のけしき立ちて、艶ある夕ぐれに、大臣實雄わたりたまひて見たまへば、姫君 信子うち色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれてゐたまへる様・容貌、常よりもいふよしなく、あてに匂ひみちて、らうたく見えたまふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを廣げたらんさまして、少し色なるかたにぞ見えたまへど、筋こまやかに、額より裾までまがふすぢなく美し。ただ人にはげに惜しかりぬべき人柄にぞおはする。几帳おしやりて、わざとなく拍子うち鳴らして、御箏弾かせ奉りたまふ。折しも中納言公宗まゐりたまへり。實雄「こち」とのたまへば、うち畏りて、御簾の内にさぶらひたまふさまかたち、この君公宗しもぞまたいとめでたく、あくまでしめやかに、心の底ゆか

御筆をお弾かせ申された。

(二四)こちらへと。

(二五)あくまで慎ましやかに、御心の奥も床しく、このかたに對しては誰でもわれ知らず心遣ひされるやうな御様子で、ほんたうに優雅で、落ち著いた風で、氣高く美しい。

(二六)常よりは一層氣を靜めて。

(二七)連れ弾きの間。

(二八)平氣な風でふるまはれた。

(二九)む刺繡の撫子の露もほんものそつくりにきらきらして見える小桂に。

(三〇)横顔はほんたうに光を放つとは。

(三一)普通の容貌でさへ、親の怒目からは大騒ぎする。

(三二)「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」後撰集・權中納言(兼輔)により、子の愛に迷ふことをいふ。

(三三)入内の御儀式。

しう、そぞろに心遣ひせらるるやうにて、こまやかに艶めかしう、すみたるさまして、あてにうつくし。いとどもてしづめて、騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へたまへり。笛少し吹きなどしたまへば、雲井にすみのぼりて、いと面白し。御筆の音のほのかにらうたげなる、掻き合はせのほど、なかなか聞きもとめられず、涙浮きぬべきを、つれなくもてなしたまふ。撫子の露もさながらきらめきたる小桂に、御髪はこぼれかかりて、少し傾きかかりたまへるかたはらめ、まめやかに光を放つとは、かかると見えたまふ。よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかく類なき御有様どもなめれば、世に知らぬ心の闇に惑ひたまふも、ことわりなるべし。

十月二十二日、まわりたまふ儀式、これもいとめでたし。出車十輛、一の車左大宮殿、二位中將基輔の女とぞきこえし。二の左春日、三位中將實平の女、右は新大納言、この新大納言は爲家の大納言の女とかや聞きしにや。それよりも下、ましてくだくだしければむつかし。御雑仕、青柳・梅が枝・高砂・貫川といひし。この貫川を、帝龜山忍びて御覽じて、姫宮一所いでもし給ひき。その姫宮は、末に近衛關白家基の北の政所になりたまひにき。よろづのことよりも、女御

(一) お馴染みになつた。

(二) 不釣合に見えないほど。

(三) かの入知れず女御を戀してゐられる公宗の君の心地にも、妹君が陛下の御愛寵をうけられるのは嬉しいもの、それはそれとして御胸の思ひもひたすら苦しくなりまさるから、たへきれない氣持がするのだが、さてしまひにはどうなるのかと氣づかはず。

(四) 藤信子、弘長元年二月立后。

(五) 實雄公は、御自分の姫君の寵が奪はれないかと、ひどく御心配であつたが、別にさういふこともなかつた。

(六) 中宮と女御とはどちらも離れられぬ近い御血縁の間柄で、御競争軋轢あそばされるので、大層外聞の悪いこともあるやうだ。

(七) 後宮奉仕の習慣としてお互にからして競争するのを、昔の人は興のある華やかなこととされたのだけれども、當世の人人の御心はまた餘りあけすけで、風雅をかはすことをなさらないのであらう。

(八) 新中宮は遊戯にのみふけていて、幼兒らしくして、女らしい魅力があまりなさらぬから、主

京極院信子の御様・容貌めでたくおはしませば、上籠山もおもほしつきにたり。

女御京極院信子は十六にぞなりたまふ。帝龜山は十二の御年なれど、いとおとなしくおよすけたまへれば、めやすき御ほどなりけり。かの下くゆる心地にも、いとうれしきものから、心は心として、胸のみ苦しきさまなれば、忍びはつべき心地したまはぬぞ、つひにいかになりたまはんといとほしき。ほどなく后だちありしかば、大臣實雄心ゆきて思さることかぎりなし。

西園寺の女御今出川院嬪子も、さしつづきてまゐりたまふを、いかさまならんと、御胸つぶれて思せど、さしもあらず。これ嬪子も九つにぞなりたまひける。

冷泉の大臣公相の御女なり。大宮院嬪子の御子にしたまふとぞきこえし。いづれも離れぬ御中に、挑みきしろひたまふほど、いと聞きにくきこともあるべし。宮仕へのならひ、かかるこそ昔の人はおもしろくはえあることにしたまひ

けれど、今の世の人の御心どもも、餘りすくよかにて、みやびをかはすことのおはせぬなるべし。これ嬪子も後に立ちたまへば、もとの中宮信子はあがりて、皇后宮とぞきこえたまふ。今后嬪子は遊びにのみ心入れたまひて、しめやかにも見え奉らせたまはねば、御おぼえ劣りさまにきこゆるを、思はずなるこ

上の御寵愛は劣つてゐるやうなお噂があるのを、世間の人人も意外なことのやうに沙汰しあつた。

(九)心配に思はれたけれども。

(一〇)今はかうでも、もう少し成長されたならばと思ひ返されて、今のところは誰を怨みやうもなく、お氣を靜めてをられる。

(一一)二條良實、寛元四年正月關白を罷め、十五年後の弘長元年四月再任、その後三年になる。

(一二)その御隨身たちに美しい服装をさせて、行幸より先に龜山離宮にまゐり、いろいろ當日の御準備を遊ばされた。

(一三)例のやうに貴顯のかたがたばかりが供奉し。

(一四)祕曲の手のあらんかぎりを。

(一五)この離宮を訪ね来て、美しい櫻にいつまでも見飽きすることのない心にまかせ長居するならば、千年も櫻花の蔭で暮すことになるであらう。

(一六)さう云ふ歌の道の方面までも龜山天皇はお上手であられる。

(一七)醍醐天皇の御宸筆の手本を驚のとまつてゐる梅の造枝につけて、主上に獻られるとて。

とに、世の人も言ひ沙汰しける。父おとど公相も心やましく思せど、さりともねびゆきたまはばと、ただ今は怨みどころなく思しのどめたまふ。

かくて弘長三年二月のころ、おほかたの世のけしきもうららかに霞みわたるに、春風ぬるく吹きて、龜山殿の御前の櫻ほころびそむる氣色の常よりことなれば、行幸あるべくおぼしおきつ。關白二條殿良實この三年ばかり、またかへりなりたまへば、御隨身ども花を折りて、行幸よりも先にまゐりまうけたまふ。

その外の上達部は、例のきらきらしきかぎり、残るは少なし。新院後深草も兩女院大宮・東二條もわたらせたまふ。御前のみぎはに船ども浮かべて、をかきさまなる童、四位の若きなど乗せて、花の木かげより漕ぎ出でたるほど、になくおもしろし。舞樂さまざま曲なる手をつくされけり。御遊びの後、人人歌たてまつる。「花契^{ニチキル}返年^{ヘンカナルシラ}」といふ題なりしにや。内の上龜山の御製、

たづね来てあかぬ心にまかせなば千歳や花のかけに過ごさん

かやうのかたまでもいとめでたくおはしますとぞ、ふるき人人申すめりし。還^{かへ}らせたまふ日、御贈物^{おくりもの}ともいとさまざまなる中に、延喜^{ニギハヒ}の御手本^{ごてほん}を、鶯のゐたる梅の造り枝^{つくえだ}につけて奉らせたまふとて、院の上 後醍醐、

- (一)この梅の枝に、昔の御代御代の春から、今年の春までかけて、始終變ることなく來て鳴く、この鶯の聲のためたく聞えることよ。
- (二)主上の御返歌もお立派であつたのを忘れたのは、筆者の老いぼれたためでまことに情ない。
- (三)一定の規則によつて經文を書寫すること、多く法華經を寫すことをさす。
- (四)大變たぐひまれで。
- (五)御在俗のまま、殊勝にもかういふことを思ひ立たれたのは、えらい御願があつてだらう。
- (六)法華經御書寫に奉仕した朝臣は。
- (七)天台及び眞言の學僧ら。
- (八)華鬘、璎珞、抹香、燒香、塗香、幡蓋、衣服、伎樂、飲食、合掌の十種を佛に供養すること。
- (九)龜山離宮内にある。
- (一〇)翌文永二年の誤り。
- (一一)そんなことばかり申し上げるのはどうかと思はれるので。
- (一二)關白殿。實經は文永二年閏四月十八日關白に任せられた。「この二年ばかり」は半年の誤り。

梅が枝に代代のむかしの春かけてかはらず來る鶯の聲
御返りごとを忘れたるこそ、老のつもり、うたて口惜しけれ。

その年 弘長三にや、五月のころ、本院 後醍醐龜山殿にて如法經書かせたまふ。いとありがたく、めでたき御ことならんかし。後白河院こそかかる御ことはせさせたまひけれ。それも、御髪おろして後のことなり。いとかく思ひ立たせたまへる、いみじき御願なるべし。さるはあまたたび侍りしぞかし。男は花山院の中納言師繼一人さぶらひたまひける。やんごとなき顯密の學士どもを召しけり。昔上東門院彰子も行はせたまひたりしためしにや、大宮院嫡子同じく書かせおはしますとぞ承りし。十種供養はてて後は、淨金剛院へ御みづから納めさせたまへば、関白・大臣・上達部、歩み續きて、御供つかうまつられけるも、さまざまめづらしく、おもしろくなむ。

その年 弘長三 九月十三夜、龜山殿の棧敷殿にて御歌合せさせたまふ。かやうのことは白河殿にても鳥羽殿にてもいとしげかりしかど、いかでかさのみはにて、皆洩しぬ。このたびは心ことに磨かせたまふ。右は關白殿實經にて、歌ども擇りととのへらる。左は院後醍醐の御前にて歌御覽せられけり。このほど殿

二〇 歌合の左方。

二四 數差し。勝負の數をかぞへる具、串などをさす。

二五 風雅な鳥臺を沈木で作り、銀の舟二艘をのせ、その舟にいろいろの色紙の詠草を巻き重ねて積ませられたが、數取りの具も沈で作り、同じく舟の中に入れられた。

二六 朕みづから植ゑて見る山の紅葉をば、時雨も必ずやどこの紅葉より色濃く染めるであらう。

二七 選歌を讀みあげること。

二八 御簾の中でも、女性のかたが御筆を合奏された。その中で東の御方と申したは新院の若君の御生母であつたかと思ふ。

と申すは圓明寺殿實經新院後深草の御位のはじめつかた攝政にていませしが、

またこの二年ばかりかへりならせたまへり。前關白殿良實は院の御かたにさぶらはせたまふ。その他すぐれたる限り、右は關白殿實經、今出川の太政大臣

公相、皇后宮御父の左大臣殿實雄より下、皆この道の上手どもなり。左は大

良實より、かすだてつくりて、風流の洲濱、沈にて造れる上に、銀の舟二つに、色色の色紙を巻き重ねてつまれたり。數も沈にて造りて、船に入れらる。

左右の讀師、一度に御前にまわりてよみあぐ。左具氏中將、右行家なり。山紅葉、本院後醍醐の御製、

ほかよりは時雨もいかが染めざらんわが植ゑて見る山のみぢ葉

つひに左御勝の數まさりぬ。披講はてて、夜ふけゆくほど、御遊びはじまる。

笛花山院の中納言長雅、茂通の中將、笙公顯の中將にておはせしにや。箒築忠輔の中將、琵琶は太政大臣公相、具氏の中將も弾きけるとぞ。

御簾の内にも、御筆どもかきあはせらる。東の御かた童子ときこえしは新院後深草の若宮伏見の御母君にや。刑部卿の君も弾かれけり。樂のひまびまに太

政大臣公相土御門大納言通成など朗詠したまふ。忠輔・公顯、聲加へたるほど

(一)大堰川。

(二)和漢朗詠集の公乘億「秦甸之一千餘里、瓊瑤水舖」

(三)史記・項羽本紀の「富貴にして故郷に歸らざるは繡をきて夜行くが如し」により、見る人もなくて、そのかひのないのをいふ。古今集に貫之「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」と詠んだが、晝見る紅葉よりも、一層美しい。

(四)ともなつて。

(五)それがまるでわざと縁を求めて風流を試みたやうに見える。

(六)勅撰和歌集編纂の沙汰があつたのが完成し、ちぎ今日明日にも披露あるだらうと噂があるが。

(七)かの元久の後鳥羽院の新古今集の例にならつて。

(八)格別に光彩を増した珠玉の作品。

(九)年月のたつにつれて、院の御血統以外には皇位に即かれる方も絶無になり、益益御榮え遊ばすばかりの御有様がすばらしいので。

(一〇)論語顔淵篇に「君子の徳は風小人の徳は草、草これに風を尙ふれば必ずふす」による。

おもしろし。河浪もふけゆくままに凄う、月は氷を舖ける心地するに、嵐の山の紅葉、「夜の錦」とは誰かいひけん、吹きおろす松風にたぐひて、御前の簀子、御みきまゐるかはらけの中などに散りかかる、わざと艶あることのつまにしつべし。若き人人は身に沁むばかり思へり。うち亂れたるさまに、おのおの御かはらげどもあまたたびくだる。明けゆく空も名残多かるべし。

まことや、この年ごろ、前内大臣基家・爲家の大納言入道・侍従二位行家・光俊の辨入道など承はりて、撰歌の沙汰ありつる、ただ今日明日ひろまるべしと聞ゆる、おもしろうめでたし。かの元久のためしとて、一院後醍醐みづからみがかせたまへば、心ことに光そひたる玉どもにぞ侍るべき。年月に添へては、いよいよ外さまにわたるかたなく、榮えのみまさらせたまふ御有様のいみじきに、この集の序にも「やまと島根はこれわが世なり、春風に徳を仰がんと願ひ、和歌の浦もまたわが國なり、秋の月に道をあきらめん」とかや書かせたまへる、げにぞめでたきや。金葉集ならではの、皇子の御名のあらはれぬも侍らねど、このたびは、かのあづまの中務の宮宗尊の御名のりぞ書かれたまはざりける、いとやんごとなし。新古今の時ありしかばにや、竟妻といふこと行はせ

(一) 秘歌の遺。

(二) 金葉集以外は親王の御名を忌まれたことはなかつたが、このたびは、かの關東の將軍中務宮宗尊親王の御名を書かないで中務卿親王とのみあは、太府卿かつた。

(三) 二十卷は、歌數千九百餘首。

(四) 執權役は、やむり時頼朝臣であるから、例の如く大層賢明に處置し事態を收拾したので、風聞ほどの恐ろしいことはなかつたから。

(五) 吾さきに關東御下の折に六波羅に建てた檜皮屋が一棟あつて、そこに還京當初はお住まひであつた。檜皮屋は檜の皮で葺いた家。

(六) 今までとらつて變つた御様。

(七) 天下の將軍としてひたすら虎のやうに畏敬されてゐたのは昔の話で、今は人を懼つて鼠のやうに小さくなつて穴にとごこもつてゐる。ああ、いやな世の中だ。

(八) 父院も幕府をはばかつて、すぐには御對面もされないで。

(九) 後の大納言經任——當時まだ微官(左少將)だつたのを、鎌倉に敕使として下向せしめられたれ、御事にやと仰せ遣はされなどした後は、御父子の御對面もさしつかへない

たまふ。いとおもしろかりき。この集をば續古今と申すなり。

またの年文永三、あづまにころよからぬこと出で来て、中務のみこ都へ上らせたまふ。何となくあはただしき様なり。御後見はなほ時頼朝臣なれば、例のいと心かしころしたためなほしてければ、聞えしほどの恐ろしきことなどなければ、宮は御子の惟康の親王に將軍を譲りて、文永三年七月八日上らせたまひぬ。御下りの折、六波羅に建てたりし檜皮屋一つあり。そこにぞはじめはわたらせたまふ。いとしめやかにひきかへたる御有様を、年月のならひにさうざうしうもの心細う思されけるにや、

虎とのみもちゐられしは昔にて今は鼠のあなう世の中

院 後廢職にも、あづまの聞えを慎ませたまひて、やがては御對面もなく、いと心苦しく思ひきこえさせたまひけり。經任の大納言いまだ下謁なりしほど、

御使に下されて、何ごとにかと仰せられなどして後ぞ、苦しからぬことになりて、宮宗尊も土御門殿承明門院の御あとへ入らせたまひける。院へも常に御まゐりなどありて、人人もつかうまつり、御遊びなどもしたまふ。雪のいみじう降りたる朝明けに、右近の馬場のかた御覽じにおはして、御心のうちに、

こととなり、親王も承明門院の舊御所の土御門邸へ入御された。

(三〇)右近衛府の馬場で、北野附近にある。

(一)雪の朝早く北野神社に向つて無實の罪に沈淪してゐる。この私もやはりお救ひ下さいと祈る。あとなき、うつもるは雪の縁語。北野は菅公を祭る。菅公が罪によつて筑紫に流されたのを思ふ。

(二)謀反をくはだてようとすする武士たち。

(三)宮が北條氏を傾ける御氣色があるやうに言ひ觸らしたとか。さういふことが評判になつたために、かく冤罪に陥れたらまうたのお嘆き遊ばして、右の歌を詠まれたといふことだ。

(四)盃の獻酬が盛んになつて。

(五)公相の男。

一 なほ頼む北野の雪の朝ぼらけ跡なきことに埋もるる身も

二 世を亂らむなど思ひよりけるものふの、この御子宗尊の御歌勝れて詠ませたまふに、夜晝いと睦まじくつかうまつりけるほどに、おのづから同じ心なるものなど多くなりて、宮宗尊の御氣色あるやうにいひなしけるとかや。さやうのことどものひびきによりかくおはしますを、思し敷きたまふなるにこそ。

日ごろ長雨降りて、少し晴れ間みゆるほど、空の景色しめやかなるに、二條富の小路殿に本院 後蟻・新院 後深草ひとつにわたらせたまふころ、ことごとしからぬほどの御遊びあり。大宮院 媼子・東二條院 公子も御几帳ばかり隔てておはします。御前に太政大臣 公相・常磐井の入道 實氏・左の大臣 實雄・久我大納言 雅忠など、睦まじき限りさぶらひたまひて、御みきまゐる。あまた下り流れて、上下少しうち亂れたまへるに、太政大臣、本院 後蟻の御盃賜はりたまひて、持ちながら、とばかりやすらひて、公相「公相、官位ともに極め侍りぬ。中宮今出川院 媼子おはしますせば、もし皇子降誕もあらば、家門の榮華いよいよ衰ふべからず。實兼もけしうは侍らぬをのこなり。うしろめたくも思ひ侍らぬを、ひとつのうれへ、心の底になむ侍る」と申したまへば、人人「何ごとにか」と

(六)皇后宮の御父君の左大臣實雄公は、太政大臣が御息女の中宮のことをかく仰しやるのを、まだ早いうちからと耳にきつく障つておぼしめすにも、ひよつとしたり、皇位繼承に關して御自分に都合のよい意を持ち出されるのではなからうかと、御胸中が落ち著かない。

(七)本朝文粹、大江朝綱の亡息澄明四十九日の願文に、「悲しきのまた悲しきは、老いて子に後るるよりも悲しきはなし。恨みてもさらに恨めしきは、わかくして親に先だつよりも恨めしきはなし」(原漢文)

(八)太政大臣公相公が御病氣だといふ噂でしたが、それほどのこともあるまいと思つてをりましたところ、思ひがけなくもはかなくおなくなりになりました。文永四年十月十二日薨去。年四十五。
(九)ほんたうに今度といふ今度また御流産であつたらどうしよう。

おぼつかなく思す。左の大^{おとど}臣實雄は、中宮嬪^{ひん}子のことかけたまふを、まだきよりもと耳とまりてうち思すにも、心のうち安げなし。一院後醍醐^ごは、「いかなる愁へにか」とのたまふに、公相「いかにも入道相國實氏に先立ちぬべき心地なむし侍る。恨^せみの至りて恨めしきは、さかりにて親に先だつ恨み、悲しびの切に悲しきは、老いて子に後るる悲しみには過ぎず」などこそ、澄明^{すみあかり}におくれたる願文^{くわんもん}にも書きて侍りしか」などきこえて、うちしほれたまへば、皆いとあはれとおぼさる。入道殿實氏はまいて墨染めの御袖しほるばかりに見えたまふ。さてその後いくほどなく惱^なみたまふよし聞ゆれど、さしもやはとおぼえしに、いとあやなく失^うせたまひぬ。冷泉の太政大臣と申し侍りしことなり。入道殿實氏の御心のうちさこそはおはしけぬ。中宮嬪^{ひん}子も御服^{ぎふく}にてまかでたまひぬ。

皇后宮京極院信子は、日にそへて御覺えめでたくなりたまひぬ。姫宮嬪^{ひん}子・若宮知仁など出でものしたまひしかど、やがて失せさせたまへるを、帝^{みかど}龜山をはじめ奉りて、誰も誰も思し歎きつるに、今年文永四またその御氣色あれば、いかがと思し騒ぎ、山山寺寺に御祈りこちたくののしる。「こた^なびだに、げにまたうちはづしては、いかさまにせん」と、おとど實雄・母北の方樂子も安きいも

(一) 御産が近づかれたとて。

(二) 御胸が晴ればれし。

(三) 新院(後深草)の若宮の熙仁親王も、このかたの御外孫であるけれど、それは皇子の一人もあらせられなかつた東二條院(後深草院后、實氏女公子)の御心中もはばかられ、また大體から言つて、熙仁親王の御生母は同じ實雄公の御女だが、皇后宮ではなく世間にも幅がきかないで、尊貴と申すほどのかたでもないから、本院も大宮院も萬事御眼中におかれないうふ御有様であつたが、今度の若宮を兩院ともに格段にもてはやし、大切に御養育遊ばされた。

寝たまはず、おぼし惑ふことかぎりなし。ほど近くなりたまひぬとて、土御門殿の承明門院の御あとへうつろひたまふ。世の中ひびきて、天下の人、高きもくだれるも、官あるほどのまわりこみてひしめきたつに、殿の内の人人はまして心も心ならずあわただし。おとど限りなき願どもを立て、賀茂の社にも、かの御調度どもの中にすぐれて御寶とおぼさるる御手箱に後の宮京極院信子みづから書かせたまへる願文入れて、神殿にこめられけり。それには「たとひ御末まではなくとも、皇子一人」とかや侍りけるとぞ承はりし、まことにや侍りけん。

かくいふは文永四年十二月一日なり。例の御ものけどもあらはれて、叫びどよむ様いと恐ろし。されども、御祈りのしるしにや、えもいはずめでたき玉のをのこ御子。後宇多生まれたまひぬ。そのほどの儀式、いはすともおしはかるべし。上龜山も、限りなき御志にそへて、いよいよ思すさまに、嬉しときこしめす。おとど實雄も今ぞ御胸あきて心おちわたまひける。新院後深草の若宮伏見院も、この殿實雄の御孫ながら、それは、東二條院公子の御心の中おしはかれ、おほかたもまたうけばりやんごとなきかたにはあらねば、よろづきこしめし消つさまなりつれど、この今宮後宇多をば、本院後醍醐も大宮院嫡子も、際

(四)これも中宮(嬪子)の方には御氣の毒でないことはなかつたが、どうしてさう遠慮ばかりしてゐられようかと、ちやはやなさるので、中宮の御實家の西園寺家の方では、ひとかたならず不愉快におぼしめされ、さういふ噂を面白くなく聞いていらした。

ことにもてはやしかしづき奉らせたまふ。これも中宮嬪子の御ためいとほしからぬにはあらねど、いかでかさのみはあらんと、西園寺さまにぞ、ひとかたならず思し結ばほれ、すさまじう聞きたまひける。

第八 飛鳥川

(一) 卷名は後嵯峨院御製「われのみや影もかはらむ飛鳥川おなじ淵瀬に月はすむとも」による。記事は龜山天皇の文永五年から同十一年御讓位までで、後嵯峨院の五十一年御賀の試樂、御歌合、龜山殿御幸、御入道、月華門院の逝去、後嵯峨院・後深草院の御勝負争、東二條院皇女誕生、後嵯峨院の御不例、崩御、御遺言、大宮院出家、皇后宮の崩御、院方、天皇方の對立、東宮の御不例、内裏炎上、今上御讓位の御心しらひなど。

(二) 光陰矢の如く。漢書・魏豹傳「豹曰はく、人生一世の間は白駒隙を過ぐるが如し」とある。

(三) 御生誕五十日に餅を召される御祝儀。

(四) 閏正月下旬に。(實は一月中旬)

(五) 世間ではその支度に大童だと申すことである。

(六) 御賀當日の舞樂のことを司る役所の開所式。

(七) 當日の舞樂の豫行演習。

(八) 二御衣(同色の袿を二枚重ねる)をお召しになられた。

(九) 京都岡崎にある。

隙ひまゆく駒の足にまかせて、文永も五年になりぬ。正月二十日、本院後嵯峨のおはします富の小路殿にて、今上龜山の若宮後宇多御五十日きこしめす。いみじうきよらをつくさるべし。

今年正月に閏あり。後の二十日餘りのほどに、冷泉殿にて舞御覽あり。明けん年文永六年、一院後嵯峨五十に満たせたまふべければ、御賀あるべしとて、今より世のいそぎにきこゆ。樂所はじめの儀式は内裏龜山にてぞありける。試樂二十三日と聞えしを、雨降りて、あくる日つとめて人人まわり集ふ。新院後深草はかねてよりわたらせたまへり。寢殿の御階の間に、一院後嵯峨の御座まうけたり。その西によりて、新院後深草の御座。東は大宮院嬉子・東二條院公子皆白き御袴に二御衣奉れり。聖護院の法親王覺助・圓満院圓助などまわりたまふ。土御門の中務の宮宗尊もまわりたまふ。上達部・殿上人あまた御供したまへり。仁和寺の御室世助、梶井の法親王最助なども、すべて残りなく集ひ

- (一〇)聖護院にあつた。天文中三井寺に移る。覺助・圓助・宗尊・性助・最助、いづれも後嵯峨院皇子。
- (一一)大原三千院、延暦寺の別所。
- (一二)後嵯峨院皇女、母大宮院。
- (一三)實氏室、大宮院母。
- (一四)御几帳を取り除けて、隔なく御着座なざる。
- (一五)柱と柱との間を一間といふ。
- (一六)女房たちの袖口が、ことに美しく御簾からこぼれてゐる。
- (一七)公經の女、後嵯峨院御乳母。
- (一八)中務宮御母。
- (一九)源雅言。原註は誤り。
- (二〇)公守。原註は誤り。
- (二一)未詳。經輔は註の誤りか。
- (二二)大納言は前中納言の誤りか。
- (二三)經俊。原註は誤り。
- (二四)東西の對から釣殿・泉殿に通ふ廊、その間に各各中門がある。
- (二五)廊下の勾欄のみで、壁がなく、翠簾を垂れて往來する。
- (二六)幅の廣い厚板の橋で、どこへでも移動できる。移し橋の義。

たまふ。月華門院繼子、花山院准后貞子などは、大宮院嫡子のおはします御座に、御几帳おしのけてわたらせたまふ。寢殿の第四の間に、袖口ども心ことに押し出ださる。大納言の二位殿、南の御かたなど、やんごとなき上臈は、院嫡子のおはします御簾の中にひきさがりてさぶらひたまふ。いづれも白き袴に二つぎぬなり。東のすみの一間は、大宮院嫡子・月華院繼子の女房どもまわりつどふ。西の二間に、新准后嫡子さぶらひたまふ。御前の簀子に關白基平をはじめ、右大臣基忠・内大臣家經・兵部卿隆親・二條大納言良敏・源大納言通成・花山院大納言師繼・右大將通雅・權大納言基具・一條中納言公藤・花山院中納言長雅・左衛門督通領・中宮權大夫隆顯・大炊御門中納言信嗣・前源宰相有資・衣笠宰相中將經平・左大辨宰相經俊・新宰相中將具氏・別當公孝・堀川三位中將具守・富小路三位中將公雄、皆御階の東に著きたまふ。西の第二の間より、また、前左大臣實雄・二條大納言經輔・前源大納言雅家・中宮大夫雅忠・藤大納言爲氏・皇子宫大夫定實・四條大納言隆行・帥中納言經任、このほかの上達部、西東の中門の廊、それより下ぎま、透波殿・打橋などまで著き餘れり。みな直衣に色色の衣重ねたまへり。時なりて、舞人どもまゐる。實冬

- (一) 表白、裏赤花または濃紫。
- (二) 紫の濃い色と薄い色とで狩衣の紋様に梅の花を織り出した。
- (三) 紅鬮し、上は濃く、下は薄くにははしてかさねるのをいふ。
- (四) 小袖を三枚かさねて著る。
- (五) 縮の綾。
- (六) 原本傍註に「大臣冬忠のことなるべし」とある。
- (七) 尋常の織物。一本「唐織物」からおりもの。
- (八) ななこの山吹の狩衣。
- (九) 打つて光澤を出した絹。
- (一〇) 幾度も染めて。
- (一一) 三重織物の單。
- (一二) 浮き模様織物。
- (一三) 絲でいろいろの模様を結びつけた狩衣。
- (一四) 金屬を彫つて模様とした。
- (一五) 表萌黄、裏赤花。
- (一六) 表黄裏赤。
- (一七) 青く柳の枝を澤を掛けたやうに織り出した中に。
- (一八) 櫻の模様を染めつけて。
- (一九) びばかし蘇芳色の。

の中將、唐織物の櫻の狩衣、紫の濃き薄きにて梅を織れり。赤地の錦のうはぎ、紅のほひの三衣、同じ單、しじらの薄色の指貫、人よりは少しねびたるしも、あな清げと見えたり。大炊御門中將冬すけといひしにや、裝束さきのかはらず、狩衣はひら織物なり。花山院中將家長右大將の御子魚綾の山吹の狩衣、柳櫻を縫ひ物にしたり。紅の打衣をかがやくばかりだみかへして、萌黄のほひの三衣、紅の三重の單、浮織物の紫の指貫に、櫻を縫ひ物にしたり。めぐらしくうつくしく見ゆ。花山院の少將忠季 諸繼の御子なり 櫻の結び狩衣、白き絲にて水を隙なく結びたる上に、櫻柳をそれも結びてつけたる、なまめかしく艶なり。赤地の錦の表著、金の文をおく。紅の二衣、おなじ單、紫の指貫、これも柳櫻を縫ひ物に、色色の絲にてしたり。中宮權亮少將公重 實藤の大納言の子唐織物の櫻萌黄の狩衣、紅の打衣、紫のほひの三衣、紅のひとへ、指貫は例の紫に櫻を白く縫ひたり。

堀川の少將基俊 基具の大納言の子 唐織物、裏山吹、三重の狩衣、柳襷を青く織れる中に、櫻をいろいろに織れり。萌黄の打衣、櫻をだみつけにして、輪違へを細く金の文にして、色色の玉をつく。にほひ躑躅の三衣、紅の三重の單、

- (二〇)表蘇芳裏赤花。
- (二一)浮紋のある織物。
- (二二)狩衣の袖くくりの糸に玉を飾つたもの。
- (二三)表青裏紫。
- (二四)金箔を置き散らしたものの。
- (二五)舞樂「關陵土」。北齊の關陵王周の師を破つた時、これを作る。沙陀調の舞樂で、多く章舞である。
- (二六)。裾の短い狩衣、少年用。
- (二七)笏を作る木で扇の骨とし、これに全部彫刻を施したものの。
- (二八)大層氣取つてゐて。
- (二九)腰鼓に似て、ばちで両面を打つ。あきなりは顯成。
- (三〇)高麗樂に用ゐる鼓、則頰。
- (三一)左舞は唐樂、右は高麗樂を交互に舞ふ。この時は左は萬歲樂・陵土・輪臺・青海波・太平樂・春鶯囀・賀殿、右は地久・落躑・古鳥蘇・後參・皇仁・散手・林歌。
- (三二)舞ひながら入ること。
- (三三)各各御退散遊ばされた。

これも箔ちらす。二條中將經良良致の大納言の御子なりこれも唐織物の櫻崩黄、紅の衣、おなじ單なり。皇后宮權亮中將實守、これも同じ色色、樺櫻の三衣、紅梅の三重の單、右馬頭隆良隆親の子にや綠苔の赤色の狩衣の、玉のくくりを入れたる、青き魚綾の表著、紅梅の三衣、同じ二重の單、薄色の指貫、少將實繼松がさねの狩衣、紅の打衣、紫の二衣、これも色色の縫ひ物・おきものなどいとこまかに艶かしくなしたり。陵王の童も、四條大納言隆行の子、裝束常のままなれど、紫の綠苔の半尻、金の紋、赤地の錦の狩衣、青き魚綾の袴、笏木の皆彫骨、紅の紙に張りて持ちたる用意氣色、いみじくもてつけて、めでたく見え侍りけり。笛茂道・隆康、笙公顯・宗實、篳篥兼行、太鼓教藤、鞆鼓あきなり、三つの鼓のりより、左萬歲樂、右地久、陵王、輪臺、青海波、太平樂入綾、實冬いみじく舞ひすまされたり。右落躑、左春鶯囀、右古鳥蘇、後參、賀殿の入綾も實冬舞ひたまひしにや。暮れかかるほどにて、何のあやめも見えずなりにき。御方方、宮たちあかれたまひぬ。

同じ二月十七日に、また新院 後深草 富の小路殿にて舞御覽、そのあした大宮院 嬉子まづ忍びてわたらせたまふ。一院 後醍醐の御幸は日たけてなる。冷泉殿

(一)車輿を要しないごく短い距離だから。

(二)けふ出演の扮装のまま。

(三)後嵯峨院は網代庇の御車に召され、御警衛の武官が十二人、美装を凝らして、口口に大聲で先驅申し上げつつ、御車近く供奉してゐるのは。

(四)御袴殊に美しく。

(五)本院妃、性助法親王御母。

(六)女官たちは二重織物の萌黄色のたれぎぬの御几帳を出されて、いろいろの彩色のある豹模様のついた美しい袖口を屏風などなくて直接帷の間からお見せになる。

(七)後嵯峨院皇妹。

(八)今日は花田の表に山吹を裏にしたかさねの狩衣に、二重織の表に萌黄の裏の表衣を着てゐるが、他の舞人たちも思ひ思ひ心にさきとは皆すつかり變つた意匠をこらし、いろいろ美を盡した。

(九)舞樂の初めに、左右の舞人が木杵を持つて舞ふ。その杵を立てるのはいはゆる振武(えんぶ)の杵で開演の合圖。

よりただ這ひわたるほどなれば、樂人・舞人、今日の裝束にて、上達部など皆歩み續く。庇の御車にて、御隨身十二人、花を折り錦をたちかさねて、聲、御さき花やかに追ひののしりて、近くさぶらひつる、になく面白し。新院後深草は御烏帽子直衣、御袴きはにて、中門にて待ちきこえさせたまへるほど、いと艶にめでたし。御車中門によせて、關白殿基平御佩刀取りて、御匣笥殿に傳へたまふ。二重織物の萌黄の御几帳のかたびらを出だされて、色色の平紋の衣ども、ものの具はなくておし出ださる。今日は正親町の院覺子も御堂の隈の間より御覽ぜらる。

大臣・上達部、ありしにかはらず。なほまわり加はる人は多けれど、洩れたるはなし。實冬は、今日は花田・裏山吹の狩衣、二重うら萌黄裏など、思ひ思ひ心ごころに、さきにはみな引きかへてさまざまつくしたり。基俊の少將、このたびは櫻萌黄の五重の狩衣、紅のほひの五衣、打衣は山吹のほひ、浮織物の三重單、紫の綾の指貫、中にすぐれてけうらに見えたまへり。このたびは、多く緑苔の衣を着たり。萬歳樂を吹きて樂人・舞人まゐる。池の汀に杵をたつ。春鶯囀、古鳥蘇、後參、輪臺、青海波、落躑などあり。日ぐらし面白く

(一〇) 新院から本院への贈り物。

(一一) 本院妃、覺助法親王母。

(一二) 父公相の服喪で取り止めた。

(一三) 別に。

(一四) 元寇(文永五年閏正月五日大宰府から蒙古の國書を傳ふ)が起つて、後醍醐院の五十の御賀も行はれなかつた。

(一五) かく皇后宮腹の皇子がお榮えなさるにつけ、御寵愛のうすい中宮の御祖父實氏公は、不愉快におぼしめされる。

(一六) 實氏公はわが子が夭死してゐたのをひたすら悲しんでゐるが、かかる不快な世をよくぞ見なかつたことよと、それをせめてもの慰

のしりて、歸らせたまふほどに、赤地の錦の袋に御琵琶入れて奉らせたまふ。刑部卿の君、御簾のうちより出だす。右大將通雅取りて、院後醍醐の御前にけしきばみたまふ。胡飲酒の舞は、實俊の中將とかねては聞えしを、父大臣公相のことにとどまりにしかば、近衛前關白殿兼平の御子三位の中將兼忠ときこゆる、いまだ童わらわにて舞ひたまふ。別して、この試樂しがくよりさきなりしにや、うち白河殿にて試みありしに、父の殿兼平も御簾のうちにて見たまふ。若君いとうつくしう舞ひたまへば、院後醍醐めでさせたまひて、舞の師忠茂、祿たまはりなどしけり。

かやうに聞ゆるほどに、蒙古の軍といふこと起りて、御賀停まりぬ。人人口惜しく、本意ほんいなしと思ふこと限りなし。何ごともうちさましたるやうにて、御修法やなにやと、公家武家ただこの騒ぎなり。されども、ほどなくしづまりて、いとめでたし。

かくて今上龜山の若宮後宇多、六月二十六日親王宣旨ありて、同じき八月二十五日坊ばうにゐたまひぬ。かく花やかなるにつけても、入道殿實氏は、めざましく思さる。故大臣公相の先だちたまひし嘆きに沈みてのみものしたまへど「か

めとした。

(一) 御喪服の後も、父公相公の忌み明け後も参内しない。

(二) 萬事打つて變りない。

(三) 御出家されること。

(四) 文永五年。

(五) 引出物を。

(六) 常に淵瀬の變るといふ飛鳥川の同じ淵瀬に、月は變らず照り映えてゐるようとも、朕だけは必ず姿を變へるであらう。

(七) まだ出家しないうちから、さすがに名残が惜しまれて、袖に涙が時雨のやりに降つて、袖の色が變つて墨染の衣かと思はれる——ちやうど、この夕方時雨にあつて色を増した峯の紅葉のやりに。
(八) 御出家のことを決心されたと知つて。

(九) この御製を拜誦すると、悲しみが身に迫り、心が千々に碎けて、判詞を書くことができません。

(一〇) 表白、裏蘇芳。

(一一) 表青、裏黄の五衣を八領重ね。

(一二) 隨行の武官たちは今日を最後の晴れとして衣裳の美をつくし、體裁の悪いほどめかしあつた。

かる世の氣色^{けしき}を、かしく見たまはぬよ」と思^{おぼ}し慰む。中宮今出川院孺子は御服^{ごぶく}の後もまわりたまはず。よろづ引き返し、もの怨めしげなる世の中なり。

一院 後嵯峨は御本意^{ごほんい}とげんことをやうやうおぼす。その年の九月十三夜、白河殿にて月御覽するに、上達部・殿上人、例の多くまわりつどふ。御歌合ありしかば、内の女房ども召されて、色色の引物^{ひきもの}、源氏五十四帖の心、さまざまの風流^{ふうりゅう}にして、上達部・殿上人までも、分ち賜はず。院 後嵯峨の御製、

^六 われのみや影もかはらん飛鳥川おなじ淵瀬^{ふちせ}に月はすむとも

^七 かねてより袖もしくれて墨染めの夕いろ^{ゆふいろ}ます峯のみぢ葉

この御歌にてぞ、御本意^{ごほんい}のことおぼしさだめけりと、皆人袖をしぼりて聲も變りけり。あはれにこそ。民部卿入道爲家判ぜさせられけるにも、「身^みをせめ心を碎きて、かきやるかたも侍らず」とかや奏しけり。

かくて神無月の五日、龜山殿へ御幸なる。今日を限りの御旅なれば、心ことにとのへさせたまふ。新院 後深草も例のおはします。大宮 媼子東二條公子ひとつ御車にて、同じくわたらせたまふ。大宮女院は白菊^{しろきく}の御衣^{ごえ}、東二條院は青紅葉の八つ、菊の御小袿^{ごこぎ}奉る。まづ北野・平野の社へ御まわりあれば、御隨身^{ごずいしん}

(三)神馬を獻上された。

(四)御歌の下句らしいが、上句未詳。今日の人人の袂はさぞ涙でぐつしよりになつて、折からの時雨に濡れたやうであらう。

(五)われらの袖をひどく濡らす、この本院御出家のけふをいつであるかと數へてみると、折も折、時雨のふるつら悲しい神無月の五日である。だから、われらの袖がぐつしよりに濡れるのも無理はない。「何時か」と「五日」を懸く。

(六)後世の冥福を祈るため、生前豫めする佛事。

(七)天台宗の教理。

(八)廣く各宗にわたつて、萬事に通曉せられ。

(九)後嵯峨院皇女、母大宮院。

(一〇)限りなく御寵愛遊ばされたのに、大層驚いたことである。

ども、花を折り盡し、今日を限りと、さまあしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬^{一三}あげさせられけり。神もいかに名残多く見たまひけん。空さへうちしぐれて、木の葉誘ふ嵐も折知り顔にも悲しう、涙あらそふ心地したまふ人人多かるべし。中務の皇子宗尊「今日の袂さぞしぐるらん」とのたまひし御返し、中将實冬、

袖^{一五}ぬらす今日をいつかと思ふにもしぐれてつらき神無月かな

やがてその夜御髮^{一六}おろす。御戒の師には青蓮院の法親王尊助まわりたまふ。

そのころやがて御逆修^{一七}はじめさせたまへば、そのほど女院大宮院嫡子、色色の御捧物^{一八}ども奉らせたまふ。今日はいよいよ法の道のみもてなさせたまひつつ、ある時は止觀^{一九}の談義、ある時は眞言の深き沙汰、淨土の宗旨なども尋ねさせたまひつつ、よろづにかよひ、暗からずものしたまへば、何ごとも前の世より賢くおはしましけるほどあらはれて、今行く末もげに頼もしく、めでたき御有様なり。

かくて今年も暮れぬ。またの年文永六年三月の朝日、月華門院縁子俄かにかくれさせたまひぬ。法皇後嵯峨も女院大宮院も限りなく思ひきこえさせつる

(一)それは事實であつたか、又人違ひであつたか知らないが、この方の薨去についていろいろ世間で御噂申し上げるのが。

(二)順徳院御孫、忠成王御子。源姓。正三位右近衛中將となつた。

(三)またお通ひなされたほかに。

(四)えらい不祥さへあつて。御懷妊お血おろしのことをいふ。

(五)うはさをする。

(六)しかしやはりそれほどまでひどいことはなかつたと思はれますが、さて事實どうでしたか知ら。

(七)御父子の御間柄として當然の御ことながら、新院は何かにつけて御心情が美しくやさしくあられて、父法皇のおぼしめし立たれた筋のこととは、必ず御心を同じうして奉仕され、なにごにも厭やだとお思ひになる風は少しもお見せにならないのを。

(八)法華八講八日間の第五日目、法華經第五卷を講ずる日。

(九)砂金。

(一〇)柳の木を三角に削つて簀のやうに編みならべた臺。

に、いとあさまし。さるはまことにやあらん、また人たがへにや、とかく聞ゆる御ことどもぞいと口惜しき。四辻よつの彦仁の中將忍びてまゐりたまひけるを、基顯もとあきの中將かのまねをしてまたまゐり加はりけるほどに、あさましき御ことさへありて、それ故かくれさせたまへるなどささめく人も侍りけり。なほさまではあらじとぞ思ひたまふれど、いかがありけん。

法皇 後醍醐はまた文永七年神無月のころ御手づから書かせたまへる法華經一部供養せさせたまふ。御八講、名高く才さいすぐれて賢き僧どもを召したり。世の中の人残りなくつかうまつる。新院 後深草かねてよりわたりたまへり。さるべき御こととは申しながら、何につけても御心ばへのうるはしくなつかしうおはしまして、院 後醍醐のおぼいたるすぢのことは必ず同じ御心につかうまつり、いささかもいでやとうち思さるるひとふしもなくものしたまふを、法皇 後醍醐もいとうつくしうかたじけなしと思されけり。第二日の夜に入りて行幸龜山もなる。五の巻の日の御捧物おもちどもまゐり集つふ。さまざままねびつくしがたし。内龜山の御捧物は、紙屋紙かみやに黄金かを包みて柳箱やなぎばこに据えて、頭の辨資ひんし宣のたまぞ持ちたる。次に新院 後深草、女院 大宮院たち、宮宮、御かたがた、皆そなたさまの宮司みやづかさ・殿上

- (一) 絲で編んだ沓。
 (二) そのまま。
 (三) 銀を延べ打ちにし。
 (四) 御八講の終りの日。
 (五) 左右に分れ勝負を争ふ遊戯。
 (六) 負けた方が勝つた方に御馳走する、その饗應の御迎へに。
 (七) 五節の舞姫の扮装をして。
 (八) 衣の裾の襖の厚いもの。
 (九) 雑藝の歌詞で、「思ひの津に船のよれかし星のまぎれにおしてまるらうとやれことう」と、五節今様亂舞の時囃して御前に參上する。今はそれを模した。
 (一〇) 金屬性の盆。
 (一一) 時知らぬ山はふじのねいつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん(伊勢物語東下りの段)
 (一二) 麝香の塊でもつて。
 (一三) 名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと(伊勢物語隅田川の段)
 (一四) 仕返しには。
 (一五) 當時流行の囃し詞。

人などもつづきたり。關白基忠・大臣などは座に著きたまふ。大中納言・參議・四位・五位などはみづからの捧物を持ちてわたる。おのおのころころに挑みつくして、さまざまをかしき中に、兵部卿隆親は絲鞋をはきて鳩の杖をつきて出でたり。この杖をやがて捧物にとなりけり。銀にてひたうちにして、さきは黄金にて鳩を握るたりけり。結願の日は舞樂などいみじくおもしろくて過ぎぬ。

またの年文永八年正月に忍びて新院後深草と御かたわかちのことしたまふ。はじめは法皇後醍醐御負けなれば、御勝むかひに、上達部みな五節の眞似をして、色色の衣、厚襪にて、「思ひの津に船のよれかし」と囃してまゐる。新院ひきつくるひてわたりたまふ。御酒いく返りとなくきこしめさる。一つがひづつの御引出物、伊勢物語の心とぞきこえし。かねの地盤に、銀の伏籠に薰物くゆらかして、「山は富士の嶺いつとなく」と、また銀の舟に麝香の臍にて、糞著たる男つくりて、「し言問はん都鳥」など、さまざまいとなまめかしくをかしくせられけり。わざとことごとしきさまにはあらざりけり。ねたみには、新院後深草ぞ仙人のまねをして、「煩惱は頸に乗る、盃は花に載る」とかや囃

(一)おとなになつた人たちは。

(二)輕輦に。輕率に。

(三)このたびの贈り物は本院へ。

(四)源氏物語の巻巻の意を寫されたのであらうか、唐風の箱にむくれんじの數珠を入れ、五葉の松の枝につけて、若紫の巻の北山の聖からの源氏の君への贈物を利かせたのや、梅が枝の巻にある齋院から黒方といふ香を梅の花の半ば散つた枝につけて源氏に贈つたのをまねた引き出物などいろいろあつたが、これも大したことはなさらなかつた。原註禮子は誤り。(五)ここは前後から推すと文永九年にあたるが、東二條院皇女生誕は文永七年であるから、誤りで、月次からいふと、この段は前前段の宸筆御八講の前に入れるべきである。

(六)御懷妊の様子。

(七)後深草院の御所(東二條院は後深草上皇の皇后)で御産を。

(八)薬師七佛を本尊として行ふ安産の祕法。

(九)五大明王を本尊として兵亂の鎮定または息災益増のために修する密教の祕法。

(一〇)普賢菩薩を本尊として延命を

して、法皇 後醍醐の御迎へにまゐる。上達部のおとなびたまへるなどは、少しきやうぎやうにや見えけんとおしはからる。このたびは源氏の物語の心にやありけん、唐めいたる箱に金剛樹の數珠入れて、五葉の枝につけたり。また齋院禮子よりの黒方、梅の散り過ぎたる枝につけなど、これもいとささやかなることどもになむありける。男・女房亂りがはしく強ひ交して、御筆ども召し、拍子うち鳴らしなどして明けぬ。

かやうのことにのみ心やりてあかし暮らさせたまふほどに、またの年の秋になりぬ。東二條院公子日ごろただにもおはしまさざりつるが、その御氣色ありとて世の中騒ぐ。院のうちにてせさせたまへば、いよいよ人まゐり集ふ。大法祕法残りなく行はる。七佛薬師・五壇の御修法・普賢延命・金剛童子・如法愛染など、すべて數知らず。御驗者には常住院僧正良瑜まゐりたまふ。八月二十日宵のことなり。既にかと見えさせたまひつつも、二日三日になりぬれば、ある限りものおぼゆる人もなし。いと苦しげにしたまへば、仁和寺の御室性助の、如法愛染の大阿闍梨にてさぶらひたまふを、御枕上に近く入れ奉らせたまひて、後深草「いと弱う見え侍るは、いかなるべきにか」と、院後深草も添ひ

祈願する修法。

(二)金剛童子を本尊とする安産の修法。

(三)愛染明王を本尊とする息災延命を祈る修法。

(四)すでに御安産かと思えさせられながら。

(五)修法壇上の主僧の阿闍梨。

(六)まさか御異變はあらせられま

すまい。定業をも能くお轉じなさ

るのは、菩薩の御誓願です。今さ

ら佛様に御安語はありますまい。

(七)「一持」秘密呪、牛生而加護、

隨逐不相離、必送華藏界」

(不動經偈文)

(八)御誦經料。お布施の品。

(九)別別に。お誦經の料のお布施

の品品を運び出し、女官がたから

女裝束を仰仰し、御簾の下から

さし出して山と積むと、係りの

者が受け取つて、殿上人、院の北

面の上下の者が各各手傳つて、僧

たちに分けてやつたといふ語脈。

(一〇)中臣の祓を千度讀む。

(一一)東二條院の御手を。

(一二)七佛藥師修法の主僧。

(一三)七佛藥師經の句。

おはしまして、扱ひきこえたまふさまおろかならねば、あはれと見奉りたまひ

て、佳助「さりともしけしうはおはしませじ。定業の亦能轉は菩薩の誓ひなり。

今さら妄語あらじ」とて、御心を致して念じたまふに、驗者の僧正良徳も、

「一持秘密」とて珠數おしもみたるほど、げに頼もしく聞ゆ。御誦經のものど

も運び出で、女房の衣など、こちたきまで押し出だせば、奉行とりて、殿上

人、北面の上下、あかれあかれに分ち遣はす。そこらの上達部は、階の間の

左右に著きて、皇子誕生を待つ氣色なり。陰陽師・巫女立ちこみて、千たびの

御祓へつとむ。御隨身、北面の下藤などは、神馬をぞ引くめる。院後深草拜し

たまひて、廿一社に奉らせたまふ。すべて上下内外ののしりみちたるに、御氣

色ただ弱りに弱らせたまへば、今ひとしほ心惑ひして、さとしぐれわたる袖の

上どもいとゆゆし。院後深草もかきくらし悲しく思されて、御心のうちには石

清水のかたを念じたまひつつ、御手をとらへて泣きたまふに、さぶらふかぎり

の人みなえ心づよからず。いみじき願どもを立てさせたまふしるしにや、七佛

の阿闍梨まゐりて「見者歡喜」とうちあげるるほどに、からうじて生まれたま

まひぬ。何といふこともきこえぬは姫宮なりけりといと口惜しけれど、むげに

(二四)皇子御生誕なら、大聲で披露があるはずなのに。

(二五)全く御命が危いと見えられたのに、御安産なさつたのだから、それをせめてものことに思はれて皇女でもしかたがないと諦められた。

(一)かへつてお氣の毒におぼされて、この皇女を大切にされて。

(二)西園寺方の人人のころをいふ。

(三)一方今上の中宮の御父實雄公の御果報が知られて安堵されるのも不人情の様だが、世の習ひで。

(四)五夜七夜の御祝儀など。

(五)御前藥。醫師は和氣氏。一思しく持ちては不注意に持つての意。

なき人と見えたまへるに、たひらかにおはするを喜びにて、いかがはせんと思し慰む。人人の祿など常のごとし。法皇 後醍醐もなかなか痛はしく、やんごとなきことに思して、いみじくもてはやし奉らせたまふ。いでやと口惜しく思へる人人多かり。かかるにしも實雄の大臣の御宿世あらはれて、片つかたには心おちわたまふも、世のならひなれば、ことわりなるべし。五夜七夜など、ことに花やかなることどもにて過ぎもてゆく。

そのころほより法皇 後醍醐時御惱みあり。世の大事なれば、御修法ども厳めしく始まる。何くれと騒ぎあひたれど、怠らせたまはで年もかへりぬ。

文永九年 正月のはじめも、院の内かいしめりて、いみじくもの思ひ歎きあへり。十七日龜山殿へ御幸なる。これや限りと上下心細し。法皇 後醍醐は御輿なり。兩女院大宮・東二條は、例の一つ御車にたてまつる。尻に御匣殿さぶらひたまふ。道にてまゐるべき御煎じものを、胤成・師成といふ醫師ども御前にてしたためて、銀の水瓶に入れて、隆良の中納言承りて、北面の信友といふに持たせけるを、内野のほどにてまゐらせんとて召したるに、この瓶に露ほどもなし。いとめづらかなるわざなり。さほどの大事のものを悪しく持ちて、うち

(六)新院は大堰川の龜山離宮内の別殿に御移りになつて、絶えず、朝臣・女官、上下を問はず、法皇の御殿に御見舞ひに遣はされて。

(七)その御使が行つて歸つて來る間もなほ待ち切れないほど御不安におぼしめされた。

(八)どうおなりなさるか。

(九)龜山離宮内。

(一〇)三井寺の内。

(一一)龜山殿内。

(一二)南北兩六波羅の探題。

(一三)天皇が次の日一日御いでになつたので、法皇は泣く泣くいろいろのことを御遺言してお置きになつた。

(一四)御遺言の趣きが他と異なる。後深草上皇の御子孫に長講堂領を、龜山天皇の御子孫に皇統を永く傳へらるるの遺記。

(一五)藤原資經の子。

(一六)京都嵯峨に遺趾。

こぼすやうはいかでかあらん。法皇後嵯峨もいとど御臆病をひて心細く思されけり。新院後深草は大堰河のかたにおはしまして、隙なく、男・女房、上下となく、「今のほどいかにいかに」ときこえさせたまふ御使の行き歸るほどをなほいぶせがらせたまふに、正月もたちぬ。いかさまにおはしますべきにかと誰も誰も思し惑ふことかぎりなし。かねてよりかやうのためと思しおきてける壽量院へ、二月七日わたりたまふ。ここへはおぼろげの人はまゐらず。南松院の僧正實伊、淨金剛院の長老覺道上人などのみ、御前にて法の道ならではのたまふこともなし。六波羅北南、御とぶらひにまゐれり。西園寺大納言實兼、例の奏したまふ。

十一日行幸龜山あり。中一日わたらせたまへば、泣く泣く萬づのことを聞えおかせたまふ。新院後深草も御對面あり。帝龜山は御本性いと花やかにかしこく、御才なども昔に恥ぢず、なにごととのほりてめでたくおはします。世を治めさせたまはんこともうしろめたからずおぼせば、きこえたまふすぢことなるべし。十七日のあしたより、御氣色かはるとて、善知識召さる。經海僧正、往生院の聖などまゐりて、ゆゆしきことどもきこえ知らすべし。つひにそ

(一)院の中は暗い氣持ちにとざされて。

(二)龜山離宮内。

(三)三十年ほどの間天下の政治をおとりになつたのに、少の過失もなく、お思ひどほりになつて。

(四)皇位の繼承が御血統以外に分かれないので、なに一つ御心残りがない。

(五)出家もしないで、御大葬のしやらしやらした狩衣を着て、御骨壺を捧持して行かれたのを、案外のことだと見る人が多かつた。

(六)死出の旅路に法皇が自分をお伴ひなさらなかつたことを若い心地にまかせて、一途にやるせなく悲しいと思ひこまれた。

(七)友人の具氏宰相中將が、わが邸の西の對の前の庭の紅梅のごくきれいなのを折つて。

(八)今年の春は諒闇のために春らしくもない世であるのに、この梅の花は、今をいかなる時機だと思

の日の酉きの時に御年五十三にてかくれさせたまひぬ。後嵯峨院とぞ申すめる。

今年は文永九年なり。院のうちくれふたがりて、暗やみに迷ふ心地すべし。十八日

に藥草院に送り奉りたまふ。仁和寺の御室みむろ性助・圓滿院ま圓助・聖護院み覺助・菩

提院み梶井・青蓮院せ慈助、みな御供つかうまつらせたまふ。内裏うち龜山より頭の中將

實冬御使にまゐる。三十年がほど世をしたためさせたまひつるに、少しのあや

まりなく、おほすままにて、新院あたら後深草・帝みかど龜山・春宮はるみや後宇多動きなく、また

ほかさまに分かるべきこともなければ、思おもしおくべき一ふしもなし。なき御跡

まで人の靡なきつかうまつれるさま、來きしかたもためしなきほどなり。

二十三日御初七日に大宮院おほみや嬉子御髮こみげおろす。そのほどこいみじく悲しきこと多

かり。天の下おしなべて黒みわたりぬ。よろづしめやかに、あはれなる世の氣

色に、心あるも心なきも涙もよほさぬはなし。院いん後深草・内龜山の御歎きはさる

ことにて、朝夕むつまじくつかうまつりし人人の思ひ沈みあへるさま、ことわ

りにも過ぎたり。その中に、經任の中納言は人よりことに御覺えありき。年も

若からねば、定めて頭かぶおろしなんとみな人思へるに、ななよらかなる狩衣にて御

骨ほねの御壺もちまゐらせてまゐれるを、思ひの外にもと見る人思へり。權中納言

つて咲き匂うてゐるのでせう。

(九)「をりもをり諒闇の世に咲く梅の花よ、お前に心があるなら、そして今年の春は法皇崩御の悲しい時であることを知つてゐるならば、今年はどうか咲かないでほしい。(頃も)と「衣」をかけてあげよ。——夕方おたづねして、お目にかかつて、萬事申し上げませう」と書いて來たのを、この具氏の中將も、やはり故法皇の御寵愛の人で、公雄中納言を自分と同じ心の友のやうに感じてゐたので、大將中納言に同情して、悲しいことをもお互ひに語り合はうと、終日待つてゐたのに、とうとう見えなかつた。變だなと思つてゐたら、はやその夜剃髮してしまつたのである。

(一〇)世間の人の思はくもめでたく、前途多望できらびやかであるべき御身で。

(一一)言ひ沙汰してゐる。

(一二)經任の中納言とは格段に立派な心柄ではないか。

公雄ときこゆるは、皇后宮信子の御せうとなり。はやうより、故院後睦職いみじくらうたがらせたまひて、夜晝御かたはら去らずさぶらひて明暮つかうまつらせたまひしかば、限りある道にもおくらかしたまへることを、若きほどにやるかたなく悲しと思ひ入りたまへり。西の對の前なる紅梅のいとうつくしきを折りて、具氏宰相中將、かの中納言公雄に消息きこゆ。

梅の花春は春にもあらぬ世をいつと知りてか咲き匂ふらん
返し、公雄

心あらばころもうき世の梅の花をり忘れずば匂はざらまし

「夜さり對面になにごともきこえん」といへるを、この中將具氏も、故院後睦職の御いとほしみの人にて、同じ心なる友におぼえければ、いとあはれにて、悲しきことも語りあはせんと、日ぐらし待ちゐたるに、つひに見えず。あやしと思ふに、はやその夜頭おろしてけり。齡もさかりに、今も皇后宮京極院信子の御兄春宮後宇多の御伯父なれば、世のおぼえ劣るべくもあらず。思ひなしも頼もしく、誇りかなるべき身にて、かく捨てはつるほど、いみじくあはれなれば、みな人、いとほしく悲しきことにいひあつかふめり。經任の中納言には、こよな

き心ばへにや。父大臣^{おとと}實雄も、院後醍醐の御ことを盡きせず嘆きたまふにうち添へて、いみじとおぼす。

公宗中納言もかひなきもの思ひのつもりにや、はかなくなりたまひぬ。またこの中納言公雄さへかくものしたまひぬを、さまざまにつけて心細くおぼすに、いくほどなく皇后宮^三信子さへまた失せたまひぬ。實雄いよいよ臥し沈み待のみおはするほどに、いと弱うなりまさりたまふ。春宮^四後宇多の御代をもえ待ち出づまじきなめりと、あはれに心細う思しつづけて、

はかなくもをふの浦なし君が代にならばと身をも頼みけるかな

歎きにたへず、つひに失せたまひにけり。「もの思ふには、げに命も盡くるわざなりけり。あはれに悲し」といひつつも、とまらぬ月日なれば、故院後醍醐の御日數もほどなう過ぎたまひぬ。

世の中は新院後深草かくておはしませば、法皇後醍醐の御かはりに引き移して、さぞあらんと世の人も思ひきこえけるに、當代龜山の御一つ筋にてあるべきさまの御おきてなりけり。長講堂^{ちやうかうどう}領、また播磨の國、尾張の熱田の社をぞ御處分^{そふん}ありける。いづれの年なりしにか、新院後深草六條殿にわたらせたまひ

(一)無駄なものの思ひをしすぎたせいか。

(二)みまかられてしまった。

(三)かく出家したまうたのを。

(四)東宮の御即位になる時節も。

(五)東宮の御代になつたならばとはかなくもわが身を頼みにしてゐたことよ。——東宮の御即位をも見奉ることができなくて死ぬ自分とは知らないで。「をふの浦梨」は伊勢名産「ならば」の序とした。

(六)「悲しみのためには、なるほど、命もなくなるものである。ほんたうにお氣の毒である」などお噂申し上げてゐる中にも、月日は止らないから、まもなく故法皇の中陰も過ぎた。

(七)天下の政治は、後深草院がかりしていらつしやるから、故法皇に御代りになつて、引き繼いで御覽遊ばすことと世間の人人も想像申し上げてゐたのに、法皇の遺詔は、政務は主上か、またはその御子孫だけがお執りになることであ

つて、新院はこれに干與遊ばされぬことにお決めになつてあつた。

(八)その代り長講堂領、また播磨の國衙領、新田の社領などを御遺産として、熱田に譲られた。長講堂は後白河院六條殿に草創。

(九)六月祇園御靈會の際、神興が皇居近く渡る時は、天皇避けて、他に行幸したまふをいふ。

(一〇)後深草院が主上と御對面の御格式を故法皇にお尋ねなされた時にも、法皇は「新院は自分と同じく上皇であらせられるのだから、朝觀の行幸に準ぜられるがよい」と仰せられた。

(一一)それに新院は主上と御同腹の御兄君であらせられるのだから、いづれにしても、後深草上皇が院政を遊ばすのが當然の世であるのに、主上の御親政とは意外だと思ふ人も、少なくないだらう。

(一二)新院にも若宮がおありになるのだから、その方が皇位を繼承遊ばす一事だけは、必ずあらう。

(一三)露骨なこと。

(一四)後嵯峨法皇お一人崩せられた後は實に情ない状態であつた。

(一五)朝廷の御守刀。

しころ、祇園の神興たがひの行幸ありし時、御對面のやうを故院へたづね申されたりしにも、後嵯峨「われとひとしかるべき御ことなれば、朝觀になぞらへらるべし」と申されけり。ひとつ御腹の御兄にてもおはします、かたがたことわりなるべき世を、思ひのほかにもと思ふ人も多かるべし。「いでや、位におはしますにつきて、さしあたりの御政事などはことわりなり。新院後深草にも若宮伏見おはしませば、行く末の一ふしはなどか」などいひしろふ。かかれは、いつしか院後深草がた内龜山がたと、人の心もひき別かるるやうに、うちつけごとども出で來けり。人ひとりおはしませぬあとはいみじきものにぞありける。朝の御まぼりとて、田村の將軍より傳はりける御佩刀などを、か御氣色のしかおはしませしけるにや、御かくれの後、やがて内裏へ奉らせたまひしかば、それなどをぞ女院嬉子恨めしき御ことには、院後深草も思ひきこえさせたまひける。さてしもやはなれば、このよしをも關の東へぞのたまひつかはしける。内龜山には花山院の太政大臣通雅後院の別當になされて、世の中もみづからしたためさせたまふ。もとよりいと花やかに今めかしき所おはする君にて、よろづかどかどうなむ。

- (二) 後嵯峨院の御内意。
 (三) 御母女院の御處置を恨めしいことと、御孝心の新院さへ。
 (四) このままには棄てて置けないことであるから、御遺詔の趣きを鎌倉へ仰せ遣はされた。
 (五) 後院は讓位後上皇御所と豫定された離宮で、後世は院政の長い時のみ置かれた。別當はその長官、天皇の政務を補佐する。
 (六) 萬事てきばきしてをられた。
 (七) しかし皇后宮の崩御後は。
 (八) 仰仰しく氣詰りで、どうかして遊世の御本懐をもとげたいとまでお思ひ遊ばした。
 (九) 文永十年。
 (一〇) どうなられる御ことかと。
 (一一) 主上も全く東宮の御傍につききりて、御看護遊ばすのに。
 (一二) 御尿器。
 (一三) 大層驚愕あらせられて、「これは黄直ではないか。どうしてこれくらゐのことを知り申さぬか」と仰しやつて、逆鱗遊ばされた。
 (一四) これほど御軍態になつては。
 (一五) 東宮に御灸をすゑ申したといふ前例がないので。

皇后宮京極院信子崩れさせたまひにし後は、盡きせぬ御歎きさまがたうて、所せき御有様もよだけう、いかで本意をもとげてばやなど思されけり。故院後嵯峨の御はても過ぎさせたまへば、世の中色改まりて、花やかに、人人の御嘆きの色も薄らぎ行くしも、あはれるならひなりかし。

その夏、春宮後宇多例にもおはしまさで日ごろふれば、内の上龜山御胸つぶれて、御修法やなにやと騒がせたまふ。和氣丹波の醫師氏成・春成ども夜晝さぶらひて、御藥のこと色色につかうまつれど、ただ同じ様におおはす。いかなるべき御ことにかと、いとあさましようて、上龜山もつとこの御かたにわたらせたまひて見奉らせたまふに、御目のうち、おほかた御身の色などもことの外に黄に見えければ、いとあやしようて、御壺を召し寄せて御覽せらる。紙を浸して見せらるるに、いみじう濃く出でたる黄皮の色なり。いとあさましく、などかばかりのことを知りきこえざらんとて御氣色あしければ、醫師ども、いたうかしこまり、色を失ふ。かばかりになりては御灸なくてはまがまがしきこと出で來べしと、おのおの驚き騒ぐ。未だ例なきことはいかがあるべきと定めかねらる。位にてはただ一たびためしありけり。春宮にては未だざる例なかりけれ

- (九)御在位の方では。(高倉院)
 (一〇)餘儀ないことと決心された。
 (一一)ただでさへ御いたいけ盛りにおはしますに、奈なだと思されるのはほんたうに可愛さうだと思された。
 (一二)東宮大夫。東宮職長官。
 (一三)御乳母たちも、大層お痛はしいことと御案じ申し上げるが、主上はなかなかお聞きにならない。
 (一四)たまらなく。
 (一五)主上が東宮の御手を捉へ。「念じ」は堪へること。

(一六)地震が屢屢あり。

- (一七)北斗七星を本尊として長壽息災を祈禱する法。
 (一八)西の對。
 (一九)また引き返して東宮をお乗せした。
 (二〇)その夜、をりもをり。
 (二一)奏請傳宣を掌る内侍。
 (二二)壁を塗つた室、納戸。寶物類文書ををさむ。

ど、いかがはせんとして思し定む。七つにならせたまへば、さうでだに心苦しき御ほどなるに、まめやかにいみじと思す。醫師と大夫定實の君一人召し入れて、また人もまゐらず。帝龜山の御前にて、五つ所ぞせさせ奉らせたまひける。御乳母どもいと悲しと思ひて、いぶかしうすれど、をさをさゆるさせたまはず。宮後宇多いと熱くむつかしとおぼせど、大夫につと抱かれたまひて、上龜山の御手をとらへ、よろづに慰めきこえさせたまふ御氣色の、あはれにかたじけなさを、をさなき御心に思し知るにや、いとおとなしく念じたまふ。かくて後、ほどなく怠らせたまひぬれば、めでたく御心おちゐたまひぬ。

おほかた今年は地震しげくふり、世の中騒しきやうなれば、慎しみおぼされ、十月十五日より、圓滿院の二品親王圓助、内裏萬里小路殿にさぶらひたまひて、尊星王の御修法勤めたまふに、二十日の宵、二の對より火いできたり。あさましともいはんかたし。上下立ち騒ぎののしるさま思ひやるべし。大宮院姫子も内裏におはしましたしけるころにて、急ぎ出でさせたまふ。御車の棟木にもすでに火燃えつきけるを、またさしよせて春宮後宇多奉りけり。その夜しも勾當の内侍里へ出でたりければ、御塗籠の鍵をさへ求め失ひて、いみじき大事な

- (一) 激しくお蹴りになると。
(二) 故法皇御遺産分配の文書などの入つてゐる御小唐櫃。
(三) かし、それでも餘りあわて、御勘文(陰陽寮から吉凶を勘へて奉る文書)、御産衣などの入つてゐたのは焼失した。
(四) 愚僧の修法の力が強いためにかういふことが出来たのだ。
(五) 御移御。
(六) 長和四年十一月十七日新造内裏焼失。
(七) 今度の火事以上に大變な事件も起れば起りうるものだし、御移御の當夜でないのをせめてのことにして諦めねばならない。「かはりたらんは」御移御の當夜でなく、別の夜であるのは。
(八) 一層世の中を面倒におぼしめされて、御讓位なさらうとの御用意を遊ばされるやうである。
(九) まだ三十にもよほど間のある御齡であるから、今が盛りで、若く、お綺麗なお年ごろである。

りけるを、上龜山きこしめして、荒らかに踏ませたまひたりければ、さばかり強き戸の、まろびてあきたりけるぞ恐ろしき。さなくば、いとゆゆしきことどもぞあるべかりける。故院後醍醐の御處分そとの入りたる御小唐櫃こからが、なにくれの御寶たからことゆゑなく取り出だされぬ。それだにも、餘り騒ぎて、御勘文かんぶん、御産衣うぶぎなどの入りたるものは焼けにけり。上龜山は腰輿ようよにて押小路殿おしじりへ行幸なりぬ。法親王圓助は、「修法しゆほの強き故にかかるとはあるなり」とぞのたまはせける。この四月うつきに御わたましありつるに、いくほどなくかかるはげにいみじきわざなれど、昔も三條院位の御時かとよ、大内裏造り建てられて、御わたましの夜こそやがて火出で来て焼けにしこともあれば、これより重き大事もあるべかりけるに、かはりたらんは、いかがはせむ。

かくて今年文永十年も暮れぬ。上龜山はいよいよ世の中慌ただしう思されて、おりぬなんの御心づかひすめり。位におはしましては、十五年ばかりにやなりぬらん。未だ三十みそちにも、遙かに足らぬほどの御齡よばひなれば、今ぞさかりに、若うきよらなる御ほどなめる。

(一)卷名は龜山院御製「夢とだにさだかにもなきかりぶしの草の枕に露ぞこぼるる」による。文永十一年から建治二年まで。後宇多天皇の即位、後深草院の皇子熙仁親王立坊の經緯、後嵯峨院皇女愷子内親王の齋宮退下から薨去までの悲戀の生涯を描く。皇位繼承に關する幕府の干渉、及び最明寺入道の廻國談は歴史的な興味がある。

(二)押小路南、室町東、二條殿。

(三)高倉殿。二條南、東洞院東。

(四)三種神器を新帝に渡された。

(五)新帝から殿上人の裝束に禁色(上古は深紅深紫を禁色)としたが、中古からは織物の裝束のこと)を用ゐるを許す旨御沙汰があつた。

(六)裾を長くした直衣で、天皇・上皇の御常服。

(七)うつて艶を出した絹の下著。

(八)板引にして絹の袴。

(九)介添へ申し上げるのを。

(一〇)御存生でいらしたならばどんなに御悦びになるだらうと。

(一一)殿上の間。清凉殿の南側にあつて、大臣以下殿上人の候するところ。

(一二)公卿ら庭上に降りて、新帝よ

第九草 枕

文永十一年正月二十六日、東宮後宇多に位ゆづり申させたまふ。二十五日夜、まづ龜山内侍所・劍璽ひき具して、押小路殿へ行幸なりて、またの日、ことさらに二條内裏へわたされけり。九條の攝政殿 忠家まゐりたまひて、藏人召して、禁色おほせらる。上後宇多は八つにならせたまへば、いとちいさくうつくしげにて、びんづら結ひて、御引直衣・打御衣・はり袴奉れる御氣色、おとなおとなしうめでたくおはするを、花山院内大臣 輔繼扶持し申さるるを、故皇后宮京極院信子の御せうと公守の君などは、あはれに見給ひつつ、故おとど實雄・宮信子などのおはせましかばと思し出づ。殿上に人人多くまゐり集まりたまひて、御膳まゐる。その後上達部の拜あり。女房は朝餉より末まで、内大臣公親の女をはじめにて、三十餘人なみゐたり。いづれとなくとりどりにきよげなり。二十八日よりぞ内侍所の御拜はじめられける。

かくて新院龜山二月七日御幸はじめさせたまふ。大宮院婚子のおはします

り昇殿をゆるされた御禮の拜舞がある。

(三)清涼殿の西庇、臺盤所の北にある天皇朝食の御間。末は廊下。

(四)御讓位後の始めての御幸。

(一)檳榔唐庇の車、上皇・皇后・親王・攝關ら貴顯の乗用車。

(三)束帯に用ゐる表衣。禮裝。

(四)菊の紋のついた網代車。

(五)狩衣、略裝。

(六)御母代安嘉門院。

(七)立板に入葉の紋をつけた牛車。

(八)法華長講彌陀三昧堂。

(九)法華懺法とて、故後嵯峨院の御減罪のため懺悔の文を讀ませられる。

(二〇)御遺詔の意外な辛い仕打ち。

(二一)然るべき前世の約束であらうと。

(二二)追善供養。

(二三)太政官廳。

(二四)大嘗會御禊の時、女御代理を勤仕する女官。

(二五)五色絲で飾つた車。

中御門京極實俊の中將の家へなる。御直衣、から庇の御車、上達部・殿上人残りなく、袍たへのきぬにてつかうまつる。同じ十日、やがて菊の網代庇の御車奉りはじむ。このたびは御烏帽子直衣同じ、院へまゐりたまふ。同二十日、布衣の御幸はじめ、北白河殿へ入らせたまふ。八葉の御車、萌黄の御狩衣、山吹の二御車紅の御單、薄色の織物の御指貫たてまつる。

本院後深草は、故院後嵯峨の御第三年のことおぼし入りて、正月の末つかたより、六條殿の長講堂にてあはれに尊く行はせたまふ。御指の血を出だして、御手づから法華經など書かせたまふ。僧衆も十餘人がほど召しおきて、懺法など讀ませらる。御掟おとての思はずなりしつらさをも思し知らぬにはあらねど、それ二もさるべきにこそはあらめと、いよいよ御心を致して、懇ろに孝じ申させたまふさま、いとあはれなり。

新院龜山も嚴めしう御佛事嵯峨殿にて行はる。三月二十六日は後宇多御即位めでたくて過ぎもてゆく。十月二十二日御禊なり。十九日官の廳へ行幸あり。女御代花山院たはさんいん御繼より出ださる。絲毛いとぎの車、寢殿の階の間に左大臣殿師思大納言長雅ながよよせらる。皆紅の十五の衣、同じ單、車の尻より出ださる。十一月十

(二六)蒙古軍對馬・壹岐侵入。
(二七)大嘗會の時、主上が沐浴し裝束を改められる處。

(二八)豐明節會(群臣への饗宴)

(二九)豐樂院の裏にあつて、大嘗祭後御神樂を行ふ處。

(三〇)本院は御自分だけが同じ上皇でありながら院政ができないでまつたといふ大層案外であつた御果報について、世間の人人のおもはくも不快で、御心がふさぎ、御遺世の下心で、太上天皇の尊號をも拜辭せられ。

(三一)御隨身をもやめようとして。

(三二)御心弱くなつて御涙がち。

(三三)あのやうに大層。

(三四)後深草院妃、伏見院御母。

(三五)御一緒に出家しようと、御用意なさる。

(三六)その他の。

(三七)個人的にも。

九日また官の廳へ行幸。二十日より五節はじまるべくきこえしを、蒙古起るとて停まりぬ。二十二日大嘗會、廻立殿の行幸、節會ばかり行はれて、清暑堂の御神樂もなし。

新院龜山は世をしろしめすことかはらねば、よろづ御心のままに、日ごろゆかしく思しめされし所、いつしか御幸しげう、花やかにて過ぎたまふ。いとあらまほしげなり。本院後深草はなほいとあやしかりける御身の宿世を、人の思ふらんこともすさまじう思し結ばれて、世を背かんのまうけにて、尊號をも返し奉らせ給へば、兵仗をもとどめんとて、御隨身ども召して、祿かづけ、暇たまはするほど、いと心細しと思ひあへり。おほかたの有様うち思ひめぐらすも、いと忍びがたきこと多くて、内外、人人、袖どもうるほひわたる。

院後深草もいとあはれなる御氣色にて、心強からず。今年三十三にぞおはします。故院後醍醐の四十九にて御ぐしおろしたまひしをだに、さこそは誰も誰も惜しみきこえしか。東の御方情子も後れきこえじと、御心遣ひしたまふ。さらぬ女房・上達部の中にも、とりわきむつまじうつかうまつる人、三四人ばかり、御供つかまつるべき用意すめれば、ほどほどにつけて、わたくしもの心

(一) 朝廷の陣の座での公卿僉議。

(二) 當時は前の時頼朝臣の子の時宗といふのが相模守で、執權として天下の政をとつてゐた。
 (三) 探り、直接見たり、聞いたたりしようといふ企てであつた。
 (四) 道理ある訴訟などの不當に停滞してゐるのを、よく聞いてやつて。

(五) 愚僧はしがない僧だが、昔は幕府で相當なかたを御主人としてお仕へしてゐた。まだそのかたが御生存かと思ふから、御手紙をさし上げよう。これを持參して、事情を申し上げなさい。

(六) 相手は「大したこともない乞食坊主の言葉がどれほどの効果があらう」と疑ひながらも、家の者と相談し。

(七) これは畏くも入道殿の御書である。ひかへ居れ。

(八) 諸國の役人たちも。

(九) 非常な器量人だ。

(一〇) 故法皇の御遺言はなにか仔細

ぼそう、思ひ數く家あるべし。かかることも、あづまにも驚ききこえて、例の陣の定めなどやうに、これかれあまた、武士どももの寄り合ひ寄り合ひ評定しけり。

このころは、ありし時頼朝臣の子時宗といふぞ相模守、世の中はからふな主なりける。故時頼朝臣は、康元元年に頭おろしてのち、忍びて諸國を修行しありきけり。それも、國國の有様、人の愁へなどくはしくなぐり見聞かんの謀はかりごとにありける。あやしのやどりに立ち寄りては、その家ぬしが有様を問ひ聞き、^四ことわりある愁へなどの埋もれたるを聞きひらきては、時頼「われはあやしき身なれど、昔よろしき主ちを持ち奉りし、未だ世にやおはすると、消息うそご奉らん。もてまうでてきこえたまへ」などといへば、「な六でふことなき修業者の、なにかかりかは」と思ひながら、言ひあはせて、その文を持ちて東へあづま行きて、しかじかと教へしままにひて見れば、入道殿時頼の御消息なりけり。「あ七なま、あなま」とて永く愁へなきやうにはからひつ。佛神などのあらはれたまへるかとして、みな額ぬかをつきて悦びけり。かやうのこと、すべて數知らずありしほどに、國國も心づかひをのみしけり。最明寺の入道とぞいひける。

があらうけれど、本院もおほぜいの皇子たちの御兄上で、これといふ御失錯もお有りにならないであらう。それがどうして急にすつかり皇位と關係を絶たれてよからうか。大層よくないことだ。

(二)後深草院妃懐子腹の皇子。

(三)立太子の御儀。

(四)これが當然さと、露骨に世人も思ひいふであらう。

(五)一條天皇七歳の御時、東宮十一歳。

(六)後一條天皇九歳の御時、東宮二十三歳。

(七)六條天皇三歳の御時、東宮六歳。

(八)天智・天武兩帝とも舒明天皇の皇子で、御母皇極天皇。

(九)天智・天武兩帝とも舒明天皇の皇子で、御母皇極天皇。

(十)天智・天武兩帝とも舒明天皇の皇子で、御母皇極天皇。



(一)後深草院と龜山院との御兩統で皇位をも御繼承あそばすやうにとお計らひ申した。

(二)大體外觀では。

その子なればにや、今の時宗朝臣もいとめでたきものにて、時宗「本院後深草のかく世を思し捨てんずる、いと辱けなくあはれるなる御ことなり。故院後醍醐の御掟てはやうこそあらめなれど、そこらの御このかみにて、させる御あやまりもおはしまさざらん、いかでかは忽ちに名残なくはものしたまふべき。いとたいだいしきわざなり」とて、新院龜山へも奏し、かなたこなたなだめ申して、東の御方懐子の若宮伏見院を坊に立てまつりぬ。十月五日節會行はれて、いとめでたし。かかれば、少し御心慰めて、この際は、しひて背かせたまふべき御道心にもあらねば、思しとまりぬ。これぞあるべきこととあいなう世の人も思ひいふべし。帝後宇多よりは今二つばかりの御兄なり。まうけの君御年まさされるためし、遠き昔はさておきぬ、近ごろは三條院・小一條院・高倉院などやおはしましたけん。高倉院の御末ぞ今もかく榮えさせおはしませば、かしてきためしなめり。いにしへの天智天皇と天武天皇とは同じ御腹の御はらからなり。その御末しばしばうちかはりうちかはり世をしろしめしたためしなどをも思ひや出でけん、御二流にて位にもおはしませさんと思ひ申しけり。新院龜山は御心ゆくとしもなくやありけめど、おほかたの人めには、御中いとよくなり

(一) 世子内親王。後嵯峨天皇皇女、御母大炊助藤原俊盛女二位局。文永元年九月齋宮として伊勢下向。

(二) 御服忌で、辭任されたが。

(三) 仁和寺に近い衣笠(山城國葛野郡)

(四) 後嵯峨院第一皇女、御母大宮院。月華門院の御次ぎには大層大切におぼしめしてゐた故法皇の御遺志をしみじみ想ひ起されて。

(五) 大宮院は齋宮の准母。

(六) 大宮院は龜山離宮にお住まひなので、十月ころに前齋宮をもお招き申さうと思ひ立たれて、先づ後深草院にもお出であるやう御案内あると、久久にて御幸があつた。

(七) 女房に御佩刀を持たせて。

(八) 香(黄を帯びた淡紅色)を薄くほかしたのみ。

(九) 表紅梅、裏薄紅梅の重桂。

(一〇) 薄紫の打掛。

(一一) 花に響へると、體の中にはの

て、御消息も常にかよひ、上達部などもかなたこなたまゐりつかうまつれば、大宮院嬉子もめやすくおぼさるべし。

まことや、文永のはじめつかた下りたまひし齋宮體子は、後嵯峨院の更衣腹の宮ぞかし。院後嵯峨崩れさせたまひて後、御服にておりたまへれど、なほ御暇ゆりざりければ、三年まで伊勢におはしまししが、この秋の末つかた建保元年御上りにて、仁和寺に衣笠といふ所に棲みたまふ。月華門院縁子の御次にはいとたうとく思ひきこえたまへりし昔の御ころおきてをあはれに思し出でて、大宮院嬉子いとねんごろにとぶらひ奉りたまふ。龜山殿におはします。十月ばかり、齋宮體子をもわたし奉りたまはんとて、本院後深草にも入らせたまふべきよし御消息あれば、めづらしくて、御幸後深草あり。その夜は、女院大宮院の御前にてむかし今の御物語などのどやかにきこえたまふ。またの日夕つけて、衣笠殿體子へ御迎へに、忍びたるさまにて殿上人二人御車二つばかり奉らせたまふ。寢殿の南おもてに御褥ども引きつくりひて、御對面あり。とばかりして、院後深草の御方へ御消息きこえたまへれば、やがてわたりたまふ。女房御佩刀持たせて御簾のうちに入りたまふ。女院大宮院は、香のうすにはひの

見える榊櫻の美しささへもこれには劣るだらうと思はれるほど。

(二) 秋草。枯野は表黄、裏青。

(三) 薄紫色。

(四) 床しき御色合の服装を遊ばされ、それに香をよくたきしめて。

(五) 齋宮の御側に身分の高いらしい女官をられたが、そのひとは紫ばかりの五つ衣に、裳だけを引き掛けて、お迎への車で來られたのである。

(六) 上皇は幼ないころのお話などをほどよく遊ばされてから。(齋宮時代の話ではない)

(七) 齋宮は御返事も恥かしげにはあるが、おほつかなくはない程度でかすかに仰つしやる御様子。

(八) 先刻の齋宮の面影。

(九) わざわざ懸想文をさし上げられるのも、外聞がよくあるまいし、どうしようも煩悶される。

(一〇) 御兄妹とはいふけれども、長年月離れて成長なされたから、疎遠であつた癖がついていらつしやるままに、御遠慮の念も薄くなられたのであらうか、やはり一途に、思ひをとげないでおくのはどうしても残念だと思ひこまれる。

御衣ころも、香染かうぞめめなどたてまつれば、齋宮さいくう檀子たんし紅梅かうばいのほひに蒲萄ぶどう染めせんめの御小袿ころもせきなり。御髪みかみいとめでたく、さかりにて、二十に一二やあまりたまふらんと見ゆ。

花はなといはば霞がすの間まのかば櫻おうもなほ匂におひ劣せりぬべく、言ことひ知らずあてにうつくしう、あたりも薫かほる御みさまして、珍めづらかに見えさせたまふ。院いん後深草ごふかはわれもかう亂みだれ織をりたる枯野かれのの御狩衣みかりぎ、薄色うすいろの御衣みぎ、紫苑色しそんいろの御指貫みさしほ、なつかしきほどなるをいたくたきしめて、えならず薫かほりみちて、わたりたまへり。上臈じやうだつ女房にようぼう、紫むらさのほひ五つに、裳もばかり引き掛けて、宮檀子みやたんしの御車みぐるまにまゐりたまへり。神代かみよの御物語みものがたりなどよきほどにて、故院こいん後ご曉あけ殿どののいまはのころの御ことなど、あはれに懐なつかしきこえたまへば、御みいらへも、慎しんましげなるものから、いぶせからぬほどにほのかにものうちのたまへる御様みさまなども、いとらうたげなり。をかきさまなる御酒みさけ・御果物みくも・強飯こゑいひなどにて今宵こんよひははてぬ。

院いん後深草ごふかも、わが御かたにかへりてうち臥ふませたまへれど、まどろまれたまはず。ありつる御面影みおもかげ心こころにかかりておほえたまふぞいとわりなき。「さしはへてきこえんも人ひとぎきよろしかるまじ。いかがはせん」と思おもひ亂みだる。御みはらからといへど、年月としげよそにて生なひ立ちたまへれば、うとうとしくならひたまへるま

(一)「埒を越えてまでとは考へてゐないが、たゞも少しおそば近くで、私のお慕ひ申す心の片端を申し上げたい。今夜のやうな絶好の機會もめつたに無いだらう。うまく取り計らつて呉れ」と、しきりに眞面目ぶつて仰しやるので。

(二)齋宮はひどい仕打ちであるとおぼしめされたが、御心弱く死ななばかりにあつてまどふといふこともなさらず、あどけなく、されるままにしていらして。

(三)さすがに宮の御名が立つてはと氣の毒に思はれたから。

(四)まだ暗いうちに。

(五)表面はただ普通のお見舞の文句のやうにして、「昨夜はお馴れにならないこの離宮でよくおやすみになれましたか」などといつた風な、ちやんとした御挨拶に見せて、中に小さく。

(六)「夢ほどさへはつきりともしなかつた昨夜の假寢の床のはかなさを想ふにも、残念で涙がこぼれます。——大層そつけない御様子のお恨み申し上げやうなさに」と書いてあつたやうだ。

に、慎ましき御思ひも薄くやありけん、なほひたぶるにいぶせてやみなんはあかず口惜しと思す。けしからぬ御本性なりや。なにがしの大納言の女、御身近く召し使ふ人、かの齋宮愷子にも、さるべきゆかりありて、むつまじくまゐり馴るるを召し寄せて、後深草「馴れ馴れしきまでは思ひよらず。ただ少しけ近きほどにて、思ふ心のかたはしをきこえん。かく折よきこともいと難かるべし」と、切にまめだちてのたまへば、いかがたばかりけん、夢現ともなく近づききこえたまへれば、いと心憂しと思せど、あえかに消えまどひなどはしたまはず。らうたくなよなよとして、あはれなる御けはひなり。鳥もしばしば驚かすに、心あわただしろ、さすがに人の御名のいとほしければ、夜深くまぎれ出でたまひぬ。日たくるほどに、大殿籠り起きて、御文たてまつりたまふ。うはべは、ただおほかたなるやうにて、後深草「ならばぬ御旅寝もいかに」などやうにすくよかに見せて、中にちひさく、

「夢とだにさだかにもなきかりぶしの草の枕に露ぞこぼるる

いとつれなき御氣色のきこえんかたなさに」とぞあめる。愷子「なやまし」とて、御覽じも入れず。しひてきこえんもうたてあれば、なだらかにもてかく

(七)お傍の人人は、無理に御返事をおすめするのにもよくないと思つたから、穩やかに取りつこうとて、「早くお癒り遊ばせ」など氣をつけ申し上げた。

(八)さて上皇・女院・前齋宮などの御かたがたが御會食遊ばされるため、晝ころまた御對面があつた。

(九)御辭退申し上げやうもない。

(一〇)御馳走で。

(一一)繪で作つた仕切辨當。

(一二)上皇は女院に、「これでは餘り殺風景ですから、失禮ですが、亡父後嵯峨院の御在世當時と同様に隔てなくおほしめされて、御盃を賜はるわけには行かないでせうか」と御機嫌をお伺ひ遊ばすと、女院の御盃を齋宮に賜はつた。

(一三)次の間に。

(一四)御盃が幾度も巡つて、皆大分よい機嫌になつて亂れがちだ。

(一五)打ち解けて一曲お聞かせ下さいなど、酔つておつしやると。

(一六)女院は女官を召して。

して、「おこたらせたまへ」などきこえしらすべし。

さて御かたがた、御臺^{みだい}などまゐりて、晝つかたまた御對面どもあり。宮豐子はいと恥かしうわりなくおぼされて、いかで見え奉らんとすらんと思しやすらへど、女院大宮院などの御氣色のいとなつかしきに、聞えかへさひたまふべきやうもなければ、ただおほどかにておはす。今日は院後深草の御けいめいにて、善勝寺大納言隆顯、ひわりごやうのもの、いろいろに、いときよらに調^{しら}じてまゐらせたり。三めぐりばかりはおのおの別^{べつ}にまゐる。その後、後深草「あまりあいなう侍れば、かたじけなけれど、昔さまにおぼしなすらへ、ゆるさせたまひてんや」と御氣色とりたまへば、女院大宮院の御かはらけを齋宮豐子まゐる。その後、院後深草きこしめす。御几帳ばかりを隔てて、長押^{ながし}の下へ、西園寺大納言實兼・善勝寺大納言隆顯召さる。簀子^{すい}に長輔・爲方・兼行・資行などさぶらふ。あまたたび流れくだりて、人人そほれがちなり。後深草「故院後嵯峨の御ことのはは、かやうのこともかき絶えて侍りつるに、今宵^{こよ}はめづらしくなむ。心とけてあそばせたまへ」など、うちみだれきこえたまへば、女房^{によう}召して、御筆^{ごひつ}ども掻き合はせらる。院後深草の御前に御琵琶、西園寺實兼も弾きたまふ。兼行

(一)大袈裟な御催しでないのも、かへつてしんみりして面白い。

(二)この御盃は大層處置に困つてをられるやうですが、こゆるぎの磯ではないにかよいお肴がありさうなものですね。(こゆるぎの磯は風俗歌に「玉だれの小瓶の中に据ゑて、主人はもや、肴まぎに肴とりに、小ゆるぎの磯のわかめ刈り上げに」とあるによる。)

(三)今様歌、「賣炭翁はあはれなり。おのれが衣は薄けれど、薪を取りて冬を待つこそ悲しけれ」

(四)宮がお酒を召し上つてから。

(五)「天子には父母がないといふ世の諺があります、院が十善の天子の御位につかせられたのも、賤しい私が宮仕へして、院をお産み申し上げたからです。それで院は今私の言葉をよく聞いてくれて、今も今様を歌はれたでせう。だから、あなたも御禮になにか一節うたつてお聞かせになりませんか」とおつしやると、「それは勿論のことだ」と、互に眼を見合はせるが、こそつとつきあつて微笑する。(六)平家物語、佛御前のうたつた今様。この前句「君をはじめて見

筆^{ひら}筆^り、神樂^{かぐら}うたひなどして、ことごとしからぬしも面白し。こたみはまづ齋宮愷子の御前に院後深草みづから御銚子^{てうし}をとりてきこえたまふに、宮いと苦しうおぼされて、とみにもえ動きたまはねば、女院大宮院「この御かはらけのいと心もとなく見え侍るめるに、こゆるぎの磯ならぬ御肴^{さかな}やあるべからん」とのたまへば、後深草「賣炭^{うりたん}の翁はあはれなり、おのが衣^{ころも}は薄けれど」といふ今様^{いまさ}をうたはせたまふ。御聲いとおもしろし。宮^{みや}豐子きこしめして後、女院大宮院御盃をとりたまふとて「天子には父母なしと申すなれど、十善の床^{ゆか}をふみたまふもいやしき身の宮仕へなりき。一言報^{ひとこと}いたまふべうや」とのたまへば「さらなる御ことなりや」と人人目をくはせつつ、忍びてつきじろふ。豐子「御前^{みやまへ}の池なる龜岡^{かめがき}に鶴こそむれぬて遊ぶなれ」とうたひたまふ。その後、院後深草きこしめす。善勝寺隆顯「せれうの里」を出だす。人人聲加へなどして、らうがはしきほどになりぬ。かくていたうふけぬれば、女院大宮院もわが御かたに入らせたまひぬ。そのままのおましなから、かりそめなるやうにてより臥したまへば、人人もすこし退きて、苦しかりつる名残りにほどなく寝入りぬ。

明日^{あす}は宮^{みや}豐子も御歸りときこゆれば、今宵ばかりの草枕、なほ結ばまほしき

る時は、千代も經ぬべし姫小松一
後深草院はおのが胸中に情火の燃
えるのを賣炭翁に喩へ、宮は院に
あひまゐらせたとのをせめてよきに
とりなして、かく謠はれた。

(七)今様の句ならむも未詳。芹生
(せうれ)は山城國愛宕郡。

(八)上皇はお座のままで、おうた
た寢のやうにして。

(九)小柄でいらつしやる院が、お
召物などもさういふお心構へで柔
かいのをめしてゐて、他の物言に
まぎらしながらお脱ぎになるなど
そつとふるまはれるから。

(一〇)ただひどく無邪氣にすなほな
御様子で、うつとりとしていらつ
しやるのを、まだ御契を結ばれな
かつた以前の御熱情ほどではない
が、たまらなくかはゆいといは
かただと思ひ申し上げられた。
(一一)齋宮の御歸邸後も、上皇は宮
の御心をお動かしするやうなお手
紙を折折はさし上げられたけれど
わがざなお訪ね遊ばすことは御身
分がらなかなかりできないので、大
層御疎遠にばかりなれる。
(一二)理性も戀には負けるといふ諺
ほどには戀はれなかつたのであら

御心のしづめがたくて、いとささやかに
おはする人の、御衣などもさる心し
て、なよらかなるを、まぎらはし
すぐしつ、忍びやかにふるまひ
たまへば、驚く人もなし。なにや
かやとなつかしう語らひきこ
えたまふに、靡くとはなけれ
ども、ただいみじうおほどかに、
やはらかなる御さまして、おほ
しほれたる御氣色を、よそなり
つるほどの御心まどひまではな
けれど、らうたくいとほしと

思ひきこえたまひけり。長き夜
なれどふけにしかばにや、ほど
なう明けぬる夢の名残はいとあ
かぬ心地しながら、きぬぎぬに
なりたまふほど、女官監子も心苦
しげにぞ見えたまひける。その
後もをりをりはきこえうごかし
たまへど、さしはへてあるべき
御ことならねば、いと間遠まはに
のみなむ。「まくるならひ」ま
ではあらずやおはしましけん、
あさましとのみつきせず思し
わたるに、西園寺大納言實兼忍
びてまゐりたまひけるを、人柄
もきはめて、いとねんごろに思
ひきこえたまへれば、御母代ははの
人なども、いかがはせんにて、
やうやう頼みかはしたまへば、
ある夕つかた、「内裏うちよりま
かでんついでに、また必ずまゐ
り來ん」とたのめきこえたまへ
りければ、その心して誰も待ち
たまふほどに、二條の師忠のお
とど、いと忍びてありきたま
ふ道に、かの大納言實兼實兼扈從こなどあま

うか、齋宮は一途に心外なことだと、絶えず惱み續けてゐられたところ。(まくるなひて——伊勢物語「思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ」)

(二)性格も至極まじめで、求婚したから、齋宮の御後見の人などもしがたがるまいといふことでも

(三)約束申上げられたから。

(四)威風堂堂として来るのに出會はれたから、面倒だと思つて。

(五)大した御挨拶にも及ぶまいと思召して、「暫らくこのお邸に身を忍ばせて、あの大納言の車をやり過してから出かけよう」と。

(六)いつもは御内密の事であるから、門の中へ引き入れて、對の屋の端からお降りなされるのに。

(七)なんの見分けもつかず、お通しすると、師忠公は。

(八)ちよつと御挨拶して。

(九)なにかとその場に相應するやうに、宮に日ごろから御懸想されてゐたやうにうまくおつしやつたので、宮は大層意外なことに、なみなみならぬ御惱みが加はられたのであつた。

たして、いときらきらしげにて行きあひたまへれば、むつかしと思して、この齋宮の御門かんかどあきたりけるに、女宮に豊子の御もとなれば、ことごとしかるべきこともなしと思して、暫しかの大將實兼の車やりすぐしてんに出でんよとおぼして、門かどの下したにやりよせて、おとど師忠しちゆう烏帽子直衣かぶしなましのなよらかなるにて降りたまひぬ。内には、大納言實兼のまわりたまへるとおぼして、例は忍びたることなれば、門かどのうちへ車を曳き入れて、對のつまより降りてまわりたまふに、門より降りたまふを、あやしうとは思ひながら、たそがれ時のたどしきほど四にのあやめも見えわかで、妻戸つまどはづして人のけしき見ゆれば、なにとなくいぶかしき心地したまひて、中門の廊にのぼりたまへれば、例の馴れたることにて、をかきほどの童女わらわあゆみ出でて、けしきばかりをきこゆるを、おとど師忠は覺えなきものから、をかしとおぼして、しりにつきて入りたまふほどに、宮豊子も待ちきこえたまふとおぼしくて、御几帳にはづれて、なに心なくうちむかひきこえたまへるに、おとど師忠もこはいかにとは思せど、なにくれとつきづきしう、日ごろのころざしありつるよしきこえなしたまふぞ、いとあさましう、ひとかたならぬ御思ひ加はりたまひにけり。大納言實兼は、この宮をさし

(七)その邊になにげなく見張つてをれ。「を」は感動助詞。

(八)始めから心がけられたのではない、氣のすすまない御契りであるけれど。

(九)變ではあるが、そのまま月日を送つて行かれるうちに、御懷妊なされたのを。

(一〇)ほかにも男がと思ふから、氣まづく思はれたのも、是非ない。しかし、さすがに御自分の子だと判断がおつきになることがあつたのであらうか。御産じぶんのことなども。

(一一)大納言の異腹の姫君をまで、この齋宮の御子として、御遺産をもつておかれたとか。

てかくまわりたまひけるに、例ならず男の車より降るる氣色見えつれば、あるやうあらんとおぼして、「御隨身一人、そのわたりにさりげなくてをあれ」とて、とどめて歸りたまひにけり。男君師思は、いと思ひの外に、心起らぬ御旅寝なれど、人の御氣色見たまふも、ありつる大將實兼の車などおぼしあはせて、「いかにも、この宮にやうあるなめり」と、心えたまふに、「いとすきすきしきわざなり。よしなし」と思せば、更かさで出でたまひにけり。かの残り置きたまへりし隨身、この様よく見てければ、「しかじか」ときこえけるに、實兼いと心憂しとおぼえて、「日ごろもかかるにこそはありけめ。いとをこがましう、かのおとど師思の心の中もいかにぞや」と數數おぼし亂れて、かき絶え久しく訪れたまはぬをも、この宮體子には、かう残りなく見あらはされけんとも知ろし召さねば、怪しなから過ぎもて行くほどに、ただならぬ御氣色にさへ悩みたまふをも、大納言殿實兼は一すぢにしもおぼされねば、いと心やましう思ひきこえたまひけるぞわりなき。されども、さすがに思しわくことやありけん、その御ほどのことどももいとねんごろにとぶらひきこえさせたまひけり。異御腹の姫宮をさへ御子になどしたまふ。御處分もありけるとぞ。いくほどな

(二三)文永十一年六月、藤位子、上皇の宮に入る。十二年三月院號。

くて、弘安七年二月十五日に宮啓子薨れさせたまひにしをも、大納言殿實兼いみじう歎きたまひけるとや。

まことや、新院龜山には一とせ近衛の大殿基平の姫君位子女御にまゐりたまひにしぞかし。女御ときこえつるを、このほど院號あり。新陽明門院とぞきこゆめる。建治二年の冬のころ、近衛殿にて若宮啓仁生まれさせたまひにしかば、めでたくきらきらしうて、三夜、五夜、七夜、九夜など、いまめかしくきこえて、御子もやがて親王の宣下などありき。

第十 老のなみ

(一) 卷名は、従一位貞子九十の賀に東宮大夫實兼のよんだ「代代の跡になほ立ちのぼる老の浪よりけん年は今日のためかも」による。記事は建治三年から弘安十年までで、後宇多天皇の御元服から讓位に至る。その間、龜山院の奔放な御戀愛生活・元寇・准后貞子九十の賀などを精細に描く。

(二) 加冠役。「の」は「は」の誤り。

(三) 理髮役。頭中將基顯とあるのは左大臣師忠の誤り。

(四) 御理髮の介添役。

(五) 玄象は琵琶の名器。和琴の名器鈴鹿とともに宮中累代の寶物。

(六) 握り飯。

(七) 天皇龜山上皇を訪はれる。

(八) 下襲の裾。

(九) 五位以下、地下官人の舞。

(一〇) 石清水行幸は建治四年三月十三日、賀茂行幸は建治四年四月十九日で、年月を誤つてゐる。

建治三年正月三日、内のうへ後宇多御冠し給ふ。十一にぞならせたまふら

んかし。御諱世仁ときこゆ。ひきいれの關白太政大臣殿兼平、理髮頭中將基顯、御總角大炊御門大納言信嗣の君つかうまつられけり。御遊びはじまる。琵琶玄象今出川の大納言實兼、和琴鈴鹿信嗣大納言、箏の琴殿の大納言兼忠の君にておはせしなめり。屯食、祿などのこと常の如し。

二十二日朝覲の行幸龜山殿へなりしかば、上達部・殿上人、例の色色の裾、下襲、織物、打物、めでたくゆゆしかりき。御前の大井河に龍頭鶴首浮かめらる。夜に入りて、鶴飼ども召して、篝火として乗せらる。御前の御あそび、地下の舞など、さまざまの面白きことども、例のことなれば、うるさくて、さのみもえ書かず。

同じ三月二十六日、石清水の社へ行幸、四月十九日、賀茂の社へ行幸、いづれもめでたかりき。人人定めて記しおきたまひつらんと、譲りてとめ侍りぬ。

(一) 建治三年七月二十六日、興福寺雷火のためほとんど全焼。

(二) 「ひきいれの」の「」は衍字。

(三) 類なく。

(四) 東宮の御母。

(五) 後深草院の御車。

(六) 院中に仕へる下人。雑仕。

(七) 元服して童形をすてて、一層美しくお見えになること。

(八) 龜山院后、後宇多天皇御母。

(九) 御涙で袖がぐつしよりになりがち。

(一〇) 誰れ彼れ美しいかたがたをお側にさし上げるけれど、ほとんど較べものなるひともなかつた。

(一一) 御寵愛。

(一二) 御容貌が似ていらつしやるであらうとお慕はしくて。

(一三) 大したこともなくて。

(一四) 姫宮お一かたほど儲けられただけで、おしまひになつた。

春宮 伏見院の御元服八月ときこえしを、奈良の興福寺の火のことにより、延びて十二月十九日にぞせさせたまひける。十六日に、まづ内裏へ行啓なる。清涼殿の東の廂ひさしに倚子いし立てらる。帝みかど後宇多も倚子に著かせたまふ。ひきいれの左大臣 輔忠、理髮東宮權大夫具守つとめらる。御諱いみなひろひと熙仁と申しき。持明院殿後深草より、女房にになくきよらにしたてて十二人まゐる。東の御かた玄壇門院御事も院いの御車にて、殿上人・北面めしつぎ・召次めしつぎなどと美美びびしうてまゐりたまへり。帝みかど後宇多・春宮 伏見いづれもいとうつくしき御みかどあげまさりなり。

新院 龜山はつきせず皇みかど后宮京極院信子のおはしまさましかばとのみみほたれがちに思し忘るる世なき御心や慰むと、これこかれまゐらすれど、をさをさなずらへなるもなく、新陽明門院位子も、はじめは御みかどおぼえあるやうなりしかど、次第にかれがれる御ことにて、御ひとり寝がちなり。故皇后宮京極院信子の御はらからの中の君媒子も、御みかど面影や通ひたらんと、なつかしさに、忍にびてねんごろにのたまひしかば、まゐらせ奉りたまへれども、いといしもなくて、姫宮い理子一所ばかりとり出でたまへりしままにてやみにき。姫宮理子をば大宮院 姞子の御かたはらにぞかしづききこえたまふ。

- (二五)十月十三日。
 (二六)元永十年十月、「あすか川」の巻末近くに見ゆ。
 (二七)御屋移りで。
 (二八)後嵯峨院后。
 (二九)大宮院腹でない、すなはち他の后妃の生んだ後嵯峨院の皇子・皇女たち。
 (三〇)圓助・性助らの法親王。
 (三一)五條院禪子など。
 (三二)孝時の女、刑部卿局。
 (三三)のちには五條院と申したが、當時はまだ内親王でいらした時分であつたのであらうか。
 (三四)新院が無理に御心にかけて、御隙を窺つていらしたうちに、この女院の御病氣のところ、どう工夫されたのか、とうとうお會ひなされたので、姫宮は大層意外なことに口惜しいとお嘆きなされた。
 (三五)かの「草枕」の巻でお話した前齋宮の御時より御熱心で、苦苦しい御ことで、姫宮までお生まれ遊ばした。
 (三六)變なことが、どなたの御腹の姫君といふことなしに。
 (三七)どうお辨へ遊ばされたのか。

かくて弘安元年になりぬ。十月ばかりまた二條内裏に火出で来て、いみじうあさまし。萬里小路殿はありし火の後また造られて、今年の八月に御わたましにて、新院龜山住ませたまへれど、内裏焼けぬれば、この院また内裏になりぬ。うち續き火のしげさ、いと恐ろし。

そのころ、大宮院姁子いと久しく惱ませたまへば、本院後深草も新院龜山も常にわたりたまひて、夜などもおはしませば、異御腹の法親王・姫宮たちなども絶えず御とぶらひにまうでさせたまふ中に、故院後嵯峨の位の御時、勾當の内侍といひしが腹に出でものしたまへりし姫宮禪子後には五條院ときこえし、いまだ宮の御ほどなりしにや、いと盛りにうつくしげにて、切にかくれ奉りたまふを、新院龜山あながちに御心にかけてうかがひきこえたまふほどに、この御なやみのころ、いかがありけん、いみじう思ひのほかにあさましとおぼし歎く。かの草枕よりはまことしう、苦苦しき御ことにて、姫宮まで出で來させたまひにき。限りなく人目をつつむことなれば、あやしう誰が御腹といふこともなくて、院の御乳母の按察の二位の里にわたし奉りたまへり。幼き御心にも、いかが心えたまひけん、「宮の御母君を誰とか申す」と人の問ひきこゆ

(一)それは言はないことよ。

(二)龜山院は、御心の赴くままに。

(三)想ひをかけてられた女性をそのままにしてお置き遊ばさず。

(四)大方、十三の御年から御子がおできはじめになつたが、年々に多くなられる一方であるから、亂りがましいほどであつた様だ。

(五)「北野の雪」文應元年十月二十二日の信子入内の條に見える。

(六)崇道天皇・伊豫親王らの御靈を祀る神祠。

(七)御養育をうけていらしたうち

(八)近衛家基公がこの貫川腹の姫宮にお通ひになり、はては公はもとからの本室をも疎んぜられて。

(九)あつばれ。

(一〇)悪くすると。

(一一)「大層ふびんなことだ。宮腹の經平はまだ赤ん坊ではないか。長男家平の大大人びられたのを押し退けるといふやうなことがあつてよからうか」と仰しやつて、その家平公は、終に御家も相續なさつたのである。

(一二)後高倉院第二皇女、龜山上皇の准母。

れば、姫宮「いはぬこと」とのみぞいらへさせたまひける。

御心のあくがるるままに、御覽じすぐす人なく、亂りがはしきまでたはぶれさせたまふほどに、腹腹の宮たち數知らず出で来たまふ。おほかた、十三の御年より宮は出で來をめさせたまひしが、年々に多くのみなりたまへば、いとらうがはしきまでぞあるべき。故皇后宮京極院信子の御雜仕にて貫川といひし、御靈とかやきこゆる社の神子にてぞありける。さきにもきこえしやうに、位の

御ほどにたびたび召されて、姫宮生まれたまへりしを、それも御乳母の按察の二位殿の里に、かの五條院櫻子の御腹のと二所、おなじ御かしづきぐさにておはせしほどに、近衛殿家基いらせたまひぬれば、殿はもとおはせし北の政所をもすさめたまひて、この宮をたぐひなく思ひきこえさせたまふほどに、かひがひしく若君左大臣經平いできたまへるをも、いみじうかしづきたまひて、前の北政所の御腹の太郎君家平中將ばかりにてものしたまふをも、よくせずば、おしのけぬべうもてなし奉りたまひけるを、新院龜山聞かせたまひて、「いといとほしきことなり。これは未だ兒なり。ちとおとなしうなりたまへるをば、いかでか引き違へるやうはあらん」とのたまはせて、そのおとど家平はつひに御家

- (二三)安嘉門院女房。
 (二四)當時流行した一種の民間演藝その役者を田樂法師といふ。安嘉門院は田樂がお好きであつたので田樂法師の玄駒の女下野が大納言の君の曹司に仕へることになつた。(二五)自然下野と御關係ができたのであらうか、格外の御寵遇をかうむり出して、この御所にお呼び寄せになつて。
 (二六)御養女となされて。
 (二七)大宮女院のもとに讃岐といつて御奉公申してゐた女は、西園寺の御家の侍である景房(大膳大夫)といつた者の娘である。
 (二八)二位の位に陞敍された。
 (二九)藤實平の女、九條殿の北政所・覺靈・良助らの御母。
 (三〇)昭慶門院は中納言典侍(藤雅平女)の御腹。
 (三一)山城國愛宕郡。(黒谷方)
 (三二)兵部卿平時仲の女。
 (三三)とんど。
 (三四)龜山上皇の方には女御・更衣が多數いらつしやるのに後宇多天皇がたはつかへつてお召しになるかたもなく、さびしい禁中の御様子である。

もたもたせたまへりしなり。また、北白川殿の女院(二二)安嘉門院に、大納言の君とてさぶらひし人の曹司に、下野といひしものは、田樂とかやいふことするあやしの法師の、名をば玄駒といふが女なりき。かの女院安嘉門院は新院龜山の御母代にて、常に御幸もなりしかば、おのづから御覽じそめけるにや、ことのほかにときめきいでて、この院に召しわたされて、花山院の太政大臣通雅の御子になされ、廊の御かたとぞつけさせたまふ。その御腹にも宮兼良生まれたまひぬ。大宮女院(二七)姑子に讃岐壽子とてさぶらひしは、西園寺の御家の者、景房といひしが女なり。いみじうおぼいて、これも召しとりて、西園寺のおとど公相の御子になして、二品の加階たまはる。若君定良むまれたまひにき。帥の中納言爲經のむすめの帥の典侍殿といひしが御腹にもあまた生まれたまふ。九條殿師敦の北政所、また梨本覺靈・青蓮院法親王良助など大納言典侍の御腹、昭慶門院(三〇)豐子中納言典侍雅子、十樂院慈道法親王は帥の典侍殿の腹、かやうにすべて多くものしたまふ。昔の嵯峨天皇こそ八十餘人まで御子もたまへりけると承り傳へたるにも、ほとほと劣りたまふまじかめり。

内裏(二四)後宇多にはなかなか女御・更衣もさぶらひたまはず。いとさうざうしき

(一) どういふものか、延び延びになつてゐるのは、御考へになつてゐることがおありらしいと。

(二) その方に對する龜山上皇の御仕打ちがひどく情なかつたものだから、西園寺家の人人は龜山院の御筋のかたには女御を入内させないのだなど、變に悪くつて沙汰する人もあつたといふことだ。

(三) 後深草院の御所。京都上立賣の北、新町の西。

(四) 蹴鞠のコート。方六間、八間、又は十二間で、四方に竹の圍をつくり、四隅に樹を植ふる。

(五) ことさらにでなく女房の袖口が御簾からはみ出てゐて、それが格別に美をつくしてゐられる。

(六) 兩上皇の御座を相對するやうに設けられたのを。

(七) 「故嵯峨院の御時、朝覲の行幸に准ずるやう定め置かれたからは、本院に對し奉つては自分は永久に父子の禮を執るべきで、今さら變更することはできない」と仰しやつて。

(八) 御自分の座を次ぎの一段低い間に引き下げさせ遊ばす時に。

「飛鳥川」參照。

(九) 天曆元年三月九日村上天皇が

雲の上なり。西園寺より女御まゐりたまふべしときこえながら、いかなるにかすがすがとも思し立たぬは、思ふ心おはするなめりとぞ、世の人もささめきける。新院龜山の御位の時まゐりたまへりし西園寺の中宮嬪子は、院號ありて今出川院ときこゆなり。かの御覺えなどのいと口惜しかりしより、この院の御かたさまをつらく思ひきこえたまふなめりなどぞいひなす人も侍りけるとぞ。

弘安元年やよひの末つかた、持明院殿の花盛り、新院龜山わたりたまふ。鞠まりのかかり御覽ぜんとなりければ、御前の花は梢も庭も盛りなるに、外の櫻をさへ召して、散らし添へられたり。いと深う積りたる花の白雪、跡つけがたう見ゆ。上達部・殿上人、いと多くまゐり集まる。御隨身みおとど、北面の下蔭かげなどいみじうきらめきてさぶらひあへり。わざとならぬ袖口ども押し出だされて、心ことにひきつくろはる。寢殿もやの母屋に、御座對座おまたいざに設けられたるを、新院龜山入らせたまひて、「故院こゐん後嵯峨の御時定めおかれし上は、今さらにやは」とて、長押ながしの下へひきさげさせたまふほどに、本院ほんいん後深草出でたまひて、「朱雀院の行幸には、あるじの座をこそなほされ侍りけるに、今日の御幸みゆきには御座をおろさるる、いとことやうに侍り」などきこえたまふほど、いとおもしろし。むべむ

朱雀院行幸の時、朱雀上皇はその御席を引き下げて東向き、天皇は西向きに對座された。

(一〇)鹿爪らしい御挨拶は。

(一一)蹴鞠をあそぶす。

(一二)アログラムが半ばすぎたじぶん、お客である龜山上皇が寢殿にお上りなすつて御休憩なされ、解けかかつた御革足袋の紐など結び直されてゐると。

(一三)生絹。

(一四)同じく銀の提子。

(一五)吊し柿をすつて、酒に浸したも。興奮飲料。

(一六)大騒ぎしながら。

(一七)文永十一年十月十二日焼失。

(一八)建治元年四月十日移御。

べしき御物語はすこしにて、花の興に移りぬ。御かはらけなどよきほどの後、東宮伏見院おはしまして、かかりの下にみな立ち出でたまふ。兩院後深草・龜山・春宮伏見立たせたまふ。半ばすぐるほどに、まらうどの院龜山のぼりたまひて、御機などなほさるるほどに、女房別當の君、また上藤だつ久我の大おとど通光のむまごとかや、樺櫻の七つ、紅のうち衣、山吹のうはぎ、赤色の唐衣、すずしの袴にて、銀の御杯、柳箱にすゑて、同じじさげにて、柿ひたしまゐらすれば、はかなき御たはぶれなどのたまふ。暮れかかるほど、風少しうち吹きて、花もみだりがはしく散りまがふに、御鞆數多くあがる。人人の心地いと艶あり。ゆゑある木蔭に立ちやすらひたまへる院龜山の御かたち、いときよらにめでたし。春宮伏見も、若ううつくしげにて、濃き紫の浮織物の御指貫、なよびかに、けしきばかり引きあげたまへれば、花のいと白く散りかかりて、紋のやうに見えたるもをかし。御覽じあげて、一枝おし折りたまへるほど、繪にかかまほしき夕映えどもなり。その後も、御みきなど、らうがはしきまできこしめしさうどきつつ、夜ふけてかへらせたまふ。

六條殿の長講堂も、焼けにしを造られて、そのころ、御わたまししたまふ。

(一) 網代庇の車。

(二) 供奉の女官の車。

(三) 新居移轉後三日間は、陰陽道でも忌みの期間とし、その間外出・更衣・殺生などを禁じた。

(四) 表薄紫、裏蘇芳。

(五) 表白、裏蘇芳。

(六) 表紅梅、裏青。

(七) 中庭。(六條殿内の)

(八) 左右に人人分れて、築山・造庭の優劣を争ふ遊戯。

(九) 宇治川の中にある。

(一〇) 自分の造つた庭の川に。

(一一) 佛前に花を供へる儀式で、五月・九月に行はれ、結縁同志極樂に生まれるやう祈願する。

(一二) 御堂の美しい木の香や名香の薫りも、外よりははずつと優つて大層身に深く沁みて、風雅で。

(一三) 後白河上皇より行はる。

(一四) 經營の字音の轉。奔走。

(一五) 朝と夕。

(一六) 永正本「關白大臣以下」

四月イダシのはじめつかたより、院の上後深草ひさし庇の御車にて、上達部・殿上人・御隨身じびん、えもいはすきよらなり。女院にじ東二條院の御車に姫宮ひめみや遊義門あそぎもたてまつる。出車いだしるまあまた、みな白き袷あはせの五衣いつつぎ、濃き袴、同じ單ひとへにて、三日み過ぎてぞ、色色の衣ども、藤ふじ・躑躅つづじ・撫子ななしなど著かへられける。しばしこの院にわたらせたまへば、人人絶えずまゐりつどふ。西園寺の殿だんばらなども日ごとまゐりたまふ。御壺ごてわかたせたまひて、前まへ裁ざい合せありしにも、をかしうめづらしきことも多かりき。なにがしの朝臣あその横よこの島のけしきを造りて侍りけるを、平大納言へい經親、未だ下臈げらにて兵衛佐などいひけるほどにや、その宇治川の橋を盗みて、わがわがつくろひたるかたにわたして侍りける、いと恐ろしく心かしこくぞ侍りける。

例の五月の供花くげ、やがてうち續きければ、女院たち、宮宮など、夜の御時に關せき御奉みこらせたまへば、御堂ごだうのかをり、名香なかうの香も、ほかには多くまさりて、いとしみふかう、なまめかしうおもしろし。おほかたいづれも年に二たびは、昔むかしよりのことにて、いみじうけいめいたまへば、世の人の嚙くはきつかうまつるさま限りなし。日に二たび院いん後深草の出でゐさせたまふにも、關せき白大臣ばかり、

(一七)院政も御覽にならぬ上皇の御前とも見えす。

(一八)後二條關白師通が白河上皇の院政をそしつて「御退位になつた帝の御門前に嬪官の車が立つといふことはあるはずがない」といつた。(今鏡「紅葉のみかり」)

(一九)山城國紀伊郡。

(二〇)後深草院がたと龜山院がたのが一緒になつて、うしめきあつて。

(二一)伏見山や、その麓の水田につづく宇治川がはるかに望み見られるところのさまは、大層雅致があるのを、若い人人は身に沁むほど面白がつた。

(二二)あいにく御謹慎日に當られたのでお取り止めになられたものだから、五葉の松につけて御歌を獻られた。

(二三)伏見山に幾萬年もますます枝を繁らせて榮えるであらう松の如く、兩上皇の御行末も年久しく御繁昌のことをごぞいませう。

やんごとなき人人絶えずさぶらひたまふ。大中納言、二位三位、非參議、四位

五位などは、まして數しらす。すべて前の司の人、入道などもまゐることなれば、時ならぬ院の御前ともなく、いみじう花やかに面白うたふとし。昔の後二

條關白師通ときこえしは、「おりぬの帝の門に車の立つべきことなし」とそしりたまひけるに、今の世を見たまはばと思ひ出でらる。九月の供花には新院

龜山さへわたりものしたまへば、いよいよ女房の袖口、心ことに用意加へたまふ。

御花はつれば、兩院後深草・龜山一つ御車にて伏見殿へ御幸なる。秋山のけしき御覽ぜさせんとなりけり。上達部・殿上人、かなたこなたおしあはせて、いろいろの狩衣姿、菊紅葉こきまぜてうちむれたる、見どころ多かるべし。野山のけしき色づきわたるに、伏見山、田面につづく宇治の川浪、はるばると見わたされたるほど、いと艶あるを、若き人人などは身にしむばかり思へり。鷹司殿の大殿兼平もまゐりたまふべしときこえけるを、御ものいみとてとまりたまへれば、五葉の枝につけて奏せられける。

伏見山いくよろづ世も枝そへて榮えん松のすゑぞ久しき

- (一)伏見山に枝を連ねて生ひしげる松が永久に榮えるやうに、われら兄弟(連枝)の上皇の御代もいらく久しく繁昌することであらう、御貴意の如くに。
- (二)淀川の上流。
- (三)遊女。
- (四)善美をつくした御馳走を調理して獻つた中に。
- (五)六條と六條坊門との間。兼行は民部卿從二位道綱十代の孫、親忠の子、楊梅にすむ。
- (六)源氏物語、松風に「野にとまりぬる君達、小鳥しるしばかりひきつけさせたる萩の枝などつとにしてまるれり」とある。
- (七)京極爲兼、歌人。
- (八)いはゆる青表紙本。
- (九)現存する源氏諸本には河内本系でも、青表紙本系でも、すべて「萩の枝」とある。ただ一本だけ「木の枝」とあるが、これは誤脱らしい。増鏡著作時代には、河内本が勢力があり、青表紙本は秘本とされてゐたので、かういふ異説をもち出したのだらう。
- (一〇)後深草院と龜山院とが。
- (一一)あなたがにお負けになつた罰と

御返し、

さかふべきほどぞひさしき伏見山おひそふ松の枝をつらねて

またの日は、伏見津に出でさせたまひて、鶺鴒御覽じ、白拍子御舟に召し入れて、歌うたはせなどせさせたまふ。二三日おはしませば、兩院後深草・龜山の家司ども、われ劣らじといかめしきことども調じてまゐらせあへる中に、楊梅の二位兼行、檜破子どもの、心ばせありてつかうまつれるに、雲雀といふ小鳥を萩の枝につけたり。源氏の松風の巻を思へるにやありけん。爲兼の朝臣を召して、本院後深草「かれはいかがと見る」と仰せらるれば、「いと心得侍らず」とぞ申しける。まことに定家の中納言入道が書きて侍る源氏の本には、萩とは見え侍らぬとぞ承りし。

かやうに御なかいとよくて、はかなき御あそびわざなども、いどましき様にきこえかはしたまふを、めやすきことになべて世の人も思ひ申しけり。ある時は御小弓射させたまひて、「御負けわざには、院の内にさぶらふ限りの女房を見せさせたまへ」と新院龜山のたまひければ、童の鞠蹴たるよしをつくりなして、女房どもに水干着せて出だされたる事も侍りけり。新院龜山の御賭物には

て、あなたの御所に奉仕してゐる女房たちをみな見せて下さい。

(二)女官たちに水干を着せて、童が蹴鞠の遊びをしてゐるやうに扮装させて、新院のお眼にかけられたこともあつた。

(三)また龜山院がお負けになつた時には、鬪として本院を嵯峨の離宮にお招きになり、内裏でやる五節の舞を模倣されて、新院の女房を、舞姫・童・下仕にまで扮装をおさせになつたばかりか、上達部が直衣に出だし衣して露臺(紫宸殿・仁壽殿の間にある板敷)で亂舞するところから、天皇の御前で五節の舞姫の試演、北の陣(朝平門にある衛士の詰所、寅の日、殿上人がうちつれて、清涼殿からここを経て、五節所へ行く)、推參(その後所所に參つて郢曲等を誦ふ)までの御儀をことごとくやらせられたとのこと。

(四)非常に精神がこもつてゐる様には取れないが、優美とは見える(五)大體續古今集の模倣ではあるが、並大抵のことでは、續古今に比較にはなるまいと思はれます。

(六)新陽明門院がまた御懷妊なさ

龜山殿にて、五節のまねに、舞姫・童・下仕までになされけり。上達部直衣に衣いだして、露臺の亂舞、御前の召し、北の陣、推參までつくされ侍りとぞ承りし。

この御代にもまた勅撰の沙汰をとどし、建治二年ばかりより侍りし、爲氏大納言えらばれつる、この弘安元年十二月にぞ奏せられける。續拾遺集ときこゆ「たましひあるさまにはいたく侍らざめれど、艶には見ゆめる」と、時の人人申し侍りけり。續古今のひきうつし、おぼろげのことは立ちならびがたくぞ侍るべき。

かくて弘安二年年月かはりぬ。そのころ、新陽明門院位子またただならずおはしますときこえし、五月ばかり御氣色あれば、めづらしう思す。内内殿にてせさせたまふに、天下の人人まわりつどふ。前のたび生まれさせたまへる若宮啓仁は薨れさせたまひにしを、新院龜山本意なしと思されけるに、またかくものしたまへば、めでたう思ふさまなる御こともあらばと、今よりおぼしかしづくに、いとかがひがひしう、若宮繼仁生まれさせたまへれば、限りなく思さる。八月御子繼仁の御ありきぞめとて、萬里小路殿にわたらせたまふ。唐庇の御車

れたといふことであつたが、五月ごろ御出産の氣色のおはしますのを龜山院は珍らしいことに思はれた。

(二七)誕生後はじめて外出されること。

(一)縁起のよい御あやかり者。

(二)菊の紋のついた網代庇車。

(三)續けて走らせて、幽薄美しく、立派であつた。

(四)そのころはちやうど儉約令とかが發布された時で、御車の下簾を短かくされ、小さい飾りの金具を取り除かせられた。

(五)下役人。

(六)中納言高經女。

(七)外國からわが國の代表的美人をたづねて來たら、この姫宮の肖像をやらう。

に、後嵯峨院の更衣腹の姫宮、聖護院の法親王覺助のひとつ御腹とかや、御母代にて添ひ奉りたまふ。また三條内大臣公親の御女、内の上後宇多の御乳母なりしも、めでたき御あえものとして、御車に二人乗りたまふ。女院新陽明は院の上龜山ひとつ御車に、菊の網代の庇にたてまつる。宮の御車にやりつづけて、よそほしくめでたき御ことなり。そのころ、儉約行はるとかや聞えしほどにて、下簾垂短くなされ、小金物抜かれける。もの見る車どものも、召次寄りて切りなどしけるをぞ、「時しもや、かかるめでたき御ことをりふし」などつぶやく人もありけるとかや。この宮繼仁も親王の宣旨ありて、いとめでたくきこえしほどに、あくる年弘安三年九月またかくれさせたまひにし、いと口惜しかりし御ことなり。

弘安も四年になりぬ。夏ごろ後嵯峨院の姫宮かくれさせたまひぬ。後堀川院の御女にて、神仙門院禮子ときこえし女院の御腹なれば、故院後嵯峨もいとよろかならず、かしづき奉らせたまひけり。御容貌もたぐひなく美しうおはしまして、「人の國より女の本をたづねんには、この宮の似せ繪をやらん」などぞ父の帝後嵯峨も仰せられける。御乳母隆行の家におはしましけるほどに、御乳

(八)御懷妊。
(九)御流産。

(一〇)閏七月二日中御門經任を伊勢の勅使に發遣。

(一一)六月二十日石清水八幡宮御幸、御一宿、月御雲各御神樂。

(一二)大和國奈良。

(一三)文句を略さず、全部丁寧に讀むこと。一章一段を略して讀む草讀に對す。

(一四)「まあ、不吉なことを仰しやるものではありません」と言つてお諫めになつたのは、やはり御親子の情、無理のないことで、同感されます。

(一五)大袈裟にして騒ぐ。

(一六)「あすか川」参照。

(一七)國書。

(一八)面倒な噂であるから。

(一九)本文は閏を誤つて脱した。勸仲記を見よ。

母子隆康、忍びてまわりける故に、あさましき御ことさへ出で來て、これも御産み流し、俄かに失せさせたまひにけりとぞきこえし。

そのころ、蒙古おこるとかやいひて、世の中騒ぎたちぬ。色色さまざまに恐ろしう聞ゆれば、本院後深草・新院龜山はあづまへ御下りあるべし、内後宇多・春宮伏見は京にわたらせたまひて、東武士ども上りてさぶらふべしなど沙汰ありて、山山寺寺、御祈り數しらず。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院龜山も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老思圓召されて、眞讀の大般若供養せらる。大神宮へ御願に、「わが御代にしもかかるみだれ出で來て、まことにこの日本の損はるべくは、御命を召すべきよし、御手づから書かせたまひけるを、大宮院姁子「いとあるまじきことなり」と、なほ諫めきこえさせたまふぞことわりにあはれなる。東にも、いひ知らぬ祈りどもこちたくののしる。故院後醍醐の御代にも、御賀の試樂のころかかることありしかど、ほどなくこそしづまりにしを、このたびはいとにががしう、隙状とかや持ちてまゐれる人などありて、わづらはしうきこゆれば、上下思ひまどふことかぎりなし。されども、七月一日おびただしき大風吹きて、異國の船六萬艘、兵乗りて筑紫へよ

(一)「はぐ」は矢を作ること。

(二)筑紫の方。

(三)恐ろしく險悪になつて。

(四)經任大納言の誤りであらう。經任は閏七月二日に京をたち、同十一日に歸京のよし。(勘仲記)

(五)陛下のお言葉によつて、天照大御神にお祈り申し上げたかひがあつて、神風が吹いたために、わが國に押し寄せた敵の艦船が殆んど破壊されてしまつたのは、かしい極みである。

(六)はつと御安堵遊ばされて。

(七)元の忽必烈。この弘安四年より十三年の後、伏見天皇の永仁二年八十歳で死んだ。この時代の撰といふ「聖徳太子瑪瑙記文」にも同じ説が見えるから、増鏡著作當時の傳説であらう。

りたる、みな吹きわられぬれば、あるは水に沈み、おのづから残れるも、泣く泣く本國へ歸りにけり。石清水の社にて大般若供養説法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黒雲一むらにはかに見えてたなびく。かの雲のうちより、白き羽にてはぎたる鐮矢かぶやの大きいなる、西をさして飛び出でて、鳴る音おびたしかりければ、かしこには、大風の吹き來るとつはものの耳には聞えて、浪荒く立ち、海の上あさましくなりて、みな沈みにけるとぞ。なほわが國に神のおはしますことあらたに侍りけるにこそ。さて爲氏なりの大納言、伊勢の勅使にてのぼる道より申し送りける。

勅ちよくとして祈るしるしの神風によせくる浪はかつくだけつつ

かくて静まりぬれば、京にも東あづまにも御心みこころどもおちゐて、めでたさ限りなし。

かの異國ちの帝心みかど憂しと思して、湯水をも召さず、「われいかがして、このたび日本の帝王に生まれて、かの國をほろぼす身とならん」とぞ誓ひて死にたまひけるとぞ聞き侍りし。まことにやありけん。

同じ六年正月六日、日吉の社の訴訟勅裁なしとて、御輿みこしは都へ入らせたまふ。六波羅の武士どもけしきばかり防ぎ奉りけれど、まめやかに神には向ひ奉

(八)神輿を投げ棄て奉つて、山法師どもは延暦寺に歸山した。

(九)手でかく輿。非常用である。

(一〇)冠の纓を撓め疊んで、白木の挟み木でとめる。突發的な事件の時、文官がなす。

(一一)正月七日の白馬御覽の節會も正式には行はれなかつた。

(一二)前内大臣源通成公の邸。

(一三)萬里小路に面する四足門。

(一四)瀧口の武士のなんとかいふ者が、過つて殺した御祟りで、いろいろ面倒な怪異などが引き續き起つたので。かうがうしき―神々しき、怪異。

(一五)御學問。

(一六)これといふ女御や后など。

(一七)後に西華門院と號す。

(一八)甚だ一通りでない前世からの深い御縁。

りて弓射るものもなければ、紫宸殿・清涼殿などにふりすてまゐらせて、山法師はのぼりぬ。帝^{みかど}後宇多は急ぎ^{いたひや}聖屋に出でさせたまひて、腰輿にて近衛殿に行幸なる。殿上人ども、柏^{かしは}挟み^{はさ}ましてつかうまつりけり。七日の節會もまほには行はず。それより三條坊門萬里小路の通成の大臣の家へ行幸なりて、しばし内裏になりし時、萬里小路おもての四足は建てられ侍りき。かかりしほどに、この家に石清水の若宮をいはしまゐらせたる社おはしますに、狐多く侍りけるを、瀧口のなにかしとかや、過ちたりける御とがめにて、よろづわづらはしく、かうがうしきことどもありければ、萬里小路殿へ歸らせたまひにき。

この帝^{みかど}後宇多は、ねびたまふままに、いとかしこく、御才などもすぐれさせたまへれば、なべて世の人もめでたきことに思ひきこゆ。はかばかしき女御・后などもさぶらひたまはで、いとつれづれなるに、新陽明門院位子の御かたに、堀川の大納言の具守御女、東の御かた基子とてさぶらひたまふを、忍び忍びに御覽じけるほどに、弘安八年二月ばかり若宮後二條いでものしたまへり。
いとやんごとなき御宿世なるべし。

今年北山の准后實氏皇貞子九十にみちたまへば、御賀のこと大宮院媿子思しい

(一) 天下の一大事として、世間でも喧しくお噂し合つた。かくみんなに大騒ぎせられる北山の准后といふかたは、安元二年三月四日、後白河法皇の五十の御賀の時、青海波を舞つた隆房大納言の御孫女でせう。

(二) 當世の貴顯の方方、皆この准後の御子孫でないのは少ない。

(三) 大勢あらせられたが。

(四) いろいろなおしあはせを取り集めて、ひどく御幸ひであらせられた前例は。

(五) 御競争相手もなく。

(六) 御心かなはないこと、御憂鬱になられるやうなことは一つもなく。

(七) 昔、藤原基經公の御女で、醍醐天皇の皇后であらせられた隠子皇太后は、朱雀・村上兩帝の御母君でおはしたが、最初にお生まれになつて、とりわけ御愛しなされた前皇太子の保明親王に先き立てられ遊ばしてからは、御存生の間といふもの、絶えず御嘆きがつきなかつた。

そぐ。世の大事にて、天下かしがましくひびきあひたり。かくののしる人は、安元の御賀に青海波舞ひたりし隆房大納言の孫なめり。鷲の尾の大納言隆衡の女ぞかし。大宮院嫡子・東二條院公子の御母なれば、兩院後深草・龜山の御祖母おほきおとど實氏の北の方にて、天の下みなこのにほひならぬはなし。いとやんごとなかりける御さいはひなり。昔、御堂殿道長の北の方鷹司殿倫子ときこえしにも劣りたまはず。

おほかたこの大宮院の御宿世、いとありがたくおはします。すべていにしへより今まで、后國母おほく過ぎたまひぬれど、かくばかり取り集めいみじきためしは未だ聞き及び侍らず。御位のはじめよりえらまれますまひて、争ひきしるふ人もなく、三千の寵愛一人にをさめたまふ。兩院後深草・龜山うちつづきものしたまへりし、いづれもたひらかに、思ひの如く、二代後深草・龜山の國母にて、今はすでに御孫の位をさへ見たまふまで、いささかも御心にあはず、おぼしむすばるる一ふしもなく、めでたくおはしますさま、來しかたもたぐひなく、行末にもまれにやあらん。

いにしへの基經のおとどの御女隠子、延喜醍醐の御代の大后宮、朱雀・村上

(八)年少の者に先き立たれるといふ、さかさまの御嘆きの絶える時なく、御壽命が餘り長いといふので、かへつて人目をおはばかりになる御心が深くあらせられた。

(九)これらはいづれもみな攝關家の姫君で、國母と仰がれ遊ばされたかたがたであるのに、それでさへ、いろいろ様子の變つた、御一身上の御惱みは逃れさせられなかつた。

(一〇)一の人(攝關)でない、普通の公卿。

(一)御子孫も絶えた。

(二)だから現世において、攝關でない人の女にお生まれになつて、三帝の御代にわたつて、國母として重んぜられ、尊ばれ。

(三)かつ後深草・龜山の兩上皇が御健在で長く御孝養をお盡くし遊ばされるのを見奉ると。

(四)こそその下に「と」を脱す。

の二代の國母にておはせしも、はじめいできたまひて、ことになしうしたまひし前坊保明におくれきこえたまひて、御命のうちは、絶えぬ御歎きつきせざりき。九條のおとど師輔の御女安子天曆村上の后にておはせし、冷泉・圓融兩代の御母なりしかど、めでたき御代も見奉りたまはず、帝村上にも先立ちたまひて失せたまひにき。御堂道長の御女上東門院彰子、後一條・後朱雀の御母にて、御孫後冷泉・後三條まで見奉りたまひしかども、みな先立たせたまひしかば、さかさまの御歎き絶ゆる世なく、御命のあまり長くて、なかなか人目を恥づる思ひ深くおはしましき。これもみな一の人にて、世の親となりたまへりしだに、やうをかへて、さまさまの御身のうれへはありき。ただ人には、大納言公實の御女こそ待賢門院璋子とて崇徳・後白河の御母にておはせしかど、それも後白河の御世をば御覽ぜず、讃岐の院崇徳の御末もおはしまさず。されば今のほどに、ただ人の御身にて、三代の國のおもしといつかれ、兩院後深草・龜山とこしなへに仰ぎささげ奉らせたまへば、前の世もいかばかりの功德おはしまし、この世にも、春日大明神をはじめよろづの神明佛陀の擁護あつくものしたまふにこそ、ありがたくぞおしはかられたまふ。

- (一) 後深草院の皇女。
 (二) 前以て北山の御邸に。
 (三) 大宮院の院司。
 (四) 主上御成りの由を女院に啓し
 て後。
 (五) 東宮傳二條師忠公、東宮の御
 車に陪乘してまゐる。
 (六) 襖障子を取り拂つて。
 (七) 紺地の紙に、膠で溶いた金粉
 で書寫したもの。
 (八) 一切金剛壽命陀羅尼經の略。
 (九) 柳の模様を織り出した織物。
 (一〇) 經綯縁の疊、經綯は白地に色
 糸で紋様を織り出した錦。
 (一一) 紋柄の大きな高麗縁の疊。高
 麗は白地に黒模様を織つたもの。
 (一二) 絞り染め。くくり染めとも。
 (一三) そのお仕へしてゐる院・宮の
 かたがたの個性をあらはして
 押し出されてゐるさまは、龍田姫
 (秋を司る神、染織に巧みとされ
 る)といへども、どうしてこんな
 錦を織り出すことができようかと
 思はれるほど、非常に好感のもて
 る絢爛さである。
 (一四) 儀式の刻限となつたのだらう
 か。

かくて御賀は二月三十日ころなり。本院 後深草・新院龜山・東二條院公子・遊義門院 始子、いまだ嬪宮と申す 皆かねてより北山にわたらせたまふ。新陽明門院 位子も新院のひとつ御車にておはします。二十九日の夜、まづ 後宇多行幸あり。雅樂寮樂を奏す。院司左衛門督公衡（四）ことのよし申して後、中門によせらる。その後、春宮伏見行啓、門よりおりさせたまふ。傳のおとど二條師忠御車にまゐりたまへり。その日になりぬれば、寢殿の東面の母屋庇まで取り拂ひて、釋迦如來の繪像かけ奉る。道場の飾り、まことの淨土の莊嚴もかくこそとめでたくきよらをつくされたり。御經の篋二合、金泥の壽命經九十卷、法華經入れらる。名香、柳の織物に藤を縫ひたるにて包みて、御經の机によせかく。御簾の中に、西の一間に雲綯二帖、唐錦の褥敷きて、内の上 後宇多の御座とす。おなじ御座の北に、大文の高麗一帖敷きて、春宮伏見わたらせたまふ。西の廂に、これも屏風をそへて、雲綯二帖、錦の褥に、准后貞子ゐたまへり。同じ廂に東二條院わたらせたまふ。はるばると、纈纈の几帳のかたびら出だして、色色の袖口ども、御かたがたけぢめわかれて、おし出でたるほど、龍田姫にもかかる錦の色はいかではと、いみじうこのまじげなり。ことなりぬるに

(二五)打ち續き出御あらせられ、搦ち續ける誦經の鐘の音も、耳が聾せんばかりで、さしも大きい式場も窮屈に感じられるほどに響きわたる。「うちつづく」は上下に係る。

(二六)衆僧に集會の知らせの鐘を打ち鳴らしながら。
(二七)寢殿正面の階段。

(二八)濃い花田色。

(二九)市松模様似た霞地に、輪切にせる木瓜にかたどつた紋のついた紫の御括り袴。

(三〇)紅褸ちの單を二つ捻り合はせて着られ。「紅うち」は紅うらの誤寫か。永正本「紅梅」。

(三一)この姫宮のお出でになるだらうとおぼしめす間の方角に、主上は始終御眼附きただならず、御熱心に御眼を注がせられる。

(三二)青海波の一笈。

や、兩院後深草・龜山・帝^{ふと}後宇多・春宮伏見・大宮院・東二條院・今出川院・東宮大夫實兼など、うちつづく誦經の鐘のひびきも耳驚くばかり所せう聞ゆ。衆僧集會の鐘うちて後、上達部御前の座に著く。階より東に、關白兼平・左大臣師忠・内大臣家基・花山院大納言長雅・源大納言通頼・大炊御門大納言信嗣・右大將通基・東宮大夫實兼・左大將公守・三條中納言實重・花山院中納言家敏・左衛門督公衡などさぶらひたまふ。階より西に、大納言四辻殿隆顯・東宮權大夫具守・權中納言宗冬・四條宰相隆保・右衛門督爲世など伺候せられたり。内の上後宇多御引直衣・すずしの御袴、本院後深草御烏帽子直衣・青鈍の御指貫新院龜山御直衣・綾の御指貫、春宮伏見櫻の御直衣・霞に窠の紫の御指貫、いひ知らずなまめかしう見えたまふ。今日はみな御簾の中におはします。大宮院、白き綾の三御衣、東二條院、唐織物の柳櫻の八つ、紅うちのひねりあはせの御單、權櫻の御小袿奉れる、姫宮遊藝院紅のほひの十、紅梅の御小袿萌黃の御單、赤色の御唐衣、すずしの御袴たてまつれる、常よりもことに美しうぞ見えたまふ。おはしますらんとおもほす間のほとりに、内の上後宇多常に御まじりただならず、御心づかひして、御目とどめたまふ。樂人・舞人、鳥向樂を

- (一) 鶏婁鼓。頸にかける。
 (二) 盛んに音楽を奏し、舞人左右に棹を振つて舞ふ。
 (三) 十二律の一。
 (四) 沙陀調で舞がない。
 (五) 講師・讀師・咒願・三禮・唄師・散花・堂達を七僧といふ。講師は經を講説し、讀師は經名品名をよみ上ぐ。
 (六) 少納言入道信西の裔、法印大僧都隆承の子。
 (七) 西園寺實氏の男、東寺一の長者。
 (八) 法會の時、藏人並びに諸家の諸大夫の花籠(佛前に供する花を入れる籠)をとるもの稱。
 (九) 帝から准后に賜はる杖の使。「しりぞけて」は「ささげて」の誤りか。原文のままなら、杖を一寸脇に置いて舞を奏し、さてその後杖を准后につたへるのであらう。
 (一〇) 古今集、僧正遍昭「淺緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」による。
 (一一) 舞人の上首の久助は、少し老いて大層なものしく、顔附き足踏みなど古雅で面白い。かうまひ

奏す。鶏婁を先だてて、亂聲、左右に棹を振る。その後、壹越調の調子を吹き、樂人・舞人、衆僧集會の所にむかひて、安樂鹽を吹く。衆僧左右に分れてまゐる。階の間より昇りて座に著く。講師法印憲實、讀師僧正守助。導師高座にのぼりぬれば、堂童子花籠をわかつ。杖をしりぞけて舞を奏するほど、氣色ばかりうちそそぎたる春の雨、青柳の緑に玉ぬくかと見えたり。一の舞久助といふもの、すこしねびて、いとよししうおももち・あしぶみ、かうまひて面白し。萬歳樂・賀殿・陵王、右地久・延喜樂・納蘇利、久忠、二のものにて、勅祿の手といふことつかうまつる時、右の大臣忠教座を立ちて賞仰せらるれば承りて拜し奉るほど、いと艶なり。久助・正秋などいふものどもも賞うけたまはりて、笛を持ちながら拜するさまも、つきづきしうゆゑありて見ゆ。講讚の言葉めでたういみじ。今の世には富樓那尊者の如くいはるるものなれば、心とどめて人人聞きたまふに、涙とどめがたきことどもをいひ續く。高座はてて後、樂人酒胡子を奏す。そのほどに、僧の祿を賜ふ。頭中将公教よりはじめ、思ひ思ひの姿にて祿をとる。あるは闕腋に平胡篋、縫腋の袍に革緒の劔など、ここごころなり。俊定・經繼などは巡方の帶をさしたり。衆僧まかりつ

- てし一本神さびて。神舞ひてか。
- (二) 萬茂樂・賀殿・陵王は左舞、唐樂・地久・延喜樂・納蘇利は右舞、高麗樂。
- (三) 舞人の上首に次ぐ者。
- (四) 舞の祕曲「胡飲酒」の舞をいふ。これを舞へば勸賞がある。
- (五) 拜舞するさまも似合はしく、いかにも由緒ありげに見える。
- (六) 釋迦の弟子で雄辯第一。
- (七) 高座の講説が終はつて後。
- (八) 祿を取つて、講師以下の衆僧に分ち與へた。
- (九) 武官の袍。
- (一〇) 文官の服。
- (一一) 革緒をつけた野劍。
- (一二) 方形の玉石を綴ちつけた石帶(こくのおび)。
- (一三) 平調で舞なき樂曲。
- (一四) 天食調で舞なき樂曲。
- (一五) 饗膳に侍する者。給仕。
- (一六) 御膳を取り次ぐ役。
- (一七) 壁の代りにかける几帳の類。
- (一八) 御簾を捲き上げる役を關白兼平が奉仕する。
- (一九) 艶なる御様子である。
- (二〇) 絛を堅くしめて紋を織り出したもの。

るほどに、廻めぐ忽たつ・長ちやう慶けい子し奏そうして、樂人・舞人も退きぬる後、大宮院姫子・准后白子の御臺まゐる。陪ばい膳ぜん權中納言、役送實時・實冬・實躬・信輔・俊光などつからまつる。

かくて、またの日は三月一日やよいひたちなり。寢殿のよそひ昨日のままなり。舞臺・樂屋ばかりをとりのけて、母屋もやの四方に壁代かきしろをかく。兩院後深草・龜山、内の上後宇多の御簾みすだの役、關白兼中さぶらひたまふ。春宮伏見のは、傳師思遅くまゐりたまへば、大夫實兼つとめたまふ。内の上後宇多今日は例の直衣、紅うちたる綿厚き御衣ごい、織物の御指貫、いとめでたき御みこにほひなり。本院後深草ごかた織物の薄色の御指貫、すこし薄らかなる御直衣、新院龜山雲に鶴の浮織物の御直衣、同じ指貫、紅の今すこし色かはれるを奉る。あらまほしきほどにねびととのほり、しうとく三にもものものしき御みこ様・容貌かたち、あなきよげ、今ぞ盛りに見えたまふ。春宮伏見は色濃き御直衣、浮線綾うきせんあやの御指貫、紅のうちたるあはせを奉れり。とりどりにめでたくきよらにおはします御容貌かたちどもの、いづれとなくあなうつくしと、うち見奉る人の心地さへそぞろに笑あはまし。大宮院姫子などはましてなにごとをかと思すらんとおしはかられたまふ。かなたこなたの御隨身ども

(三)宿徳、重重しい様。

(三)浮き織物。

(一)色色華麗をつくし。

(二)かへつて異様に見える。

(三)笛の名器。

(四)琵琶の名器。

(五)催馬樂呂の歌。「席田」とも。

(六)鳥樂の序破急の中、破急の二部。

(七)樂の高い調子で、呂に對す。

(八)催馬樂、律の歌。萬歳樂とも唐樂。

(九)片つける。

(一〇)位階を賜ふ。

(一一)舞樂の師らも陸絃さる。

(一二)和歌をよみあげる御儀。

(一三)圓筒形の矢壺。

(一四)詠進の歌を書いた紙、檀紙、あるいは杉原紙。

(一五)歌をのせる臺。

(一六)藥を束ねて、渦卷きの如く、圓く平に並べ巻きたるもの、座席の料とする、圓い座布團。

(一七)正月二十一日のころ、仁壽殿で催される天皇私的の御宴で、詩歌管絃がある。嵯峨天皇より始まる。

近くさぶらひつるを、院出でさせたまひぬれば、しりぞきて、御階の西になみわたる裝束ども、色色の花をつけ、高麗・唐土の綾錦、金銀をのべたるさま、いとあまりうたてあるほどにぞ見ゆる。

今日は内 後宇多・春宮伏見兩院後深草・龜山御膳まゐる。陪膳花山院大納言長雅役送四條宰相隆康・三條宰相中將公實、本院後深草陪膳大炊御門大納言信嗣、新院のは東宮大夫實兼などつとめらる。その後、御あそびはじまる。内の上 後宇多御笛、柯亭といふものとかや、御箱に入れたるを、忠世もちてまゐれるを、鬮白兼中とりて御前に奉る。東宮伏見御琵琶、牧馬宮權亮親定もちてまゐれるを、大夫實兼御前に置かる。上達部の笛の箱別にあり。笛兵部卿良敦・花山院大納言長雅、笙源大納言通頼・左衛門督公衝、篳篥兼行朝臣、琵琶東宮大夫、箏左大將洞院兼忠・三位中將實泰、和琴大炊御門大納言信嗣、拍子徳大寺中納言公孝、末の拍子實冬、みな人人、直衣に色色の衣を出だす。例の安名尊・席田・鳥破急、律、青柳・萬歳樂・三臺急。御遊びはてぬれば、殿上の五位どもまゐりて、管絃の具をわかつ。御かたがたかうぶり賜はりたまふ。道道の師ども加階たまはる。

(二〇)西宮記、内宴の條に「太子以下御前に候す(圓座を以て太子の座とす)、講師を召す(次將二人燭を秉る)、詩を講ず、畢つて祿を賜ふ」とある。

(二一)魚子(ななこ)、綾の一種。

(二二)日の短かい二月からのどかな三月に移る今日の春の陽にむかつて、けふ九十の賀を賜はつた准后の御行末がいよいよ春の日のやうに永くお榮えあるやう、われは約束します。

(二三)九十歳の准后が、さらに幾春を無事に過ごして、百歳の春をも迎へられるやう、はや今から鶯が「もとせ、もとせ」と囀つてゐる。百年——原文もいゝ。

(二四)幾千萬年も保たせたまふべき君の御齡は、この春、まだやつと九十にしかならせられない。だから千歳にならせられるには、まだまだ遠い春であるよ。

(二五)御詠草の初めに「應製」とお認めになり、御名の下に「上」たてまつる」といふ文字をお置きになつたのも、内宴の獻詩の例をまねられたとか。

その後、和歌の披講はじまる。爲道朝臣縫腋の袍に、壺おひて、弓に懷紙をとり具して、上達部の座のうへをとほりて、階の間より入りて、文臺の上におく。そのほかの殿上人どもの歌は、ひとつにとり集めて、信輔一度に文臺におく。文臺の東に圓座をしきて、春宮伏見披講のほどわたらせたまふ。内宴なごいふことにぞかくはありけると、古きためしもおもしろくこそ。上達部みな色色の衣を出だす。右大將通基、魚綾の山吹の衣著たまへり。笏に歌をもち具したまふ。内の上後宇多の御歌は殿兼平ぞ書きたまひける。

行末をなほ長き世と契るかなやよひにうつる今日の春日に

新院龜山御製は内大臣家基書きたまふ。

ももとせと今や鳴くらん鶯もこのかへりの君が春經て

春宮伏見のは左大將兼兼に書かせらる。

限りなき齡はいまだ九十なほ千世遠き春にもあるかな

製に應ずと上文字載せられたるも、内宴の例とかや。つきつき例のおほけれど、むつかしくて漏らしつ。東宮大夫實兼こそいとうげばりてめでたく侍りしか。

代代の跡になほ立ちのぼる老の波よりけん年は今日のためかも

(二五) 歴代の高齡者の記録を破つてなほ重ねられた御老齡は、今日の前古未曾有の光榮ある御賀をうけさせられるためです。立ち越ゆる・寄るは波の縁語、老の波は、皺(しは)をいふ。

(一) 表裏とも濃朽葉。

(二) 女院の御かたがたの女官。

(三) 白地に格子型を織り出したもの。

(四) 表黄、裏紅。

(五) 薄紫に白い筋のあるもの。

(六) 紫格子の表著に柳鬘。

(七) 同一の紋様も色も交らず。

(八) 文永三年四月。

(九) 兩腋入頭。

(一〇) 口惜しきことに。

(一一) 誰も彼も綺麗で、目移りがしても取り繕つてある。

(一二) 後鳥羽院が建仁の御幸に上靴された先例によるのだといつて、新院が三度ばかり鞠を空高く蹴上げられ、地に落された。

(一三) 御插鞋、天皇御料の木沓。

(一四) 革足袋の模様が左右にちがつてゐる。

(一五) 藍革に白い竹模様(左)に、

(一六) 藍革に白い竹模様(左)に、

その後東向の鞆のかかりある方へわたらせたまふ。御かたがたの女房、色の衣、昨日にはひきかへて、めづらしき袖口を思ひ思ひに押し出でたり。紫の匂ひ・山吹・青鈍・柑子・紅梅・櫻崩黄などは女院の御あかれ、内後宇多の御かたは、典侍より下、みな松がさね・白格子・うら山吹、院の御かた、葡萄酒に白筋・かば櫻の青筋、春宮伏見の女房、うへ紫格子、柳など、さまざまに目もあやなる清らをつくされたり。同じ文もまじらず。心にかはりて、いみじうぞ侍りける。後嵯峨院、蓮華王院御幸ありし時、兩貫首具氏・忠方おなじやうに藤の下がさね、山吹のうへの袴なりしをば、いと念なきことに世の人もいひ侍りしにや。御かたがたの女房ども八十餘人おしこみてさぶらはる、いづれともなく目うつりして、いみじうかたちも氣色もめやすくもつてたり。後鳥羽院建仁のためしとて、新院龜山御上靴三足ばかり立たせたまひて落されぬ。内の上後宇多御直衣、紺地の御袴、はじめは御草鞋を奉りけれど、のちには御沓片足がはりの御襪、藍白地竹、紫白地桐の文、紫革の御ゆひ緒なり。春宮伏見御直衣、紫の御指貫、おなじ色革の御襪。新院龜山織物の御直衣、御指貫、文なき紫の御襪。關白兼平文なきふすべ革、内のおとど家基紫革

紫草に白い桐の紋(右)の足袋。

(二六)足袋の紐。

(二七)地を松葉の煙で燻べたもの。

(二八)紫地の草に白い紋を出す。

(二九)従叔姪のごく親しい中で。

爲家―爲氏―爲世―爲道

―爲教―爲兼

(三〇)京官除目。

(三一)毎年三月九月の三日、北辰を祭つて燈明を獻する御饗。

(三二)御手本をさし上げられた。

(三三)指貫のくくり緒を踵の上でくくり結んで歩きよくする。

(三四)西園寺邸内の佛堂。

に菊をぬひたり。藤大納言爲氏無紋のふす草、そのほか色の錦皮(にしきまは)・藍皮(あぶらび)・

藍白地(あぶらしろ)、おのおのけちめわかるべし。爲兼紫草、爲道は藍白地なりけり。爲兼

とは爲氏の大納言の弟、兵衛督爲教といひしが子なり。爲道は大納言爲氏の孫、

爲世の太郎なり。離れぬ中にていといたく挑みかはしたり。内の上後宇多は白

骨(ほね)の御扇左の御手に持たせたまひて、花のいみじく面白き木蔭に立ちやすらひ

たまへる御容貌、いとゆゆしきまできよらに見えたまふ。飽かず名残(なごり)多く思さ

るれど、春(はる)の司召(つかひ)、御燈(みとう)などいふことどもあれば、行幸は今宵かへらせたま

ふ。御贈物に御本(みほん)まゐる。

明くる日、午の時ばかり、寢殿より西園寺まで筵道(えんどう)しきて、兩院後深草・龜山

御烏帽子直衣、春宮伏見御括り上げて、堂堂(どうどう)拜ませたまふ。左衛門督公衡、新院

龜山の御佩刀(はかし)持たまへり。權亮(ごんりやう)親定、春宮の御佩刀(はかし)持たれたり。妙音堂に御ま

わりあるに、遅き櫻一本ほころびそめて、今日の御幸(みさき)を待ちがほなり。佛の御

前に、かりそめの御座(みま)ながら、みなわたらせたまふ。廂(ひまし)に上達部(じやうたつ)つきて、御遊

の具召す。笛花山院大納言長雅、笙左衛門督公衡、篳篥兼行、春宮伏見御琵琶、

大夫實兼等、太鼓具懸、鞀鼓(かづこ)、範藤、盤涉(ばんじやう)調にしらべとのへて、採桑(さいそう)老・蘇

(一)節會などの儀式ばつた音楽よりも、かへつて優雅である。

(二)和漢朗詠集、張讀。「花は上苑に明らかなり、輕軒九陌(きやうくわんきゅうまつ)はく)の塵に馳す。猿空山(さるくうさん)に叫ぶ、斜月千巖の路をみかく)上苑は漢武帝の上林苑。

(三)和漢朗詠集、菅原道眞。「羅綺の重衣たる、情なきことを機婦に妬み、管絃の長曲にある、をへざることを伶人に怒る」

(四)残り惜しいままに終つた妙音堂での音楽をしるんで、そのままの調べを移して。

(五)五曲。

(六)和漢朗詠集、大江澄明。「山また山、いつれの工(たくみ)か青巖の形を削り成せる。水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出だせる」

(七)本朝文粹九、道眞「變態繽紛、神也又神也」

(八)水の底にも耳を傾ける者があつて、身もよだつばかりの鬼氣が感じられた。

合・白柱・千秋樂など、いみじう面白し。うるはしきことよりもなかなか艶なり。兼行「花上苑に明らかなり」とうち出だしたるに、いとどもの音もてはやされて、えもいはず聞ゆ。具顯・範藤など「羅綺の重衣」と二返りばかりいへるに、「情なきことを機婦に妬む」と本院後深草加へたまへば、新院龜山御聲助けたまふほど、そぞろ寒きまで艶なり。歸らせたまひても、また昨日の花の蔭にて鞠御覽ぜられつつ、それよりやがて御船に奉りておし出でたれば、遙かなる海づらに漕ぎ離れたらん心地して、いとをかし。小き舟に上達部乗りて、橋につけられたり。飽かさりつる妙音堂の調子をうつされて、ありつる同じ人人つかうまつる。春宮伏見また御琵琶、箏の琴は右衛門督といふ女房御船にまゐるるに弾かせらる。船の中のしらは、いと艶なり。蘇合の五帖、輪臺・青海波・竹林樂・越殿樂など、幾返りともなくおもしろし。兼行「山また山」などうち誦じたるに、「變態繽紛たり」と兩院後深草・龜山あそばしたるに、水の底もあやしきまで、身の毛たちぬべく聞ゆ。中島に御船さしとめて見れば、舊昔年ふりたる松の枝さしかはせる岩のたたずまひいと暗がりたるに、池の水波心のどかに見えて、名も知らぬ小鳥どもみだれ飛ぶ氣色、なにとなくをか

(九) 仙人の棲む洞穴。

(一〇) 和漢朗詠集、白樂天の「三五夜中新月の色、二千里外故人の心」による。

(一一) 我らの舟は雲の浪・煙の波をわけて、ここまで漕いで来た。

(一二) 行く末の遠い君の御代だといふので、かくは遠い沖まで。

(一三) 昔の御代にもなほ立ちまさつて、御調物が澤山献上される。

(一四) 神の御意のままに、准後のやうに九十の上にさらに老いの齡をお重ねなさい。

(一五) それも結構だが、立つたり、坐つたりするのも苦しい世の習ひでね。

し。遠きさかひに臨める心地するに、めぐれる山の瀧つ岩根、遙かにかすみて

見わたさるるほど、やまはたと仙の洞ほらもかくやとぞおぼゆる。

「一〇二千里の外の心地こそすれ」などのたまひて、新院龜山

二雲の波けぶりの波をわけてけり

六誰にかあらん、女房の中より、

一三行末遠き君が御代とて

東宮の大夫實兼、

一三むかしにもなほたちこゆる御調物

ともむき具顯の中將、

曇らぬかげも神のまにまに

東宮伏見、

一四九十になほもかさぬる老のなみ

本院後深草、

一五たちゐる苦しき世のならひかな

暮れはつるほどに、釣殿つりどへ御船寄せて、おりさせたまひぬ。

- (一)唐の青龍寺の僧。弘法大師の師。
(二)掃部寮の官人が。

(三)後深草土皇が東宮の御代を待ち遠しく思しめしてゐるだらうと、御同情申し上げてか。

(四)御讓位のことを。

(五)一周忌。

(六)亡き跡を訪ねて、上皇御親ら追善して下さる光榮を思ひ出しては、故人の二位は雪の下に埋もれてゐても、永く身にしみて有難たいことに感激するでせう。

(七)故人の罪障もこの雪のやうに消えてしまへと、朕はわざわざ雪の中で追善の法事を修したのであるよ。

春宮伏見こよひ歸らせたまへば、御贈物に和琴一つ奉らせたまふ。まことや、准后貞子にも、惠果いけ和尚の三衣みつぎぬ、紺地の錦につつみて、銀しろがねの箱に入れてまゐる。いづれも大宮院儲子の御沙汰なり。掃部寮火しげうともして、うち群れつつゐたるさまも、なまめかしうみやびかなり。ここかしこにも、この御賀のことも書きつけしるす人のみぞ多かめれば、片はしだにいとかたくなならんとあさまし。

なにとなく過ぎ行くほどに、弘安も十年になりぬ。この帝みかど 後宇多位に即かせたまひて十三年ばかりになりぬらん。本院ほんいん 後深草待ち遠とほに思さるらんといとほしくおしはかり奉るにや、例の東あづまより奏することあるべし。新院龜山の御かたざまには心細うきこしめし惱むべし。去年こぞの春、御乳母めのとの按察あんさつの二位殿うせにしかば、一めぐりの佛事に龜山殿へおはしまして、いかめしう八講行はせたまふ日、雪いたう降りければ、九條の三位隆博、檜扇ひらふたのつまを折りて、

跡あととめてとはるる御代の光をや雪のうちにもおもひいづらん
女房の中にきこえたるを、院龜山御覽じて、返しにのたまふ。

なき人のかさねし罪も消えねとて雪のうちにも跡をとふかな

(八)後宇多天皇御退位。

(九)御性格も大層端正で、御思慮も沈着で、毅然としたところがあまりになり。

(一〇)新院は仙洞御所で御覽遊ばしてゐる天下の政治もだんだん主上にお譲り申し上げようかななどおほしめしてをられたのに、大層あつけなく御代が變つたのを、面白くないことに思されるであらう。

(一一)世間は後深草院方と龜山院方とにわかれて、人の心も、かういふ場合には、善惡正邪がはつきりあらはれた。

(一二)新帝も故山階左大臣實雄公の御外孫であるから。

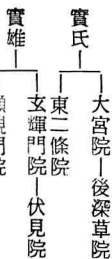
(一三)實雄公一門の公達だけはどこちらにも排斥されない人で。

よろづ飽かず思さるるほどなれど、その年の十月におりゐさせたまふ。もとの上後宇多は二十一にぞならせたまひける。御本性もいとうるはしく、のどめたるさまにおほしく、すくよかに、御才もかしこうめでたうおはしませば、御政事などもやうやう譲りやきこえましなど思されつるに、いとあへなくうつろひぬる世を、すげなく新院龜山は思さるべし。春宮伏見位に即きたまひぬれば、天下本院後深草におし移りぬ。世の中おしわかれて、人の心どもかかる際にぞあらはれける。今の帝伏見も、故山階の大臣實雄の御孫にてわたらせたまへば、かの殿原のみぞいづかたにもすさめぬ人にておはしける。

(一) 卷名は伏見院讓位の後、五節の頃の「をとめ子がさすや小櫛の云云」の御製による。記事は、正應元年伏見院即位から嘉元三年龜山院崩御に至る。伏見院后永福門院の入院、淺原爲頼内裏亂入事件、龜山院妃掬子と源有房との邪戀、征夷大將軍惟康親王の貶謫、後伏見院・後二條院の迭立、後深草・龜山兩法皇の崩御などを記す。卷末の後醍醐天皇の少時の文藝生活の片影も歴史的興味がある。

(二) 藤子、後深草妃、伏見母、左大臣實雄第三女。

(四) 後深草院が御叔母東二條院を中宮となされた御前例。



(五) それほどまで天下晴れての御待遇は、おできになるまい。

(六) 三位様の御兄の公守の大納言の姫君も御幼少から大切に養育され、主上の御傍近くお仕へ申され

第十一 さし櫛

正應元年三月十五日、官の廳にて伏見御即位あり。このほどは香園院師忠かぞのの左の大臣おとど關白にておはしき。その後、近衛殿家基、また九條左大臣殿忠教、その後また近衛殿還りなりたまひき。なほ後に歡喜園院兼思などいとしげうかはりたまふ。おりぬの帝みかど後宇多を今は新院ときこゆれば、太上天皇 後深草・龜山・後宇多 三人世におはしますころなり。いとめづらしく侍るにや。帝みかどの御母 玄暉門院 三位したまふ。その御はらからの姫君 顯親門院 御かたはらにさぶらひたまふを、上伏見いと忍びたる御むつびあるべし。東二條院 公子の御ためしにやなどささめく人もあれど、さばかりうけばりては、えしもやおはせざらん。三位 殿 玄暉門院 暉子の御せうとの公守大納言の姫君も、幼くよりかしづきてさぶらひたまふ。それもよそならぬ御契ちがひりなるべし。この君をぞ父の殿 公守もいとうるはしきさまにても、まゐらせまほしう思おもいつれど、西園寺大納言 實兼の姫君 水福門院 鏡子 いつしかまゐりたまへば、きしろふべきにもあらず。その年正應元年

た。それとも浅からぬ御關係のやうである。

(七) 堂堂と正式に入内させたいと思つたけれど。

(八) 成女式で、初めて裳を著ける。

(九) 先帝の御代にも、姫君を入内させられる御豫定との噂はあつたが、どういふわけか、それは實現しなかつたので、今度はいつの間にか、かうなつたのは、やはり龜山院の御かたをお疎みなさる御心があつたのだらうと、露骨に變な風と言ふ人もありました。

(一〇) 永正本「きよらにと」
(一一) 萬事につけ世間の人の心も昨日よりも今日はと華美に傾くやうであるから、一層新機軸を見せて好ましく御立派である。

(一二) 御裳の腰紐をお結びになり。元服の加冠役に相當するのが、腰結の役である。

(一三) 御里方、實兼の本郎の者。

(一四) 續松、松明。

(一五) このかたは三條といふ呼名がつけられたのを、下藁の名みたいでいやなことと大層お嘆きになつたけれど、他の人人が先きになつた二條などにつけてしまつたので

六月二日 鐘子入内あり。その夜まづ御裳著したまふ。さきの御代後宇多にもあらまはきこえしかど、いかなるにか、さもおはせざりしに、いつしかかうもあ
りけるは、なほおぼす心ありけるなめりとぞ、うちつけに、ひがひがしう言ひ
なす人も侍りける。この姫君 鐘子の母北の方は三條坊門通成の内大臣の女 龜子
なり。さぶらふ人人も、おしなべたらぬ限りえりととのへ、いみじう清らなる
にと思しそぐ。よろづ、人の心も昨日に今日はまさりのみ行くめれば、いや
めづらに好ましうめでたし。おほかた、大宮院 姑子の御まゐりの例を思しなす
らふべし。院 後醍醐の御子にこれもまたなりたまふとて、東二條院 公子 御腰結は
せたまひて、時なりぬれば、唐廂の御車に奉りて、上達部十人、殿上人十餘人
本所の前驅二十人、ついで松ともして、御車の左右にさぶらふ。出車 十輛、一
の左に母北の方 龜子の御妹一條殿、右に二條殿、實顯の宰相中將の女、大納言
實兼の子にしたまふとぞきこえし。二の車左、久我大納言 雅忠の女、三條とつ
きたまふをいと辛いことに歎きたまへど、みな人先だちてつきたまへれば、あ
きたるままとぞ慰められたまひける。右に近衛 源大納言 雅家の女。三の左
に大納言 君、室町宰相 中將 公重の女、右に新大納言、同じ三位兼行とかやの

残つた名をそのままにつけたのだと慰められなかつた。

(一)うるさくしてはぶきます。

(二)両親が揃つてゐて、少しも缺點のないのを選びそろへられた。

(三)天皇の鏡子姫へのお手紙。

(四)貴女が入内されて、宮中において千年もお榮えになる第一日だといふので、けふの日はかくも久しく暮れがたいのであるか。どうも貴女にお逢ひする今宵が待ち遠しくてならない。

(五)花山院家教が心得てゐるとお聞きになつたから、使をやつてお包ませになつたと聞きました——と老尼が語ると、いつの間にか局に歸つて来た、老尼のつれて来た侍女が、「いつぞや、御消息の使の中將が包まれたとお話なされたではありませんか」と抗議する。

(六)張つて光澤を出した蘇芳色。

(七)白地に花田の小紋などを摺つたもの。

(八)菱の重文、三本の筋を交叉して菱としたもの、大文ともいふ。

(九)上級の女官も下級の女官も。

女、四の左宰相君、坊門三位基輔の女、右治部卿兼倫の三位の女なり。それより下は例のむつかしくてなむ。多くは本所の家司、なにくれが女どもなるべし。童・下仕・御雑仕・はしたものに至るまで、髪かたちめやすく、親うち具し、少しもかたほなるなくとのへられたり。

その暮つかた、頭中將爲兼朝臣御消息もてまゐれり。内の上伏見みづからあそばしけり。

雲の上に千代をめぐらんはじめとてけふの日影もかくや久しき

紅の薄様、おなじ薄様にぞ包まれたんめり。關白殿師思「つつむやう知らず」とかやのたまひけるとて、花山家教に心得たると聞かせたまひければ、つかはして包ませられけるとぞ承りしと語るに、またこの具したる女、「いつぞやは、御使實教の中將とこそは語りたまひしか」といふ。

女御の御よそひは、蘇芳のはり一重がさね、濃き裏のひへぎ、濃き蘇芳の御うはぎ、赤色の御唐衣、濃き御袴、地摺の御裳奉る。女房のよそひ、おしなべてみな蘇芳のはり一重がさね、紅のひへぎ、濃き袴、蘇芳のうはぎ、青朽葉の唐衣、薄色の裳、三重だすき、上下同じさまなり。まゐりたまひぬれば、藏人

(二〇) 殿車で宮中の出入をゆるされる宣旨。

(二一) 女御の御兄君の中納言公衡卿は檢非違使別當を兼ねてゐられたが、女御の母君の御甥の左衛門督通重卿も、女御の御兄君に準ずるの沙汰があつたから、御屏風や御几帳を立てる役を手傳はれる。

(二二) ヤがて輦車は書の御座（清涼殿内主上常の御座所）へ寄せられ、御衾を御ふ役を、女御の御母君の二位殿が遊ばされる。

(二三) 御寢室、日の御座の北隣。

(二四) 肝入りなされる。

(二五) 新婚第三夜の祝儀の餅。

(二六) 婿の杵を舅姑が抱いて寝るのが、當時婚姻の一習慣であつた。

(二七) 御露顯、結婚披露。

(二八) 御給仕。

左衛門權佐俊光うけたまはりて、手ぐるまの宣旨あり。殿上人まゐりて御車ひき入れ、御せうと中納言公衡別當かねたまへり。うへ顯子の御甥の左衛門督通重、御せうとにならずらふるよしきこゆれば、御屏風御几帳たてらる。日の御座へ、御車より、御衾、二位殿顯子まゐらせたまふ。御臺まゐりて、やがて夜のおとどへ御のぼり。この御衾は京極院信子のめでたかりし例とかやきこえて、公守の大納言沙汰し申されけるとかや承りしはまことにや侍りけん。三夜のもちひも、やがてかの大納言沙汰し申さる。内の上伏見の夜のおとどへ召して入らせたまひたる御草鞋をば、二位殿顯子とりて出でたまひて、大納言殿實兼と二人の御中に抱きて寝たまふときこえし。さきさきもさることにこそは侍りけめな。

八日、御所あらはしとて、うへ伏見わたらせたまへば、袖口ども心ことにて、わざとなく押し出ださる。今日は、おのおの紅の一重がさね、青朽葉のうはぎ、二藍の唐衣なり。大納言殿實兼もさぶらはせたまふ。上伏見も御臺まゐる。二位殿顯子御陪膳、女御顯子のは一條殿つかうまつりたまふ。女御の君は蘇芳のはり一重がさね、紅のひへぎ、青朽葉の表著、赤色の唐衣、二重織

(一) お美しい盛りに成人せられ、すつかりととのつていらつしやるのは。

(二) 湯殿に仕へる卑しい女官。

(三) 下臺所、下級の者の食物を調理するところ。

(四) すぐそばの間で、天皇御附の女官が陪觀される。

(五) 女御の御局で。

(六) 經青緯蘇芳の織物で裏が青のもの。

(七) 立涌は波形の立模様、その中に竹の葉の紋のあるもの。

(八) 菓子器。

(九) 御厨子所の女官。

(一〇) 合器、蓋附の椀。

(一一) 片方に口がある御銚子。

物、唐の薄物の御裳、濃きあやの御袴、御髪いとうるはしくて、盛りになびととのほりたまへる、いと見所多くめでたし。御供にまゐりたまへる人人、右大臣忠敏・内大臣家基・大納言左大將兼忠・花山院中納言家敏・權大夫公衡、殿上人どもあまた、ここかしこのうち橋・渡殿などに、けしきばみつ群れぬたるも、艶なる心地すべし。上達部の勲盃はてて後、内伏見の御かたの御乳母をはじめて、内侍・女官ども、釜殿まで祿たまはる。十日夕つかた、下大所の御覽あり。臺盤所の北の御壺へまゐる。同じそばの間にて、内伏見の御かた御覽ぜらる。やがて東面より女御鏡子も御覽す。二位殿顯子・一條殿・二條殿をはじめて、上臈だつ人人あまたさぶらひたまふ。御簾の外にも、上達部あまたさぶらはる。いとはればれし。十四日、また内の上伏見入らせたまひて、こなたにて始めて御みききこしめせば、南面へ出でさせたまふ。女御永福門院鏡子蘇芳の御單襲、萩の經青の御表著、朽葉の御小袿、みな二重織物の綾の織、生絹の御袴、御紋竹立涌を織る。上伏見は御引直衣、生絹の御袴、櫛子まゐる。御陪膳一條殿、今日よりはうちとけたる心地にて、女房ども色色の一重がさね、唐衣、さまざまめづらしき色どもをつくして、生絹の袴に著換へたる、

- (二) 御酌をなさる。
 (三) 西園寺邸。
 (四) 朔平門、北の陣とも。
 (五) 威風堂堂としてゐる。
 (六) 主上の御消息の御使の殿上人も、女の装束を肩にかけながら、宮中に歸つて来て、殿上の間の入口に落し棄てたが、これを主殿寮の官人がひろつて始末する慣習になつてゐた。
 (七) 新婚の翌朝、婿から女へ文を遣はす使。ここでは女御のもとへ遣はされた勅使。
 (八) 立後の節會。
 (九) 準備萬端整へられて、お待ち遊ばすさま、大層めでたく、今さら申す必要もないが、父君の實兼卿もつひには大臣の高い位にもお陞りになることは勿論であるけれども、現在さし當つてはまだ官位が低くあらせられるのに、かく障りなく姫君の後の位にお定まりなされたことは、限ない主上の御寵愛の賜物であると、結構な御ことに思はれる。

今少し見どころ添ひて、なつかしきさまなり。得選^{とくせん}楓子^{かえりこ}をもてまゐる。次第に取り次ぎてまゐらす。金の御合器^{ごごうぎ}、銀の片口^{かたぐち}の御銚子^{しやうし}、一條殿御陪膳^{ごばいぜん}、その後女御殿永福門院^{えいふくもんいん}鑾子^{らんし}も御銚子^{しやうし}に手をかけさせたまふこと侍りけり。今宵二位殿顯子^{けんし}今出川^{いまでがわ}へまかでたまふ。輦車^{てんぐるま}の宣旨^{のたまひ}ゆりたまふ。御送りに御子の公衛中納言^{こうゑちゆうなごん}、御甥の通重左衛門督^{とむしげさゑもんとく}など、殿上人どもあまたなり。縫殿^{ぬいどの}の陣より出でたまふけしき、いとよそほし。まことや、御入内^{ごにうだい}の夜の御使^{ごし}、勾當^{こうたう}の内侍^{のうし}まゐれりし祿^{ろく}に、表著^{うはせき}・唐衣^{たうい}を賜はる。御消息^{ごしよき}の御使^{ごし}にまゐられし上人^{うしやうじん}も、女の装束^{まづらひ}かづきながら歸りまゐりて、殿上の口に落し捨つ。主殿^{ぬしやう}司^{つかさど}ぞ取るならひなりける。後朝^{ごせう}の御使^{ごし}には公貫中將^{こうくわんちゆう}なりし。公衛^{こうゑ}の中納言^{ちゆうなごん}對面^{たいめん}して、勸盃^{けんばい}の後、これも女の装束^{まづらひ}かづけらる。

かくて八月二十日、后に立ちたまふ。かねてより今出川^{いまでがわ}の御家^{ごけ}へまかでたまひて、節會^{ふせ}の儀式^{ぎしき}ひき移し待ちとりたまふさまいとめでたく、今さらならぬことなれど、父の殿實兼^{とみかね}もつひの御位^{ごゐ}はさこそなれど、ただ今さしあたりては、未だ淺くおはするに、すがやかに后妃^{ごひ}の位に定まりたまふこと、限りなき御世のおぼえとめでたく見ゆ。大宮院^{おほみやういん}姞子^{しよし}・本院^{ほんいん}後深章^{ごふかあきら}・東二條院^{とうにじょういん}公子^{こうし}みなわたりお

(一)下襲ねの裏を引きへがして綿を抜き返つたもの。

(二)威儀をととのへるために居竝ぶ女官。

(三)たれもかれも、容貌が綺麗で見好い。

(四)前の御代と變つて中宮・皇后・宮・院たちなど別別に大勢いらつしやるから、殿上人たちは五節の祝宴にどうしても出なければならぬ所が多く、頭の痛くなるまで廻り飲み歩く。(五節の舞の後の話)

(五)中園准后藤經子。

(六)大嘗優れて御幸運な宮である四月二十五日立坊、二歳。

(七)中宮の御猶子となされた。同

はしまして、見奉りたまふさへぞやんごとなき。今日は紅のはりひとへがさね、ひへぎ、女郎花の表著、二藍の唐衣、薄色の裳、すべて二十人、同じ色のよそひなり。このほか、威儀の女房八人、白きはり單襲、濃きひへぎ、同じ袴、女郎花の衣にてさぶらふ。いづれとなく、かたちども清げにめやすし。

その年の十一月八日ぞ、後の宮の御父實兼右大將になりたまひぬる。同じ二十五日、正二位したまふ。このほどは大嘗會、五節などのしる。前の御代にはひきかへて、中宮 永福門院・皇后 遊義門院・宮・院たち、あかれあかれ多くおはしませば、殿上人ども推參のところ多くおはし、頭痛きまでめぐりありく。その年十二月に帝の御母三位殿信子院號あり。朝に准後の宣旨ありて、同じ日夕に玄輝門院と申す。めでたくいみじかりき。

年返りて正應も二年になりぬ。よろづめでたきことども多くて、三月二十三日鳥羽殿へ朝覲の行幸なる。本院後深草は、かねてより鳥羽殿におはしまして、池の水草かきはらひ、いみじう磨かれて、例のことごとしき唐の御船浮かめられて、二十四日舞樂ありき。二十六日にぞ歸らせ給ひける。さても去年の三月三日かよ、經氏の宰相の女中園の准后の御腹に若宮いできさせたまへりし

じことなら、これがほんたうの中宮の御子であられたならばと、父君の實兼の大將などはお考へになつたであらうよ。

(八)先帝の後宇多上皇も皇子が大勢あらせられるから、そのうちの一人を東宮などとお考へになつてゐられたのを、他にとられてしまつたのは、大層不本意であらせられた。

(九)眞魚(まな)の祝、魚の喰ひそめ、東宮がする。

(一〇)紫宸殿御帳の前に左右相對して立つ。紫宸殿は南殿ともいふ。

(一一)神祇官・陰陽寮の官人を召して卜筮させるのである。

(一二)内裏の西面の宜秋門をいふ。右衛門府の官人の詰所がある。

(一三)内侍所等に分屬して、掃除キ點燈を掌る下級女官。

(一四)「こらこら」

(一五)鏡下に用ひる直垂、袴短かゝして、袖・裾に括り緒あり。

(一六)緋にて染めたる革を以て緘したるをいふ。緘とは緒通しの意。

(一七)御寢なるか。

を、太子後伏見に立てまつらせたまふ。いとかしこき御宿世なり。中宮鏡子の御子にぞなし奉らせたまひける。同じうは、まことにておはせましかばとぞ、大將實兼殿などおぼしけんかし。おりゐの帝後宇多も御子あまたおはしませば、坊になどおぼしけるを、ひきよぎぬる、いと本意なし。十月二十五日に一院後深草の御所にて魚まききこしめす。いとめでたきことどもののしり過ぎもてゆく。

同じ正應三年三月四日五日のころ、紫宸殿の獅子・狛犬、中よりわれたり。

驚きおぼして御占あるに「血流るべし」とかや申しければ、いかなることのあるべきにかと、誰も誰もおぼし騒ぐに、その九日の夜、衛門の陣より、恐ろしげなる武士三四人、馬に乗りながら、九重のうちへ馳せ入りて、上に昇りて、女女婦が局つぎの口に立ちて、「やや」といふを見あげたれば、丈高く恐ろしげなる男男の、赤地の錦の鎧直垂ひたれに、緋緘ひもどしの鎧著て、ただ赤鬼などのやうなるつらつきにて、武士「帝はいづくに御よるぞ」と問ふ。女婦「夜のおとどに」といらふれば、武士「いづくぞ」とまた問ふ。女婦「南殿より東北の隅」と教ふれば、南さまへ歩みゆく間に、女婦内よりまわりて、權大納言典侍殿・新内侍殿などにか

(一)ちやうど主上は中宮の御部屋にあらせられたので、別の建物へそつとお逃げ遊ばされ、そこから御母君の玄耀門院の御所の春日殿へ、女官みたいな、大層賤しい姿に變装されて、行幸遊ばした。

(二)女官。

(三)西園寺邸。

(四)淺原三郎行信の孫、小三郎頼行の子で、八郎爲頼と號す。保曆間記に「甲斐の國小笠原一族に源爲頼といふ者あり。(淺原八郎と號す)諸國にて惡黨狼藉を致す、いづくにても見合はむ所にて誅すべき由、諸國へ囑れらる。叶ひ難きによつて、いかなる企てにかありけむ、内裏へまゐりて、夜半に紫宸殿に籠りけり」とある。

(五)中宮の護衛の長で、西園寺家の侍。防戦して、負傷するなど大騒動である。

(六)京都の辻辻に番屋を設け、盜賊を警め市中を衛る武士の詰所。

(七)こなたの鬨聲に合はせる敵の鬨聲が小さくて小勢のやうに聞えたので、安心して内裏にまゐる。

(八)淺原爲頼の長男。

(九)爲頼の八男。

たる。上伏見は中宮の御かたにわたらせたまひければ、對の屋へ忍びて逃げさせたまひて、春日殿へ、女房のやうにて、いとあやしきさまをつくりて入らせたまふ。内侍劍聖取りて出づ。女孺は玄象・鈴鹿とりて逃げにけり。春宮後伏見をば中宮永福門院鐙子の御かたの按察殿抱きまゐらせて、常磐井殿へ徒歩にて逃ぐ。そのほどの心のうちども、いはんかたなし。この男をば淺原の某爲頼とかいひけり。辛くして、夜のおとどへ尋ねまゐりたれども、おほかた人もなし。中宮の御かたの侍の長景政といふもの名のりまゐりて、いみじく戦ひ防ぎければ、疵かうぶりなどしてひしめく。かかるほどに、二條京極の箆屋備後守とかや、五十餘騎にて馳せまゐりて鬨をつくるに、合はする聲僅かに聞えければ、心やすくて内にまゐる。御殿どもの格子ひきかなぐり亂れ入るに、かなはじと思ひて、夜のおとどの御褥の上にて、淺原自害しぬ。太郎なりけるをのこは、南殿の御帳の内にて自害しぬ。弟の八郎といひて十九になりけるは、大床子の脚の下に臥して、寄る者の足を斬り斬りしけれども、さすがあまたして搦めんとすれば、かなはで自害すとて、腸をばみな繰りいだして、手にぞもたりにける。そのままながら、いづれをも六波羅へ昇き續けて出だしけり。

- (一〇)晝の御膳を召される臺。
 (一一)大床子の脚の下に隠れ伏してそばに寄る者の足を切つては倒し切つては倒ししたけれど。
 (一二)切腹して腸を掴み出す。
 (一三)それをそのまま、いづれをも六波羅廳へ昇ぎ續け出して、引き渡した。
 (一四)大體禁中は血で穢れたから、宜しくあるまいといふので、中宮の晝の御座に腰輿を寄せて、兵衛の陣からお出ましになつた。
 (一五)取り調べ詮議するうち。
 (一六)從一位右大臣實親の孫、正二位中納言公泰の子である。
 (一七)憂慮すべき大事件のやうに沙汰するのは、甚だ心外であつた。
 (一八)南禪寺の舊名、龜山院離宮。
 (一九)御心をあはせになつたのでせう。
 (二〇)それにもかかはらず、若し陛下が穩便にでもおすましになるならば、これ以上の事件が発生してまゐるかも知れません。
 (二一)今にもかの承久の亂の時の三上皇遷幸の先例をも持ち出しさうに仰しやるから、大層お氣の毒に以ての外だとおぼしめされて。

ほのぼのと明くるほどに、内伏見・春宮 後伏見御車にて忍びて歸らせたまひて、晝つかたぞまたさらに春日殿へなる。おほかた雲の上げがれぬれば、いかにて、中宮の晝の御座へ腰輿よせて、兵衛の陣より出でさせたまふ。春宮 後伏見は絲毛の御車にて、また常磐井殿へわたらせたまふ。中宮 永福門院鐘子も春日殿へ行啓なる。世の中ゆすり騒ぐさま、ことの葉もなし。

このこと、次第に六波羅にて尋ね沙汰するほどに、三條宰相中將實盛も召し捕られぬ。三條の家に傳はりて、鯨尾とかやいふ刀のありけるを、この中將實盛 日ごろ持たれたりけるにて、かの浅原自害したるなどいふことども出で来て、中院龜山も知らし召したるなどいふきこえありて、心憂くいみじきやうにいひあつかふ。いとあさまし。中宮 永福門院鐘子の御せうと權大納言公衡、一院 後深草の御前にて公衡「このことは、なほ禪林寺殿 龜山院の御心あはせたるなるべし。後嵯峨院の御處分を引き違へ、東よりかく當代伏見をも据ゑ奉り、世をしろしめさすることを 快からず思すによりて、世を傾けたまはんの御本意なり。さてなだらかにもおはしませば、まさることや出でまうでこん。院龜山をまづ六波羅に遷し奉らるべきにこそ」など、かの承久の例も引き出でつべく申し

(一)ほんたうでないことでも人といふものはよく作り出して言ひ觸らすものである。故法皇があゝの世で思ひ患らはれる御尊慮のほども大變恐れ多い。

(二)でも、主上の仰せでございませうなどと、殿しいことを申し上げたから、それを傳へ聞かれた中院も、新院も驚き遊ばされる。

(三)雲行きが大變險惡になつたからしかたがないので。

(四)この事件に全然關係のないことをお誓ひ遊ばされた御消息などを。

(五)もはや御出家遊ばされるであらうとの御噂があつたかたは實現されないで、思ひがけない龜山上皇が、このやうにさつさと遁世されたりして、ほんたうに人生といふものは分らぬものである。

(六)緑色の法衣。

(七)禪僧の著る、兩肩から胸に掛ける方形の袈裟。

(八)御愛妾たち。

(九)田樂法師玄駒の女。

(一〇)剃髪したり、里邸へ退つたりなど。

たまへば、いといとほしうあさましと思して、後深草「いかでかさまであらん。實ならぬことをも、人はよくいひなすものなり。故院の亡き御影にも、思ふことこそいみじけれ」と涙ぐみてのたまふを、心弱くおはしますかなと見奉りたまひて、「なほ内伏見よりの仰せ」など、きびしきことどもきこゆれば、中院後宇多も、新院龜山院も思し驚く。いとあわただしきやうになりぬれば、いかがはせんにて、知ろしめさぬよし誓ひたる御消息など、東へ遣はされて後ぞ、こと静まりにける。

さて九月のはじめつかた、中院龜山は御髪おろさせたまふ。いとあはれることども多かるべし。禪林寺殿にて、やがて御如法經など書かせたまふ。一院後深草の世の中恨み思されし時、既にときこえしは、さもおはしませで、かくすがやかにせさせたまひぬる、いと定めなし。暫しは禪僧にならせたまふとて、緑衫の御衣に、掛絡といふ袈裟かけさせたまへり。四十一にぞものしたまひける。御法名金剛覺と申すなり。新陽明門院位子をはじめ奉りて、色色の御召人ども、廊の御方、讃岐の二位殿壽子など、淋しき院に残りて、あるは様かへ、あるは里へまかでなど、さまざま散り散りになるほど、いと心細し。

(二)もとから大した御寵愛もなかつたから、上皇が御出家されるといふ場合でも、別に御名残惜しくも存じ上げなかつたであらう。

(三)どこからどこまで美しくあらせられるのを、惜しいことに。

(四)ものの役に立つ人。

(五)雨に濡れて。

(六)これらに御宿衛を致させませう。私も今夜は侍の詰め所に伺候することにしませう。

中務の宮宗尊親王の御女おんな掬子くしこはもとよりいとあざやかならぬ御覺えなりしかば、世を捨てさせたまふ際きはとても、とりわきたる御名残もなかるべし。禪林寺のうへの院の、人はなれたるかたに据ゑきこえさせたまへれば、ことにふれていと寂しく、心細き御有様なるを、おのづから言こととひきこゆる人もなし。源氏の末の君に、中將ばかりなる人有房院龜山に親しくつかうまつり馴れて、家もやがてそのわたりにあれば、ほど近きままに、をりをりこの宮掬子の御とのゐなど心にかけてつかまつるを、さぶらふひとびともいとありがたくもと思ふ。宮の御かた掬子はこのころいみじき御さかりのほどにて、まほまほにうつくしうおはしますを、あたらしう見奉りはやす人のなきことと思ひあへり。

七月ばかり、風あららかに吹き、稻妻いなづまけしからずひらめきて、神鳴りかみなさわぐ常よりも恐ろしき夜、はかばかしき人もなければ、上下かみもといとあわただし、心細う思しまどふ。法皇龜山は龜山殿に過ぎにしろよりおはしませば、近きあたりにだに人のけはひも聞えず、あはれなるほどの御有様にて、墨をすりたらんやうなる空の氣色のうとましげなるをながめさせたまふほどに、例の中將ちゆうじやうそぼちまゐりて、侍さむらいめく者一二人、弓など持たせて、有房いふぶ「御宿直ごしゆくちゆうつか

(一)それから中将は宮のいらつしやる母屋の廂の間の勾欄に寄り掛つて、香染めのやはらかい狩衣に薄紫色の指貫をくつろかに穿いてゐる様子で、しめやかにお話ししながら、ひどく夜がずつとふけるまで、御前にぞつと伺候せられるから、御簾の中にゐられる宮も御心を遣はれて、一寸した返事など遊ばす。

(二)宮がお臥みになつた横に。

(三)「長の年月戀ひ慕ひ申し上げてゐる自分の心を、恐れ多くもあり、怪しからぬことと反省して、大分我慢してゐまして、まう我慢がしきれなくなつたので、ほんの少し、かうして胸の中だけなりと落ち着けようと思ひまして。ただそれだけのことで」などと非常に眞剣になつて申し上げるのは、先刻ゐた中将であつた。

(四)身近い手廻り、御ふるまひのあてやかな御様子に、まして胸の思ひを募らせこそすれ、抑へやうがないから、大層お氣の毒で、突然なこととは思ひながら、すつかり本意を遂げてしまはれた。

(五)宮は御身の不幸の際限もない

うまつらせ侍るべし。なにがしも侍のかたに侍らん」など申すにぞ、いささか頼もしくて、人人慰めたまふ。おはします母屋にあたる廂の勾欄におしかかりて、香染のなよらかなる狩衣に、薄色の指貫うちふくだめるけしきにて、しめじめと物語しつつ、いたうふけゆくまで、つくづくとさぶらひたまへば、御簾のうちにも心づかひして、はかなきいらへなどきこゆ。暁がたになりぬれば、御几帳ひきよせて、大殿ごもりぬるかたはらに、いと馴れがほに添ひ臥す男あり。夢かやとおぼして御覽じあげたれば、有房「年月おもひきこえつるさま、おほけなくあるまじきことと思ひかへさひ、こころ忍ぶるにあまりぬるほど、ただ少し、かくて胸をだにやすめ侍らんばかり」など、いみじげにきこゆるは、はやうありつる中将なりけり。いとうたて心變のわざやと思すに、御涙もこぼれぬ。近き手あたり、御もてなしのなよびかさなど、まして思ひしづむべうもなければ、いといとほしう、ゆくりなきこととは思ひながら、残りなうなりぬ。身のうさの限りなうもあるかなと、前の世もうらめしう、いふかひなきことを思しつづけて、よよと泣きたまふさま、いよいようたし。見るとしもなき夢のただちをうち驚かす鐘の聲、鳥の音も、人やりならぬ心づくしに、え出

ことよと、前世も怨めしく。
(六)夢の直路、ひたすら夢をみる
こと。

(七)わが身から出た惱みの種。

(八)お別れ申し上げて、あてども
なく起きて出て行く途に生えてゐ
る芝に、置く露は朝日が出るゝ消
えてしまふものであるが、それよ
りも先きに自分は死んでしまふこ
とであらう。

(九)と詠じて、出かねて躊躇して
ゐる面持ちもたかが中將風情では
なんの御目にとまる點もない。

(一〇)あんなに優雅であらせられた
龜山上皇をお見馴れになつた御目
には、比較にもならないあさまし
い契りの様であると思ひ知られる
につけても、情ないから。
(一一)宮の御許の按察の君といふ侍
女が、中將の甘言に乗せられて、
宮の御臥所に中將をお導き申した
のであらう。この按察の君をとほ
して内密に御文が頻繁に参るのも
大層不快な事に思はれながら、そ
のまま濟まないのが、男女の仲の
ならひだから、大變お氣の毒なこ
と(御懷妊)さへ出来られたので
ある。

でやらす。

起き別れ行く空もなき道芝の露よりさきにわれや消なまし

出でがてにやすらひたる面影も、なにの御目とまるふしもなし。さばかりいみ
じかりし院舞山の御目うつりに、こよなの契りのほどやとおぼし知らるるもつ
らければ、いらへもしたまはず。あさましようも、心憂くも、さまざまおぼし亂
るるに、御心地もまめやかに損はれぬべし。按察の君といふ人、語らひとられ
けるなめり。忍びて御消息しげうきこゆるをも、いとうたて心づきなう思され
ながら、さてしもはてぬならひにや、いとまたあはれなることさへものしたま
ひけり。かかるにつけても、この世ひとつにはあらざりける御契りのほど、淺
からずおしはからる。中將も世とともにあくがれまさりて、夢の通ひ路、足も
やすめずなりゆく。この御氣色もやうやうしるきほどになりたまへば、空おそ
ろしとて、忍びて御乳母だつ人の家などいひなして、白河わたり、かごやかに
をかしき所用意して、ゐてわたし奉りつつ、なほみづからは、さすがに世の慎
ましければ、忍びつつぞ御宿直しける。そこにこそ御子も生みたまひけれ。

この中將、さえかしこくて、末の世にはことのほかにもてなされて、まづ一

(二)御懷妊の様子もだんだん人目

につくほどになられたから。

(三)ひつそりした。

(四)從一位に敘せられて。

(一)位階だけは、自分は幸ひに一位といふ最高の位階に上ることができたが、やはりそれだけでいふのもほしくなく、その上に高い官職をもほしくといふ欲望が残つてゐる。位山——飛驒の名所、位階に取りなす。峯に生ふる松——位山の縁語で、高き官職を意味す。

(二)若い時代に螢雪の功を積んだお蔭で、豫想以上に立身することが出来た。(嘉元御百首の中)

(三)源通光の孫、通有の子。

(四)龜山上皇の御妃の宮との御關係は、そのお若い時代のことであらう。

(五)別棟にさし出した室。

(六)姫君。

(七)北の方になられて。

(八)御遺産など澤山に。

(九)かういふ艶つばいお話しばかりして、上つたかの御ことを申し上げるのは、おしやべりの咎の免れやうありませんが、當今の貴顯のかたがたも、ひよつとして御懸

品して、しばしおはせしころ、御百首の歌に、

位山のぼりはてても峰におふる松に心をなほ残すかな

さてつひに内大臣まで昇られき。さて元應のころかとよ、百首歌奉りし中に、

あつめ來し窓の螢のひかりもて思ひしよりも身を照らすかな

と詠まれ侍りき。有房ときこえしが、若くての世のことなるべし。

新陽明門院位子も、禪林寺殿のしもの放出はなちいでにつれづれとしておはしますほど

に、松殿宰相中將兼かねつて嗣、いかがしたりけん、常にまゐりたまひしほどに、はてに

は、その宰相中將の御子に、世をのがれたる人ありき。その御房頼悟男におぼ

しうつりて、限りなく思したりしほどに、御子おをさへ生みたまひき。その姫君

はじめは富小路中納言季雄の北の方にておはせしが、後には歡喜園院の攝政

兼思ときこえたまひし末の御子に、基教もとりのりの三位中將ときこえし上うへになりて失せ

たまふまでおはしき。故女院新陽明門院位子いとほしくしたまひしかば、御處分おそこぶ

などいといと猛まうにありき。尼に「さのみかかるとどもをさへきこゆるこそ、

もの言ひさがなき罪さりとどころなけれど、よしや昔もさることありけりと、こ

のころの人の御有様も、おのづから輕きことあらば、思ひゆるさるるためしに

輕しいことがあるならば、寛大に取り計らはれる前例にもなるだらうと思ふので、遠い昔の人の御ことは今はなににも御遠慮申すことはあるまいと存じますから、少しづつお話しするのです。

(二〇)そこで記者が「まあ、一體、昨今ではどなたが不良でいらつしやるの」とたづねると。

(二一)「いやいや、それは恐しくて申せません」と尼が答へて。

(二二)鶴岡八幡宮。

(二三)毎年八月、石清水八幡では社前の川へ魚を放つ神事がある。

(二四)社前の反橋。

(二五)獅子舞。

(二六)大勢の武士どもが並びある光景は、都とは様子が変わつてゐて、誇りかに威風四邊を拂つて、至極愉快らしく鎌倉といふ場所柄につけては無雙に面白く見えた。

もなりてんものぞと思へば、遠き人の御ことは、今はなにの苦しからんぞとて、少しづつ申すなり」と、うち笑ふもはしたなし。「いづら、このころは、誰か悪しくおはする」と問へば、尼「いないな、それはそら恐ろし」とて頭をふるもさすがにをかし。

さて石清水の流れをわけて、關の東にも若宮ときこゆる社おはしますに、八月十五日都の放生會まねびて行ふ。そのありさままことにめでたし。將軍惟康も詣でたまふ。位あるつはもの、諸國の受領どもなど、色色の狩衣、思ひ思ひの衣重ねて出でたちたり。赤橋といふところに、將軍惟康御車とどめて降りたまふ。上達部は袍なるもあり、殿上人など多くつかうまつる。この將軍惟康は中務の宮宗尊の御子なり。このころ權中納言にて右大將兼ねたまへれば、御隨身ども花を折らせてさうぞきあへるさま都めきておもしろし。法會のありさまも本社にかはらず。舞樂・田樂・獅子がしら・流鏑馬など、さまざま所にしつげたることどもおもしろし。十六日にもなほかやうのことなり。棧敷どもいかめしく造りならべていろいろの幔幕などひきつづけて、將軍の御棧敷の前には、相模守貞時をはじめそこの武士どもなみぬたるけしき、さまかは

(一) 執權貞時が管領頼綱の讒によつて、外戚安達泰盛父子を誅した事件。

(二) 流言蜚語が起るといふ間もあらばこそ、將軍が都へ流されるといふ評判があつた。

(三) 遠い僻地の地に流されるといふなら普通だが、一都へ流されたまふとは珍らしい言葉です。

(四) 天皇の御位のかはりめの時と變らない。

(五) ひどく粗末な網代の御輿を向きを逆さに昇き容せてお乘せ申し上げるのも、ほんたうに大變いまいしい光景である。

(六) 一般には。

(七) 日本の武家の棟梁として、それらを従へてゐたのに、今は鎌倉武士に見離され、將軍の位を追はれて。

(八) 御涙を拭はれる御疊紙の音がしきりに御輿の外に漏れ聞える。

りて、好ましううけばりたる心地よげに、所につけてはまたなくは見えたり。

その後いくほどなく、鎌倉中さわがしきこと出で来て、みな人肝をつぶし、ささめくといふほどこそあれ、將軍惟康都へ流されたまふとぞきこゆる。めづらしき言の葉なりかし。近くつかうまつる男女いと心細く思ひ歎く。たとへば、御位などのかはる氣色に異ならず。さて上らせたまふ有様、いとあやしげなる網代の御輿をさかさまに寄せて乗せ奉るも、げにいとまがまがしきことさまなり。うちまかせては、都へ御上りこそいと面白くめでたかるべきわざなれど、かく怪しきはめづらかなり。母御息所も近衛大殿兼經ときこえし御女なり。父みこ宗尊の將軍にておはしましし時の御息所なり。先にきこえつる禪林寺殿龜山の宮の御方掬子も同じ御腹なるべし。文永三年より今年 正應三年まで二十四年、將軍にて天下のかためといつかれたまへれば、日の本の兵を従へてぞおはしましつるに、今日は彼等にくつがへされて、かくいとあさましき御有様にて上りたまふ。いとほしうあはれなり。道すがらもおぼし亂るるにや、御たたら紙の音しげうきこゆるに、猛きものふも涙おとしけり。

さて、このかはりには一院 後深草の御子久明、三條内大臣公親の御女房子御

(九)將軍宣下の御儀が専ら踐祚の御儀のやうな莊嚴な感じがする。

(一〇)鎌倉では前將軍のいらした御殿を改造して。

(一一)管領頼綱の次男。

(一二)前將軍の御歸京の時にお通りになつた道までが不祥だから、その跡も通るまいとて、わざわざ足柄山を避けて上京するなどは、餘りひどいしうちだと思ふ。

(一三)後深草上皇の御所から直ちに六波羅の北館の、前前も將軍の宮のお出ましになつたところへいらつしやつて、そこから。

(一四)御關迎へとて、足柄の關まで將軍奉迎に武士どもが參上した。

(一五)御輿の外側に格子を造り、菊の紋章をつける。

(一六)木賊、青黒色。

(一七)金覆輪の鞍。

(一八)騎馬でお供したのも。

(一九)碗飯、饗應。

(二〇)鎌倉あけての奔走である。

匣殿くげどのとてさぶらひたまひし御腹なり。當代伏見の御はらからにて、今少しよせ

重くやんごとなき御有様なれば、ただ受禪の心地ぞする。もとの將軍おはせし

宮をば造り改めて、いみじうみがきなす。つはものの勝れたる七人、御迎へに

上るなかに、飯沼いひぬまの判官はくわんといふもの、前の將軍さきさき准康のり上りたまひし道もまがまが

しければ、跡をも越えじとて、足柄山をよぎて上るなどぞ、あまりなることに

や。みこは十月三日御元服したまふ。久明の親王ときこゆ。同じ十日、院いんより

やがて六波羅の北方、さきざきも、宮のわたりたまひしところへおはして、そ

れよりぞ東あづまに赴かせたまふ。同じ二十五日、鎌倉へ著かせたまふにも、御關迎

へとて、ゆゆしき武士どもうちつれてまゐる。宮久明は、菊の外とくれんじ櫃子の御輿に

御簾あげて、御覽じ習はぬ夷あまどもうち圍み奉れる、頼もしく見たまふ。しの

ぶを亂れ織りたる萌黄もぎの御狩衣、紅の御衣、濃き紫の指貫奉りて、いと細こまやかに

になまめかし。飯沼いひぬまの判官はくわん、とくさの狩衣、青毛の馬に金きんかなもの鞍おき

て、隨兵いかめしく召し具して、御輿ごごのきはにうちたるも、都にたとへば、行

幸ゆきにしかるべき大臣などのつかうまつりたまへるによそへぬべし。三日がほど

は碗飯わんぱんといふこと、また馬御覽、なにくれといかめしきことども、鎌倉かまくらうちの

(一) 天上界帝釋天の宮殿。善見天の殊勝殿に同じ。

(二) 金・銀・瑠璃・頗梨・珊瑚・瑪瑙・痺凍。

(三) 都において遊ばして、宮といふ名ばかりで、これといつて生計の頼む所がなく、浮草のやうな生活をしてみられるのとくらべると比較にならないほど勝れて結構に豪奢に見えた。

(四) 政事にも關與せず。時宗は弘安七年三月二十八日所勞、四月四日出家、法名演果、同日酉時死、三十四歳。

(五) 長男の相模守貞時といふのに天下萬端のことを申しつけた。貞時、弘安七年七月以後加判形。

(六) 將軍執權次第に、「惟康親王(二品)正應二年九月十三日御上洛(廿六)、十二月六日御出家」とある。

(七) 一層お動かされ遊ばしたのであらうか。

(八) 御受戒遊ばされる。正應三年二月十一日。

けいめいなり。宮の中のかざり、御調度などはさらにもいはず、帝釋の宮殿もかくやと、七寶を集めて磨きたるさま、目もかがやく心地す。いとあらまほしき御有様なるべし。關の東を都の外とておとしむべくもあらざりけり。都におはしますなま宮たちの、より所なくただよはしげなるには、こよなくまさりて、めでたく賑ははしく見えたり。

時宗朝臣といひしもまた頭おろして、法光寺の入道とて、いとたふとく行ひて、世にもいろはず。貞時といふ太郎、相模守にぞよろづいひつけける。上りたまひにし前大將殿惟康は嗟峨のほとりに御髪おろし、いとかすかに寂しくおはす。

かくて年かはりぬれば、またの年正應三年二月のころ、一院後深草御寮おろす。年月の御本意なれど、たゆたひ過したまひけるに、禪林寺殿龜山去年の秋おぼし立ちにしに、いとど驚かされたまひぬるにやありけん。二月十一日龜山殿にて御いむことうけさせたまふ。四十八にぞならせたまふ。御法名素實と申すなり。

正應四年ついで、正月の一日、節會などはてて、夕つかた、内の上伏見皇后宮永福門院鐘子の御か

(九)紅の打衣。

(一〇)表薄朽葉、裏黃。

(一一)髪のかたち。類語面(おも)ざし。

(一二)主上は新年の御挨拶など簡單に申し上げられて、その後は例のとほりただならぬ御臨言ばかり、ひそひそお交し遊ばされて。

(一三)花櫻の桂の取り合はせが美しいのに。

(一四)この方は玄輝門院の御もとで御養育申し上げられたので、その習慣からか、普通の後宮の女性よりも誇りかなところがおおりになる。

(一五)今一人の御妃のお部屋も近いところにあるから、そなたの方に歩いていらつしやる。御心は餘り淑やかでもないが、このかたを主上は普通の御妃のなみ以上に、御寵愛になつてゐるやうだ。

(一六)大層夜がふけてから、夜の大殿に入らせられ、中宮をお召しになられた。

たへわたらせたまへれば、宮水福門院は中濃き紅梅の十二の御衣に、同じ色の御單、紅のうちたる、萌黃の御表著、蒲萄染の御小桂、花山吹の御唐衣、唐の薄物の御裳、けしきばかりひきかけて、御髪ぞ少し薄らぎたまへれど、いとなよびかに美しげにて、常よりもことに匂ひ加はりて見えたまふ。御前に御匣殿、花山院内大臣、龍麩の女、二藍の七つに、紅の單、紅梅の表著、赤色の唐衣、地摺の裳、髪うるはしくあげてさぶらひたまふ。かんざし、容態、これもけしうはあらず見ゆ。新しき年の御悦びなど少しきこえたまひて、例のただならぬ御ことども、うちささめきがちにて、これより公守大納言の女の曹子さしのぞかせたまへば、いとささやかにて、衣がちにて、花櫻のあはひをかききに、山吹の表著、裳ひき掛けて、寄り臥したまへる、あてにらうたし。こまやかにうち語らひきこえたまふ。玄輝門院、懺子の御そばにかしづききこえたまひしならひにや、おしなべての上宮仕へのさまよりは、思ひあがれる氣色なり。

今一所、顯親門院の御曹子も近きほどなれば、そなたさまに歩みおはして、いと心静かならねど、この君をばおしなべての際ならず思すめり。この御腹、顯親門院、季子に御子たちあまたおはしましき。かくめぐらせたまふほどに、いたくふけ

(一) 壯觀を極めた行幸や素晴らしい御催しも多かつたけれど、年をとつたせいで、なにごとともはつきり覚えてをらず、月日なども怪しいですから、いつそ申し上げませぬ。

(二) 五節の舞姫のさす小櫛を見るにつけても、われは帝位にあり、卿は關白の重職にあつて、共にあひたすけ、あひ親しんで來た當時のことが忘れられない。「をとめ子がさすや小櫛の」は「そのかみ」(髪・當時)の有心の序である。

(三) 私も當時の御ことをお懐かしく存じ上げてみましたのに、今また、この五節の舞姫のさす黃楊の小櫛をいただきましたにつけても、ひとしほ去年の今宵がなつかしく思ひ出されます。

(四) 後伏見院の父帝伏見院立太子の時、後宇多天皇より二歳御年上であつた。「草枕」参照。

(五) 後深草法皇皇女、後宇多上皇后。弘安八年八月十九日立后。

(六) 「老のなみ」北山准后御賀の條参照。

てぞ、中宮鐺子^{のち}上らせたまふ。

この御代伏見にも、いみじき行幸どもゆゆしきこと多かりしかど、年のつものになにごともさだかならず、月日などおぼろに侍れば、なかなかきこえず。

ほどなく明けかれて、永仁も六年になりぬ。七月二十一日、春宮後伏見に位讓りて、おりたまひぬ。十一月になりて、五節のころ、去年永仁五年をおぼし出でて、そのをり關白にておはせし兼忠の大臣に櫛遣はすとて、新院伏見、

をとめ子がさすや小櫛^{のかみ}のそのかみにとともに馴れにし時ぞ忘れぬ

御返し、歡喜園前攝政殿兼忠、

いとどまたこぞの今宵ぞ忍ばるるつけの小櫛を見るにつけても

堀川の具守のおとの女基子の御腹に、前の新院後宇多の若宮後二條生まれたまへりし、六月二十七日御元服して、八月十日春宮に立ちたまひぬ。御諱邦治^{はな}ときこゆ。これも内後伏見よりは御年三つまさりたまへり。今の帝後伏見は十一になりたまふ。御諱胤仁^{たねひ}ときこゆ。あてになまめかしうおはします。中宮鐺子の御腹には、おほかた宮もものしたまはねば、この帝後伏見をぞ御子にし奉らせたまひける。讓位の後は、宮鐺子もおりさせたまひて、永福門院ときこ

(七)御注連繩が落ちた。

(八)「これはなにの前兆であらうか」などと、密かにささやき合ふ間もあらばこそ、關東から幕府の御使が上洛するといつて、世の中が騒いで、「今度は龜山院の院政を遊ばす天下になるだらう」とか、専らの評判である。

(九)後二條天皇は後宇多上皇の皇子で、龜山法皇の御孫である。

(一〇)これと取り立てて申し上げられることはなにもない。

(一一)この春には春日神社に行幸があらうと、世間ではまだ早いうちから浮き立つて、いろいろ沙汰しあつてゐたのも、御退位で立ち消えになつて大層淋しい。

(一二)龜山法皇もこのころは一院と御一緒にお住まひのやうである。

(一三)天下の人がまた引き返して、この御一統の方にわれもわれもおなじき申し上げる様も、ほんたうに眼前にあのやうに掌をかへすやうで、よくも移り變る世の中よと情なかつた。

ゆめり。皇后宮始子もこのころは遊義門院と申す。法皇後深草の御かたはらにおはしつるを、中院後宇多いかなるたよりにかほのかに見奉らせたまひて、いと忍びがたく思されければ、とかくたばかりて、盗み奉らせたまひて、冷泉萬里小路殿におはします。またなく思ひきこえさせたまへることかぎりなし。

正安二年正月三日、帝後伏見御元服したまふ。今年十三にならせたまへば、御行末はるかなるほどなり。またの年正月のころ、内侍所の御注連のおりたまへるは、「いかなるべきことにか」など、忍びてささめくほどこそあれ、東より御使上るとて、世の中騒ぎて、禪林寺殿龜山見奉りたまふ世にとや、正月二十一日、春宮後二條位に即かせたまひぬ。おりぬの帝後伏見十四にて、太上天皇の尊號あり。いとさびはにいたはしき御ことなるべし。わづかに三とせにておりぬさせたまへれば、なにごとのはえもなし。この春は、春日の社に御幸などあるべしとて、世の中まだきより面白きことにいひあへりつるも、かいしめりていとさうざうし。さてこの君後伏見を新院と申せば、父の院伏見をば中院ときこゆ。帝後二條の御父後宇多は一の院と申す。法皇龜山もこのころは一つにおはしますなめり。一院後宇多世の政事きこしめせば、天下の人、またお

(一)父君の故大納言顯定卿が後深草帝の時大將を望んでならず、入道された、そのとげられなかつた御本意をはたし、立派に面目を立てられたのは、大層えらい。

(二)御愛顧の人。

(三)伏見上皇の第二皇子、諱は富仁。

(四)崇高な、落ち著いた御様子で、しとやかにあらせられる。

(五)晝の御座の御劔を奉仕して供奉する役。(行幸は太政官廳へ)

(六)内裏還御後、内侍に御劔を逆にわたしたのである。

(七)かへつて縁起をかつぐことになつて悪いでせう。ただ穩便になさるがよい。

(八)しかし、後で思ふと、これは當代が夭折遊ばすといふ不吉な前

しかへし一かたになびきたるほども、さも目の前にうつろひかはる世の中かなとあぢきなし。

土御門の前の内の大臣定實、六月に太政大臣になりたまふ、いとめでたし。

故大納言入道顯定の、本意なかりし御面おこしたまへる、いとゆゆし。院龜山の御覺えの人なるうへ、才もかしこくおはすれば、世に用ゐられたまへり。御子の雅房・中納言親定とて、いづれも才ある人にておはしき。

持明院殿 後深草・伏見には、世の中すさまじくおぼされて、伏見殿に籠りおはしますべくのたまへれど、この御子花園坊に定まりたまへば、まためでたくて、なだらかにておはしますべし。さきにきこえつる御母女院玄鹽門院憎子の御はらからの姫君 季子、顯親門院ときこえし御腹なり。八月十五日、まづ親王になし奉らせたまひて、同二十四日に春宮 花園院に立ちたまひぬ。

かくて新帝 後二條は十七になりたまへば、いとさかりにうつくしう、御心ばへもあてに、けだかうすみたるさまして、しめやかにおはします。三月二十四日御即位、この行幸の時、花山院三位中將家定、御劔の役をつとめたまふとて、さかさまに内侍にわたされけるを、今出川の大い公衛御覽じ咎めて、出仕

兆かと思はれます。

(九)かく後宮が源氏のかたがたで占められる例はめづらしく、至極貴い感じがする。しかしなんとつても、藤原氏でないから、御勢力が微弱で、その點は氣がかりのやうだ。

(一〇)久久で陛下と御對面申し上げたので、おしたはしさがつので、御名殘惜しさにたへず、月を眺めると、その月までが雲の中に入つて光は見えなくなつてしまつた。寂しい極みである。月を主上に、雲の上を禁中になぞらへてゐる。

(一一)御別れして後、御したはしさを、御名殘惜して、御したはし私も同様でございます。しかし、陛下は千年の長壽を必ずお保ちでせうから、けふお別れしても、今後御對面申し上げる機會は無數にありますから、さうお淋しがりなさいませう。

(一二)藤忠子、後に談天門院と號す
(一三)後醍醐天皇の皇姉、後に達智門院と號す。

停めらるべきよし申されしかど、應司の大殿基忠「なかなかなかましくて悪

しかりなん。ただ音なくこそ」と申しとどめたまへりしこそ情深く侍りし

か。後に思へば、げにあさましきことのしるしにや侍りけん。十月二十八日御

禊、このたびの女御代にも、堀川の大^{おとど}臣具守の姫君璵子いでたまへり。今の上

後二條も、源氏西華門院基子の御腹にてものしたまふ。いとめづらしくやんごと

なし。されど、うけばりたるさまにはおはせぬぞ、心もとなかめる。

またの年は乾元元年、六月十六日龜山殿へ行幸あり。法皇龜山殿いとめづら

しくうつくしと見奉らせたまふ。曉歸らせたまひぬるのち、法皇龜山より内

後二條にきこえさせたまふ。

したはるる名殘にたへず月を見れば雲の上にぞ影はなりぬる

御返し、内の上 後二條、

君はよし千歳^{ちとせ}のよはひたもてれば逢ひ見んことの數も知られず

一院 後宇多は忠繼の宰相の女の中納言典侍殿忠子といふ腹にも男女御子たちあ

またものしたまふ中に、すぐれたまへる内親王璵子^{いしん}をいとかなしきものにかし

づききこえさせたまふ。

(一)新後撰集二十卷、正安三年十一月後宇多院の院宣により、前大納言爲世卿撰進。嘉元二年十二月十九日、これを奏す。(拾芥抄)

(二)後深草院皇后、實氏の次女。正應六年六月七日尼となり、嘉元二年正月廿一日崩御。七十三歳。

(三)おこり。

(四)御死穢を避けさせられて、急いで他所へ行啓遊ばされた。

(五)御祈禱の壇をばたばたと毀して、どやどやと亂れ出る法師どもの様子までが、今日を最後とはなやかな法皇の御一生の幕が閉ぢられた世の有様を見せて、大層悲しい。六波羅の貞顯(金澤氏)は南方、憲時は北方時範の誤りで、ともに探題であらう。

この御代後二條にもまた、爲世大納言承りて撰集あり。新後撰集ときこゆ。嘉元元年披露せらる。

かくてまたの年嘉元二年春のころより、東二條院公子御惱み日日におもりたまひて、今はと見えさせたまへば、伏見殿へ出でさせたまひて、つひに失せさせたまひぬ。七十にあまらせたまへば、ことわりの御ことなり。

法皇 後深草もその御歎きの後、をさをさものきこしめさずなどありしをはじめにて、うちつづき快からず、御瘧病^三などきこゆるほどに、七月十六日、二條富小路殿にて崩れ^{かく}させたまひぬ。六十二にぞならせたまひける。いとあはれに悲しきことども、いへばさらなり。御孫の春宮花園も一つにおはしましつれば、急ぎ^四て外へ行啓なりぬ。御修法の壇どもこぼこぼとこぼちて、くづれ出づる法師ばらのけしきまで、今を限りと、とちめはつる世の有様いと悲し。宵過^五ぐるほどに、六波羅の貞顯・憲時^二二人、御とぶらひにまゐれり。京極表^{おもて}の門の前に、床子^{しやうじ}に尻かけてさぶらふ。従ふ者ども左右に竝みゐたるさま、いとよそほしげなり。

またの日、夜に入りて、深草殿へゐてわたし奉る。御車^{くわ}さし寄せて、御棺乘^{くわん}

(六)院の内外どつと泣き叫んだのは、大層無理からぬことで、取り亂さない人はなかつた。

(七)葬送に用ゐる薬で作つた香。

(八)よう御乗車なさらない。

(九)御中陰の間。

(一〇)よととも流れてぞ行く

涙川多もこほらぬ水泡なりけり

(古今集、紀貫之)一生つきるこ

とのない御涙の、乾く間なく御嘆きに暮れられる。

(二)もの思ひのみをしながら寝た寢覺めに、つくづくと見守るにも悲しく思はれる燈明の色よ。

(三)この春、霞の立つてゐるころ、東二條院の御薨去にあひ、喪服を著たが、その喪服にそそいだ涙も乾かぬうちに、今また後深草法皇の崩御にあひ、をりしも立ちこめる秋霧の空のやうに、妾の心も悲しみにくれふたがる。(東二條院は御母、後深草院は遊義門院の御父)

(三)龜山院が。

(四)やにきは立つて行ひすまじれ、いかにも聖僧らしくて。

せ奉るほど、うちとどよみあひたる、いとことわりに、心をさむる人もな

し。院 伏見殿の御前、宮たちなど薬履とかやいふもの奉りて、門まで御送りつ

かうまつらせたまひて、とみにえのぼらせたまはず、御直衣の袖をおしあて

て、遙かにほど經てぞ、御車に奉りて、伏見殿への御送りもせさせたまひけ

る。院のうちゆゆしきまで泣きあへり。後深草院とぞきこゆめる。御日數のほ

どは、伏見殿に宮たち、遊義門院始子などおはします。秋さへ深くなりゆくま

まに、よととも御涙、ひる間なく思しまどふ。遊義門院、

物二をのみ思ひねざめにつくづくと見るも悲しきともし火の色

春三きてしかすみ衣ほさぬまに心もくるる秋霧の空

年返りぬれば嘉元も三年になりぬ。萬里小路殿の法皇龜山また御惱みとて龜

山殿へ移らせたまふ。色色に御修法やなにくれ御祈りどもこちたくせさせたま

へるもしるしなくて、九月十五日のあけぼのにつひにかくれさせたまひぬ。去

年三今年二の世のさがなさ、うち續きたる人人の御歎きども、いはんかたなし。世

を背かせたまひにしはじめつかたは、いと際四だけう聖五だちて、女房など御前に

だにまゐらぬことなりしかど、後にはありしよりなほたはれさせたまひしほど

(一)「たまへりし」の下に「に」を補つて讀む。

(二)「降り積みし高嶺のみ雪溶けにけり清龍川の水の白波」(新古今集、西行法師)により、ふたたび春になつて若返るをいふ。

(三)女院小傳に「大相國實兼二女、正安三年正月十六日、法皇宮に入る(二十九)」とある。

(四)とてもかわゆいものにおぼしめしてをられたのに、せめてまう少し大人びられるまで御覽になることができなくなつたのを、ひどく悲しいことに昭訓門院はお思ひ遊ばされた。

(五)いくらお名残が惜しいとて、御遺骸をそのままにして置くことができない世の慣習だから。

(六)袴のそばを取つて。

(七)龜の山。御茶毘所。

(八)御生前あれほど御立派であらせられた龜山法皇も、ほんの瞬間に、ただつかのまの煙となつて、大空に消えてしまはれたから、だ

に、永福門院鐙子の御さし次ぎの姫君莢子、はや御盛りも過ぐるほどなりしを、この法皇龜山にまゐらせ奉らせたまへりし、かひがひしく「水の白波」に若やがせたまひて、やがて院號ありしかば、昭訓門院莢子ときこえつる、その御腹に、一昨年おととしばかり、若宮恒明生まれたまへるを、限りかぎなくかなしきものと思されつるに、今少しだに見奉らせたまはずなりぬるを、いみじう思されり。

さてしもあらぬならひなれば、同じ十七日に御わざのことせさせたまふ。ことわりといひながら、いといひか厳めしう人人つかうまつりたまふ。網代あじろ廂の御車、前右大臣殿公衡寄せさせたまふ。烏帽子直衣、袴はかまきはにてまゐりたまふ。院の上後宇多も庭におりさせたまふ。法親王たち三人、山の座主ざす良助・聖護院順助・十樂院慈道法親王などはわらうづをぞ奉る。上の山まで御供せさせたまふ。上達部には前右大臣公衡西園寺大納言公顯萬里小路大納言師重・源中納言有房・三條前中納言實躬・宗氏二位・重經二位・爲雅宰相・經守・爲行・親氏などなり。殿上人、頼俊朝臣・忠氏・爲藤・國房・經世・泰忠・光忠、みな狩衣の袖をしぼりしぼりまゐる氣色さへあはれを添へたり。院後宇多も御供にひきさが

(八) 御生筋あれほど御立派であらせられた鶴山法皇も、ほんの瞬間に、ただつかのまの煙となつて、大空に消えてしまはれたから、だれもかれも夢のやうなはかない氣持ちがして。

(九) 初度に長親、つぎに雅行、三度目に有忠と、勅使を三度茶毘所に差遣あつた。これは古例によるのだらう。

(一〇) 御喪服。

(一一) 倚廬 (諒闇の間おはします御所) の殿。

(一二) 蘆のすだれ。

(一三) 喪服の上の衣。

(一四) 萱草色、黄黒色。

(一五) 袖のうらを引き放つたもの。

(一六) 龜山院妃。

(一七) 以下龜山院皇女。

(一八) 以下龜山院皇子。

りてまゐりたまふ。花山院權大納言師信・西園寺中納言兼季・土御門大納言親定、御子親實少將御太刀持ちて御供せられたり。よそほしかりつる御有様も、いとほどなく、ただ時の間の煙にて上りたまひぬれば、誰も誰も夢の心地して、ほのぼのと明けゆくほどに、おのおのまかでたまふ。三條大納言入道公貫・萬里小路大納言師重などは、とりわき御ころざし深くて、御茶毘のはつるまで、墨染の袖を顔におし當てつつさぶらひたまふ。かねてより山道つくられて、木草きり拂ひなどせられつれど、露けさぞ分けんかたなき。涙の雨の添ふるなるべし。内よりの御使に、はじめ長親朝臣、雅行・有忠朝臣など、三たびまゐる。ふるき例なるべし。

同じ二十六日、院の上後宇多御素服たてまつる。おはします殿には、黒き絲にてあみたる簾をかけらる。淺黄べりの御座に、うへの御衣、黒きうへの御袴、裏は柑子色、御下襲黒し。同じひへぎ、淺黄の御檜扇、御臺まゐるもみな黒き御調度どもなり。この御ついでに、御かたがたの御素服たてまつる人数、昭訓門院瑛子、昭慶門院喜子は御むすめ、近衛殿の北の政所基家室・關白殿九條殿の北の政所師教室、良助法親王・覺雲・順助・慈道・性惠・行仁・性融

(一)中納言典侍とあつた女性。女院小傳に「談天門院忠子、後醍醐母、後宇多妃云云」とある。

(二)嘉元三年九月二十一日出家。

(三)太宰帥にいます故である。

(四)をりしも時雨がちな空模様にも山の木の葉も人人の涙と競つて落ちる心持がして大層悲しい。

(五)龜山離宮の環境も、場所がらひとしほ哀しみを深くした川浪の響き。

(六)戸無瀬、大堰川の上流で、龜山殿の附近。

(七)龜山離宮内の大多勝院の西の廂の間にいらつしやる。

(八)よく眞赤に紅葉したのを折つて。

(九)明日から降るはずの時雨も待たないで、はやこの葛はこのやうに眞赤に染まりました。これは故法皇をいたみまつるわれわれの袖に置く紅の涙が、かうも濃く葛を紅葉に染めたのでせうか。(明日よりの時雨―時雨は十月の景物)
 (一〇)をりからの木の葉よりも脆くお落ち遊ばす門院の御涙は、ましてひとしほ抑へかねさせられた。
 (一一)御仰せのやうに、四方の山山

法親王たち、上達部も御山の御供したまふ人人、みなもれず。院 後宇多の二の御子 後醍醐の御母談天門院も、近ごろは法皇龜山召しとりて、いと時めきて、准后などきこえつるも、思ひ歎きたまふべし。昭訓門院 葵子やがて御髪おろす。法皇龜山は五十七にぞならせたまひける。御骨も、この院に法華堂を建てさせたまへば、龜山院とぞ申すべかめる。禪林寺殿をば、おはしましし時より禪院になされき。南禪院といふ、これなめり。

院の二の皇子後醍醐、忠繼の宰相のむすめ、今は准后 談天門院の御腹におはします。このころ帥宮ときこゆるを、法皇龜山とりわき御かたはら去らず馴らし奉りたまひて、いみじうらうたがりきこえさせたまひしかば、人よりことにおほし歎くべし。ころさへしぐれがちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心地して、いと悲し。所がらしも、いとどあはれを添へたる川浪のひびき、となせの瀧の音までも、とり集めたる御心の中どもなり。御日数のほどは、帥の宮 後醍醐ひとつ御腹の内親王 非子などもこの院におはしますほど、つれづれなるままに、はかなしごとなどきこえかはして、花紅葉につけても、むつまじく馴れきこえたまふべし。

の草木は、空からの時雨には濡れないで、みな私たちの涙で眞赤に染まつてしまひました。ことしの秋の紅葉ぐらゐる悲しい色はありません。

(二三)と仰しやつて来たその御返歌を、しみじみと御覽あそばされながら、暮れかかる空も大層名残惜しく眺められて、勾欄によりかかつていらつしやる若い帥の宮の、夕日の光をお浴びになつた御姿は非常に美しかつた。

(二四)太政大臣實兼の子。

(二五)故法皇をいたみ奉つて、雨と降る天下の人の涙の色は、この蕙の紅葉に現はれてゐるのではないでせうか。私どもの袖も血の涙で紅に染まりましたが、その袖以外に、かく蕙の葉までが眞赤に紅葉してゐるのは。

(二六)公顯卿は門院の御兄であるから、門院がひつそりした淋しい山里の離宮にお住まひになつてゐるのがお氣の毒さに、御殿に伺候してゐられたのであつた。

(二七)今日が秋の最終の日であるとして、ことに眞赤に染まつてゐるこの紅葉は、この秋ぢう、いくたび

帥のみこ後醍醐は大多勝院に西の廂ひさしにわたらせたまふ。御前の松の木にはひかかれる蕙の紅葉ハにいたう染めこがしたるをとりて、九月三十日の夕つかた、昭訓門院莢子の御かたへ奉らせたまふ。帥宮

あすよりの時雨も待たで染めてけり袖の涙や蕙のもみぢ葉

木の葉よりも脆もろき御涙は、ましていとどせきかねたまへり。御返し、昭訓門院

よもはみな涙の色に染めてけり空にはぬれぬ秋のもみぢ葉

あはれに見奉らせたまひつつ、名残もいみじくながめられて、勾欄におしかかりたまへる夕ばえの御かたち、いとめでたし。ありつる紅葉を、西園寺大納言

公顯のとのゐ所へ遣はす。帥宮

雨と降る涙の色やこれならん袖よりほかに染むるもみぢ葉

女院 昭訓門院の御せうとなれば、しめやかなる御山棲やまがねみの心苦しさに、さぶら

ひたまふなりけり。御返し、公顯

いくしほか涙の色に染めつらん今日を限りの秋のもみぢ葉

時雨はしたなく、風あららかに吹きて暮れぬれば、宮 後醍醐内に入りたまひ

て、御殿油ごだんあぶら近く召して、晝御覽じさしたる御經など讀みたまふほどに、若殿上

われわれの紅の涙の色で染め揚げたことせう。

(二) 時雨がをり悪しく催し。

(一) 紅葉を見ても心は慰まず、故法皇をお慕ひ申して泣く聲は絶つによしない。されば、この美しい紅葉の唐紅の色をも、われらの紅涙の染めた色と見ようと思ふが、どうせうか。(空蟬の——から紅の枕詞で、「なく」の縁語)

(二) 法皇の崩御をいたみ奉つて、山姫の涙の色も、このころはとりわけ濃いのであらうか。

(三) この秋は、天下の人人が法皇の崩御を嘆き悲しんで、一様に黒い色の著てる喪服を知らないからか、この蕙のみぢ葉は去年と同じく、眞紅に染まつてゐる。今年ばかりは墨染めにもみぢすればよいのに。

(四) 秋は今日を限りと立ち去るが、それでもその色はやはりこの眞赤な蕙の紅葉にはつきり残つてゐる。これを逝く秋の別れ路に留めておいた形見と思つて見ると、この秋はをりもせり、故法皇の崩御遊ばされた季節であるから、この形見も悲しくうち眺められる。

人どもうち連れて、こなたの御宿直まゐりにまわれり。晝の蕙の葉の散りぼひたるを、人人見るに、宮後醍醐「それにおのおの歌書きて」とのたまへば、中將爲

藤朝臣、

もみぢ葉になくね絶えずばうつせみのからくれなゐも涙とや見ん

清忠朝臣、

山姫の涙の色もこのごろはわきてや染むる蕙のみぢ葉

光忠朝臣、

世三の中のなげきの色を知らねばや去年こぞにかはらぬ蕙のみぢ葉

これらをととりあつめて、北殿の内親王皇子の御かたへ奉らせたまひければ、皇子

さすがなほ色は木の葉に残りけりかたみも悲し秋の別れ路

雨うちそそぎてけはひあはれなる夜、いたうふけて、帥宮後醍醐例の北殿へ

まゐりたまへれば、姫宮皇子も御殿ごもり、さぶらふ人人もみな静まりぬるに

や、格子などたたかさせたまへどあくる人もなければ、空しく歸らせたまふと

て、書きてさしはさませたまふ。帥宮

おのづから眺めやすらんとばかりにあくがれ來つる有明の月

(五)この雨がばらばら降りかかつて、情趣の濃やかなる夜、貴女も自然お寝みになれなくて、もの思ひにふけつてゐられることと思つたばかりに、夜ふけて、ふらふらと出て來ました、この有明の月(私)は。

(六)あなたのお出で下さるのを、今か今かと、いたづらにお待ち申してゐるうちに、夜がふけて、村雨さへ降つて來たので、これでは有明の月(あなた)も見えまいと、あきらめて寝てしまひまして、惜しいことをしました。

(七)昭慶門院の御所。

御返し、またの日、莛子

いたづらに待つ宵すぎし村雨は思ひぞたえし有明の月

月日ほどなく移り過ぎぬれば、院も宮宮もおのちりぢりにあかれたまふほど、今少しもの悲しさまさる御心のうちどもは盡きせねど、世のならひなれば、さのみしもはいかが。昭慶門院喜子は、あまたの宮たちの御中にすぐれてかなしきものに思ひきこえさせたまひしかば、御處分(そとぎん)などもいとこちたし。大堰川に向かひて、離れたる院のあるをぞ奉らせたまへれば、そこにおはしまししほどに、川端殿(かわはたご)の女院など人は申し侍りし。かのところは臨川寺といふ。都にも土御門室町(とごもんむろまち)にありし院、いづれもこのころは寺になりて侍るめりとぞ。めでたくもあはれなる。

第十二 浦千鳥

(一) 卷名は、伏見院の御製「わが世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をやあとに残さん」による。記事は、徳治二年遊義門院崩御より文保元年伏見院崩御までで、後宇多院の入道、後二條天皇の崩御、花園天皇の即位、玉葉集の勅撰、二條富小路内裏新造などを載す。

(二) かへつて。

(三) 御退位後は、御心にまかせて大變よく忍び歩きを遊ばすので、このころは御寵愛を競ひ顔のかたがたがだんだん多くなられたが。

(四) 御姉宮が故龜山院の後宮にお仕へした時よりは、大層鄭重に御待遇あつて。「さし櫛」参照。

(五) 上臈の女官。禁秘抄「三位の典侍を上臈と號す」とある。

(六) 十六は二十六の誤りかと。萬秋門院、瑣子、圓明寺關白女。

(七) 源基俊、具守の弟。

(八) おはせしかのの誤り。

(九) 後宇多院の後宮に入る。

(一〇) 院・基俊・瑣子の三角關係が源氏物語の朱雀院・源氏・關月夜尙侍との關係に似てゐること。

(一一) 從三位に敘せられたこと。

院の上後宇多は位におはせしほどはなかなかさるべき女御・更衣もさぶらひたまはざりしかど、おりさせたまひて後、心のままにいとよく紛れさせたまふほどに、このほどはいどみ顔なる御かたがた數そひたまひぬれど、なほ遊義門院始子の御心ざしに立ちならびたまふ人はをさをさなし。中務の宮宗尊の御女瑠子も、おしなべたらぬさまにもてなしきこえたまふ。すぐれたる御覺えにはあらねど、御姉宮瑠子の故院龜山にわたらせたまひしよりは、いと重重しう思しかしづきて、後には院號ありき。永嘉門院と申し侍りし御ことなり。また一條攝政殿實經の姫君瑣子も、當代後二條堀川のおとど具守の家にわたらせたまひしころ、上臈^五に十六^六にてまゐりたまひて、はじめつかたは基俊の大納言^七うとからぬ御中にておはせしかば、かの大納言^八東下りの後、院^九にまゐりたまひしほどに、ことのほかにめでたくて、尙侍^{一〇}になりたまへる、昔^{一一}おぼえて面白し。加階^{一二}したまへりし朝^{一三}院^{一四}後宇多より、

(一)その昔、あなたに約束したとほり違はず官位を陞せたのだから、すつかり昔の初戀時代に立ち返つて、また仲よく打ち解けようではないか。

(二)陛下が妾にかたくお約束なされた御心が將來どう變られるか存じませんが、この尙侍にしてやると仰しやつた一事だけは、どうやらお守り遊ばしたやうですね。しかし、ほかのことは陛下の今後の御心の如何によることとすわ。

(三)徳治二年七月二十四日崩。
(四)同月二十六日落飾、法名金剛性と申す。御歳四十一。

(五)教王護國寺。京都九條、朱雀大路の東。

(六)加持した水を頭上に注ぐ式。太古、大日如來の始めて如來位に上つた時の儀式に由來すといふ。傳法・結縁・受明の三灌頂がある。

御灌頂の加行とは、御灌頂をうけられる前、數日間、功を加へ修行されること、灌頂豫修である。
(七)宇多上皇が益信を師として東寺で御灌頂あつた故事。

(八)當番をきめて。
(九)齋法を持すること、晝食をと

そのかみにたのめしことの違はねばなべて昔の世にや歸らん

御返し、尙侍の君瑣子とぞきこゆめりし、

契り置きし心の末は知らねどもこの一言やかはらざるらん

露霜かさなりて、ほどなく徳治二年にもなりぬ。遊義門院始子そこはかとなく御惱みときこえしかば、院後宇多の思し騒ぐことかぎりなく、よろづに御祈り、祭り・祓へとののしりしかど、かひなき御ことにて、いとあさましくあへなし。院後宇多もそれゆる御髪おろして、ひたぶるに聖にぞならせたまひぬる。そのほど、さまざまのあはれ思ひやるべし。悲しきことども多かりしかど、みなもらしつ。

明くる年の春、八幡の御幸の御歸りさまに、東寺に三七日おはしまして、御灌頂の御加行とぞきこゆる。仁和寺の禪助僧正を御師範にて、かの寛平の昔をやおぼすらん、密宗をぞ學せさせ給ひける。六月には、龜山殿にて、御如法經書かせたまふ。御髪おろして後は、おほかた女房はつかうまつらず。男、番におりて御臺などもまゐらせ、よろづにつかうまつる。いつも御持齋にておはします。いとありがたき善知識にてぞ、故女院遊義門院はおはしける。嵯峨の

らないなど。

(三)これを思ふと、故遊義門院は法皇の御ためには大層有難い善知識であらせられた。

(一)西園寺實氏の夫人。

(二)法皇の御筆に。

(三)法華經の文を一字書くたびに三度禮拜すること。

(四)今林殿中にあるのだらう。

(五)人事不省。

(六)御病勢さらに悪化。

(七)この徳大寺家では、かういふ内・立后などやうなことは全くなかつたのを、珍らしく姫君が入内され、御寵愛もすぐれていらしたのに、情ないとも言ひやうがない。

(八)大行天皇の御葬儀の沙汰もあつた。「先帝も」は「先帝の」の誤りか。

今林殿にて御法事ども日日に怠らずせさせ給ふ。この今林は北山の准后貞子のおはせし跡なり。遊義門院始子の御髮にて梵字縫はせたまへり。かの御手のうらに法華經一字三禮に書かせたまひて、攝取院にて供養せらる。覺守僧正御導師。故女院遊義門院の御骨も、今林に法華堂建てられて、置き奉らせたまへれば、月ごとに二十四日には必ず御幸あり。思し入りたるほど、いみじかりき。

かくて八月の初めつかたより、内の上後二條例ならずおはしますとて、さまさまの御修法、五壇・樂師・愛染、いろいろの祕法ども、諸社の奉幣神馬、なにかとののしり騒ぎつれど、むやみに不覺にならせたまひて、二十三日御氣色かはるとて、世のひびき言はんかたなく、馬・車走りちがひ、所もなきまで人人はまわり混みたれど、いとかひなく、二十五日子の時ばかりに、はてさせたまひぬ。火の消えぬるさまにて、かきくれたる雲の上のけしき、言はずともおしはかられなん。まことや、中宮忻子は徳大寺の公孝の太政大臣の御女ぞかし。珍らしくもかの御家に、かかることのいたくなかりつるに、御覺えもめでたくてさぶらひたまへるに、あさましともいはんかたなし。二十八日にまかでたまふ。先帝も御わざの沙汰あり。院號ありて、後二條院とぞきこゆる。堀川右大

(九)具守の女、後二條院の生母。具守が大將になつたのは、後二條院の御母后西華門院に對する御孝心による。

(一〇)意外なことに。

(一一)夢を見てゐるやうな氣持ちがしながらも、まもなく月日は移り過ぎて、御四十九日までが明けたから。

(一二)新帝花園天皇の御父君。

(一三)故後二條院の御父君。

(一四)異議なし。

(一五)持明院殿方の天皇が即位されて、今はわが世終れりと失望してゐた人人も。

(一六)保元元年十月三十日を十一月朔とした例。戦亂を忌んで改曆。

(一七)十月は大の月(三十日を一月とす)なのを小の月(二十九日を一月とす)として、十月三十日を十一月一日とすると宣布した。

將具守御車よせらる。心のうちいかばかりかおはしけん。大將になりたまへるも、この帝後二條の西華門院基子むつまじうもつかうまつりたまへるに、いとほしき御ことなり。御素服を著たまはざりしをぞ、思はずなることに世の人もいひさたしける。尙侍の君瑣子もさまかはりたまふ。中宮忻子も院號ありて、長樂門院ときこゆ。よろづあはれなることのみ、書きつくし難し。

東宮花園正親町殿へ行啓なりて、劍鹽わたさる。八月二十六日踐祚なり。十二にぞならせたまふ。夢のうちの心地しつとも、ほどなく過ぎうつる御日數さへはてぬれば、盡きせぬあはれはさむる世なけれど、人人もおのが散りぢりになるほど、今ひとしほ堪へがたげなり。持明院殿伏見にはいつしかめでたきことどものみぞ聞ゆる。大覺寺殿後宇多には、遊義門院始子の御ことにうち添へて、御涙の乾る世なく思さるべし。帥の皇子後醍醐の御ことを、東へのたまひ遣はしたる、「相違なし」とて、九月十九日立太子の節會ありて、坊にゐたまひぬ。今はと世をとぢむる心地しつる人人、少し慰みぬべし。その年十月大なりつるを、保元の例とかやとて、十一月朔日に宣下せられたり。新しき御代にありて、月日さへ改まりにけり。十一月十六日御即位。攝政後照念院殿冬平、

(一) 今日任官の御禮言上があり、そのまま行幸に供奉されて、御大典の式場の太政官廳に赴かれる。

(二) 御元服の御儀は紫宸殿に出御し、太政大臣加冠後、後殿に入御、朝服に改めて、再び玉座に出御、太政大臣の壽詞を受け、また後殿に入御、さらに出御、群臣の拜舞がある。

(三) 加冠の御儀後、群臣に賜宴。

(四) 後伏見院后、花園天皇准母。花園天皇の御實父は伏見院、御實母は顯親門院。

(五) どんなにか立派な勅撰集を是非編纂したいものであるとお考へになつたけれども。

(六) 正應ごろに御上命あつたが、撰者の一人京極爲兼が謀反の嫌疑で幕府の命で佐渡に流される、他の二人の撰者は死ぬといふ、いろいろ面倒なことがあつて、そのうち帝も讓位されたので。

今日御^一悅^二申^三ありて、やがて行幸にまゐりたまふ。あるべき限りのことども、舊^ききにかはらで、めでたく過ぎ行く。

延慶二年十月二十一日御^二禊^一、おなじ二十四日大嘗會、應長元年正月三日、御年十五にて御冠^{ちかづみ}したまふ。御諱^{ごな}富仁ときこゆ。引入^{ひきいれ}關白殿冬平、理髮家平つかうまつりたまふ。南殿^{なんでん}の儀式はてて、御よそひ改めて、さらに出でさせたまふ。清涼殿にて御遊^{あそ}びはじまる。攝政殿^{せつせいだん}筆^ふしみといふ名物、右大將公顯琵琶^{こけんびば}玄象、土御門大納言通重^{とむね}、和琴^{わこん}大炊御門中納言^{おほひのみかど}兼季、別當季衡^{よみかた}も笙の笛吹きたまひけり。篳篥^{ひちりき}公守朝臣、拍子有時、めでたくさまざまおもしろくて明けぬ。五日御宴^{ごえん}とて、今少し懐かしうおもしろきことどもありき。この帝^{みかど}花園をば新院^{あらたにん}後伏見の御子になし奉らせたまひてしかば、朝親行幸の御拜^{ごはい}などもこの御前にてぞありける。廣義門院^{ひろぎもんいん}寧子も同じく國母^{くにも}の御心地にて、よろづめでたかりき。

院の上伏見さばかり和歌の道に御名高く、いみじくおはしませば、いかばかりかと思されしかども、正應^{せいお}に撰者どものことゆゑにわづらひどもありて、撰集もなかりしかば、いとど口惜しうおぼされて、

(七)わが治世においては勅撰集が編纂されないために、御歴代の先例に従つて當代の和歌の隆盛を千歳に傳へる方法もなく、ただ自分が和歌を好んだといふ虚名だけを後世に残すであらう。これはいかにも残念なことである。和歌の浦千鳥——和歌・跡の縁語。

(八)なんの支障なく仕事を進捗させたのであつた。

(九)爲世は父祖定家の家訓に従ひ三代集を宗として保守的であつたが、院は爲兼とともに萬葉を範とし、制詞に拘らず、自由にお詠みになり、印象的な新風をお好みになつた。

(一〇)まだ九月の下旬で、木の葉も平然として紅葉しないのであるのに初冬の時雨にも遭はないわが袖の色が、世を背く名残惜しさに絞る涙に紅に變ずることであらうか。

わが世には集めぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや跡に残さん

など詠ませおはしましたりしを、今だにと急ぎたたせたまひて、爲兼大納言承はりて、萬葉よりこなたの歌ども集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集とぞいふなる。この爲兼の大納言は、爲氏大納言の弟に、爲教の兵衛督といひしが子なり。限りなき院の御覺えの人にて、かく撰者にも定まりにけり。そねむ人人多かりしかど、障らんやは。この院の上伏見好み詠ませたまふ御歌の姿は、前藤大納言爲世の心にはかはりてなむありける。御手もいとめでたく、昔の行成大納言にもまさりたまへるなど、時の人申しけり。やさしうも強うも書かせおはしましけるとかや。

正和も二年になりぬ。今年御本意とげなんと思さる。九月の暮つかた、賀茂に忍びて御籠りのほど、をかしきさまのことども侍りけり。近くさぶらふ女房どももうちしほれつつ、つごもりがたの空の氣色いともあはれなるに、御製伏見、

なが月や木の葉もいまだつれなきに時雨れぬ袖の色やかはらん
また、

(一)わが境涯こそ遣世して出家の身と變らうとも、秋の暮を惜しむ心だけは永久に變るまい。

(二)皆さつと涙をそそぎ、袖の上が今日を限りの秋の名残のおびただしい露よりもたまらないほどしとどにぬれ渡つた。

(三)一途に暮れ行く秋だけを惜しみたいと存じます。これに加へて、その他の、譬へば院が御遣世遊ばすといふ御名残り惜しさなどは思はないで。しかし、俗人の口惜しさ、それが出来ないのが、たへきれない悲しみでございます。

(四)今年の秋は上皇が御遁世遊ばす直前の秋であるから、例年の秋にまさつてその別れが名残惜しく思はれるのであるが、その名残をいかに戀ひしく思ひ、別れをどれほど惜しんだならば、この逝く秋は暫らくでも留まることとせうか。

(五)網代庇の御車。

(六)ひたすら御心靜かに過ぎざれて、どうかすると伏見殿にばかり引きこもつて。

わが身こそあらずなるとも秋の暮惜しむ心はいつもかはらじ

人人も、さとしぐれわたり、袖の上、今日を限りの秋の名残よりも忍びがたし。大納言三位爲子 撰者のほらからなり、

ひとすぢに暮れ行く秋を惜しまばやあらぬ名残を思ひ添へすて
また、誰にか、

いかに戀ひいかに惜しまんとしどしの秋にはまさる秋の名残を

十月十五日、伏見殿へ御幸。限りの旅とおぼせば、えもいはず、ひきつくるはる。廂の御車なり。上達部・殿上人、數知らずつかうまつりたまふ。

世の政事なども、新院 後伏見に譲り奉らせたまひにしかば、御心靜かにのみ思されて、伏見殿がちにのみぞおはしまししほどに、そこはかと御なやみ月日へて、文保元年九月三日、崩れさせたまひにき。伏見院と申しき。御母玄輝門院 僧子 永福門院 鏡子などの御數き思ひやるべし。帝花園は御輕服の儀なれば、

天下も色かはらず。この院伏見姫君あまたおはしまししかど、院號は章義門院 豐子・延命門院 延子ばかりにておはします。二條富小路の昔の院の跡に東より造りて奉る内裏、このころおんわたましありしなど、いといと面白かりき。近

(七)伏見院中宮。

(八)主上は御孫の禮を執られて、御輕喪の儀であるから、國を擧げ、ての諒闇とはならない。

(九)御移居。

きことは、人みな御覽せしかば、なかなかにてとどめつ。

第十三 秋のみ山

文保二年二月二十六日、帝みかど花鬘降りなみさせたまふ。春宮はるみや後醍醐はすでに三十

(一)卷名は、永福門院より後醍醐天皇皇后に贈られた「今宵しも云云」の御歌と天皇の御返歌「昔見し云云」による。記事は文保二年後醍醐天皇の御降祚から正中元年前關白近衛家平の薨去まで、主として天皇の詩歌管絃の風流生活、續千載の勅撰など。

(二)後醍醐天皇、文保二年二月二十六日受禪、御歳三十一。

(三)龜山離宮は勿論もとから仙洞御所だが、それとは別に。

(四)神神しくお寂しかつたのを、今度は打つて變つて繁忙な政務をお執り遊ばすことになり、佛道の御修行も疎かになつて、うるさいと思される。

(五)式場太政官廳への行幸。

(六)左大將一條内經と花山院右大將家定と行列の先後を争つて(内經・家定は俱に權大納言だが家定が上臈、ともに近衛大將で内經が左、家定が右で内經が上席であるので、列次を争つた)兩方の隨身どもが喧ましく騒ぐので、鳳璽をおとめして藏人がその由を奏上、御勅裁を仰いだりしたやうだ。

(七)嘉元二年十二月十七日薨。

に満たせたまへば、待ち遠とほなりつるに、めでたく思さるべし。法皇後宇多都に出でさせたまひて、世の中しろしめす。龜山殿はさることにて、近ごろは大覺寺のほとりに御堂たてて籠りおはしましつ、いよいよ密教の深き心ばへをのみ勤め學ばせたまへば、おのづからも京に出でさせたまふことなく、またまゐりかよふ人も稀なるやうにて神かみさびたりつるを、引き代へことしげき世に、行なひも懈な怠たしてむつかしくおぼさる。三月二十九日御即位なり。行幸なの當日なに左大將内經・花山院右大將家定行列を争ひて、隨身もわわしくののしれば、御輿をおさへて、職事しきじ奏なし下くだしなどすめり。左大將内經の御父君は内實おとどの大臣と聞えし。嘉元なのころ、俄かにかくれたまひにしかば、攝録せうろくもしあへたまはざりしにより、今はただ人にてこそいますべければとて、かく争ふとぞきこえし。十月二十七日大嘗會、消暑堂の御神樂の拍子ひたしのために、綾小路宰相有時といふ

(八)攝政關白に任せられる機會がなかつたので。

(九)攝關に對して常人をいふ。内經は一條家であるが、父が攝關でなかつたために勢力なくて、かく詰らない列次争ひをしたといふ。

(一〇)拍子の役を勤めるため。

(一一)頭丈な。

(一二)なんの理もなく。いきなり。

(一三)大切な儀式が終つてからこの事件の原因を糾明されると。

(一四)この拍子の役を競争して。

(一五)藝道に執心なのは嘉みすべきであるが、人をあやめるなどは。

(一六)東宮でいらした時のとほり。

(一七)陛下が東宮のころこの御所でお馴染み遊ばされた櫻の花は、同じく東宮の私(邦良)を迎へ、同じ春に逢つて咲いてゐるのですけれど、この私にはなじまないで、やはり昔おなじみ申し上げた陛下に心を移してゐるかに見えます。

(一八)御返歌は、さしかへて紫宸殿の御庭の櫻の枝に著けた。

(一九)幾春も見飽きしないでその色香に深く染まつた私の心を、貴宮の櫻の花は、ほんたうに仰せのやうに思ひ出してくれるで

人大内へまゐるを、車より降るる程に、いとすくよかなる田舎侍めく者太刀

を抜きて走り寄るままに、あやなく討ちてけり。さばかり立ち混みたる人の中

にて、いとめづらかにあさまし。さて拍子にはかに異人うけたまはる。大事の

ことどもはてて後、たづね沙汰ある程に、紙屋川三位顯香といふものの、この拍

子をいどみて、われこそつとむべけれと思ひければ、かかろことをせさせけ

り。道に好けるほどはやさしけれども、いとむくつけし。さてかの三位は流さ

れぬ。かくて今年は暮れぬ。

まことや、こたみの春宮には後二條院の一の御子邦良定まりたまひぬれば、

帝後醍醐坊にておはしましし時のままに、冷泉萬里小路殿寢殿にうつり住ませ

たまへるに、二月のころ、軒の櫻さかりにをかしき夕ばえを御覽じて、内後醍醐

に奉らせたまふ。かの花につけて、

馴れにける花は心や移すらん同じ軒端の春にあへども

御返しは、南殿の櫻にさしかへ給ふ。

花はげに思ひ出づらん春を経て飽かぬ色香に染めし心を

おりぬの帝花園は御兄の本院後伏見とひとつ持明院殿に住ませたまふ。も

せう。御覽下さい、私の今ある禁中の櫻の花も、貴宮の櫻の花の色にそっくりでせう。

(二)もとも御猶子の儀。

(一)これはもつともな御ことだといへるけれども、昔でも今でも、御母君などの違つてゐる場合は、どういふものか、よそよそしいことも交り、變にこぢれるのが例であるのを。

(二)機會を逸してしまはれたのでさらにこの次の御代にといふと、随分遠い將來になると淋しく思されるであらう。

(三)都の大覺寺殿の御方の人人はさまざまにわが世の春と時めいてゐるが、自分の住んでゐる持明院では、春になつても、花が咲かなくて寂しいことである。

(四)嵯峨の山里も、自分が住んでゐると、朝早くから政事を怠らないので、都から群臣百僚が參集して、寂しくはない。

(五)禮子は西園寺家の侍女の腹のよし。兼季の同母妹。

(六)文保二年七月女御となる。

(七)實兼、當時七十一歳。

(八)中宮が北山の西園寺邸へお里

とより御子のよしにておはしませば、まいて、ひとつ院の内にていささかも隔てなくきこえさせたまふ。いと思ふやうなる御有様なり。さるべき御ことといへども、昔も今も御腹などかはりぬるはいかにぞや、そばそばしきこともうちまじり、癖あるならひにぞあるを、この院の御あはひ、まめやかに思ほしかはしたる、いとありがたうめでたし。本院後伏見は、廣義門院寧子の御腹の一の御子光嚴をこのたびの坊はちにやと思されしかど、ひき過ぎぬれば、いと遙けかる世にこそと、さうざうしく思さるべし。御歌合のついでなりしにや、

いろいろに都は春の時にあへどわが棲む山は花もひらけず

大覺寺殿には、ひきかへ馬車うまぐるまの立ち混みたるを御覽じて、法皇後宇多よませたまひける、

われ住めば淋しくもなし山里も朝まつりごとおこたらすして

今の上後醍醐は、はやうより西園寺の入道大臣實兼かたの末の御女禮成門院禮子れいせい、兼季大納言の一つ御腹にもおしたまふを、忍びて盗みたまひて、わくかたなき御思ひ、年に添へてやんごとなうおはしつれば、いつしか女御の宣旨などきこゆ。ほどもなく、やがて八月に后だちあれば、入道殿實兼も、齡としの末にいと

歸りてあられたころ。

(八九)仲秋の名月。

(二〇)十五夜の今宵、主上の行幸を仰いで、名だたる仲秋の明月もひとしほ光をまして美しい、北山の貴女の御殿のはなやかな御有様を遙かに御想像申し上げてゐます。

(二一)貴女が伏見天皇の中宮であらせられた時、故天皇と共に楽しく秋の月をも御覽遊ばしたことを思ひ出されて、御妹の今の中宮が私と共に楽しくこの仲秋の名月を眺めてゐることであらうと御想像なさるのでせう。御體験からの御想像は、恐れ入りましたが、それだけに貴女の御心境のお寂しさも御同情申し上げてゐますよ。

(二二)行方不明になつたとて。

(二三)二三日たつたたぬに、ちぎ具親の君が伴れ出したと判明したのだから。

(二四)大層心外に憎いと。

(二五)この典侍は別に高い身分のからだではないが、ひどく御寵愛遊ばしてゐた最中なので、厳しく男をお咎めなさつて、ほんたうに醜月夜の内侍と關係した光源氏のやうに、須磨の浦へでも流したいとま

しこくめでたしと思す。北山にまかでたまへるころ行幸あり。八月十五日の夜、名をえたる月もことに光を添へ、所がら折から面白く、めでたきことども花やかなるに、御姉の永福門院鏡子より、今の后禮子の御かたへ御消息きこえたまふ。

今夜しも雲井の月も光そふ秋のみ山をおもひこそやれ

御返しは「磨きこえん」とのたまはせて、内の上 後醍醐、

昔見し秋のみ山の月かけを思ひ出でてや思ひやるらん

帝の同じ御腹の前齋宮 達智門院皇子も皇后宮に立たせたまふ。御母准后 忠子も院號ありて、談天門院とぞきこゆめる。よろづ花やかにめでたきことどもしげくきこゆ。内 後醍醐には萬里小路大納言入道師重といひしが女、大納言の典侍とて、いみじう時めく人あるを、堀川春宮の權大夫具親の君、いと忍びて見せめられけるにや、かの女典侍かきけち失せぬとて、求めたづねさせたまふ。二三日こそあれ、ほどなくその人具親とあらはれぬれば、上 後醍醐いとめざましくにくしと思す。やんごとなき際にはあらねど、御おぼえの時なれば、厳しく咎めさせたまひて、げに須磨の浦へも遣はさまほしきまで思されけれども、さ

で思されたけれど。

(一)ひどく踏賣されたから。

(二)山城國愛宕郡。

(三)我が勅勘の身の辛さも、この美しい櫻の花にむかつては、暫らく忘れられて、春に浮かれる心だけは、昔と少しも變らない。

(四)新織古今、顯朝の「かくばかり思ひ絶えにし年月のうきにまぎれぬ人の戀しき」による。愛人のつらい仕打ちにもかかはらず、その人の戀しさが忘れられない。

(五)それほど有難たく思はず、本人はやはり好色の心が絶えなかつたやうですよ。かう詠みました。

(六)絶えてしまつた男との關係を自分ひとり忘れないで、色色煩悶してゐるのも、また思ふにまかせぬつらい境遇に苦しんでゐるのもみなわが心から起つたことで、誰をも怨みやうがない。

(七)典侍晩年には。

(八)主上の御おぼしめしによつて典侍を夫人として賜はることをゆるされたから。

(九)公泰の邸で。

(一〇)天下に様に喪服を著し。

(一一)爲世が玉葉の撰者になれなく

すがにて、官つみみな停とどめて、いみじう勘かんぜさせたまへば、かしこまりて、岩い倉くらの

山庄に籠りぬ。花の盛りにおもしろきをながめて、具ぐ辭じ

憂うれきことも花には暫し忘られて春の心ぞ昔なりける

すけの君大納言典侍は歸りまゐれるを、つらしとおぼすものから、「ううきにまぎれぬ戀こしさ」とや、いよいよらうたがらせたまふを、ささしもあらず、正ま身みはなほ好き心ぞ絶えずありけんかし、

絶たえはつる契ちがひりをひとり忘れぬも憂うれきもわが身の心なりけり

とてひとりごたれける。未まざまには、公泰の大納言、未だ若うおはせしころ、御心とゆるして賜はせければ、思ひかはして生まれしほどに、かしこにて失あせせにき。帝みかど後醍醐の御母女院 談だん大門院 十一月失せたまひにしかば、内の上御服うちのかみぎたてまつる。天下あまのひとつに染めわたして、葦あし簾すだれ垂とか、いとまがまがしきものどもかけわたしたるも、あはれにいみじくぞ見ゆる。五節ごせつも停とどりぬ。若き人人などさうさうしく思へり。

當代 後醍醐もまた敷島の道もてなさせたまへば、いつしかと勅撰のことおぼせらる。前藤大納言爲世承はる。玉葉たまがはのねたかりしふしも、今ぞ胸あきぬらん

て口惜しかつたことも、今度は腹
が癒えたであらうよ。

(二)後醍醐天皇が東宮の御時に。

(三)紀伊國海草郡、衣通姫を祀る
和歌三神の一。

(四)歌人だと自任してゐる者はみ
な、この大納言の歌風を傳へる者
は洩れなく、参詣に隨從する。

(五)先の玉葉集勅撰の御時は庶流
異端の爲兼が用ゐられて、俊成・
定家兩朝以來の和歌の正風が没却
されたが、今回は昔に返つて、定
家朝の嫡流で、その正しい傳統を
保持する私が撰者となされたこと
は、ひとへに玉津島に鎮座しまし
ます和歌の神がわが歌道の正統を加
護されたのによると、今始めて愚
かな自分は知つたわけである。

(六)やや和歌に關して深い考へを
持つてゐる仁だから。

かし。この大納言爲世の女、權大納言の君爲子とて、坊ぼくの御時限りなく思され
たりし御腹に一の御子尊良、女三の御子瓊子、法親王尊澄などあまたのした

ふ。かの大納言の君爲子ははやうかくれにしかば、このころ三位贈らせたま

ふ。贈從三位爲子とて、集しよにもやさしき歌多く侍るべし。さて大納言爲世は、

人人に歌すすめて、玉津島の社まに詣までられけり。大臣・土達部よりはじめて、

歌詠うたむと思へる限り、この大納言の風を傳へたるは漏るるものなし。子ども孫

どもなど、いきほひことにひびきて下る。まづ住吉すまよしへまうづ。逍遙せうようしつもの

しりて、九月ながつきにぞ玉津島へまうでける。歌どもの中に、大納言爲世、

一五 今ぞ知る昔にかへるわが道のまことを神も守りけりとは

かくて元應二年四月十九日、勅撰は奏せられけり。續千載つづせんざいといふなり。新後

撰集せんしよと同じ撰者のことなれば、多くはかの集にかはらざるべし。爲藤中納言、

父よりは少し思ふところ加へたるぬしにて、今少し、このたびは心にくきさま

なりなどぞ、時の人人沙汰しける。

院 後宇多にも内 後醍醐にも、朝政あそまつりごとの暇ひまには、御歌合のみしげうきこえし

中に、元亨元年八月十五夜かよ、常よりもことに月おもしろかりしに、うへ

(一) 清涼殿夜の御殿の北、弘徽殿と藤壺との間にある。

(二) 春日の神木。春日社の神人や興福寺の僧徒がこれを奉じて入洛し、強訴し、禁闕を犯す。

(三) 神木入洛中安座しおく假殿。神木移殿にある間は節會・管絃などは停止される。

(四) 丹波忠守、典藥頭、歌人。

(五) 衛士の焚く火も、そのため明るさがましたとあつては、仲秋の名月の名折れとなりはしないかと言ふので、承明門内の西にある安福殿にお移り遊ばす。

(六) 殿上の間の東口の裏戸。

(七) 殿上の間から紫宸殿に至る土廊にある。

(八) 校書殿と安福殿との間、月華門の内。儀式の際は右近衛警護す。

(九) 安福殿といつても、里内裏のことゆゑ、釣殿だが、そこへ腰掛をすゑて、東向きにも。

(一〇) 公的な場合よりも。
(一一) ひどく氣取つて、歌を人人は急にも奉らないので、大變待ち遠しい氣持がする。

後醍醐 秋の戸に出でさせ給ひて、ことなる御遊びなどもあらまほしげなる夜なれど、春日の御櫓、うつし殿におはしますころにて、絲竹の調べはをり悪しければ、例のただうち御歌合あるべしとて、侍從中納言爲藤召されて、にはかに題獻する。殿上にさぶらふ限り、左右同じほどの歌詠みをえらせたまふ。

左、内の上 後醍醐・春宮大夫公賢・左衛門督公敏・侍從中納言爲藤・中宮權大夫師賢・宰相惟繼・昭訓門院葵子の春日爲世女。右、藤大納言爲世・富小路大納言實教・洞院中納言季雄・公修・宰相實任・少將内侍爲信女・忠定朝臣・爲冬。忠守などいふ醫師もこの道のすきものなりとて召し加へらる。衛士のたく火も月の名たてにやとて、安福殿へわたらせたまふ。忠定中將、晝御座の御佩刀をとりてまゐる。殿上のかみの戸を出でさせたまひて、無名門より右近の陣の前を過ぎさせたまへば、遣水に月のうづれるいと面白し。安福殿の釣殿に床子たてて、東面におはします。上達部は簀子勾欄にせなかおしあてつつ、殿上人は庭にさぶらひあへるもいと艶なり。池の御船さしよせて、左右の講師隆資・爲冬のせらる。御みきなどまゐるさまも、うるはしきことよりは、艶にまめかし。人人の歌いたく氣色ばみて、とみにも奉らず、いと心もとなし。

(二三)「水の上に照る月なみを敷れば今宵そ秋の最中なりける」(拾遺集、源順)による。照る月も曇りのない池の鏡にさやかに映つて、これは何月の月であると言はなくても、はつきりと秋の眞中の月と知られる八月の十五夜は、ほんたうにふだんの夜とちがふ風情のある空の景色で。

(二四)ふだんはなんとも思はない曉の鐘の音も、今夜は曉が知らされるためにこの美しい仲秋の名月が傾くのではないかと、つまらない愚痴がいはれるほど實に明けるのが惜しく思はれる今宵であるよ。

(二五)曉の鐘。南史、武穆斐皇后傳に、景陽樓に鐘をおいて曉を告げた故事がある。

(二六)後宇多法皇。

(二七)常盤井殿も同じ衛府の警戒區域内で、ごく近いから。

(二八)造花。

(二九)池水にさし出た庭の砂地。

照る月なみも、曇りなき池の鏡に、いはねどしるき秋のもなかは、げにいとことなる空のけしきに、月も傾きぬ。明方あけがたちかうなりにけり。上後醍醐の御製、鐘かねの音もかたぶく月にかこたれてをしと思ふは今宵こよなりけりと講じ上げたるほど、景陽けいようの鐘も響きをそへたるをりからいみじうなむ。いづれもけしうはあらぬ歌ども多くきこえしかど、御製の「鐘の音かねのね」にまされるはなかりしにや。

かくて今年もまた暮れぬ。明くる春 元亨二正月三日、朝覲の行幸なり。法皇ほうすは御弟の式部卿の親王みかど・恒明の御家、大炊御門京極常盤井殿といふにぞおはします。内裏は二條萬里小路まごのちみちなれば、陣じんの中にて、大臣以下かみ徒歩かちよりつかうまつらる。關白二條内經・太政大臣久我道雄・左大臣實泰・右大將今出川兼季・左大將藤原冬敏・中宮大夫西園寺實衡、中納言には具親堀川・公敏洞院・爲藤・顯實・經定、宰相、實任・冬定・公明・光忠、中將、公泰・資朝、殿上人は頭中將爲定・修理大夫冬方をはじめて、残る少なし。この院は池・山の木立きだち、もとよりよしあるに、時ときならぬ花の梢をさへ造り添へられたれば、春の盛りにかはらず咲きこぼれたるに、雪さへいみじく降りて、残る常磐木とこはらぎもなし。洲崎すまきに立てる鶴

(一)普通の家の棟のやうに作つた樓のない門。表門で鳳輦をおとどめして。

(二)主上御成りのよしを法皇に奏す。

(三)入御亂聲。朝覲の行幸の時樂人が音楽を合奏する。

(四)階の間から出られて、廂に御座を設けられたから、そこで法皇に對し奉つて御拜禮を遊ばされるのを、東西の中門の廊に、上達部が大勢立ち重なつて、遙かにお見上げ申すうちに。

(五)後醍醐天皇のおもり役だつた定房卿が、帝の御拜なさるさまを見奉つて、眼に涙を浮かべていらつしやるのは、あはれ深く見える。この涙は陛下の御幼少のころを思ひ起こされてのうれし涙でもありませうよ。

(六)正殿の廂の間に出御せらる。

(七)孫廂の間に。

のけしきも、千代をこめたる霞の洞は、まことに仙の宮もかくやと見えたり。

京極表の棟門に御輿をおさへて、院司ことのよしを奏す。亂聲の後、中門

に御輿をよす。中門の下より出づるやり水に、小さく渡されたる反橋の左右に

兩大將冬教・兼季ひざまづく。劍璽は權亮宰相公泰つとめられしにや。關白内經

公卿の座の妻戸の御簾をもたげて、入れ奉らせたまふ。とばかりありて、寢殿

の母屋の御簾みなあげわたして、法皇後宇多出でさせたまへり。香染の御衣、

同じ色の御袈裟なり。御袈裟の簀置かる。内の上後醍醐、公卿の座より勾欄を

經たまふ。御供に關白内經さぶらひたまふ。階の間より出でたまひて、廂に御

座奉りたれば、御拜したまふほど、西東の中門の廊に上達部多くたち重なりて

見やり奉る中に、内の御めのとの吉田の前大納言定房、まみいたうしぐれたるぞ

あはれに見ゆる。そのかみのことなど思ひ出づるに、めでたき悦びの涙ならん

かし。御拜をはりぬれば、またもとの道を経たまひて公卿の座に入らせたまひ

ぬ。法皇後宇多も内に入りたまひて、暫しありて、左右の樂屋の調子とのほ

りて後、また帝後醍醐入らせたまふ。法皇も同じ間の内に、御褥ばかりにてお

はします。末の廂に、内よりまわれる女房どもさぶらふ。一の車に小大納言の君

(八)大納言典侍のこと。(この巻の初めに見ゆ)第一輛目の車には左に小大納言の君、右に帥典侍、後方に讃岐と「こいま」とかいふ雑仕が陪乗して來た。

(九)のちに後醍醐妃新待賢門院廉子。
(一〇)夏引・岩根の二人の雑仕を載す。

(一一)多房。

(一二)藏人頭兼修理大夫。

(一三)催馬樂、出の歌。
(一四)同、律の歌。

師重女、「うきもわが身の」と詠みし人の妹なり。帥典侍すゑの侍資茂女、讃岐・こいまとかや。二の左に新兵衛、中宮内侍、後に准后ときこえにき。尻に夏引・いはねを。三の車に少將内侍・尾張内侍、尻に青柳、今まわりなどきこゆ。上達部、御前に著きて後、御臺たいまゐる。役送やくぞう公泰宰相中將、陪膳右大將兼季、そのほど舞人跪く。地下ちげの舞は目馴れたることなれど、をりからにや、今日はことにおももち足踏みもめでたく見ゆ。院後宇多の御覺えにて、壽王といふ人、松殿まつどののなにかしとかやが子なり。落躰らくたんなど舞ふとききしかど、夜もふけ、雪もことにかきくらしして、なにのあやめも見えざりき。その後、御前おまへの御遊びはじまる。頭大夫とうのだい冬方御宮の蓋に御笛入れて持ちてまゐる。關白せきはく内經とりて御前にまゐらせたまふ。右大將みぎのたいしょう兼季も笛、中宮大夫なかつうだう實衡琵琶、大宮大納言笙、東宮大夫公賢こうけん箏、左宰相中將公泰和琴、光忠宰相兼策篳篥、兼高も吹きしにや。拍子左大臣實泰、すゑ冬忠の宰相。上後醍醐の御笛の音すみのぼりて、いみじくさえたり。左の大臣實泰の「安名尊やすなむね」「伊勢いせの海」、かぎりなくめでたく聞ゆ。ことどもはてぬれば、御贈物おくりものまゐる。錦の袋に入れたる御笛、篋の蓋に据ゑらる。左大臣實泰取り次ぎて、關白せきはく内經に奉る。御前に御覽ぜさせて、冬方を召して賜は

(一)定房の關東下向は去年の十月である。(花園天皇宸記)

(二)大體、考へてみると、ひどく情なかりはてた世の中である。これ位のことは一幕府の承認を得なくとも、御父君の法皇の御心のままに、ごく簡單におきめ遊ばすはすのものであるのにと、幕府が糺にさはるけれど。

(三)主上の御かたに特に親しく伺候してゐる上達部などで、うす腹汚ない者どもは、自分の願ひごとがうまく行かないことなどもあるために、やはり法皇をお怨み申し上げて、なにとぞ、この主上御親裁の儀を關東から御承認申し上げないものかなと、神佛に祈願までした。

(四)院政の際の訴訟裁斷の所。

(五)内裏の政治議定の所。

(六)院の文殿で政治を議する官。

(七)ひどく十分にある。

(八)三史は史記・前漢書・後漢書。

五經は詩經・書經・禮記・易經・春秋。論議は研鑽討議。

す。次に唐の赤地の錦の袋に御琵琶入れてまゐる。その後、御馬、殿上人口をとりて、御前に曳き出でたり。ほのぼのと明るるほどにぞ歸らせたまひぬる。

法皇 後宇多ややもすれば大覺寺殿にのみ籠らせおはします。人人世の中のことども奏しにまゐり集ふ。今は一筋に、御行ひにのみ心入れたまへるに、いとうるさく思せば、その夏のころ定房の大納言あづまへつかはさる。帝 後醍醐に天の下のこと譲り申さんの御消息なるべし。おほかたはいとあさまじうなりはてたる世にこそあめれ。かばかりのことは父帝 後宇多の御心にいとやすく任せぬべきものをと目ざましけれど、昨日今日はじまりたるにもあらず。承久よりこなたはかくのみなりもて來にければなめり。内に近くさぶらふ上達部などの、なま腹汚なき、わが思ふことのとどこほりなどするを、法皇を愁はしげに思ひ奉りて、このこといかで東よりゆるし申すわざもがなと祈りなどをさへぞしける。かくて大納言定房ほどなく歸り上りぬ。御心のままなるべく奏したりとて、院の文殿、議定所に遷され、評定衆など少少かはるもあり。さて世をしたためさせ給ふこといとかしこうあきらかにおはしませば、昔に恥ぢず、いとめでたし。御才もいとはしたなうものしたまへば、よろづのこと、曇りなかん

- (九) 清涼殿。
 (一〇) 漢詩を作ること。
 (一一) 易の繫辭の「久しかるべきは則ち賢人の徳、大いなるべきは則ち賢人の業」による。
 (一二) 詩文のことは女が口出しすべきでないから。
 (一三) 父實兼の病による。
 (一四) 中務省の被官で、詔勅の草案など書く事務官。
 (一五) 曲節をつけて朗詠する。
 (一六) このやうな正式の詩會においては、豫め人人も用意するから。
 (一七) ところが臨時に突然難題を下されて、内内詩を作らせ、歌を詠ませられて侍臣の賢愚を御試験あるので、ひどくつらいことが多く、おちおち油断もできない時代であつた。この文は古今集序の「古への代代の帝、春の花の朝、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人人を召して、ことにつつつ歌を奉らしめたまふ。あるは花を思ふとてたよるなき所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべもなき間にたどれる心を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけん」による。

めり。三史五經の御論議なども暇なし。

六月みなつきのころ中殿ちゅうだんの作文ぶんせさせたまふ。題は式部大輔藤範奉る。「久しかるべきは賢人の徳」とかやきこえしにや。女にのまねぶべきことならねば洩らしつ。上達部・殿上人三十餘人まゐれり。關白殿房實ばかり直衣ひきほしにて御几帳のうしろにさぶらはせたまふ、上は御引直衣、御琵琶ひび玄象ひかせたまふ。右大將實衛 琵琶、春宮大夫公賢箏、權大納言親房箏、權中納言氏思和琴、左宰相中將公翠 箏、右衛門督嗣家笛、右宰相中將光思 箏、拍子は例の左大臣實泰、すゑは冬定なりしにや。上後醍醐の御琵琶の音いひ知らずめでたし。右大將はなにかあらん、心とけてもかきたてられざりき。御遊びはてての後、文臺ぶんたい召さる。藏人内記ちゆうに俊基人人の文を取り集めて一度に文臺の上におく。披講ひかうの終るほどに、短か夜はほのぼのと明けはてぬ。御製を左の大臣返す返す誦よみして、うるはしく朗詠にしたまふ。聲いとうつくし。をりふし郭公かくこうの一ひと聲こゑのり捨てて過ぎたるは、いみじく艶えんなり。かやうのまことしきことはかねて人も心づかひすれば、あやまちなかるべし。時ときに臨まみてにはかに難き題を賜はせて、うちうち詩を作らせ歌を詠ませて、賢く愚かなると御覽じわくに、いと辛むづいこと多く、心

(一)七夕祭。

(二)人人の樂器の受持ちは、さきの中殿の詩會に同じだ。「鳴板」は、清涼殿孫廂の南の落板敷から簀子にのぼる階のところにある。第一の板を踏むと音がする。見參板(けんさんのいた)とも。

(三)蘇合香。
(四)祕曲を殘さず。

(五)管絃の音も、天の河まで響くらしい——今宵、牽牛・織女にたむける秋の奏樂は。
(六)順流る、順次に披講する。

ゆるびなき世なり。

その七月七日乞巧きこう奠、いつの年よりも御心とどめて、かねてより人人に歌召され、ものの音ねどもも試みさせたまふ。その夜は、例の玄象けんじやうひかせたまふ。人の所作、ありし作文さくもんにかはらず。笛・箏そうなどには、殿上人ども鳴板なるいたのほどにさぶらひてつかうまつる。中宮なかつう禮成門院れいせいもんいん禰子ねこも上の御局みろくにまうのぼらせたまふ。御簾みすだれのうちにも琴・琵琶びばあまたありき。播磨はりまの守長清しゆぢやうの女、今は左大臣さだみ實翠みずの北の方きたのほうにて、三位殿みいのだいといふも箏そうひかれけり。宮嬪みやひん子の御かたの播磨はりまの内侍うちじも同じく琴ことひきけるとかや。琵琶びばは權大納言ごんのだいなるごんごんの三位殿みいのだい師藤大納言しとうのだいなるごんごん女めいみじき上手かみにおはすれば、めでたうおもしろし。蘇香そかう・萬秋樂ばんしゆくらく、殘のこる手てなく、いく返かへしとなくつくされたる明方あけあたは、身にしむばかり若き人人にんじんめであへり。さらでだに、秋の初風はつかぜはげにそぞろ寒ふせきならひを、ことわりにや。御遊みあそびびはてて文臺ぶんたい召まさる。このたびは和歌わがの披講ひかうなれば、その道の人人、藤大納言とうのだいなるごんごん爲世ためよ、子ども孫まごども引き連れてさぶらへば、上かみ後ご醍醐たいごの御製みせ、

五 笛竹ふえたけのこゑも雲井うみいに聞きゆらし今宵こんじやう手て向むかくる秋あきのしらべは

六 すんながるめりしかど、いづれもただ天あまの川がは、鵲かみさぎの橋はしよりほか珍めづしきふしは

(七)ともに七夕の平凡な歌題。

(八)薫物のかをりを誘つて吹く庭の秋風よ、同じことなら、この薫物のかをりを、空にますたなばた様まで送れ。

(九)と詠まれたが、ほんたうに通りならぬ名香のかをりが、座中にみちて、非常に立派で、かうばかりだった。

(一〇)正中元年三月二十三日。

(一一)鶴の羽をひろげたとるころを丸く紋にして織る。

(一二)綾の文を、糸をしづめて固く織つたものをいふ。

(一三)櫻に蝶を色色あしらつた模様を織つた、櫻萌黄の二重織物の御下襲。

(一四)攝政關白。

(一五)家風とか、なんとかで。

(一六)細かき模様を地の上に浮かせて織つたもの。

(一七)武官の冠の両耳につけて、菊花を半切したやうなもので、もと冠のおちるのをふせぐ具。老懸。

(一八)端から見えた顔つき。

聞えず。まことや、實教大納言なりしにや、

おなじくは空まで送れたきものにほひを誘ふ庭の秋風

けにえならぬ名香の香どもぞめでたくかうばしかりし。

花も紅葉も散りはてて、雪つもれる日数のほどなさに、また年かはりて、正

中元年といふ三月の二十日あまり、石清水の社に行幸したまふ。上達部・殿上

人、いみじき清らをつくせり。關白殿房實は御車なり。右大將實衛松襲の下襲

鶴の丸を織る。蘇芳の固紋の衣、左大將經忠櫻萌黄の二重織物の御下襲、櫻

に蝶を色色に織る。花山吹のうへの袴、紅のうちたる御衣、人よりことにめで

たく見えたまふ。御かたちも、にほひやかにけだかきさまして、まことに一の

人とはかかるをこそきこえめと、飽かぬことなく見えたまふ。土御門中納言顯

實、花櫻の下襲なりき。花山院中納言經定などぞ、上藤の若き上達部にて、い

かにもめづらしからんと世の人も思へりしかど、家のやうとかやなにとかやと

て、たदैいつもそのままなり。公泰宰相中將劍璽の役勤めらる。櫻萌黄のうへの

袴、樺櫻の下襲、山吹の浮織物の衣、紅のうちたる單を重ねられたり。白くま

ろく肥えたる人の、眉いと太くて、紋のはづれ、あな清げと好もしくぞ見え

(一) 藏人頭中宮亮。

(二) 近衛の中少將、衛門兵衛の佐官。

(三) たてこんでゐたから。

(四) 檢非違使別當。

(五) 檢非違使の下役。

(六) 地はすつかり銀を延べたのではないかと思はれるのに、鶴の紋様を黄金に打つたのは。

(七) 左舞の一番目。

(八) ひどく年かさのやうで、髯だらけの、ひねた顔附して、幼少なかと立ち竝ばれたのは、大變不釣合な對照であつた。

(九) 面倒で。

(一〇) 色も紋もめづらしくて感じのよいのを、これはひどすぎると思はれるまで、べた一面に彩色して。

(一一) 雖に山吹の咲いてゐる様を銀で打ち出して、ひと、くつつけである。花の色、瓣の重なつてゐるさままで、細かに苦心が見えて面白い。

られし。頭亮藤房、樺櫻の下襲、蘇芳の浮織物の衣、弟の職事季房も山吹の下襲、紅の衣。衛府の次官どもは、うち混みたれば見もわかれず。別當左兵衛督資明、はしり下部とかやいふもの八人に、地は皆しろがねを延べたるにやと見ゆるに、鶴の丸を黄にみがきたる、好ましうきよげなり。

舞人にもよき家の子どもをえらびととのへられたり。一の左に、中院の前大納言通顯の子通冬少將、まだいとちいさきに、童なども同じほどなるを、好みととのへて、いと清らにいみじうしたてて、秦の久俊といふ御隨身をぞ具せられたる。右に久我の少將通宣、いたく過したるほどにて、ひげがちに、ねびたまへる容貌して、ちいさきに立ちならべられたる、いとたとしへなくぞ見えし。それよりつきつきは難かしさに忘れぬ。大將の隨身どもこそ、昔のことはげには見ねば知らず、いとゆゆしく、まことに花を折るとはこれにやと、めでたう面白かりし。左大將殿經思の隨身、赤地の錦の、色も紋も目馴れぬさまに好もしきを、情なきまでさながらだみて、ませに山吹を銀にてうちものにしてひしとつけたり。花の色、かさなりなどまで、こまかにうつくし。露を水晶の玉にておきたる、朝日に輝きて、すべていみじうぞ見ゆる。西園寺實衡の隨身

(二) 松の模様を糸で結んで飾り付け、丸い鶴の紋を銀と金とで打ち出してくつつけたのは、山吹よりも見ばえがしなかつた。

(三) いろいろな神寶、神馬、幣帛などを奉納して。

(四) 一樣に。

(五) 褐色の衣に雉の尾を打ち違へにした白い模様をつけてゐるが。

(六) これも目立つて。

(七) 賀茂の祭祭、四月中の酉日。

(八) 神館。賀茂の齋館。序の神官が打ち連れて社殿にまゐるのが。

(九) 賀茂祭の勅使。

(一〇) 公賢の父。

(一一) 徳大寺家の紋の木瓜をいろいろに織つたものかと見受けた。

(一二) 新任披露の宴會。

(一三) 主賓。

(一四) 右大臣經忠の父。

も、同じ錦なれど、松をむすびて、鶴のまるを白と黄とにうちてつけたる、山吹よりはほひなく見えき。さまざまの神寶、神馬、幣帛など、夜もすがらのしりあかして、またの日の暮つかた歸らせたまひぬ。

同じ卯月十七日、賀茂の社に行幸なる。上達部多くはさきにおなじ。衣がへの下襲どもけぢめなく涼しげなり。別當齋朝の下部、このたびは十二人、かちんに雉の尾を白くうち違へてつけたる、これもけちえんに、このましげなり。明くる日は祭なければ、神館のかたうち續き、花やかに面白し。今日の使は徳大寺中将公清なり。東宮大夫公賢の掣にておはすればにや、左大臣實泰の大炊御門富小路の御家よりぞ出で立たれける。人がらといひ、よろづめでたく見ゆ。萌黄の下襲、御家の紋のまかうを色色に織りたりしにや、近ごろの使には似ず、いとみじくきらめきたまへり。中宮の御使は亮藤房なり。このころ時にあひたるものなれば、いと清げに劣らぬさまなり。

その二十七日に任大臣の節會行はる。左大將經忠右大臣にならせたまふ。内大臣冬教左にうつりたまへば、右大將實衡内大臣になさる。またの日やがて、右大臣殿經忠大饗行はせたまへば、尊者に内大臣實衡まゐりたまふ。近衛殿

(一) 法皇の御所であつた大炊御門の式部卿親王の御家の明いてゐるのを、内大臣が借り受けて。

(二) 主賓には右大臣、すなはち御自分の家の大饗を終へられると、主客相伴なつてお出で遊ばした。

(三) 内大臣も右大臣も大將を兼任してゐるから、隨從の武官どもが一通りならず苦心して、お互ひに服裝の華美を氣取り合つたのは。

(四) 御馳走なども。

(五) 元亨四年三月二十九日。

(六) 大體家平公はお若い時は少女を御寵愛あつて、この右大臣の君などもお出来になつた。

(七) 一遍づつ大層華やかに御寵遇なさるのが甚だ宜しくなかつた。

(八) 御寵愛。

(九) 大臣家等の家司に補せられる輕い家柄の者。五位相當。

(一〇) うるさく執著されて。

(一一) 引き續き現在なほ御寵幸の人であるから。

(一二) 體をよりかからせながら、後をふり返つて、きつと御覽になり。

(一三) ああ、お前と一緒に冥途にゆ

家平、近ごろは御惱みがちにてのみ臥したまへれど、今日の御悦びに、めづらしく出でゐさせたまへり。法皇後宇多は今は大覺寺殿にのみおはしませば、大炊御門の式部卿の親王恒明の御家を内大臣殿實衡申し受けて、同じ日、大饗したまふ。尊者には右の大臣經忠、やがて、わが御家の大饗はつるままに引き連れてわたりたまへり。あるじもまれ人も、大將兼ねたまへれば、隨身どもえならすけいめいして、かたみにけしきとりかはしたる、いと面白し。あるじのおとど實衡琵琶、右衛門督兼高筆筆、隆資朝臣笙、室町三位中將公春琴、教宗朝臣笛、有賴宰相拍子とりて、遊びくらしたまふ。御前のもなども常の作法にことを添へて、こまかにきよらなり。

その後いくほどなく、右大臣殿經忠の御父君前關白殿家平御惱み重くなりたまひて、御髪おろす。にはかなれば、殿の内の人人いみじう思ひ騒ぐ。おほかた、若くてぞ少し女にもむつまじくおはしまして、この右大臣殿經忠なども出で來たまひける。中ごろよりは、男をのみ御かたはらに臥せたまひて、法師の兒のやうに語らひたまひつつ、ひとわたりづつ、いと花やかに時めかしたまふこと、けしからざりき。左兵衛督忠朝といふ人も限りなく御おぼえにて、七

けるなら、嬉しいだらう。

(二四)このやうなあさましい御様子で。

(二五)前後不覺で、狂ひながら。「枕よりあとより戀のせめ來ればせんかたなみに床なかにをる」(古今集、誹諧歌)

(二六)常に人の前に伺候してゐるやうな恰好で、袍など引き掛けて。

(二七)すぐ參上します、參上します。

(二八)一條天皇の長徳元年五月八日薨。

(二九)藤原相如のこと。榮華物語「見はてぬ夢」に、道兼薨去の際、その家にゐた藤原相如が「夢ならでまたもあふべき君ならば寝られぬいをも歎かざらまし」(夢でなくてまた逢ふことのできる君ならば、夜眠れないことも嘆かないであらう)と詠んで死んだ。そこで、その娘がまた嘆いて「夢みずと歎きし人をほだなくまたわが夢に見ぬぞ悲しき」と詠んだ。

(三〇)迎へ取つたのだらうと。

八年がほどいとめでたかりし。時すぎてその後は、成定といふ諸大夫いみじかりき。このころはまた、隱岐守頼基といふもの、童なりしほどよりいたくまとはしたまひて、昨日今日までの御召人なれば、御髪おろすにも、やがて御供つかうまつりけり。病おもらせたまふほど、夜晝御かたはらはなたずつかはせたまふ。すでに限りになりたまへる時、この入道頼基も御後にさぶらふに、よりかかりながら、きと御覽じ返して、家平「あはれ、もろともに出で行く道ならば、嬉しいかりなん」とのたまひもはてぬに、御息とまりぬ。右大臣殿經忠も御前にさぶらはせたまふ。かくいみじき御氣色にてはてたまひぬるを、心憂しとおぼされけり。さてその後、かの頼基入道も病づきて、あと枕も知らずまどひながら、常は人にかしこまる氣色にて、衣ひきかけなどしつつかうやがてまゐり侍る、まゐり侍る」とひとりごちつつ、ほどなく失せぬ。粟田の關白道兼のかくれたまひにし後「夢見ず」と嘆きしものの心地ぞする。故殿家平のさばかり思されたりしかば、召し取りたるなめりとぞ、いみじがりあへりし。

第十四 春の別れ

(一) 卷名は中納言有忠が嘉暦元年春東宮の薨去を悼んで出家して詠んだ「おほかたの云々」の歌による。記事は後醍醐天皇の正中元年から嘉暦二年までで、後宇多法皇の崩御、爲藤中納言の薨去、正中の變、東宮の薨去、關後拾遺の勅撰、量仁親王立坊、關白太政大臣鷹司冬平の薨去など。元弘の亂の端緒として注意すべき卷である。

(二) 正中元年。

(三) 後から後からと追加してお始めなさるけれど。

(四) 御見舞の勅使をさし上げる。

(五) 綑をわがねて白木で挟む。

(六) 内裏から法皇御所大覺寺までの。

(七) 左右の馬寮の御馬。

(八) 大覺寺殿へ行幸されると、法皇は以前主上がこの御所に行幸された當時を思ひ出されながら、色色のことを御遺言あらせられた。

(九) この大覺寺に澤山の御莊や御牧を寄進して置かれて、性圓法親王がこの寺の寺主におなり遊ばされるやうお計らひ置きになった。

(一〇) さういふやうなことなどが、お崩れになつた後に心配でないや

四月フツキの末つかたより、法皇後宇多御惱み重くならせ給へば、天下の騒ぎ思ひやるべし。帝みかど後醍醐もいみじく思し歎き、御修法なども、いとこちたく、またまた始め加へさせたまへど、しるしもなくて、日に重らせたまへば、夜晝かとなく「いかに、いかに」と訪とぶらひ奉らせたまふ。若き上達部などは直衣かじほに柏かしは挟はさみして、夜中曉となく、遙とほけき嵯峨野を寮せの御馬うまにて馳せせありきたまふめり。今はむげに頼たのみななきよしきこゆれば、大覺寺殿へ行幸、ありしこと思おもし出づ。よろづのことどもきこえさせたまふ。上後醍醐の一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いとかなしきものに思ひきこえさせたまひて、この大覺寺九にそこの御庄みきやう・御牧うまきなどを寄せ置かる。法ほうのあるじとしておはしますべく思おもしおきてけり。さやうのことなど、見たまへざらんあと、うしろめたからぬさまなどぞきこえさせたまひける。

その後、御孫二の東宮邦良行啓あり。世をしろしめさん時の御心づかひなど、

うになつてゐるなど、主上にお話なされた。

(二)後宇多天皇の長子後二條天皇の皇子。

(三)かねてから。

(四)主上と東宮との御中は、表面は大層よいけれども、眞實にはないのを、法皇は大變苦に病んでいらつしやるが、言葉に出して仰しやることができないから。

(五)ただ大體について處世上のこととか、また最近主上が親政遊ばされるやうになつてから、餘り用ゐられなくて、少し世を怨めしく思つてゐるやうな人人で、法皇の御心にも氣の毒だと思召されるのなどが大勢あるのを、東宮の御心のままになる御代となつた時には必ず考慮してやつてほしいなど申し上げられた。

(六)一寸お目ざめになつて。

(七)一寸せきはらひをして。

今少し、こまやかにきこえ知らせたまふ。宮は先帝たじ後二條院の御代りにも、いかで心の限りつかうまつらんと、二あらましおほされつるに、飽かず口惜しうていたうしほたれさせたまふ。帝みかど後醍醐の御なからひ、うはべはいとよけれど、まめやかならぬを、いと心苦しと思さるれど、言に出でたまふべきならねば、一四ただおほかたにつけて、世にあるべきことども、またこのころ、少し世に怨みあるやうなる人人の、わが御心にあはれと思さるるなどあまたあるをぞ、御心のままなる世にもなりなん時は、必ず御用意あるべくなどきこえたまひける。中御門大納言經繼・六條中納言有忠・右衛門督教定・左衛門佐俊顯などきこえし人人のことにやありけん。その夜はとまりたまへるも知ろし召さで、夜うちふけて、一五少し驚かせたまひて、「東宮邦良はいつ歸りたまひぬるぞ」とのたまふに、一六うち聲こゑづくりて、近く参りたまへれば、「未だおはしましけるな」とて、いとらうたしと思されたる御氣色あはれなり。おほかたの氣色、院後宇多の内かいしめりたる有様など、よろづ思しめぐらすに、いと悲しきこと多かれば、宮邦良うち泣きたまひぬ。心細ういみじとのみ思さるるに、正中元年六月二十五日つひに崩たふれさせたまひぬ。御年五十八にぞならせたまひける。後宇多院と申

(一) 供養し。

(二) 御父後宇多院御一人だけを頼みにし申し上げてゐられたのに。

(三) その當時からの舊友であるから、御自分と同じ心であらうと思ひやつても懐かしい氣がするのだ。

(四) あなたと御一緒に御敬慕申し上げてゐた法皇様もおかくれになつた悲しい秋であるから、道理を知れと、今宵の八月十五夜の空も曇るのですね。(新千載集・哀傷)

(五) 法皇様がおかくれになつて、この世に光がなくなつたのであるから、今日の仲秋の名月が姿を見せないのももつともであるが、皆の涙をも添へて、一層空も曇るのであらうかと思はれます。

(六) 後宇多上皇の院官によつて、正安三年新後撰、文保三年續千載を撰んだことをいふ。

(七) 撰芥抄に「續後拾遺集二十卷、元亨三年七月二日、繪旨を奉じて

すなるべし。

帝後醍醐また御服奉る。あけくれねんごろに孝^{けう}に奉りたまふさま、いとかたじけなし。御女の皇后宮ときこえし、今は達智門院^{たぢもんゑん}罪^{つみ}と申すも、まいて一所をのみきこえさせたまへるに、心細ういみじと思し歎くこと限りなし。昔の尙^{なう}侍^{しやう}の殿^{だん}瑠子、近ごろ院號ありて萬秋門院ときこゆるも、故院後宇多の御かげにてのみ過^すしたまへれば、よりどころなくあはれげなり。御四十九日は八月十日餘りのほどなれば、世の氣色なにとなくあはれ多かるに、女院・宮たちの御心のうちども朝霧よりも晴間^{はるま}なし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の位の御時に宰相典侍とてさぶらひしは雅有の宰相の女なり。その世のふるき友なれば、同じ心ならんと思しやるもむつまじくて、萬秋門院瑠子のたまひ遣はず。

仰^{おほ}ぎ見し月もかくるる秋なればことわり知れと曇る空かな
いとあはれに悲しと見奉り、御返し、宰相典侍、

ひかりなき世はことわりの秋の月涙そへてやなほ曇るらん

永嘉門院 瑠子、西華門院 基子など、いづれも思^{おぼ}し歎^{なげ}く人人多かり。春宮 邦良もいと戀しくあはれとのみ思ひきこえたまふまに、御法事をぞまめやかに勤め

民部卿爲藤卿これを選び、篇を終へずして、正中元年七月十七日薨去とある。
(八)左中將、正四下。永仁七年五月五日卒、二十九歳。爲世の長子、爲藤の兄。

(九)親に先立つて歿した中納言もさぞ遺憾にたへなかつたらうが、後に残された卿の心も、わが子先立てで、どんなにか怨めしく思つてゐることであらう。鶴——子を愛する鳥だから、大納言の亡き子を悲しむ心に喩へる。和歌のうらみ——和歌の浦をかけ、鶴の縁語としてゐる。

(一〇)子供には先立たれてしまつて年老いた親のひたすら嘆き悲しんで暮してゐる心を、御推量下さいませ。

(一一)どうして生きゐてくれなかつたかと。

(一二)故爲藤中納言は特に自分の子にして。

(一三)わが末子の爲多の少將といふのをひどく可愛がつて。

させたまひける。大覺寺にては性圓法親王とりもちて行はせたまふ。帝みかど後醍醐

・春宮邦良の御法事は、龜山殿の大多勝院にてつとめらる。

あはれ、あはれといひつつも、過ぎやすき月日のみ移りかはりて、年正中二年も返りぬ。一昨年ととせばかりより、また重ねて撰集のこと仰せられしを、爲世の大納言大納言二度になりぬればにや、爲藤の中納言に譲りしを、いくほどなくかの中納言惱みて失せぬ。いとほしうあはれなり。故爲道朝臣の失せにし、ただ年月経れど、絶えぬ恨みなるに、又かくとり重ねたる嘆き、大納言爲世の心のうち言はんかたなし。春宮邦良よりしばしば訪まをらはせ給ふ御消息せうしのついでに、

遅おそれぬ鶴つるの心もいかばかり先だつ和歌のうらみなるらん

御返し、大納言爲世、

思おもへただ和歌の浦には遅れぬて老いたるたづの歎く心を

世に歌詠むとおぼしき人の、哀れがり歎かぬはなし。せめて、勅撰のこと撰びはつるまで、などかとはとぞ、一族ひととらの嘆きいとほしげなり。故爲道の中將の二郎爲定といふを、故中納言爲藤とりわき子にして、なにごともしひつけしかば、撰歌のこともうけつぎて、沙汰すべきなどぞきこゆる。大納言爲世は末すえの子爲

(一)この機に乗じて、爲定を改めて、撰集のことを爲多にさせようかと思つてゐるらしいといふので。

(二)大納言もそのままにはしておけないので、探し出して、もとのやうに撰者にして、穩やかに落著したといふ話である。

(三)正中元年九月十九日。

(四)隠謀が露顯したと思つたのであらうか、かの二人はすぐに。

(五)嚴重に訊問され、その警固が大變な騒ぎであつた。

(六)主上が北條氏の世を轉覆あそばされようとして、かの武士どもをお召しになつたのであると。(七)拘置するはず。

(八)故法皇御在世の時代には、世の中も穩かで結構であつたのに、お崩れになると、はや、こんな事件も起ることよ。

多少將といふをいたくらうたがりて、このまぎれに引きや越さましと思へるけしきありとて、爲定もうらみ歎きて、山伏姿に出で立ちて、修業に失せぬなど言ひ沙汰すれば、人人いとほしう、あはれになどもて扱へど、さすが求め出だして、もとのやうにおだしく定まりぬとなむ。

そのころ、九月ばかり、まだしののめのほどに、世の中いみじく騒ぎののしる。なにごとにかと聞けば、美濃の國の兵にて、土岐の十郎頼兼とかや、また多治見の藏人國長などいふ者ども忍びて上りて、四條わたりに立ちやどりたることありて、人に隠れて居りけるを、早うまた告げ知らする者ありければ、にはかにその所へ六波羅より押し寄せて、搦め捕るなりけり。あらはれぬとや思ひけん、かの者どもは、やがて腹切りつ。また、別當資朝・藏人内記俊基、同じやうに武家へ捕られて、嚴しく訊ね問ひ、守り騒ぐ。ことの起りは、帝後醍醐世を亂りたまはんとてかの武士どもを召したるなりとぞ言ひ扱ふめる。さて、その宣旨なしたる人人とて、この二人をも東へ下して禁むべしとぞきこゆる。いかさまなることの出で來べきにかと、いと恐ろしくむつかし。「故院後宇多おはしまししほどは、世ものどかにめでたかりしを、いつしかかやうの

(九)正應三年内裏流血事件(一)さし
櫛(參照)

(一〇)後嵯峨院の御遺言に關東から
横槍を入れて御背きした御恨み。

(一一)櫛を編んで作つた笠。

(一二)あちらの方に。

(一三)そのままにしておいては、承
久の時のやうな、言葉には云へな
い大變不敬なことが出来しやうな
取り沙汰があるので。

(一四)主上はまだ御謀が熟さないう
ちに露顯したのをひどく残念に思
しめされたが、ひと先づこの事件
を穩やかにをさめようと考へられ
たから、かの正應の事件當時に、
龜山上皇がなさつたやうに、この
ことに關しては、主上は一切御存
知遊ばしてゐない旨の御誓書を北
條高時に遣はされた。

(一五)龜山天皇から今上まで七代に
歷仕す。

(一六)天下の人人に潔白で重厚な人
物だと思はれてゐたころだから。

(一七)きつぱりと辯明すると、關東
の荒武者どもの心にも大層恐れ多
いとの念が起つて、釋然として主
上には御構ひない旨を奏上した。

ことも出で來ぬるよ」と、人の口安からざるべし。正應にも淺原といひし騒ぎ
は、後嵯峨院の御處分を東より引き違へし御恨みとこそはきこえしか。今もそ
の御憤りの名殘あるべし。過ぎにしころ、資朝も山伏のまねして、柿の衣にあ
やむ笠といふもの著て、東の方へ忍びて下れりしは、少しは怪しかりしことな
り。はやうかかるとどもにつけて、あなたさまにも、宣旨を受くる者のあり
けるなめり。俊基も紀伊國へ湯浴みに下るなどいひなして、田舎ありきしげか
りしも、今ぞみな人思ひあはせける。

さるままには、言ひ知らず聞ゆることどもあれば、まだきに、いと口惜しう
おぼされて、このことを先づ穩しくやめんとせば、かの正應にありしやうな
る誓ひの御消息を遣はず。宣房の中納言御使にて東に下る。おほかた、ふるき
御代よりつかへ來て、年も腐けたる上、このころは天下に潔くむべむべしき
人に思はれたるころなれば、このことさらに帝の知ろし召さぬよしただげや
かにいひなすに、荒き夷どもの心にも、いとかたじけなきことと和みて、無爲
なるべく奏しけり。この御使の賞にや、宣房、大納言になされぬ。いとみじ
き幸ひなり。親賢通は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへ、いと清げ

(一)主謀者たちは。

(二)元中二年八月。當時前權中納言、別當は權中納言以前の職。

(三)鎌倉から。

(四)いつかをりがあつたらとばかり思ひつづけていらつしやるであらう。

(五)灯の消えたやうな氣持ちで、途方に暮れあつた。

(六)このやうな餘命のない私をお見棄てになつては、よう彼の世へやらお出で遊ばされますまい。

(七)故後宇多院妃の永嘉門院。

(八)故院が御母代として年頃この東宮をお預け申されたので、現在も同じ御所(土御門萬里小路殿)にお住まひ遊ばした。

(九)さうして東宮妃にも、すなはち故院の姫宮で、門院のおそばで御養育なさつたかを差し上げられたところ、世に類もない様子で御睦まじくお暮しなされたのであ

にて、あまたあめり。されば、おほやけは知ろし召されぬにても、かの人人は逃るべきかたなしとて、別當資朝は佐渡の國へ流されぬ。俊基はいかにして免れぬるにか、都へ歸りぬれど、ありしやうには出でつかへず、籠り居たるよしなり。かやうにてことなく静まりぬれば、いとめでたけれど、上後醍醐の御心のうちはなほ安からず、いかならん時とのみおもほしわたるべし。

月日ほどなく移り行きて、嘉暦元年になりぬ。三月のはじめつかたより、東宮邦良例ならずおはしまして、日日に重らせたまふ。さまざまの御修法どもはじめ、御祈り、なにやかやと、伊勢にも御使奉らせたまへど、かひなくて、三月二十日つひにいとあさましくならせたまひぬ。宮の内、火を消ちたる心地して、まどひあへり。御乳母の對の君といふ人、夜晝御かたはら去らずさぶらひ馴れたるに、いみじき心まどひ、まことにをさめがたげなり。限りと見えたまふ御顔にさし寄りて、對の君「かく残りなき身を御覽じ捨てては、えおはしましやらじ。今一度御聲なりとも聞かせさせたまひて、いづかたへも御供にゐておはしましてよ」と、聲も惜しまず泣き入りたまへるさま、いとあはれなり。すべて、宮の内とよみ悲しむさまいはんかたなし。永嘉門院瑞子は御子もおは

つたが、その妃の宮なども非常に悲しみに沈んでしまはれた。

(一〇)をり悪しく士用では、犯士の忌があつて御葬送できないために。

(一一)院號下賜の沙汰もあるべきであるが、然しながら、御在世の時に、そんな必要はないと御遺言遊ばされたものだから、主上におい

ても、そのままにして置かれた。

(一二)常の御居間の裝飾。

(一三)東宮衛士の詰め所。

(一四)三條天皇の東宮小一條院が東宮を辭めさせられた時、御妃堀川

左大臣顯光公の姫君が「雲井まで立ち上るべき處かと思えし思ひの

はかにもあるかな」と、小一條院が帝位に登られなくて、案外であつたのを嘆かれたのは。

(一五)御在世のまま御自分から進んで退位されたのだから、今の場合に較べると。

(一六)さし當つての御愁傷はさておき、先帝が御在位のまま、院政

もお執りにならないうち崩ぜられたのさへ不都合なのに、また中途

半端に薨ぜられて情ないから、世間の人人の思惑も不愉快で、ひと

かたならぬ悲嘆の上に心配が東

しまさねば、年月この宮を故院後宇多きこえつけさせたまひしかば、今も一つ

院におはします。御息所みよすところにも、やがて故院の姫宮禊子を女院の御かたはらにか

しづききこえたまひしを、婚むはせ奉りたまへれば、またなきさまにおぼしかは

して、過ぐさせたまへるなど、いみじう沈み入りたまへり。

さてあるべきならねば、常の行啓のさまにて、先帝後二條のおはしましし北

白河殿へぞ入れ奉らせたまひぬる。土用つちようのほどにて、暫しかしこにおはします

さへいと悲し。院號いんごうなどの沙汰もあるべくこそ。されど、おはしましし時にそ

のことはよしなかるべく仰せられ置きしかば、内よりもきこしめしすぐしけ

り。晝ひるの御座おまのよそひとりこぼち、火ひたき屋などかき拂ふほど、なほ現うつとも

おぼえず。堀川ほりがわの女御によ延子の、「見えし思ひの」などのたまひけんは、この世な

がら御心との御あかれなれば、うらやましくさへおぼゆ。さしあたりてのあは

れはさしおきて、先帝後二條の位ながら失せたまひにしだにあるを、またかく

なかばなるやうにて、あさましければ、世の人の思はんことも心憂く、ひとか

たならぬ歎きに添へたる愁へ、いはんかたなし。おほかたわが身をかぎりはて

ぬると思ふ人のみ多かり。

宮御所に伺候してゐた人人には言はうやうやく多かつた。

(七)大體、自分のすべての希望を東宮の御前途にかけてゐたので、これでわが一生も終つてしまつたと、絶望する人ばかり多かつた。

(八)有忠は後宇多院崩後、鎌倉に下向、東宮の御踐祚を運動中であつた。

(九)東宮の踐祚を促がす幕使の上洛するのと同時に歸京しようと。

(一〇)今宵は三月三十日の夕で、一般にゆく春と別れを惜しむ時だが、その他に、私個人としては、出家して、この世を棄て去る夕である。春の別れ——東宮との死別をも暗示してゐる。

(一一)聖天子の御代にも、これ程多くの人が入道することは甚だまれであるのに。

(一二)東宮は御性格が大變穩かた。

(一三)大體、主上の御方では東宮御近の人人を快く思つてをられないから、この世の望みは絶え、身を生きがひのないものと自棄の心を起す者など、いろいろな原因で、世を厭ひ遁れるのであらう。

(一四)東宮の若宮、康仁親王・邦世

有忠の中納言、先坊邦良の御使にて東に下りにし、いつしかと思ふさまならんことをのみ待ちきこえつつ、踐祚の御使の都にまゐらんと、同じやうに上らんと、未だかしこにもせられつるに、かくあやなきことの出で來ぬれば、いみじともさらなり。三月三十日、やがてかしこにて頭おろす。心のうちさこそはと悲し。

おほかたの春のわかれのほかにまたわが世つきぬる今日の暮かな

都にも前大納言經繼・四條三位隆久・山井の少將敦季・五辻の少將ながとし・公風の少將、左衛門佐俊顯などみな頭おろしぬ。女房には、御息所藤子の御方・對の君・帥の君・兵衛督・内侍の君など、すべて男女三十餘人さまかはりてけり。やんごとなき君の御時も、かくばかりのことはいとありがたきを、

佛などの現はれたまひて、ことさらに迷ひ深き衆生を導きたまふかとまで見え

たり。御本性のいとなごやかにおはまししかば、近うつかうまつる限りの人は、日ごろの御名残を思ふも、いと忍びがたき上、おほかたの世にもさし放たれて、身をやうなきものに思ひ捨つるたぐひなど、さまざまにつけて、厭ひ背くなるべし。若宮三所、姫宮などもおはしましけり。御息所の御腹にはあらね

親王・深守法親王。

(八)嫡子内親王。

(九)東宮妃祿子。

(一〇)源氏物語河海抄の幻の註に、「いにしへのこと語らへば時鳥いかに知りてかふる聲に鳴く」とある。どうして、あの郭公は自分の悲しい心を知つて、鳴くのであらうか。

(一一)故東宮と御枕を並べて臥した昔であつたなら、あの郭公を東宮と御一緒に聞かぬものを、たつた一人で聞かぬならぬ今の我が身の悲しいことよ。

(一二)ほんに先にお話しておかねばならぬことを、つい忘れて、また例のとほりお話の前後を取り違へてしまひました。

(一三)撰者のもとに、いろいろと。

(一四)私の集めた數數の珠玉のやうな名歌に、私の身を照らす大いなる榮光があらうとは今始めて知りました。實は今日身に餘る有難い陛下のお言葉を頂くまでは、今度の集のできばえが不安でならなかつたのでございます。

(一五)卿の辛苦して擇び蒐めた和歌の珠玉は、永久に曇ることはない

ど、いづれをも今は昔の御形見とあはれに見奉らせたまふ。四月の末つかた、

夏木立ころよげに茂りわたれるも、うらやましくながめさせたまふ。曉がた

時鳥の鳴きわたるも、「いかに知りてか」と、謀子御涙の催しなり。

もろともに聞かましものを郭公枕ならべし昔なりせば

まことや、例のさきにきこゆべきことを時たがへ侍りにけり。兵衛督爲定、

故中納言爲藤の跡をうけて撰びつる撰集のこと、正中二年十二月のころまづ四

季を奏するよしきこえし残り、このほど世にひろまれる、いとおもしろし。

帝後醍醐ことのほかにめでさせたまひて、續後拾遺とぞいふなる。中宮大夫師

賢承はりて、このたびの集のいみじきよし、さまざま仰せ遣はしたる御返しに

爲定、

今ぞ知るあつむる玉の數數に身を照らすべき光ありとも

御返し、内後醍醐の御製、

數數に集むる玉の曇らねばこれもわが世の光とぞなる

この大夫師賢は、もとより中よきどちにて、常に消息など遣はすに、かく世に

褒めらるるを、いとよしと思ひて、兵衛督爲定のもとへ言ひやる。

から、この勅撰集も朕が御宇の光荣ある事業として、長く後代を照らすであらう。

(一) 今度貴君が撰ばれた勅撰集は昔の正しい歌風に立ち返つて、甚だ立派であるといふ、主上の御賞美のお言葉をと、誰よりもさきに自分が承ることができたのは、貴君の親友である自分の甚だ喜びにたへないところである。

(二) 和歌の道において、私と意見を同じうしてをられる貴君のことですから、當代の和歌が古への正しい風に返つたといふ、主上の有難い仰せ言も、人より先きに拜聞されたのであらう。

(三) 中宮冊立の宣旨をつたへた上臈の女官の呼び名。

(四) 御養育掛り。

(五) 大層綺麗びやかにお育て遊ばされ。

(六) 東宮薨後、前以て是非なく幕府に對して慣例によつて東宮冊立に關して進言するやう御催促遊ばされてあつたから。

(七) ひどく異様に。

(八) 式場から引き續いて參列の諸員が持明院殿に伺候する。

和歌の浦の浪も昔にかへりぬと人よりさきに聞くぞ嬉しき
返し、

和歌の浦や昔に返る浪ぞともかよふ心にまづぞ聞くらん

この爲定のはらから、中宮に宣旨にてさぶらふも、上後陸攝例の時めかしたまひて、若宮法仁出でものしたまへり。その宮の御めのとは師賢の大納言うけたまはりて、いみじうかしづき奉らる。また宮の内侍藤子の御腹にも、つぎつぎいとあまたおはします。一の御子尊良は藤大納言爲子の御腹、吉田大納言定房の家にわたらせたまふ。二の御子世良も、いときらきらしうて、源大納言親房の御預りなり。かくさまざまにおはしますを、このたびいかで坊にとおほしつれど、かねてだに催し仰せられしことなれば、東より人まゐりて、本院後伏見の一の宮單仁を定め申しつ。いとけやけくきこしめせど、いかがはせんにて、七月二十四日、皇太子の節會行はる。陣の座より引きわたして、持明院殿に人どもまゐる。院後伏見の殿上にて祿など賜はる。常のことなれど、にはかにいとめでたし。

八月になりて、陽徳門院後深草院御女の土御門東の洞院殿へ行啓はじめあり。

(九)土御門萬里小路で、土御門東洞院殿と近い。

(一〇)東宮職の役人。

(一一)宮中に宿直所を設けて。

(一二)女踏歌の節會、紫宸殿前庭で行はせらる。

(一三)帥の宮時代に白馬の節會に。

(一四)大體、昔はすべて親王がたが内裏の重要な御儀式には必ず御參列あらせられたのであつたけれど、近ごろはめつたにさういふやうなことはなかつたのを、今上の皇子たちは、御元服の後には、どなたも昔の聖代の盛儀の舊慣を再興して、しかるべき時には御參列遊ばされたやうである。

先坊邦良の宮は鷹司なれば、間近きほどに、世のおとなひきこしめす入道の宮前坊御息所・女院 永嘉門院などの御心のうち今さらにいと悲し。本院 後伏見・新院花園ひとつ御車に奉りて、先立ちて入らせたまふ。行啓は、東の洞院おもての棟門に御車とどめて、中門まで筵道を敷きて歩み入らせたまふ。御びんづら結ひて、いときびはに美しげなり。十四ばかりにやおはすらん。宮司ども、院の殿上人など多くつかうまつれり。花ひらけたる心地すべし。あはれる世のならひなりかし。

かくて今年も暮れぬれば、嘉曆も二年になりぬ。一の宮尊良御冠して、中務卿尊良親王ときこゆ。去年より内に御宿直所してわたらせたまふ。一月の十六日の節會にめづらしく出でたまふ。帝後襲讞も、徳治のころ帥にて七日の節に出でさせたまへりしためし思し出づるにや、おほかたふるくはみなさこそありけれど、近ごろはいたくかやうにはなかりつるを、御子たち、御冠の後には、いづれも昔おぼえて、さるべきをりを出でつかへさせたまふめり。今日の節會は、常よりことに引きつくりはるるなるべし。親王尊良は蘇芳の袍奉れり。左大臣冬教・右大臣經忠・内大臣基嗣・右大將公賢・權大納言顯賢・藤中納言

(一)龜山院皇女。

(二)御元服前であつたが、内内で袍を召して参内あらせられ。

(三)東宮の御養母。

(四)關白太政大臣鷹司冬平、嘉曆二年正月十九日薨。

實任・別當光經・三條中納言實忠・左衛門督公泰・權中納言藤房・宰相惟繼・親賢・爲定・冬信・國資などまゐれり。二の宮は、西園寺宰相中將實俊の女の御腹なり。帥の親王世良の親王ときこゆ。昭慶門院喜子とりわき養ひ奉らせたまふ。この宮世良は御めのと源大納言親房なり。それもうちうち、うへの御衣にて、帝みかど後醍醐南殿なんでんへ出でさせたまへば、御供にさぶらはせたまふ。また常磐井の式部卿の宮恒明は龜山院のみ子なれば、當代後醍醐といとねんごろなる御中にて、この御子たちと同じやうに、常はうち連れ、御宿直よのひなどせさせたまふ。今日も御まゐりありて、御子たち歩み續かせたまへる、いとおもしろし。若き女房など、心遣ひことなるころならんかし。

二月ふたつきになれば、やうやう、故宮邦良の御一めぐりのことども、永嘉門院關子には營ませたまふもあはれつきせず。鷹司鷹司の大殿冬平も失せたまひぬ。このころの世にはいと重くやんごとなくものしたまへるに、いとあたらし。北の政所は中院の内の大臣おとど通重の御はらからなり。それもさまかはりたまひぬ。近ごろ、よき人人多く失せたまふさまこそいと口惜しけれ。

第十五 むら時雨

(一) 卷名は、後醍醐天皇元弘亂に敗れて、六波羅南方の板屋に幽閉せられた時の御製「まだ馴れぬいたやの軒のむら時雨音をさくにもぬるる袖かな」による。記事は嘉暦元年から元弘元年の終りまでの五年間、皇后幡子の擬姫・清涼殿歌合・北山の花の行幸・元弘の亂・光嚴天皇即位・康仁親王の立坊などを主として描く。

(二) 皇室繁榮して皇子があまたいますこと。皇子を竹園といふは、漢の文帝の子、梁孝王の修竹園の故事による。

(三) 中宮。後漢書、馬皇后紀に「永平三年、有司奏して長秋宮を立つ」とある故事によつて、中宮・皇后の稱となる。

(四) 御妊娠の御模様。

(五) 天炊御門京極。

(六) 興福寺に同じ。

(七) 佛眼尊を本尊とする息災を修する法。

竹の園生は茂けれど、秋の宮禮成門院禰子の御腹にはただ一品内親王 宣政門院ばかりものしたまふを、いと飽かず思ほしわたるに、このころめづらしき御惱みのよしきこゆれば、いとめでたくあらまほしき御ことなるべきにやと、上後醍醐もいみじくおぼされて、かねてより御修法どもこちたくはじめらる。まして、そのほど近くならせたまひぬれば、式部卿の宮恒明の常誓井殿へ出でさせたまひて、上後醍醐も二三日隔てず通ひおはします。陣の内なれば、上達部・殿上人、夜晝となく袴のそぼとりてまわりちがふ。御兄の兼季の大臣も絶えずさぶらひたまふ。いみじき世の騒ぎなり。故入道殿實兼今暫しおはせましかばと思し出づる人人多かり。山・三井寺・山科寺・仁和寺、すべて大法・祕法・祭・祓へ、數をつくしてののしるさまいと頼もし。七佛藥師の法は、青蓮院の二品法親王慈道勤めさせたまふ。金剛童子、常住院の道昭僧正、如意輪法、道意僧正、五壇の御修法の中壇は座主の法親王承鎮行はせたまふ。如法仏眼は

- (一) 龜山院妃、中宮御姉。
- (二) 金輪佛頂尊を本尊とする法。
- (三) 尊勝陀羅尼を誦し尊勝佛頂尊に祈る修法。
- (四) 正觀音・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪の六觀音に祈る法。
- (五) 准胝觀音を本尊とする修法。
- (六) 嘉曆元年。
- (七) 御修法のために設けた御佛壇が軒並びに争うて立ち。
- (八) 不思議にも御産の豫定日も空しく過ぎてしまつたので、それでも暫くはお産の遅れることもあるなどとお待ち申し上げたけれども、さらにその御模様がなくて。
- (九) なんともあらせられないから今ではなんだか啼みたいになつてしまつた。
- (一〇) 單に情ないといふ程度ではない。
- (一一) そのほか必要なお祝ひごと。
- (一二) 良家の子女で、兩親揃つてゐるのを擇んで侍女として。
- (一三) なにかも面白くなく、稀代なことであるから、言ひやうもない。

一 昭訓門院 英子の御志にて、慈勝僧正承はりたまふ。一字金輪は淨經僧正、如法尊勝は桓守僧正、愛染王、賢助僧正、六字法、聖尋僧正、准胝法は達智門院 華子の御沙汰にて信耀僧正勤む。そのほか、なほ本坊にてさまざまの法ども行はせらる。六月ばかりいみじう暑きほどに、壇ども軒をきしりて護摩の煙みちみちたるさまいとおどろおどろしきまでけふたし。社社の神馬はさらにもいはず、醫師・陰陽師・巫ども立ち騒ぎ、世の響くさまざまでたくゆゆしきにも、もし皇子にておはしまさざらんをり、いかにと思ふだに胸つぶるるに、いかなる御ことにか、あやしうさるべきほどもうち過ぎゆけば、なほ暫しはさこそあれなど待ちきこゆれど、さらにつれなくて、十七・八、二十、三十月にも餘らせたまふまで、ともかくもおはしまさねば、今はそらごとのやうにぞなりぬる。おほかた上下の人の心地あさましともいふべき際ならず。御産屋の儀式、あるべきことどもなど、こちたきまで催しおかれ、よろしき家の子ども、二親うち具したる選ばれしかど、ここの月ごろには、あるは服になり、そのぬしも病ひして頭おろしなど、すべてよろづあへなく、めづらかなれば、いはんかたなし。

(二四)邦良親王立太子當初。

(二五)今は未亡人となられた入道の宮が東宮妃となられたのも。

(二六)ただ、どんと水ばかり流れ出られて。

(二七)一條院女御承香殿が太秦寺で數日御參籠、御水産があつたことが、榮花物語「浦浦の別れ」に見えてゐる。原文弘徽殿は承香殿の誤り。

(二八)さういふ御不幸のをりの人の口の悪さ、無理にも故東宮の御かたの人人の御ことをくさすやうな厭やがらせを言つた人人も、この中宮の御ことがあつて、またこのやうにそれ以上の變なこともあるものだと思ひ當つて、きまりの悪い思ひがした。

(二九)このまま常盤井邸にはかり長らくお出で遊ばすわけに行かないから、内裏に還啓あるにつけても。

(三〇)嘉曆二年八月十五日薨。

(三一)悪性の感冒。咳病。

(三二)關白近衛家基の母。攝關の母を大北政所といふ。

前坊邦良のはじめつかた、中院の内うちの大臣おとどの御女まわりたまひて、十八月に

て若宮むまれたまへりしかど、やがて御子も母御息所も失せたまひにしかば、

いみじうあさましきことにいひ騒ぎしほどに、またその後一五、このとまりたまへる

入道の宮みのまわりたまへりしも、十七月ばかりにや、ただならずおはしま

して、既に御氣色けしきありとて宮の中たち騒ぐほどに、ただゆくゆくと水のみ出で

させたまひて、昔いせの弘徽殿ひろみづだんの女御元子むすめの太秦うづまさにてありけんやうにてやみき。を

りふし賀茂の祭のころにて、春宮の使も停まりなどして、さやういんのをりをり、

人の口さがなさ、せめても先坊の御かたさまのことをおとしめざまに言ひ惱ま

しし人人も、このごろぞまたかくまさるためしもありけりとはしたなく思ひあ

はせける。さのみいやは、さてしもおはしますべきならねば、内へ歸り入らせた

まふにも、いとあさましうめづらかなることを思し歎くべし。御修法どももあ

りしばかりこそなけれど、なほ少しづつは絶えず、いつを限りにかと思えた

り。そのころ、左ひだりの大臣おとど實泰も失せたまひぬ。世の中いみじく歎きあへり。

かくて元徳元年にもなりぬ。今年いかなるにか、しこはぶきやみ流行りて、人

多く失せたまふ中に、伏見院の御母玄輝門院はなしろ僧子、前坊の御母代はなしろの永嘉門院

(一) 清涼殿。

(二) 至極の名文家。

(三) わが九重の禁中は永遠の春であるから、外では、はかなくうつろふ櫻の花も、ここばかりは、いつも變らぬ色に咲け。時知らぬは永久の時を知らぬ、はかない。新後拾遺・賀には「時知らば」とある。それだと、今を春と知らばの意。

(四) 長閑な宮中の櫻の花の色にこそ、永久に變らぬ春の景色が見えてゐる。

(五) 禁中の櫻花が咲いた。千年万年までも、人の頭にさす永久のかさしとなるべく。

(六) 元徳二年三月八日。

(七) 元徳二年三月二十六日。

龜山院宮瑞子^{三三}近衛大北政所^{おほきたのまんどころ}など、やんごとなきかぎり、うち續きかくれたまひぬれば、ここかしの御法事しげくていとあはれなり。かやうのことどもにて、今年もまた暮れぬ。

あくる春のころ、内には中殿にて和歌の披講あり。序は源大納言親房書かれけり。かねてよりいみじう書かせたまへば、人人心遣ひすべし。題は「花契」萬春」とぞきこえし。

御製、

時^三知らぬ花もときはの色に咲けわが九重^{ここのへ}は萬づ代の春

中務卿尊良親王、

のどかなる雲井の花の色にこそよろづ代^よ經べき春は見えけれ

帥^{すぢのふみ}御^ご世^よ良、

百敷^{ももぢき}のみ垣^{かき}の櫻咲きにけり萬づ代までの千代のかさしに

つぎつぎ多かれども、むつかし。

やよひのころ、春日の社に行幸したまふ。例のいみじき見物^{みもの}なれば、敷^{ぢき}ど

もえもいはず挑^{いど}みつくしたり。その後、日吉^{ひよし}の社にもまわらせたまひき。今年

(八)急病。
(九)元徳二年九月十八日。

(一〇)警策、萬事に發明なこと。

(一一)宮中の訴訟裁斷所。

(一二)議定所、宮中の政を議定するところ、日次を定めて關白以下參仕す。

(一三)御養育掛り。

(一四)おれもこれも非常に殘念なことに主上も思し嘆かれる。

(一五)元徳二年十一月二十四日。

(一六)關院冬嗣の孫、良門の子勸修寺高藤の裔で、甘露寺・葉室・勸修寺・萬里小路・清閑寺等十三家の祖。大納言定房は清閑寺の祖。(系圖參照)

(一七)元亨三年正月十三日從一位、五十歳、元亨二年十二月吉田亭行幸家賞。

(一八)攝關家大臣家と同格抜ひ。

(一九)禁色をゆるさる。

(二〇)指名されて。

も人多くにはかやみして死ぬる中に、帥の御子世良重く惱ませたまひて、いとあへなく失せたまひぬ。内の上後醍醐思し歎くことおろかならず。一の御子尊良よりも御才などもいと賢く、萬づきやうさくにものしたまへれば、今より記録所へも御供に出でさせたまふ。議定などいふことにもまわりたまふべしときこえつるに、いとあさまし。御めのとの源大納言親房、わが世盡きぬる心地して、とりあへず頭おろしぬ。この人親房のかく世を捨てぬるを、親王世良の御ことにうち添へて、かたがたいみじく、帝後醍醐も口惜しく思し歎く。世にもいとあたらしく惜しみあへり。

同じ年の冬のころ、平野・北野の社に一度に行幸なる。勸修寺の殿ばら、昔より近衛司などにはならぬことにてありつれど、内の御めのと吉田大納言定房、過ぎにしころ從一位していとめづらしくめでたければ、今はト藤とひとしきにや、をさなき子の宗房といふも少將になさる。色聽りなどして、この平野の行幸の舞人にまゐる。土御門大納言顯實の子に、道房の中將、堀川の大納言具親の子具雅の中將など、みなよき君達舞人にさされて、いづれも清らにうつくしう出で立ちてつかうまつられたり。そのほかは、くだくだしければ、例の

(一)元徳三年(元弘元年)三月三日中宮北山西園寺邸行啓、四日行幸、五日花の宴。

(二)「面白かるべき」の音便。

(三)音楽を奏するところ。

(四)村上天皇康保二年三月五日、南殿御前觀櫻御宴。

(五)西園寺邸北對小五月の御所。

(六)非公開の舞樂の練習の體で。

(七)六日の午前八時に奏樂が開始される。

(八)「私はその日のことを見てありませんから、たしかではありません。幼ない女童などがとりとめな話してくれたとほりお聞かせしたのです。みな様の中には當時御覽になつた人もあるでせう、はつきりしたお話が承はりたうございます」と老尼が言ふ。

とどめつ。かやうのめでたきまぎれにて過ぎもてゆく。

またの年元弘三年の春三月のはじめつかた、花御覽じに北山に行幸なる。常よりもことにおもしろかるべい度なれば、かの殿にも心遣ひしたまふ。まづ中宮禮成門院禰子行啓、またの日行幸、前の右の大臣兼季まゐりたまひて、棧敷にて、うちうち試樂めきて、家房朝臣舞はせらる。御簾の内に大納言二位殿播磨内侍など、琴かき合はせて、いと面白し。六日の辰の時にことはじまる。寢殿の階の間に御褥まゐりて、内の上後醍醐おはします。第二の間に後の宮禰子、その次ぎ永福門院鐘子・昭訓門院瑛子もわたらせたまひけるにや。階の東に二條前殿道平・堀川大納言具親・東宮太夫公宗・侍從中納言公明・御子左中納言爲定・中宮權大夫公泰などさぶらはる。右大臣兼季琵琶、東宮權大夫冬信笛、源中納言具行笙、治部卿冬定箏、琴は室町宰相公春、琵琶蘭宰相基氏などきこえしにや。尼「その日のこと見たまへねば、さだかにはなし。幼きわらべなどのしどけなく語りしままなり。このうちに御覽じたる人もおはすらん。承はらまほしくこそ侍れ」といふ。御簾のうちにも、大納言二位殿琵琶、

(九)命婦の下位の女官で雑務をつかさどる。

(一〇)女官だけれども、特に御警護の武官を下賜されて。

(一一)わがもの顔にゐる。

(一二)萬歳樂から納蘇利までの十五曲を、奥の手をつくして舞はれたのは、大層見どころが多い。

(一三)清海波を地下の官人が舞つただけでやめたのは、あきたらない氣がした。實は陵王は宰相中將。

(一四)陵王の舞が輝くばかり立派に舞ひつつ出て來たのは。

(一五)「えもいはず」より三〇ページ一行目「怒」まで底本にない。永正本により補ふ。

(一六)御裾長の直衣で。

(一七)舞の手で、曲終つて、さらに手舞・足踏して入るをいふ。

(一八)ひどく手をつくして舞ひ終り退出するのを呼び返して、御衣を賜うた。

(一九)藍の衣である。

(二〇)紅の、打つて艶を出した衣。

(二一)西園寺邸内。

(二二)催馬樂、目の歌。

播磨内侍等、女藏人高砂といふも琴弾くとぞきこえし。まことにやありけん、

中務官尊良もまゐりたまへり。兵仗賜はりたまひて、御直衣に太刀佩きたまへ

り。御隨身どもいと清らにさうぞきて、所えたるさまなり。萬歳樂より納蘇利

まで、十五帖手をつくしたる、いと見どころ多し。青海波を地下ばかりにてや

みぬるぞ飽かぬ心地しける。暮れかかるほど、花の木の間に夕日花やかにうつ

ろひて、山の鳥も聲惜しまぬほどに、陵王の輝きて出でたるは、えもいはず

面白し。そのほど上後醍醐も御引直衣にて椅子に著かせたまひて、御笛吹かせ

たまふ。常よりことに雲井をひびかさまなり。宰相中將顯家、陵王の入綾を

いみじうつくしてまかづるを、召し返して、前關白殿道平御衣とりてかづけた

まふ。紅梅の表著、二色の衣なり。左の肩にかけて、いささか一曲舞ひてまか

でぬ。右の大臣長通太鼓うちたまふ。その後、源中納言具行探桑老を舞ふ。こ

れも紅のうちたる、かづけたまふ。

またの日は、無量光院の前の花の木蔭に、上達部たち續きたまふ。廂に椅子

立てて、上後醍醐はおはします。御遊びはじまる。拍子治部卿冬定まゐる。上

も「櫻人」うたはせたまふ。御聲いと若く花やかにめでたし。去年元徳二年の

- (一) 大層風流な氣がする。
- (二) 花の枝を結んで文臺の代りとする。
- (三) 崇徳天皇保安元年閏二月十二日に法勝寺での花の宴。
- (四) 靜穩。治安。
- (五) 京城の北方、西原寺邸。
- (六) 車駕を命じて臨幸せらる。
- (七) 舞樂を奏する。
- (八) 和歌。古今集眞名序による。重課はさらに和歌を獻詠させる。
- (九) 數樹の濃艶なる櫻花。
- (一〇) 櫻梢の誤、あらゆる梢といふことで、下の滿庭に對す。
- (一一) 須佐之男命の「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」の八重垣の雲がふたたびかかつたかと疑はれ。
- (一二) 廻雪はまふ雪で、落花の風に舞ふ美しさから、人間の舞の美しさまにたとへる。古人は廻雪の美を歌つたが、その昔の雪がまだ残つてゐるかと思はれる、この滿庭の落花をみると。
- (一三) 臣等の詠はこの佳景に對して餘り風情がありませんが、強ひてほんの少しばかりの歌を天覽に供します。露詠は、いささかの詠、

秋ごろかとよ、資親の中納言にこの曲はうけさせたまひて、賞に正二位ゆるさせたまひしも、今日のためとにやありけんと、いと艶なり。ものの音どもとのほりて、いみじうめでたし。その後、歌ども召さる。花を結びて文臺にせられたるは、保安のためしとぞいふめりし。東宮大夫公宗序書かれけり。

海内艾安の世、城北花開けたる春、わが君宸臨をここに促がし、調樂その中にかかれり。重ねて六義の言葉を課し、しばしば數柯の濃花を賞す。奉二梢出雲の昔の雲再びかかれるかと疑ひ、滿庭廻雪の昨の雪なほ残れるかと省みる。小風情といへどもなまじひに露詠を瀝す。その詞に曰はく、原文海内艾安之世、城北花開之春、我君促宸臨於此處、調樂懸於厥中、重課六義之言葉、屢賞數柯之濃花、奉梢疑出雲之昔雲再懸、滿庭省廻雪之昨雪猶殘、雖小風情慙瀝露詠、其詞曰。

時をえて御ゆきかひある庭の面に花も盛りの色や久しき

御製、

代代の御幸の跡と思へばこのかみ忘れ得る、後にも見出だしてぞ。

中務のみこ尊良

露の縁で、漉といつた。

(二) 四千載一遇の好機に際會して、主上の臨幸の光榮に浴した西園寺邸の庭園に咲き亂れる櫻花も、陛下の御代の千代萬代に榮えます如く永遠に色のあせることなく咲きつづけるかに見える。

(三) 丑上旬は藤葉和歌集に、「宿からば花も心にとまるかな」とあるここに宿を借りると、庭の櫻にも心がひかれるよ、代代の帝の御幸された由緒ある名園だと思ふと。

(四) この西園寺邸に後醍醐院以來歴代の天皇が櫻花を御覽に臨幸あらせられた事跡を、今後も襲はれて、今上を始め、將來の歴代の天皇も行幸あらせられて、永久に變ることとはあるまいと思ふ。

(五) 誰も誰もこの「花の行幸」といふことにはかり拘泥して。

(六) 近衛府の官人の詰めてある日華門・月華門のあたりまで。

(七) 「これはなにごとが起つたのか」と訊くまでもなく明瞭である。

(八) 五月五日日暮野俊基・文顯・圓観らを描へ、鎌倉に送る。

(九) 六月十二日御惱快癒。
(一〇) この豫定の討幕計畫を實現し

代代を経て絶えじとぞ思ふこの宿の花にみゆきの跡をかさねて

誰も誰も、この筋にのみまとはれて、花のみゆきの外は、めづらしきふしもなければ、さのみもしるしがたし。よろづ飽かず名残多かれど、さのみはにて、九日に還らせたまひぬ。

その夏 元弘元年のころ、帝後醍醐例ならずおはしまして、御藥のことなどきこゆ。いと重くのみならせたまふとて、世の中あわてたるさまざまなり。時しもあれや、かの一年捕られたりし俊基を、またいかにきこゆることの出で來たるにか、搦め捕らんとしければ、内へ逃げてまゐるを追ひ騒ぎて、陣のほとりまで武士どもうち圍みてののしれば、こはなにごとと聞き分くまでもなし。いともの騒がしく肝つぶれて、ある限りまどひあへり。上後醍醐ももの覺えたまはぬ御有様にておほとのごもれるに、かかるよし奏すれば、いみじう思さる。つひにまたの日六波羅へ遣はしたれば、東へゐて下りぬ。上後醍醐は御惱み怠らせたまひて、いとど安からず思ふことまされり。日ごろも御心にかけてたまへることなれば、速かにこのあらし遂げてんとひたぶるに思し立ちて、忍びてここかしこにその用意すべし。

ようとして一途に決心せられて。

(一) 齋宮は龜卜で卜定する。檀子内親王は元徳二年十二月十九日卜定せらる。

(二) 齋戒して宮城内の便殿にあるを、初齋院といふ。

(三) 河原で破襲されて、そのまま。

(四) 嵯峨、有栖川にある齋宮伊勢下向前の御齋戒中の御所。

(五) この齋宮の色々な儀式が一段落つく。

(六) 兩六波羅探題を勅勘あるべしと。勘事(かうじ)。

(七) 斡旋して、ことを處理した。

(八) 御性格が果敢であられ、この帝の御計畫にも御同意になられ、謀議に参加された。

(九) どつちみち。

(一〇) できるだけ秘密にしようとしたけれど、計畫が大袈裟になつたから。

(一一) 嚴重に警戒監視申さう。

後の宮禮成門院禰子の御腹の一品内親王檀子御占にあはせたまひて、去年の冬ごろより御きよまはりありつる、今日明日、齋宮にゐたまふ。八月二十日、まづは河原に出でさせたまひて、やがて野の宮に入らせたまふ。そのほどのことどもいみじうきよらなり。

この御いそぎ過ぎぬれば、まづ六波羅を御かうじあるべしとて、かねてより宣旨に従へりしつはものどもを、忍びて召す。源中納言具行とりもちてこと行ひけり。むかし龜山院に御子など産み奉りてさぶらひし女房、このころは、後の宮禰子の御かたにて、民部卿三位親子ときこゆる御腹に、當代後醍醐の御子も出でものしたまへりし、山の前座主にて、今は大塔の二品法親王尊雲ときこゆる、いかで習はせたまひけるにか、弓ひく道にも猛く、おほかた、御本性はやりかにおはして、このことをも、同じ御心におきてのたまふ。また中務のみこ尊良一つ御腹に、妙法院の法親王尊澄ときこゆるは、今の座主にてものしたまへば、かたがた比叡の山の衆徒も帝の御軍に加はるべきよし奏しけり。つ。つむとすれど、こと廣くなりければ、武家にもはや漏れ聞きて、さこそあなれと用意す。まづ九重を厳しく固め申すべしなどさだめけり。かくいふ

(二) 雜訴御親裁の日。

(三) 清涼殿。

(四) えらい勢で攻めて。

(五) 中宮の御かたへ御挨拶にお立ち寄りになつても、しんみり別れを惜まれる暇なく、大層慌ただしい。

(六) ことのさまが逆のやうになつたから、萬事そはそはして手に著かないで、誰も彼も呆然としてゐた。

(七) 平治の亂に二條天皇が經宗・惟方に助けられて女房姿で宮城からお逃れになつた當時も。

(八) 比叡山の麓、近江滋賀郡。

(九) あへなしの訛、はりあひがない。

は元弘元年八月二十四日なり。雜務の日なれば、記録所におはしまして、人の

争ひうれふることどもを行ひくらさせたまひて、人人もまかで、君も本殿に暫

しうち休ませたまへるに、「今夜すでに武士どもきほひまゐるべし」と忍びて奏

する人ありければ、とりあへず雲の上を出でさせたまふ。中宮禮成門院禰子の御

かたへわたらせたまひても、しめやかにあらず、いとあわただし。かねて思し

まうけぬにはあらねども、ことのさかさまなるやうになりぬれば、よろづうき

うきと、われも人もあきれいたくて、内侍所・神璽・寶劍ばかりをぞ忍びてゐ

てわたらせたまふ。上後醍醐はなよらかなる御直衣たてまつりて、北の對より

やつれたる女車のさまにて、忍びて出でさせたまふ。かの二條院の昔もかく

やと思ひ出でらる。

日ごろの御本意には、まづ六波羅を攻められんまぎれに、山へ行幸ありて、

かしこへ兵どもを召して、山の衆徒をもあひ具し、君の御かためとせらるべ

しと定められければ、かの法親王たちもその御心して、坂本に待ちきこえたま

ひけれど、今はかやうにことたがひぬれば、あひなしとて、にはかに道をかへ

て、奈良の京へぞ赴かせたまふ。中務の宮尊良も御馬にて追ひてまゐりたま

(一) 賤しい者の姿に身なりを變へて。

(二) 古今集、讀人知らずの歌に、「ぬば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」とあるやうに、闇の中の現實は夢にいくらもまさらぬ心地がして、われにもあらぬ御有様であつた。

(三) 午前三時ごろ。

(四) 山城國紀伊郡。

(五) 山城國相樂郡。

(六) 奈良東大寺内。聖尋は關白基忠の息。中宮御産に奉仕す。

(七) 山城國相樂郡和束、今の東和東村原山の金胎寺をいふ。

(八) そのも適當ではなかつたのであらうか。

(九) 山城國相樂郡。

(一〇) 荒木づくりの假宮。新古今集天智天皇「朝倉や木の丸殿にわが居れば名のりをしつづ行くは誰が子ぞ」

(一一) 常陸は親王の大守たる國であるから、介を守といふ。

(一二) どうかして逃げ遅れてゐた女たちの氣持。

(一三) 清凉殿。日常おはします殿。

(一四) 御手廻りの御厨子(棚)、御道

ふ。九條わたりまで御車にて、それより帝みかど後ご醒よめもかりの御衣ぎにやつれさせた

まひて、御馬に奉るほど、こはいかにしつることぞと夢の心地して思さる。御

供ともに按察大納言公敏・萬里小路中納言藤房・源中納言具行・四條中納言隆資な

どまぬれり。いづれもあやしき姿にまぎらはして、暗くらき道みちをたどりおはするほ

どに、げに「闇くらのうつつ」の心地して、われにもあらぬさまなり。丑うし三さんつばか

りに木幡山きはたやま過ぎさせたまふ。いとむくつけし。木津きつといふわたりに御馬とめ

て、東南院とうなんの僧正そうじょう聖尋せいじんのもとへ御消息ごしよきつかはず。それより御輿ごこしをまゐらせたる

に奉りて、奈良へおはしまし著ちかきぬ。ここに中なかつ一日いちにちありて、二十七日、和束わづかの

鷲峯山じゆぼうへ行幸ありけれども、そこもさるべくやなかりけん、笠置寺かさぢといふ山寺

へ入いらせたまひぬ。所のさま、たやすく人の通とほひぬべきやうもなく、よろしか

るべしとて、木きの丸殿まるだんの構かまへをはじめらる。これよりぞ人人少すくし心地とり靜しずめ

て、近ちかき國國くにの兵へいなど召よしに遣つかはず。

さて都みやこには、二十四日の夜、六波羅ろくはらより常陸守とよとく時知馳ときちせ参りて、百敷ももぢの中ちゆうを

あさり騒さわぐ。そのほど、人の曹司そうじなどにおまのづから落おち残りたる女房にようぼうの心地い

はんかたなし。おはします殿みを見れば、近ちかき御厨子みづし、御調度みんぢゆうどども、なにくれ、

具などなにかと、硯などもそのま
ま散らばつてゐて。

〔五〕やどやと逃げ出す様などは
大層情なく、見る眼もめまぐるし
い。

〔六〕周囲の装飾や調度を取り拂ひ
瞬く間に大層情なく。

〔七〕手を目の上にかざしながらや
さがしする體は不氣味で、情ない。

〔八〕世の中といふものはいやなも
のであるよと、たちまちに本當に
心ある人は一念發起して、そのま
ま修行の門出に赴きさうに思はれ
た。

〔九〕地獄の悪鬼。

硯なども、さながらうち散りて、ただ今までおはしましける跡と見えながら、
宮人などに一人もなし。女房の曹司曹司より、樋洗めく女の童などわれ先き
にと走り出で、調度ども運び騒ぎ、くづれいづる氣色どもいとあさましく、目
もあやなり。錦の几帳のうちにいつかれましましつる後の宮も、なにの儀式も
なく、忍びてあわて出でさせたまひぬれば、あたりあたり搔き拂ひ、時の間に
いとあさましく、御簾几帳など踏みしだき、ひき落して、火の影もせず。ここ
もかしこも闇がりて、うち荒れたる心地す。今朝まで九重の深き宮のうちに
で入りつかへつる男女ひとりともらず、えも言はぬ武士どものうち散り、あら
あらしげなるけはひに、續松高くささげて、細殿・渡殿、なにくれ、まかげさ
して、あさりたる氣色けうとくあさまし。世は憂きものにこそと、時の間にげ
に心あらん人はやがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺ゆる。中宮禪子は忍びて
野の宮殿のかたはらにぞおはしましつきにける。宣房の大納言の二郎、季房の
宰相ばかり御とのゐにさぶらふ。

二十五日の曙に、武士どもみちみちて、帝の親しく召し使ひし人人の家家
へ押し入り押し入り捕りもて行くさま、獄卒とかやの現はれたるかど、いと恐

(一)ひとしほ理性も失なつて。

(二)坂本では尊雲・尊澄の兩法親王が主上の行幸をお待ち申し上げてをられたのに、案に相違して、主上は南方に巡狩せられたから、そのよしを叡山の僧兵どもに聞かれたならば悪いだらうし、またともかくもほんたうの御座所をたやすく武家へ知らせまいとの謀であつたのであらうか、花山院大納言師賢卿を延暦寺へ遣はして、密密主上が御臨幸あらせられてゐる體に装うて。

(三)白と萌黄と交互に色をかへて緘した鎧。

(四)兜の目庇の上にある雙の角のやうな前立。鉄形の兜を召して。

(五)大納言師賢卿は唐の香染の薄絹の狩衣に、特に目立つ赤い腹巻を透かして居られたが、さすがに雲上人なので、蒔繪の細太刀を帯びていらした。

ろし。萬里小路大納言宣房・侍從中納言公明・別當實世・平宰相成輔、一度にみな六波羅へゐて行きぬ。かやうのこを見るに、いとど肝心きまごころもうせて、おのづからとり残されたる人も、心とみなかきけち行きかくるるほどに、主なき宿やどのみぞおほかる。

坂本には行幸を待ちきこえたまひけるに、引きたがへ南さまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなばあしかりぬべし、またとまれかくまれ、まことのおはしまし所をさうなく武家へ知らせじのたばかりにやありけん、花山院の大納言師賢を山へ遣はして、忍びて帝のおはしますよしにもてないて、かの兩法親王尊雲・尊澄こと行ひたまひつつ、六波羅のつはものどもの圍みをも防がせたまふ。その日は、大納言師賢も、大塔の前座主まへざすの宮尊雲も、うるはしきもののかすがた武士姿に出で立たせたまふ。卯花緘うはなづなの鎧に鉄形てつがたの兜たてまつりて、大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮尊澄はすずしの御衣の下に萌黄の御腹巻とかや著たまへり。大納言は、からの香染の薄物の狩衣に、けちえんに赤き腹巻をすかして、さすがに蒔繪の細太刀をぞはきたまひける。

六波羅より、帝みかどここにおはしますと心得て、武士ども多くまわり圍む。山法

(六)海東備前左近大夫將監で、その勢十七騎で東坂本で合戦討ち死した。八月二十八日。

(七)合戦の手始めに、東がほろんだのは幸先がよいなど、人人が悦んだやうである。

(八)欺かれ申したといふので、觀山の僧徒どもも多少變心した。

(九)まぎれ入らうと。

(一〇)なにやかや取り集めて。

(一一)なんの心配もなく見たいものである、ほんのりと明けゆく空に残る有明の月の光に、くまなく照らされてゐる、志賀の浦邊に打ち寄せる波を。

(一二)早打ちの使。

(一三)先年(嘉暦元年二月、年二十四)佛門に入つて。

(一四)性格などもどういふものか正氣がなくて、朝晩好くものはと言ふと、闘犬や、田樂をさせて見物することを喜んだ。

(一五)執權の後見。内管領。

師も戦ひなどして、海東とかやいふつはもの討たれにけり。ことのはじめに、東うせぬる、めでたしなどぞいふめる。かかれども、帝笠置におはしますよしほどなく聞えぬれば、謀られ奉りにけるとて、山の衆徒もせうせう心變りしぬ。宮宮曾雲・曾澄も逃げ出でたまひて、笠置へぞまうでたまひける。大納言帥賢は都へまぎれおはすとて、夜深く志賀の浦を過ぎたまふに、有明の月くまなく澄みわたりにて、寄せ返す浪の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへとりあつめ心細し。

思ふことなくぞ見ましほのぼのと有明の月の志賀の浦波
その後、からうじてぞ笠置へはたどりまゐられける。

かやうのことどもも、例の早馬にて東へ告げやりぬ。ただ今の將軍は、昔式部卿久明親王とて下りたまへりし將軍の御子なり。守邦の親王とぞきこゆる。相模守高時といふは病によりて、未だ若けれど、一とせ入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉のぬしにてはあめり。心ばへなどいかにぞや、うつつなくて、朝夕好むこととは、犬くひ・田樂などをぞ愛しける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時よりは八代にあたる。このころ私

(一)左衛門尉光綱の子、但し當時圓喜老耄して隠退して、その子左衛門尉高資權を専らにしてゐた。

(二)ひと通りでない。

(三)後伏見院御所。

(四)主上の御脱出にともなつて、意外なおめでたいこと(御踐祚)があるはずであるけれども。

(五)御宿直の人のしかとしたものもあらず、ひとり離れておいでになるのも危険な感じがされるからか。

(六)檜皮ぶきの御殿(宗尊親王の時造る)

(七)大體はひどく氣にさはるることが多いやうだけれども、普通の場合ならとにかく、これほどの騒動のをりは、なんの儀式もないであらう。

(八)橘諸兄の裔で、楠木正遠の子。

(九)勇敢な氣象の強い男。

の後見には長崎入道圓基とかやいふものあり。世の中の大小事、ただみなこの圓基が心のままなれば、都の大事かばかりになりぬるをも、かの入道圓基のみぞとりもちておきて計らひける。重き武士ども多く上すべしときこゆ。おほかた、京も鎌倉も騒ぎののしるさまけしからず。承久の昔もかくやと今さらに思ひやらる。

持明院殿には春宮量仁おはしませば、思ひのほかかためでたかるべきことなれど、今日明日は未だ軍のまぎれにて、なにの沙汰もなし。御宿直の者の、むべむべしきもなく、離れおはしますもあぶなき心地すればにや、せめても六波羅近くとて、六條殿へ本院後伏見・新院花園・春宮量仁引續きて移らせたまひぬれど、日にそへて、天の下騒ぎみち、恐ろしきことをのみきこゆれば、なほこれもあやうしとて、六波羅の北に、代代の將軍の御料とて造りおける檜皮屋一つあるに、兩院・春宮入らせたまふ。おほかたはいとものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりの際には、なにの儀式もなかるべし。

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより兵どもまゐりつどふ中に、このはじめより頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよ

- (二〇)赤坂城。
 (二一)嚴重に構へて。
 (二二)なんと言つても。
 (二三)御自分の御心から出た御ことであるから、誰を怨みやうもないけれども、故郷の都の空もあはれに戀しく想ひでられる。
 (二四)秋も深くなつてゆくままに、山の木の葉に時雨がかかり、谷の嵐の音がするのにも、敵軍が勢こんで攻めて來るかと、びつくりされる御住居のこととて、いつの間にか至尊の御身を下じにも取り換へられたやうな御氣がなざるのも不快である。
 (二五)思ふことのならなかつた憂きわが身であるものを、秋風に誘はれて、意外な山奥に來て、この美しい紅葉を見ることである。秋風——世の騷亂。
 (二六)九十九折。羊腸たる急坂。
 (二七)城門。
 (二八)荆棘を逆立てて作つた砦。
 (二九)寄せ手の上に石を投げ落すしかけ。
 (三〇)どやどや侵入して來て。
 (三一)どうしやうもなく。

かなるものにて、河内國に、おのが館たてのあたりを嚴いひめしくしたためて、このおはします所、もし危あやうからんをりは、行幸をもなしきこえんなど用意しけり。

東あづまのえびすどもも、やうやう攻め上るよしきこゆ。もとより京にある武士ぶしどもも、われ先きにときほひまゐる。木の丸殿には、さこそいへ、むねむねしき者もなし。いかになりゆくべきにかといとも心細く思し亂る。わが御心ごこころもての御ことなれば、かこつかたなけれど、故郷ふるさとの空もあはれに思し出でらる。秋あきも深くなり行くままに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐の音づるるも、あだのきほふかと、肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心地したまふもあぢきなし。

憂うれかりける身を秋風に誘はれて思はぬ山の紅葉をぞ見る

すでにあづまの武士ども雲霞くもかきの勢いほほをたなびき上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじう思し騒ぐ。もとよりいと峻たけしき山の深きつづらつづらをりを、えもいはす木戸きど・逆茂木さかもぎ・石弓いしゆみなどいふことどもしたためらる。さりとともたやすくは破れじと頼ませたまへるに、後の山うしろより、御かたきどもくづれまゐりて、木戸ども燒き拂ひ、おはしますあたり近く、すでに煙もかかりければ、今はいいかがはせん

(一)少し落ち延びさせられてから御馬をさがし出して来て、主上だけお召しになつたけれども。

(二)御氣分もお悪くなり。

(三)山城國綴喜郡。

(四)暫らく御疲勞を恢復遊ばされるためにやすんでいらつしやるところへ。

(五)山城國紀伊郡、伏見西南の深栖(今の三栖)村の住人といふ。

(六)そのまま幕軍の方におつれ申し上げたのは、實に心外で、残念至極であつた。

(七)上達部がたは御口惜しさをどうともしやうなく、ただ目と目とを見合はせ、どうしたらよからうかと呆然としてゐられるうちに。

(八)大佛宗泰の子。

(九)なにもおつしやうやうがないから、つひにかひなく。

(一〇)不快にたへないと申しても言葉が足りない。

(一一)そのまま自分の部下の兵どもに連行させた。

にて、あやしき御姿にやつれて、たどり出でさせたまふ。座主ざすの法親王尊澄御手をひき奉りたまへるも、いとはかなげなる御有様なり。中務の御子尊良、大塔の宮曾雲などは、かねてよりここを出でさせたまひて、楠木が館たかにおはしましけり。行幸もそなたさまにやとおぼし心ざして、藤房・具行兩中納言、師賢大納言入道、手を取り交かして炎ほのの中をまぬがれ出づるほどの心地ども、夢とだに思ひもわかず、いとあさまし。少し延びさせ給ひてぞ御馬たづね出でて、君ばかり奉りぬれど、ならばぬ山路に、御心地もそこなはれて、まことに危く見えさせたまへば、高間たかまの山といふわたりに暫ひし御心地をためらふ所に、山城國やまの民にて、深須ふかすの五郎入道とかいふ者まわりかかりて、案内あんないきこえたるしも、いとめざましう口惜し。上達部じやうたつ思ひやるかたなくて、ただ目を見かはして、いかさまにせんとあきれたるに、あづまより上れる大將軍にて、陸奥國むつの守貞直といふもの、大勢にてまわれり。今はただともかくものたまはずべきやうなければつひにかひなくて、敵のために御身をまかせぬるさまなり。

やがて宇治に行幸ききあるべきよし奏すれば、御心にもあらで、ひかされおはしますほどに、心憂こしいふものなめなり。具行・藤房・忠顯少將など、やがて

(二) 御馬のあとを走りながらついで行くうち、お遅れして。

(三) 面白くなく思し召される。

(四) 治暦三年十月十五日平等院行幸、河畔に樂屋をまうけて、管絃の御遊びがあつた。

(五) 上下ともなんの心配もなく、どんなに面白かつたらうと、うらやましく身にしみて思された。

(六) 平常の行幸のをりの御心地とは相違して、ひどくすさまじい武士たちが、衛府の次官みたいな風に、御興の近くを取り圍んだ。

(七) 南館の板ぶぎの大層わるい建物に、御部屋のこしらへをして、お据え申し上げるのも、御痛はしく恐れ多い。

(八) 隣近處のお住居で、いろいろのことをお聞きになり、御眼にふれることごとにつけても。

(九) 屯びしい板ぶぎのお住まひに時雨の音までが調子はすれに強くあつて。

おのが手の者などに従へさせつ。大納言入道師賢御馬の尻に走りおくれ、こかしこの岩かけ、木のもとに休みつつ、とかくためらふほどに、それも見つけられて捕られぬ。君後醍醐をば宇治へ入れ奉りて、まづことこのよし六波羅へきこゆるほど、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに、涙催しがほなり。平等院の紅葉御覽じやらるるも、かからぬ行幸ならばと、あいなし。後冷泉院かとよ、ここに行幸したまひて、三四日はしける。その世の人の心地、上下なにごとかはとうらやましくあはれにおぼさる。

十月三日都へ入らせたまふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衛府の次官の心地して、御興近くうち圍みたり。鳳輦にはあらぬ、網代興のあやしきにぞ奉れる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより兩院後伏見・花園・春宮屋におはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどしておはしませるも、いとほしくかたじけなし。間近きほどに、よろづきこしめし、御覽じふることごとにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらん。口惜しう思しみだる。ならばぬ御やどりに、時雨の音さへはしたなくて、

(一) まだ住み馴れてゐない板ぶぎの家の軒端にあたる耳なれない時雨の音を聞くにつけても、このやうなぼろ小屋に幽閉されてゐるわが身の不運が知られて、涙で袖がぐつしより濡れることよ。

(二) 左衛門尉頼綱の三男。

(三) このごろの世の辛氣なことを空も知つてゐるのであらうか。この月は十月で、いつも時雨する月ではあるが、今年はその當然以上にひどく時雨が降るわい。(新葉集、雑上)

(四) 御匣殿の別當で中宮に奉仕してゐた女官。

(五) 親王が帝位にでもおつきになれる世にでもなれるまひ遊ばさるも誰も御前途を頼もしくお思ひ申してゐたのに、このやうに意外に情ないことが生じたのを、深く嘆き悲しんだ人人が、無數にあつた。

(六) 公願の女。
(七) さりとして御不安なお氣持ちをやはらげる程度の御文さへ。

一 まだ馴れぬ板屋の軒のむら時雨音を聞くにもぬるる袖かな

中務の宮尊良は正成がもとおはしましつれど、帝のかくならせたまひぬれば、今はかひなしとして、それも都へ入らせたまひて、佐佐木判官時信といふもの家にわたらせたまひぬ。つれづれともの思しみだるるより外のことなし。

三 世の憂さを空にも知るや神無月ことわりすぎて降る時雨かな

この御子尊良は藤大納言爲世の御孫にてもものし給へば、かの家に常は住みたまひしほどに、大納言末の女、大納言典侍ときこゆるに御覽じつきて、その御腹に姫宮など出で來たまへり。また、中宮の御匣殿は宮禰子の御せうとの右の大臣公願ときこえし御女なり。その御腹にも男みこななどおはします。思ふまなる世をも待ち出でたまはばと、誰も行く末頼もしく思ひきこえつるに、かく思ひのほかにあさましきことの出で來ぬるを、深う思ひ歎く人人數知らず。

御匣殿は失せたまひにしかば、このころはただこの典侍の君をのみまたなきものに思しかはしつるに、吹きかふ風も間近きほどにはおはすれど、御對面は思ひもよらず。おぼつかなさの慰むばかりなる御消息などだに、通ふこともかなはぬ御有様を、あはれにいぶせう思し結ばほれたり。一つ御腹の座主の法親王

(八)二條富小路内裏のこと。

(九)衛門府に屬する兵士で、皇居を守護し、夜は火をたいて衛る。

(一〇)内裏にはいつの間にか異様な者どもが棲みついて、ある時は紅の袴を長く引きずつて、火をともした女が、見てゐるうちに、背丈が軒と同じぐらゐの高さにすると延びあがつて、後では掻き消えて失せるのもあつた。

(一一)またひどく恐ろしい光を放つて、髪を前に亂して垂れ下げた童も見えた。

(一二)三條東洞院のおぼけ屋敷。

(今昔物語卷二十七)

(一三)僅か一二ヶ月のうちにこんなことはないはずであるのに、なしろはなはだ奇怪なことと言はなければならぬ。

(一四)承久以來時代の先例。

(一五)元弘元年九月二十日。

(一六)當然の御關係(先帝の東宮だといふ)におありになるとは申しながら、こんなに早く御踐祚あらせられるやうにも見えなかつたのに、はなはだおめでたい。

尊澄も、長井の高廣とかやいふ者預かり奉りぬ。帝みかど後醍醐遠く遷うつらせたまはんほど、この御子たち尊良・尊澄もおのがちりぢりになりたまふべしなどきこえり。

春宮光嚴は世をつつしみて、六波羅にわたらせたまふ。先帝後醍醐はあだのために、同じ御やどり、葦垣あしぎばかりを隔てにておはしませば、主なき院のうちいと淋しくて、衛士まへびのたく火も影だに見えず。内うちには、いつしか怪あやしかるものなど住みつきて、ある時は紅くわなの袴長やかに踏み垂れて、火ともしたる女、見るまに、丈たけは軒とひとしくなりて、後にはかき消ちて失するもあり。またいみじう光を放ちて、髪、前に亂しかけたる童なども見えけり。鬼殿おにどのなどはかくやありけんと恐ろし。人住まで年經荒れぬる所などにこそかかることもおのづからありけれ。僅すこかに一月二月のうちにかかるべきにはあらぬを、これかれいと怪しきわざなるべし。

さて、例のあづまより御使上れり。代代よのためしとかやとて、秋田の城じやうの高景・二階堂出羽入道雲とかやいふものぞまゐれる。西園寺大納言公宗にことよし申して、春宮光嚴御位みかどに即つきたまふ。さるべき御中みかどといひながら、今日

(一) 威儀をつくろつて。

(二) 行啓やら御幸やらに騒ぎ立つ世間の評判を聞きになる先帝の御胸中は、言語に絶するほど口惜しく體裁悪くおぼしめされる。(光嚴院の即位は九月廿日で、この時主上は等置におはしまし、その六波羅に遷御されたのは十月三日であるから、この條の記事は誤りである)

(三) 後宇多院のこの殿で院政をきこしめした昔。

(四) 繪旨の誤り。

(五) 昨日までは時代の花形と見えたる人々が、それもつかの間のはかない夢に過ぎなかつたかと、氣の毒である。

(六) かういふことがあるにつけても、今後は持明院の御一統のかたがただけが天皇の御位におつき遊ばされ、他の御系統に皇位の繼承が分かれるのではないやうに御きまりになるのではなからうかと世間の人も御想像申し上げてゐたところが、龜山院の御皇統も絶えてはいけなといふわけなのであらうか。

(七) 參議顯雅の子。

明日とは見えざりつるに、いとめでたし。さて六波羅より、このたびは世の常の行啓の儀式にて、持明院殿へ入らせたまふ。兩院後伏見・花園もひきつろひたる御幸のよしなり。ひしめきたちぬる世のおとなひをきこしめす先帝後醍醐の御心地、たとしへなく妬く人わろし。もとの内裏へ新帝移らせたまふ。上達部残りなくつかうまつる。院後伏見も常磐井殿へおはしまいて、世の政事きこしめせば、後宇多院の昔思ひ出でられてあはれなり。

いつしか十月十二日令旨下されて、前の御代の人人、大中納言宰相すべて十人、宣房・公明・藤房・具行・隆資・實世・實治・季房・隆重・忠顯、官やめらるるよし聞ゆるも、昨日まで時の花と見えし人人、つかの間の夢かとあはれなり。

かかるにつけては、ひとつ御族のみ、今はわくかたなく定まりたまふべきかと、世の人も思ひきこゆるほどに、龜山院の御流れの絶ゆべきにはあらずとかや、先坊の一の宮康仁を太子に立てまつる。御めのとの雅藤の宰相の法性寺の家にわたらせたまへるを、土御門高倉の先坊邦良の御跡へ入れ奉りて、十一月八日坊に定まりたまふ。今は思ひ絶えぬる心地しつるに、いとめでたし。松が浦島に年經たまひぬる入道の宮禰子も、御親の心地にておはしますすべければ、太

(八)御舊居。

(九)今はもうあきらめてゐたのに。

(一〇)尼生活に。後撰集、素性「音に聞く松が浦島けふぞ見るうへ心あるあまもすみけり」による。

(一一)後宇多院女、先坊妃、康仁親王准母、正中三年尼、元弘元年十月二十五日准三宮、同日院號。

(一二)永く人人に忘れられて、萬事斧の柄の朽ちはてたやうに荒廢した、淋しい以前の宮の中とはすつかり面目を改めた。「斧の柄の朽ちにし」は列仙傳の王質の故事。王質が山には入つて、石室山で童子の棋を圍むのを見てゐるうち、瞬く間に百年経過し、持つてゐた斧の柄が朽ちたといふ。

(一三)ひどくしよげて。

(一四)東宮大夫。
(一五)眼前に世の中が移り變る無常なありさまが、今さらいふまでもないが、あまりはつきり見えるのも、實に情ない。

上天皇になすらへて、崇明門院ときこゆ。よろづ斧の柄朽ちにし昔を改めたる宮のうちなり。ありし後、おのがさまさままかで散りにし古女房・上達部・殿上人など、世の中屈しいたくて、ここかしこに籠りゐたりしも、いつしかとまわりつどふさま、谷の鶯の春待ちつけたる心地して、いと頼もしげなり。傳には久我が右の大臣長通、大夫には中院大納言通顯なりたまふ。なべて世に年ごろ埋もれたりし人人、いつしか官位さまさまに思ふままなる氣色ども、目前に移り變る世の有様、今さらならねど、いと著くけちえんなるもあぢきなし。かくて年も暮れぬ。

(二) 卷名は後醍醐天皇隠岐遷幸の途中の「聞きおきし」の御製による。記事は後醍醐天皇隠岐遷幸、尊良親王・尊澄法親王の御配流、後醍醐天皇后妃と幼少の諸皇子の御生活、公敏・師賢らの配流、具行・資朝らの死刑、光厳天皇大嘗會の儀、後醍醐天皇隱岐の御生活、尊雲法親王・楠木正成らの孤軍奮闘、光厳天皇後宮のことなど、變化に富み、本書中堅巻の名文。

(三) しかるべき儀式の時は勿論、またさうでなくても、後伏見院の常磐井の御所と主上の二條富小路内裏とは同じ衛府の警戒區内にあつて間近いから、自然一緒になつて雑踏する馬や車は賑はしいが、前朝の御時の人はひとりもゐなくて、參内する者も退出する者も、顔の違つてゐるもののみである。

(四) もの憂い聲。古今集、在原棟梁「春立てど花も匂はぬ山里はもの憂かる音に鶯の鳴く」

(五) 異様な響へではあるが、唐の玄宗の時、楊貴妃が寵を専らにして、上陽宮の麗人がみな君恩の薄いのを悲しみ、春の日の暮れ難く秋の夜の明け難いのを恨んで、悶

第十六 久米のさら山

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年のはじめは、思ひなしさへはなやかなり。上光嚴も若うきよらにおはしませば、よろづめでたく、百敷のうちなにごともかはらず。さるべき公事のをりをり、さらでも、院・内、同じ陣のうちなれば、ひとつに立ち混みたる馬車隙なくにぎははしけれど、見し世の人は一人もまじろはず。まわりまかづる顔のみぞかはれる。

先帝 後醍醐は未だ六波羅におはします。二月のころ、空の景色のどやかに霞みわたりに、ゆるらかに吹く春風に、軒の梅懐かしくかをりを來て、鶯の聲うららかなるも、愁はしき御心地にはもの憂かる音にのみきこしめしなざる。異やうなれど、かの上陽人の宮の申思ひよそへらる。長き日影もいとど暮らしがたき御慰めにとや聞えたまひけん、中宮 禮成門院より御琵琶奉らせたまふついでに、いささかなるもののはしに、

思ひやれ塵のみつもるよつの緒に拂ひもあへずかかたる涙を

悶のうちに老い朽ちたことなどが思ひくらべられる。

(五)陛下がお出で遊ばさなくなつてから、手に觸れる人もなく、塵のみ積つた琵琶を、今陛下の御手もとにさし上げようと取り出しますと、その上に涙が拂つても、拂つても、こぼれます。この悲しい私の心をお察し下さい。四つの緒は四絃、琵琶のこと。

(六)涙が雨垂れのやうに落ちる。

(七)御身と一緒に掻き鳴らして楽しんでゐた琵琶の音も、今はすつかり絶つてしまつて、琵琶の絃も朕が御身を戀ひ慕つて泣く涙の玉を貫く緒となつてしまつた。

(八)承久の三上皇遷幸の先例。

(九)いよいよ御遷幸と。

(一〇)中宮はじめ方々の御嘆き。

(一一)このやうに甚だ取り亂してゐる體を他人に見られまいと。

(一二)保元・承久などの昔の例を思ひ出されても、また都に還つてもとの安らかな生活をなされることはむづかしいから、萬事今が最後であると思案遊ばされるにつけ。(一三)この情ない悪因縁をもたらし

げにと思しやるに、いと悲しくて、玉水の流るるやうになむ。御返し、
かきたてし音を絶ちてはてて君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける
かの承久のためしにとや、東より御使には長井の右馬助高冬といふ者なるべし。これは頼朝の大將の時より、鎌倉に重き武士にて、いまだ若けれども、かかる大事にも上せけるとぞ申しける。つひに隱岐國へ遷し奉るべしとて、三月のはじめの七日、都を出でさせたまふ。今はときこしめす御心まどひども、いへばさらなり。ところどころの嘆き、近うつかうまつりし人人の心地ども、おきどころなく悲し。帝後醍醐も限りなく御心惱むべし。いとかうしも人に見えじと、かつは思ししづむれど、あやにくにすすみ出づる御涙をもて隠しつおはします。ふりにしことを思し出づるにも、立ち返りまた世をやすく思さんことのといと難ければ、よろづ今をとぢめにこそと思しめぐらすに、人やりならず、口惜しき契り加はりける前の世のみぞつきせず怨めしき。
つひにかく沈みはつべき報いあらば上なき身とはなに生まれけん
巳の時ばかりに出でさせたまふ。網代の御車に、御前どもなどは故院後宇多の御代よりつかうまつり馴れにしものども、ある限りまゐれり。御車寄に西園

(二)最後にこのやうに沈淪してしまふといふ悪因縁があるなら、どうして自分は至尊の身と生まれたのであらう。

(一)「むら時雨」参照。

(二)つぎつぎに聯想されて。

(三)その折に人人の引出物に下賜された御衣を、今日は召し返して御旅衣に裁ちかへられるのも。

(四)御車に召されようとして。

(五)この六波羅の板ぶきの假住居は實にいやだと思つたが、これからさき自分の赴く方にまたこれ以上の辛いことがあるならば、こんな不愉快な住居とは言へ、まだあの時代の方がよかつたと、戀ひしく思ひ出されるかも知れない。

(六)北條氏の殊遇をうけてゐる者だけ。

(七)このやうな悲しい御幸でも。

(八)御車を停めらる。

(九)拜觀者の車は雑踏して身動きできないほどである。

(一〇)相當な身分の女性も、市女笠に小袖を著、兩袂を折つて腰に挟んだ壺装束などをして、徒歩の者の中にまじつてお見送りした。

寺の中納言公重さぶらひたまふ。上後醍醐は御冠に世の常の御直衣・指貫・白綾の御衣ひとかさね奉れり。去年の今日は北山にて花の宴せさせたまひしもあはれに思し出でられて、その日のこと、かきつらね戀しくおぼさる。人人の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに定めなき世のならひ、今さら心憂し。御車に奉るとて、日ごろおはしましつるかたはらの障子に書きつけさせたまふ。

いさ知らずなほ憂きかたのまたもあらばこの宿とても忍ばれやせん

御供には内侍の三位殿麗子・大納言の君・小宰相など、男には行房の中將・忠顯の少將ばかりつかうまつる。おのがじし都の名残ども言ひつくしがたし。六波羅よりの御送りの武士、さならでも名あるつはものども、千葉介貞胤をはじめとして、おぼえ異なる限り十人選びて奉る。色色の綾錦の、水干・直垂などいふもの、さまざまに織りつくし、染めつくして、いみじききよらを好み調へたれば、かくてしも、世にめづらしき見物なり。六波羅より、七條を西へ、大宮を南へ折れて、東寺の門の前に御車おさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車とこそせきほどなり。よろしき女房も、壺装束などして、徒歩の者

(一) 憂き世のどんぞこは今すつかりきはめつくした氣持ちがした。

(二) 保元物語参照。

(三) 「新島守」参照。

(四) 人づてにばかり聞いてゐて。

(五) 日ごろは少しも醜顔をも拜したくない數ならぬ人や、日蔭者までが。

(六) 一木一草も御目のひかれぬのはなかつた(御名殘惜しさに)

(七) 大鏡、菅原道眞筑紫左遷の條に「君が住む宿の梢をゆくゆくも隠るるまでにかへりみしはや」

(八) 一寸箸をおつけになつただけで、お下げになつた。

(九) 京に残る御先驅の者どもががらの御車を泣く泣く送つて歸るといふので、悲嘆にくれて泣きまどふさまは。

(一〇) 桂川・淀川に浮橋を渡す役で檢非違使の職務。

どももうちまじれり。さらでも、老いたるも、尼法師、あやしき山賤^{がた}まで立ち混みたるさま、竹の林に異ならず。おのおの目押し拭^{ぬぐ}ひ、鼻嚙^すりあへる氣色^{けしき}ども、げに憂^{うれ}き世のきはめは今につくしつる心地ぞする。崇徳院^{すんてい}の讃岐におはしましけんほどのありさま、後鳥羽院^{ごう}の隱岐にうつらせたまひけん時なども、さこそはありけめなれど、つてにのみ聞きて、見ねば知らず。これをはじめたる心地ぞする。日^ひごろは、なにの御にほひにも觸れず、數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御別れのあはれさ、なべておきどころなげにぞまどひあへるかし。君後醒^さ醒も、御簾^{みすだ}すこしかき破^やりて、このもかのも御覽^みじわたしつ、御目^みとまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士^{ぶし}の鎧^{よろい}の袖^{そで}ももしほれりとぞ見ゆる。都の梢^てをかくるまで御覽^みじ送るも、なほ夢かと覺ゆ。鳥羽殿におはしまし著きて、御よそひ改め、破^や子^こなどまゐらせけれど、氣色^{けしき}ばかりにてまかづ。これより御輿^{こし}に奉れば、とまるべき御前^{ごぜん}どもの、空しき御車を泣く泣くやりかへるとて、くれまどひたる氣色、いとたへがたげなり。

かくて君後醒^さ醒は遙かに赴かせたまふ。淀^{よど}のわたりにて、むかし八幡^やの行幸ありし時、橋^{はし}わたしの使なりし佐佐木佐渡の判官高氏といふもの、今は入道し

(一) お前が今先導する道は、隠岐の方へであつて、昔八幡行幸の際にお前が先導した道とは全然違つてしまつてゐようとも、この淀の渡しは昔どほりであるから、よもや當時のことを忘れはしまし。

(二) このやうな變な御宿。(佐佐木判官時信の家。「むら時雨」參照)

(三) なにをして御覽に入れたらよからうかと、お宿の主人の時信は一所懸命に奔走して騒ぐ。

(四) 自分こそお前と別れて遠い旅に立ち出るが、花よ、お前はやはり、今まで自分を慰めてくれた通り、相變らず後に淋しく残るこの家の主人を慰めてくれ。

(五) 攝津國河邊郡伊丹町西。

(六) 幸ひに生きながらへてゐたので、歌枕の昆陽の宿の軒端の月も見る事ができた。これからさき悲しい憂い境遇ではあるが、命さへあらばといふ希望が出て来る。(七) 御心の中に御祈願遊ばされる筋があらう。

(八) 武庫郡廣田村、天照大神の荒魂を祭る、式内社。

て、今日の御送りつかまつるに、その世のこと思し出でられて、いと忍びがたさに賜はせける。

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ

またの日は中務のみこ尊良土佐國へおはします。御供に爲明中将まゐる。日ごろかくあやしき御やどりにもしたまふを、かたじけなく思ひきこえつるに、遙かなる世界にさへ出でおはしませば、ましていかさまなるわざをして御覽ぜられんと、あるじ時信けいめいし騒ぐ。宮尊良すでに立たせたまふとて、瓶にさしたる花を折りて、

花はなほとまるあるじにかたらへよわれこそ旅に立ち別るとも

同じ日、やがて妙法院の座主尊澄法親王も讃岐國へおはします。

先帝後醍醐は今日津の國昆陽野の宿といふ所に著かせたまひて、夕づく夜ほのかにをかしきをながめおはします。

命あればこやの軒端の月も見つまたいかならんゆく末の空

昆陽より出でさせたまひて、武庫川・神崎・難波・住吉など過ぎさせたまふとて、御心のうちに思すすぢあるべし。廣田の宮のわたりにても、御輿とどめて、

(九) 建長五年三月後嵯峨院行幸。

「内野の雪」参照。

(一〇) 矢田部郡、生田神社あり。「君すまばとはましのものを津の國の生田の森の秋の初風」(詞花集)などによつて「訪はで」と言つた。

(一一) ほど近くに御父帝が御逗留遊ばすよしをお聞きになるにつけ。

(一二) この旅が自身で思ひ立つたのではなく、逆臣に強ひられてであるが、聞けば御父帝も同じ宿にお泊りなされたとの御ことで、たつたそれだけがせめてもの慰めだ。

(一三) 神戸の築島。

(一四) 在原業平の兄、文徳天皇の頃須磨に籠居した。

(一五) 旅人の袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風(續古今)と詠んだ古への關は、浦より遠方であつたらう。

(一六) 戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふかた(京)より風や吹くらん(源氏物語、須磨)

(一七) 鹽屋・垂水(明石郡)といふ所が景色が佳いので、名をお問ひになると、「鹽屋・垂水でございませう」と奏上したので、「所の名を聞くからしてからい道だね」と

拜み奉らせたまふ。あしやの松原・すずめの松・布引の瀧など御覽じやらるる

も、ふるき御幸ども思し出でらる。生田の里をば訪はで過ぎさせたまひぬめ

り。湊川の宿に著かせたまへるに、中務の宮尊良は、この宿におはしますほど、

間近く聞き奉らせたまふも、いみじうあはれに悲し。宮尊良、

いとせめてうき人やりの道ながら同じとまりと聞くぞうれしき

福原の島より宮尊良は御船に奉る。帝後醍醐は和田岬・刈藻川をうち渡して、

須磨の關にかからせたまふ。かの行平の中納言「關吹き越ゆる」といひけん

は、浦よりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大将の「泣く音に

まがふ」とのたまひけん浦波、今もげに御袖にかかる心地するも、さまざま御

涙のもよほしなり。播磨の國へ著かせたまひて、鹽屋・垂水といふ所をかしき

を問はせたまへば、「さなむ」と奏するに、「名を聞くより辛き道にこそ」と

のたまはせて、さしのぞかせたまへる御さまかたち、ふりがたくなまめかし。

けちかき限りは、あはれにめでたうもと思ひきこゆべし。

大藏谷といふ所少し過ぐるほどにぞ、人丸の塚はありける。明石の浦を過ぎ

させたまふに、「島がくれゆく舟」どもほのかに見えてあはれなり。

仰せられて。

(一八)おそは近く侍する人はみな。

(一九)今の明石。

(二〇)ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ(古今集。古註丸の作といふ)

(一)水の上に浮いてみて消えやすい泡のやうに、憂き世はかなく生きつづけてゐる自分の身にうらやましく思はれるのは、沖に見える思ふことなげな漁夫の釣舟だ。

(二)櫻の花は、憂き春だとも知らず、やはり咲いた。これで見ると都も今や花盛りであらう。

(三)この道に散つてゐる櫻花の枝を見ると、この山に住む人が、わが行幸の道しるべとして折つておいてくれたしをりの跡と見えて、その親切がしみじみ感じられる。

(四)少し方角は違つてゐるが、同じ御道を追うて。

(五)今さら申すまでもないが。

(六)口に出して言へないほど。

水^一の泡のありてうき世をわたる身にうらやましきは海士^{あま}の釣舟

野中の清水^{しみづ}・ふたみの浦・高砂の松など、名あるところどころ御覽じわたさるるも かからぬ御幸^{みゆき}ならばをかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御みだり心地に、御目とまらぬも、われながらいたいうくんじにけるかなと思さる。いと高き山の峯に花おもしろく咲きつづきて、白雲をわけゆく心地するも艶なるに、都のこと數數思し出でらる。

花^二はなほうき世もわかず咲きてけり都も今や盛りなるらん

あと見ゆる道のしをりの櫻花この山人のなさをぞ知る

十二日に、加古川^{かこがわ}の宿といふ所におはしますほどに、妙法院の宮尊澄^{みやうのぼろ}讚岐へわたらせたまふとて、同じ道^{みち}、少しちがひたれど、この川の東^{ひんがし}、野口^{のくち}といふ所までまゐりたまへるよし奏せさせたまへば、いとあはれに相見まほしう思さるれど、御送りのつはものどもゆるしきこえねば、宮尊澄^{みやうのぼろ}むなしく歸らせたまふ御心のうち、たへがたく亂れまさるべし。さらなることなれど、かばかりのことだに御心にまかせずなりぬる世の中、いへばえに、つらく恨めしからぬ人なし。

(七)お前たちも今のわれを痛はしく思ふであらうが、われもお前たちをわが民と思つて愛する心は昔と變らない。

(八)山麓の庵に焚けるしばしばも言聞ひ來なむ戀ふる山人(源氏物語、須磨、源氏君歌)

(九)民のかまどをかく近く見ようとは、自分がかつて思つたことがあらうか。遠くからいろいろ想像してゐただけであつたのを。

(一〇)都のと變らず咲くここの櫻の花を見ると、都の花の形見のやうに思へて、故郷の花の都がやはり戀ひしく思ひ出されます。

(一一)都を遠く離れた田舎の櫻花はひなびて咲けば都も忘れられて面白いのに、色も香も都と同じやうに咲くのは、かへつて昔が戀ひしく思はれて、つらく感じられる。

(一二)この旅はつらい旅だとばかり思ひ切つてもしまふまい。たとへ一枝でもこのやうに美しい花が咲いて、その花のなさげに慰められる場合には。(秀朝の情深いのをよるこんだ歌でもあらう)

十七日、美作の國におはしまし苦きぬ。御心地惱ましくて、この國に二三日やすらはせたまふほど、かりそめの御やどりなれば、もの深からで、さぶらふ限りの武士ども、おのづからけちかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひきこゆ。君も思しつづくることありて、

あはれとはなれも見らんわが民と思ふ心は今もかはらずおはしますにつづきたる軒のつまより、煙の立ち來れば「庵に焚ける」とうち誦ぜさせたまへるも艶なり。

よそにのみ思ひぞやりし思ひきや民のかまどをかくて見んとはける。二十一日、雲清寺といふ所にて、いとおもしろき花を折りて、忠顯少將奏しける。

かはらぬを形見となして咲く花の都はなほも忍ばれぞする御かへし後醍醐、

色も香も變らぬしもぞ憂かりける都の外の花の梢はまた、小山の五郎秀朝とかやいふ武士に同じ花をやるとて、少將忠顯うき旅と思ひははてじ一枝も花のなさげのかかるをりにて

(一)日數も積り、越えゆく山もいくつとなく重なるにつれて、だんだん花も散りがちにのみなつて行つて、上り下りする羊腸たる坂路に、大層白く落ち積つた。

(二)たとひ將來都に歸ることが出来て、この同じ道をゆききしようとも、この美しい櫻花の咲く春景色をまた見ることは難かしからうまして歸京のあてのない今は。

(三)大層むつかしいとは思召しながら、やはりそれでも丈夫でさへあれば、自然御難の御本意をとけて、再び上洛することもあらうと、御自分で慰めていらつしやるのも、心細い御ことである。

(四)美作國久米郡。
(五)かねてから歌枕として聞いてゐたこの久米のさら山を、このやうにして越えてゆく道とは豫期してゐただらうか。否、そんなことは夢にも豫期しなかつたのに。

(六)美作國眞島。
(七)この美作の逢坂の關は、都で聞いてゐた、あの京近くの逢坂の關と同じ名であるが、さうなら、これを都に立ち歸るために越えて行く關と思ひたいものだ。

かくてなほおはしませば、來し方はそこはかとなく霞みわたりて、「あはれに遠くもなりにけるかな」と、日數にそへて都のいとど隔たりはつるも心細うおぼさる。ほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山もかさなるにそへて、うつろひまさりつつ上り下りするつづらをりに、いと白く散りつもりて、むら消えたる雪の心地す。

花の春また見んことのかたきかな同じ道をば行きかへるとも

いとかたしとは思すものから、なほさりとまたひらかにだにあらば、おのづから御本意とぐるやうもありなんなど、御心もて慰めおぼすもはかなし。久米のさら山といふところ越えさせたまふとて、

聞きおきし久米のさら山越えゆかん道とはかねて思ひやはせし

逢坂といふは、東路ならでもありけりときこしめして、

立ち返り越え行く關と思はばや都に聞きし逢坂の山

三日月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけんこと思し出づるさへ、げに憂かりけるためしなり。

傳へ聞く昔がたりぞ憂かりけるその名ふりぬる三日月の松

(八)美作と伯耆の國境。

(九)承久の亂に隱岐遷幸の際に、「都人たれ踏みそめて通ひけんむかひの道のなつかしきかな」

(一〇)その名も舊くから聞こえてゐる三日月の松のほとりて人から傳へ聞く後鳥羽院の悲しい昔物語も、よそごとならず辛らく思ふよ。

(一一)後鳥羽院の隱岐遷幸などの場合には。

(一二)どうしてさう月日も知らぬ自分であらうか。今日は都にゐた時衣がへをした日ではないか。それになぜかうも月日を忘れてしまふのだらう。

(一三)能義郡安來の港。

(一四)後鳥羽院の舊跡。

(一五)後鳥羽院の御こと。

御道半ばになりぬれば、御送りの者ども、上下都出でしよりも、なほ花やかに、

今めかしうさうぞきかへたり。おほかたはあやしうさまことなる御幸なれど、

道すがらの御まうけ、國國に心遣ひしたる氣色などは、かうさまの御ありきと

は見えず、いとやんごとなくなむ。さはいへど、今まで國のあるじにて、世を

もいみじう治めさせたまへりつる名残にやあらん、いとねんごろにのみつかう

まつれり。いにしへの御幸どもにはかうはあらざりけりとぞ、ふるきこと知れる

人人いひ侍りける。四月一日のころ、百敷の宮の中思し出でられて、

さもこそは月日も知らぬわれならめ衣がへせし今日にやはあらぬ

出雲の國安來の津といふ所より御船に奉る。大船二十四艘、小舟どもはしに

數知らすつれたり。遙かに押し出すほど、今一霞み心細うあはれにて、まことに

「二千里の外」の心地するも今さらめきたり。かの島におはしまし著きぬ。

昔の御跡はそれとばかりのしるしだになく、人の住家も稀れに、おのづから海

士の鹽やく里ばかり遙かにて、いとあはれなるを御覽するにも、御身の上はさ

しおかれて、まづかのいにしへのこと思し出づ。かかる所に世をつくしたまひ

けん御心のうちいかばかりなりけん、あはれにかたじけなく思さるるにも、

(一)今またさらに自分がこのやうに流離すること、なによつて思ひ立つたことであるか。それによつて論、この後鳥羽院の御本意を完遂しよう。

(二)海岸よりは少し陸に入つた。

(三)知夫郡黒木村別府。

(四)昔こそ、國司なども、任期中はその國に下つて執務したが、このごろはただ名目だけで、到るところ守護といふ、國司の代官よりもただけしい者を据ゑたから、

武家にのみ躰き従つて、朝廷の御ことは萬事粗略にした。(國司は

官吏、守護は幕吏である)

(五)葛城王陸奥に下向し、國司の冷遇を怒つた時、采女が「安積山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなく」と詠んで機嫌をなほさせたことがある。(萬葉集、

卷十六)

(六)長らく怨めしいとばかり思つて來た武士に對して、今日はその名残りが惜しまれて、別れるのがつらく思はれようとは、自分の豫

期しなかつたところである。

(七)太政官廳(式場)へ行幸。

今はたさらにかくすらへぬるも、なにより思ひ立ちしことぞ、かの御心の末やはたしとぐると思ひし故なり。苔の下にもあはれと思さるらんかしと、よろづにかき集めつきせずなむ。海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしきさまにとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさは、かくてあるべき御身ぞかしと思ししづまるほど、なほ夢の心地して言はんかたなし。そこらまゐりし兵どももまかづれば、かいしめりのどやかにぬる、いとど心細し。昔こそ、受領どもも任のほどその國をしたため行ひしか。このころは、ただ名ばかりにて、いづくにも守護といふものの、目代よりはおぞましきをするたれば、武家のなびきにてのみ、おほやけさまのことはよろづおろそかにぞしける。葛城の大君を陸奥國へ遣はしたりけんも、かくやとあはれなり。

中務のみこ尊良も土佐におはしましつきて、御送りの武士に賜はせける、

思ひきや恨めしかりし武士の名残を今日は慕ふべしとは

かやうのたぐひあまたきこえしかど、なにかはさのみ、みな人もゆかしからず思さるらんとてなむ。

都には、三月二十二日光嚴御即位の行幸なれば、世の中めでたくのしる。

本院 後伏見・新院 花園 ひとつに奉りて、待賢門のほとりに御車立てて見奉らせたまふ。よろづあるべきさまに、ととのほりてめでたし。

まことや、中宮禰子はそのままに御ぐしもたぐる時もなく、沈みたまへる御有様、いとことわりに、遠き御別れの悲しさにうちそへて、御胸のひまもなく思し焦がる。後の位も停められたまひて、院號のさだめなど、人の上のやうにほのかにきこしめすも、うれしからぬ世なり。禮成門院 後京極院事也とかや申すなり。年月は、御身の人わらへなる様にて、天下の騒がれなりしをこそ思し歎き、帝も苦しきことに思しのたまはせけるに、今はなかなかのすぢのことはかけても思さず、さまざまなりし御修法の壇どもあとかたなくこぼちはてて、かきさましぬ。ひたすらにただかかる世の憂さのみ思しまどふに、日ごろふれど御湯なども絶えて御覽じ入れねば、そこはかたなくいとどそこなはれまさりて、ながらふべくも見えたまはず。隱岐 後醍醐よりはたまさかの御消息などの通ふばかりにて、おぼつかなくいぶせきこと多く積もりゆくも、いつを

(九)擬似妊娠のこと。「むら時雨」
參照。
(一〇)今はかへつてそれに關したと(お産)は少しも御心にかかけられず。

(一)御煎薬なども絶對に召し上げられないので、これといふことなく、一層御容態を悪化して。

(二)いつ御再會の期限とも。

(三)このまま離れ離れで死ぬであらうと。

あふせの限りともなく、定めなき世に、やがてかくてやとぢめんとすらんと、かたみにいみじう思さる。

(一) 恒良・成良・善良の三皇子、
(二) 庭の松の縁は老いて黒ずみ、
秋風が冷やかに吹きつける。遠地
にいらつしやる父帝と母君の御こ
とを憂へる。蘭の竹葉は繁りに茂
つて白雪が深く埋めてゐる。竹の
圍生に皇子皇女が多くいらつしや
るが、みな逆夢に沈淪されてゐる
のを悲しむ。

(三) つくづくとも思ひにふけり
ながら一日を暮らして、入相の鐘
の音を聞くにも、遙か西方にいま
す父君が戀ひしい。つくづく――
鐘の縁語。

(四) しょんぼりと御涙顔で。

(五) 爲世の孫、爲定の妹。「春の
別れ」参照。

(六) 宣旨の祖母、爲世の妻。

(七) 祖母の死後大分時がたつてゐ
たので。

(八) 私はあなたが先に主上と遠く
お別れ遊ばした御不幸の上に、ま
た最近祖母上をおなくしになると
いふ重ね重ねの御不幸にお逢ひに
なつたといふことを聞いてゐまし

かしこにまわりたまへる内侍三位麗子の御腹にも、御子たちあまたおはしま
す。いづれも未だいわけなき御ほどにはあれど、もの思し知りて、いみじう戀
ひきこえたまひつつ、をりをりは忍びてうち泣きなどしたまふ。をさなうもの
したまへば、遠き國までは遷し奉らねど、もとの御後兒をば改めて、西園寺の
大納言公宗の家にぞわたし奉る。八つになりたまふぞ御兄ならんかし。北山
におはするほど、夕暮の空いと心凄う、山風あららかに吹きて、常よりももの
悲しくおぼされければ、

庭松縁老秋風冷　　蘭竹葉繁白雪埋

つくづくとながめくらし入相の鐘のおとも君ぞこひしき

幼なき御心に、はかなくうちひそみたまへる、いとあはれなり。ここもかしこ
もつきせず思し嘆く様、言はずともみなおしはかるべし。

宮の宣旨もいたう時めききて、三位してき。その御腹の若宮法親王は花山
院の大納言師賢御めのとにて、ことのほかにかしづかれたまひしも、このころ
はひき忍びておはします。母君宣旨も世のうさにたへず、さまかへて、心深く
うち行ひつつ、涙ばかりを友にてあかしくらすに、おは北の方さへ失せたるを

たが、お弔ひにお伺ひしては、かへつてあなたのお悲しみを新たにするとお思つて、お訪ねしないで、ひとりお嘆き申して來ました。夢は死を意味するともにも、驚かすの縁語。

(九)つらいことがあつた上に、また重ね重ね不幸に逢つたことを聞きながら、なぜあなたは私を見舞つて下さらないで、ひとり嘆いていらつしやつたのですか。

(一〇)勅勘をお赦し下さるやうに御内意を伺つたけれども、一向その甲斐が見えないから。

(一一)八十餘の老歌人であるこのあはれな私の、わが子の身の上を心配して申し上げる言葉が、どうして天聽に達して御赦免にあづかれないのでせう。(和歌の浦——歌壇、鶴の縁語。夜の鶴——白氏文集、新樂府に、「夜の鶴子を憶うて籠中に鳴く」とある)

(一二)幅のきく執奏役。
(一三)ことわりにくい上、事情が事情なので。

聞きて、時時いひかはしけるなま女房のもとより、ほど經て後なりければ、
うきにまたかさぬる夢を聞きながら驚かさでも嘆き來しかな
返し、宣旨の三位殿、

うきにまたかさなる夢を聞きながら驚ろかさではなど嘆きけん

この兄の爲定中納言も、前の御代 後醍醐にはおほえ花やかにて、いと時なりにしにひきかへ、しめやかにつれづれと籠りぬれば、おほぢの大納言爲世たびたび 後伏見の御氣色賜はられけれど、いとふようなれば、心もとなう思ひわびて、東宮大夫通顯の君して、重ねて奏しける。

和歌の浦に八十あまりの夜の鶴の子を思ふ聲のなか聞えぬ

大夫通顯はうけばりたる傳奏などにてはいませざりけれど、この大納言、歌の弟子にて、さりがたき上、ことのさまも故あるわざなれば、直衣のふところに引き入れてまゐりたまへりけるに、院の上 後伏見のどやかにいでぬさせたまひて、世の御物語など仰せらる。をりよくて、思ひ歎くさまなど、ねんごろに語り申して、ありつる文ひき出でつつ御氣色とりたまふ。おほかたいとなごやかにおはします君の、まいてなにはかり罪ある人ならねば、かうじおぼすまでは

(一) 執奏申し上げないことは。

(二) 老歌人の子を案ずる切切たる愁訴が天聴に達しないことがあらうか。必ず達して、御宥免あらうから、安心して待つがよい。

(三) 賀茂の葵祭(四月、中の酉の日)に近衛の中少將を勅使に立てる。その儀を御見物になるための上皇の行幸。

(四) 御乗車るときおそばに侍するもの。

(五) 後醍醐天皇の御企てをおたすけして、笠置などにも御供した聊相。

なけれど、いささかも武家よりとり申さぬことを、御心にまかせたまはぬにより、かく滞^{とどま}るなるべし。後伏見「いと不便^{ふびん}にこそ」とのたまはせて、やがて御返し、

雲^雲の上に聞えざらめや和歌の浦に老いぬる鶴の子をおもふ聲

今年^{まこと}は祭の御幸あるべければ、めづらしさに、人人常よりも物見車心遣ひして、かねてより棧敷などもいみじうつくせり。使どもも、いかで人にまさらんと、かたみに挑^ひみかはすべし。本院^{本院} 後伏見・新院花園・廣義門院寧子・一品宮豊子も忍びて入らせたまふなどぞきこえし。御車寄^{四くろまよせ}には菊亭の右の大臣^{兼季}の御子の實尹^{さねまさ}の中納言まゐりたまへり。殿上人も、よき家の君達^{きんたち}ども、色ゆりたる限り、いとよさらに、好ましう出で立ちつかうまつれり。御隨身なども花を折れるさまなり。出車^{いでくるま}に、色色の藤、躑躅、卯花、瞿麥^{あさしと}、かきつばたなどさまさまの袖口こぼれ出でたる、いと艶になまめかし。

祭など過ぎて、世の中のだやかになりぬるほどに、先帝^{先帝} 後醍醐の御供なりし上達部ども、罪重きかぎり、遠き國國へ遣はしけり。洞院按察大納言公敏、頭おろして忍び過されつるも、なほゆり難きにや、小山判官秀朝^{ひなせ}とかやいふもの

(六) 主上が生まれなくなつて、いやな故里となつてしまつた都を別れ去らうとも、なにを嘆かう。

(七) 北の方。

(八) 今はお別れの時だとおつしやつて、今生の別れをつけて遠く旅立たれる夫の君に彼の世でなければ、いつ再會のあてがあらう。

(九) 後醍醐天皇の笠置行幸に供奉されたかたが多敷にられたが、その中でもことに重罪に處せられるだらうと、世間で噂するのは、死罪に行はれるのであらうか。

(一〇) 産み奉つたのを。

(一一) 通りならず嘆いた。

具して、下野國へときこゆ。

花山院大納言師賢は、千葉介貞胤うしろみにて、下總へ下る。五月十五日あまりに都出でられけり。思ひかけざりしありさまども、いみじともさらなり。

別るともなにか歎かん君すまできふるさととなるる都を

北の方は花山院入道右の大臣家定の御女なり。その御腹にもまた異腹にも君達あまたあれど、それまでは流されず。上のいみじう思ひ歎きたまへるさまあはれに悲しけれど、今は限りの對面だにゆるされねば、はるくるかたなく口惜しく、よろづに思ひめぐらされて、いと人わろし。

今はとて命をかぎる別れ路は後の世ならでいつを頼まん

源中納言具行も同じころ東へゐて行く。あまたの中にとりわきて重かるべく聞ゆるは、さまことなる罪に當るべきにやあらん。内にさぶらひし勾當の内侍は經朝の三位の女なりき。はやうは帝後醍醐むつまじくおはしまして、姫宮などとうで奉りしを、その後、この中納言具行いまだ下臈なりし時よりゆるしたまはせて、この年ごろ二つなきものに思ひかはして過しつるに、かくさまさまにつけてあさましき世を、なべてにやは。日にそへて歎き泣みながらも、同じ都

(一) 澤山に流れて個れてしまつたと思つた涙も、まことにまだ残つてゐた。

(二) 今一層體も流れ失せさうにお泣き遊ばす。

(三) とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ(源氏物語・河海抄)

(四) かく囚はれの身となつて、かひなく生きてだけはあるが、そのうちには空しくはてるべき身だから、どういふ風に身を慮したらよいかわからないはない生活の續けてゐる。初霜のはおくの枕詞、なほ「初」に「果つ」をかく。

(五) かく囚はれの身となつた現在では、もはや、どうしてこの逆境をお暮らしですかと、同じ世にあつてさへ訪ねてくれる人もない。まして將來自分が遠くに流されたら、殺されたりしたら、誰もかまつてはくれるまい。

(六) 俗名高氏。

(七) 自分にはふたたび歸京する時期がないから、この自分に取つては、この逢坂の關は、あの禪丸の詠んだ「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」ではなくて、行く人だけを通

にありと聞くほどは、吹きかふ風のたよりに、さすがこととふ慰めもありつるを、つひにさるべきことは、人の上を見聞くにつけても、思ひまうけながら、なほ今はと聞く心地、たとへんかたなし。この春、君後醍醐の都別れたまひしに、そこらつきぬと思ひし涙も、げに残りありけりと、今一しほ身も流れ出でぬべくおぼゆ。中納言具行は「ものにもがなや」と、くやしうはしたなきことのみ、そこには千千に碎くめれど、めめしう人に見えじと、忍びかへしつ、つれなく作りて思ひ入りぬるさまなり。去年の冬ごろあまたきこえし歌の中に、

ながらへて身はいたづらに初霜のおくかた知らぬ世にもふるかな

今ははやいかになりぬる憂き身ぞと同じ世にだにとふ人もなし

佐佐木佐渡の判官入道道賢伴ひてぞ下りける。逢坂の關にて、

歸るべき時しなればこれやこの行くを限りのあふ坂の關

柏原かしはらといふ所にしばしやすらひて、あづかりの入道道賢まづ東へ人を遣はし

たる、返事待つなるべし。そのほど、物語などなさけなさけしううちいひかはして、道賢「なにごともしかるべき前の世のむくいに侍るべし。御身一つにし

して、歸る人を通さぬ逢坂の關といふわけであらうか。

(八)あなたお一人だけで起されたのではない、戦亂ですから、一層なんとも致しかたがありません。私はこのやうな武士の家に生れて、入道しながら弓矢を取ることにばかり齟齬してゐますのが實に斷腸の思ひでござりますなど、正面からではないが、それとなく覺悟するやうにはのめかすので。

(九)御かたがたの御心中の悲しさは、すっかり御推量できました。(一〇)先帝はなにごとく昔の聖天子に劣らせられず、御立派にあらせられて、當今のやうな澆季の世には過ぎた御器量なので、このやうに御遠島などといふ御ことになられたのであらうとさへ、せめての慰めに存じりました。

(一)普通の世間話をするにつけても、なるほどと思はれる點をとこるところにまじへて。

(二)入道の分限には奢つたと思はれる御酒などを、田舎のこととて簡略で粗末だけれども、然るべく取りつくるつて勧めなどして、よきころあひに膳部を引いた。

もあらぬ亂れは、ましてかひなきわざにこそ。かくたけき家に生まれて、弓箭ゆみやとるわざにかかづらひ侍るのみ、憂きものに侍りける」など、まほならねどほのめかすに、心えはてられぬ。隱岐の御送りもつかうまつりしものなれば、御道すがらのことなど語り出でて、道譽「かたじけなう、いみじうも侍りしかな。

まして、朝夕近うつかうまつり馴れたまひけん御心ども、さながらなむ、おしはかりきこえさせ侍りき。なにごとくも、昔に及び、めでたうおはしましし御ことにて、世くだり時衰へぬる末には、あまりたる御有様にや、かくもおはしますらんとさへ、せめては思ひたまへよらるる」など、おほかたの世につけてもげにとおぼゆるふしぶし加へて、のどやかに言ひをるけはひ、おのがほどには過ぎにたる御酒みきなど、所につけてこそぎあらあらしけれど、さるかたにしなして、よきほどにて、下しつる東あづまよりの使、歸り來る氣色しるけれど、ことさらに言ひ出づることもなし。いかならんと胸むねうちつぶれておぼゆるも、かつはいと心弱しかし。いづくの島守しまもりとなれらんもあぢきなく、誰も千とせの松ならぬ世に、なかなか心づくしこそまさらめ。つひに逃るまじき道はともかくても同じこと、その際の心亂れなくだにあらば、すずすずしきかたにも赴きなんと思

(二) 心がびくびくするものも、一方覺悟の前のはずなのに、氣が弱いことであるよ。

(四) どの島に流されようと面白くなく、誰も千年の齡までも生きられもしない世なのに。

(五) 極樂淨土。

(一) なりに構ひますまい。

(二) 深刻に感じる。

(三) 消えかけてゐる露のやうにはかない自分の命の最後はもはや見ることが出來た。それにつけても幕府の末路がどうなるか知りたいものである。

(四) 出家はしてもやはりこの世に執念が残つてゐるらしく見えて、憎惡のあらはれた詠み口だ。

(五) 色色心中には煩悶もあつたらうけれど、ひどく體裁が悪くもなかつた。當然のことと覺つた様に見えた。(六月十九日刑死)

(六) 勾當内侍。

ふ心は心として、都のかたも戀しう、あはれにさすがることぞ多かりける。よろづにつけて、ことのけしきを見るに、行く末遠くはあるまじかんめりと悟りぬ。預がほのめかししも、情ありて思ひ知らずれば、同じうはと思ひて、またの日、具行「頭おろさんとなむ思ふ」といへば、道譽「いとあはれなることにこそ。東のきこえやいかがと思ひたまふれど、なんでふことかは」とゆるしつ。かくいふは六月の十九日なり。かのことは今日なめりと氣色見知りぬ。思ひまうけながらも、なほためしなかりける報いのほど、いかが淺くは覺えん。

消えかかる露の命のはては見つさてもあづまの末ぞゆかしき

なほも思ふ心のあるなめりと、憎き口つきなりかし。その日の暮つかた、つひにそにて失はれにけり。今はの際も、さこそ心のうちはありけめど、いたく人わらうもなく、あるべきことと思へるさまになむ見えける。内侍の待ち聞く心地いかばかりかはありけん。やがて様かへて、近江國高島といふわたりに昔のゆかりの人人尊く行ひて住む寺にぞたち入りぬる。

萬里小路中納言藤房は常陸國に遣はさる。父の大納言宣房おもとなど、

(七)實は相摸國早川宿で斬首。
(五月二十二日刑死)

(八)偈の類、歌誦といふこと。

(資朝六月二日刑死)

(九)晋の僧肇が刑せられた時の偈
「四大もと主なし、五蘊本來空
なり。頭をもて白刃に臨めば、
なほ春風を斬るに似たり」(禪林
類集)より脱化す。宇宙は地水火
風の四大元素からなつてゐるが、
これらの四大にはもとから主はな
い。人の身心は、色蘊(眼耳鼻舌
身の五官)と受蘊(知覺)と想蘊
(想像)と行蘊(意志)と識蘊(判
斷)とから成つてゐるが、これら
五蘊は本から空なものだ。だから
わが頭を以て白刃の上に傾けて
も、空を以て膚を斬るのだから、
ただ夏の風を斬るやうなもので、
なんら障礙も煩悶もない。
(一〇)六月三日鎌倉にて刑死。

老の末に引き別るる心地ども、いへばさらなり。身にかへてもとどめまほしう
思へど、かひなし。弟の季房の宰相も、頭おろしたりしかど、なほ下野國へ流
さる。平宰相成輔は東へときこえしかど、それも駿河の國とかやにてそこなは
れける。

また元亨の亂れのはじめに流されし資朝の中納言をも、未だ佐渡の島にしづ
みつるを、このほどのついでに、かしこにて失ふべきよしあづかりの武士に仰
せければ、このよしを知らせけるに、思ひまうけたるよいひて、都にとどめ
ける子のもとに、あはれなる文書きてあづけけり。すでに斬られける時の頌と
ぞ聞き侍りし。

四大本無^ナ主

五蘊本來空^{ナリ}

將^ナ頭傾^レ白刃^ニ

但如^シ鑽^ル夏風^ニ

いとあはれにぞ侍りける。

俊基も同じやうにぞきこえし。かくのみ、みなさまざまに罪にあたり、遠き
世界にはなち捨てらるる、おのおの思ひ歎きども筆も及びがたし。大塔の尊雲
法親王ばかりは、虎の口をのがれたる御さまにて、ここかしこさすらひおはし

(一)お氣の休まる時とてなく、しまひにはどうなる御身であらうと、お氣の毒に見えた。

(二)どれほど重い罪を犯したといふので。

(三)どうかしてその罪をもあがなひたいと思しめされて、ひたすら御精進で、朝夕勤行を遊ばされる。それとともに、妙法の效驗も試みがてら、大願も成就したいと、一方では思しめされるであらう。

(四)どこをさして漕いで行くのだらうか。

(五)浪の上に浮いて漂つてゐるあまの釣舟の志して漕いで行く方向を問ひたいものである。

(六)須磨のあまの浦漕ぐ舟の楳緒絶え寄るべなき身ぞ悲しかりける(續古今集、小野小町)

(七)まして場所がら極めて惜しい御身を、御自身でも大變勿體なくおぼしめされた。

ますも、やすき空なく、いかで過しはつべき御身ならんと、心苦しくも見えたり。

隱岐の小島 後襲船には、月日ふるままに、いと忍びがたう思さるることのみぞ數そひける。いかばかりのおこたりにて、かかる曇き目を見るらんと、前の世のみつらくおぼし知らるるにも、いかでその罪をも報いてんとおぼして、うちたえて御精進にて、朝夕つとめ行はせたまふ。法のしるしをも試みがてらと、かつはおぼすなるべし。みづから護摩などもたかせたまふに、いと頼もしきこと夢にも現にも多くなむありける。つれづれに思さるるをりをりは、廊めくところ立ち出でさせたまひて、遙かに浦のかたを御覽じやるに、あまの釣舟ほのかに見えて、秋の木の葉の浮かべる心地するも、あはれに、「いづくをさしてか」と思さる。

五 ところざすかたを問はばや浪の上に浮きてただよふ海士の釣舟

六 「浦こぐ舟のかちをたえ」とうち誦して、御涙のこぼるるをなにとなくまぎらはしたまへる、いふよしなく心深げなり。ねびたまひにたれど、なまめかしうをかしき御さまなれば、所につけては、ましてやんごとなきあたらしさを、み

(八)なにかにの方面方面につけて、やかましく騒ぎ合つてゐるのも。

(九)一方先帝の御かたでは。

(一〇)能書の人がないから、隱岐へ參つた行房の中將・藤原行成の裔、一條と號すを召し返さうかなど、廟議で決しかねてをられるのを、事前に。

(一一)都の沙汰があるとかいふ噂のお前を召還するといふ件は、一體どうなるであらうか。

(一二)重大な用件ならともかくですが、書道くらゐのことで、陛下がかういふ御有様でいらつしやるのをお見上げ申しながら、そのまゝいやな都にどうして歸れませう。

(一三)主上はそのまま引き續いて、晨朝の勤行を遊ばされるから、朝風がひどく猛烈に吹いて来る上に、霰の音までがたまらなくものすこく聞えて、非常に寒い夜を、侍臣たちが氷を叩き破つて、水を汲み、佛に闍伽を奉るのも、山寺の小法師どものやうな氣持ちがする。

づからいとかたじけなしと思さる。

京には、十月になりて、御禊・大嘗會などのいそぎに、天の下もの騒がしう、内藏寮・内匠寮・うち殿・染殿そよどの、なにくれの道道につけてかしがましうひびきあひたるも、片かたつ方は涙のもよほしなり。悠紀・主基の御屏風の歌、人人に召さる。書くべきもののなければ、かしこへまゐれる行房中將をや召し返されましなど定めかねたまふを、まだきに後醍醐傳へきこしめしければ、夜居の間の静かなるに、御前にことに人もなく、この朝臣行房ばかりさぶらひて、昔今の御物語のたまふついでに、後醍醐「都にいふなることは、いかがあらんとすらん。さもあらば、いとこそうらやましからめ」とうち仰せられて、火をつくづくながめさせたまへる御まみの、忍ぶとすれど、いたうしぐれさせたまへるを見奉るに、中將行房も心づよからず、いと悲し。「いかばかりの道ならば、かかる御有様を見おきこえながら、うき故郷にはいかで歸らん」と思ふも、えきこえやらす。後夜の御行ひにさながらおはしませば、潮風いとたかう吹き來るに、霰の音さへたへがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて、闍伽たてまつるも、山寺の小法師ばらなどの心地ぞするや。少將忠顯この

(二)「今一度どうにかして天下を御心のままにしたいたいものだ」と、人の心の二心あるものとなひものとの差別がわかるものにつけても、ますます深くお考へになるやうなことばかりが無數にあつた。

(三)元應元年十一月十五日。

(四)格別樂しみにしてゐた。

(五)その御子の宣房卿もしかるべき政務の場合には出仕された。

(六)御親祭のために太政官廳から悠紀主基の神殿への行幸。
(七)行幸の鹵簿の先導役。

(八)四月二十八日改元。

(九)河内國南河内郡。千早はその中腹にある。

中將行房など檣折りてまゐれるも、「いつ習ひてか」とあはれに御覽ぜらる。後醍醐「今一たび、いかで世を御心にまかするわざもがな」と、人の心のけぢめわかるるにつけても、深うおぼしまさることのみ數知らず。

都光嚴には十月二十五日御輿の行事なり。女御代には大炊御門大納言冬信の女いださるときこゆ。十一月十一日より五節はじまる。前の御代 後醍醐には談天門院忠子の御忌月にてとまりにしかばさうさうしかりしに、めづらしくて、若き上人どもなど、心ことに思へり。隱岐の帝の御めとなりし吉田の一品定房も當代光嚴につかへて、五節など奉る心のうちぞあはれにおしはからる。

宣房の大納言もさべき雜務のことなどには出でつかへけり。東宮の大夫 源通顯は内大臣になりて、大嘗會の時も、高御座の行幸に前行とかやなにとかやいふことなどつとめたまふ。右の大臣兼季も太政大臣になりて、清暑堂の神樂に琵琶つかうまつりなどきこえて、よろづめでたくあらまほしくて、年も暮れぬ。

まことや、この四月のころより年の名變りにしぞかし。正慶とぞいふなる。

大塔の法親王尊雲、楠木の正成などは、なほ同じ心にて、世を傾けん謀をのみめぐらすべし。正成は金剛山千早といふ所にいかめしき城をこしらへて、え

(九)大塔の宮の令旨と申して、諸國の兵を味方に引き入れたから、幕府に怨みある者などで、ここかしこに隠れてゐるやうな連中は、ことごとく集まつた。

(一〇)然るべきかくれがによく御身を忍ばせられて、突然意外な場所にお現れになつては、果敢な功名をのみ立てられるから。

(一一)ひどく捨て置けない大事であるとは大騒ぎして。

(一二)頻りに上るといふ風聞だ。

(一三)正成は天王寺の御堂の前を、戦の庭にして迎へ撃ち、進んだり退いたり、寄せたり返したり、あたかも潮が満ちたりひいたりするやうにして戦つてゐるうちに。

(一四)年は容赦なく暮れてしまつたので、春になつてから、決戦が行はれるであらうなどと、取り沙汰しあふも甚だ面倒で、油断のなからぬ時勢である。

(一五)文保元年六月二十一日。

(一六)院廳の別當。

(一七)父子がめでたく相繼いで再度までも大納言に陞進しえたのは、日野家にとつては、大層非常な榮譽であらう。

もいはずたけき者ども多く籠りにたり。さて大塔の宮の令旨とて、國國の兵

を語らひとれば、世に怨みあるものなど、こゝかしこに隠るへばみてをる限り

は集まりつどひけり。宮營は熊野にもおはしましけるが、大峰を傳ひて、吉

野にも、高野にも、おはしまし通ひつ、さりぬべきくまぐまにはよく紛れも

のしたまひて、たけき御有様をのみあらはしたまへば、いとかしこき大將軍にて

おはすべしとて、つき従ひきこゆるものいと多くなり行きければ、六波羅にも、

東にも、いと安からぬことともて騒ぎて、「なほかの千早を攻めくづすべし」

といへば、兵など上り重なると聞ゆ。正成は聖徳太子の御堂の前を軍のその

にして、出で合ひ駆け引き、寄せつ返しつ、潮の満ち引く如くにて、年はただ

暮れに暮れはてぬれば、春になりて、ことどもあるべしなどいひしろふも、いとむつかしう、心ゆるびなき世の有様なり。

さても日野大納言俊光といひしは、文保のころはじめて大納言になりしを

いみじきことに時の人言ひ騒ぐめりしに、その子、このころ、院の執權にて、

資名といふ、また大納言になりぬ。めでたくたびをさへ重ねぬる、いといみじ

かめり。前の御代後醍醐にも、定房一品して、宣房大納言になされなどせしを

(一)やはりかういふやうに世間の人人はうらやましく思つて、いろいろ取り沙汰した。

(二)これが當代の皇后の候補者であらうかと、世間の人人も、早くから結構なことに思つてゐるけれども、どういふわけからか、主上の御寵愛が餘りばつとしないのは残念である。

(三)このかたが結局後には東宮に立たせられるやうである。(のちの北朝の天子崇光・後光嚴兩院)

ば、かうさまにぞ人思ひいふめりし。

内光嚴には女御もいまださぶらひたまはぬに、西園寺の故内大臣實衡の姫君、廣義門院寧子の御かたはらに、今御方とかやきこえてかしづかれたまふを、まゐらせ奉りたまへれば、これや后がねと、世の人もまだきにめでたく思へれど、いかなるにか御おぼえいとあざやかならぬぞ口惜しき。三條前大納言公秀の女、三條季子とてさぶらはるる御腹にぞ、宮宮興仁・強仁あまたいでものしたまひぬる、つひの儲の君にてこそおはしますめれ

(一) 卷名は、卷末の「墨染の色をもかへつ月草の移れば變る花の衣に」といふ、後醍醐天皇の京都還幸を評した時人の詠による。記事は、元弘三年閏二月後醍醐天皇の隠岐脱出から六月京都還幸まで、その間に足利高氏の兩六波羅陷落、新田義貞の鎌倉幕府覆滅などを委細に敘し、波瀾に富む。

(二) 渚の水もなかなか解けない有様は、眼前の世の中の形勢と同じことで、一層憂鬱に思しめされることがつきない。

(三) 年までが越えてしまつたことよと、情なく思しめされた。

(四) ひどく悄然としてしまつた。

(五) 眞言祕密の修法。

(六) 困す。疲勞す。

(七) 「覺めなかつたらよかつたのに」古今集、小野小町の「思ひつづ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」による。

(八) 源氏物語、明石の巻に、源氏の君の夢に父壺屋の帝が現はれて「はや船出したこの浦を去りね」と告げられたことがある。

(九) 源氏物語の明石入道のこと。明石の巻に、入道が舟を用意して

第十七 月草の花

かの鳥隠岐には、春元弘三年來ても、なほ浦風さえて浪あらく、渚の水も解けがたき世の氣色に、いとど思し結ぼることつきせず。かすかに心細き御すまひに、年さへ隔たりぬるよとあさましく思さる。さぶらふ人人も、暫しこそあれ、いみじう屈じにたり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の二月のはじめつかたより、とりわきて密教の祕法を試みさせたまへば、夜も大殿ごもらぬ日數へて、さすが、いたうこうじたまひにけり。心ならずまでもせたまへる曉がた、夢うつつともわかぬほどに、後宇多院、ありしなごらの御面影さやかに見えたまひて、きこえ知らせたまふこと多かりけり。うち驚きて、夢なりけりとおぼすほど、いはんかたなく名殘悲し、御涙もせきあへず、「さめざらましを」とおぼすもかひなし。源氏の大将、須磨の浦にて、父帝見奉りけん夢の心地したまふも、いとあはれに頼もしう、いよいよ御心強さまさりて、かの新發意が御迎へのやうなる釣舟も、便り出で來なんやと待たるる心地した

源氏の君を迎へに來る條がある。しほちは新發意、新たに入道して無上菩薩を求むる意を發する者。

(二〇) つても出て來るであらうと。

(二一) 都でもやはり官軍の勢強く、人心が動搖してゐるやうに奏上されたから、萬事につけて御叡慮を慰められて。

(二二) 警固の武士の油斷してゐる隙をばかりねらつていらつしやるのに。伊勢物語の「人知れぬわが通ひ路の關守は脊骨ごとにもうちも寝ななむ」による。

(二三) 御警衛に伺候してゐる武士どもも、幾分天皇の御意向をそれと悟つて、御味方となつてお仕へしようといふ念を起したから、しかるべき者だけ味方に引き入れて、同じ月の二十四日の早曉に、大層うまじ工夫して、お隠し申し上げて、隱岐島をお連れ出し申した。

(二四) 思ふままの方向に風まで吹いて。

(二五) 午後四時。

(二六) 伯耆國東伯郡の海岸らしい。

梅松論には奈和庄野津浦とある。

(二七) 村上源氏、六條右大臣顯房の裔、但馬前司行高の子、本名を長

まふに、大塔の宮簀雲よりも、あま人のたよりにつけて、きこえたまふこと絶えず。

都にもなほ世の中しづまりかねたるさまにきこゆれば、よろづに思し慰さめて、關守のうち寝るひまをのみ伺ひたまふに、しかるべき時の至れるにや、御垣守にさぶらふ兵どもも、御氣色をほの心えて、なびきつかうまつらんと思ふ心つきにければ、さるべき限り語らひ合はせて、同じ月の二十四日のあけぼのに、いみじうたばかりて、隠ろへ率て奉る。いとあやしげなるあまの釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに押し出だす。をりしも霧いみじう降りて、行く先きも見えず。いかさまならんとあやふけれど、御心をしづめて念じたまふに、思ふかたの風さへ吹きすすみて、その日の申の時に、出雲の國に著かせたまひぬ。ここにぞ、人人心地しづめける。

同じ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所に移らせたまへり。この國に名和の又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いとまうに富めるが、類ひろく、心もさかさかしく、むねむねしきものあり。かれがもとへ宣旨を遣はしたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百餘騎の勢ひにて御迎へにまゐれり。

高といつたが、後醍醐天皇の勅で長年と改めた。

(八)いと猛に。非常に巨富を擁して、親族縁類が蔓延し、聰明な心の持ち主で、この地方の一大豪族として仰がれてゐた者があつた。

(九)東伯郡賀茂。

(一〇)同部船上山の智積寺。

(一一)前隠岐守佐木清高。

(一二)いよいよ關東からも大軍が續續上洛するやうである。

(一三)村上源氏、中納言雅兼の子定房の裔、赤松茂則の子、則村。法名を月澗圓心と號す。

(一四)混雜し騒ぐ。

(一五)このやうな騒動が起つた上はやはり御油断ならぬのか。

またの日賀茂の社といふ所に立ち入らせたまふ。都の御社思し出でられて、いと頼もし。それより船上寺といふ所へおはしませせて、九重の宮になすらふ。これよりぞ、國國の兵どもに御敵を亡ぼすべきよしの宣旨遣はしける。比叡の山へも上せられけり。

かくて隠岐には、出でさせたまひにし晝つかたより騒ぎあひて、隠岐の前の守追ひてまゐるよしきこゆれば、いとむくつけく思されつれど、ここにもその心して、いみじう戦ひければ、引き返しにけり。京にも東にも驚き騒ぐさま思ひやるべし。正成が城の圍みに、そこの武士どもかしこにつどひをるに、かかることさへ添ひにたれば、いよいよ東よりも上りつどふめり。

三月にもなりぬ。十月あまりのほど、にはかに世の中いみじうののしる。なにぞと聞けば、播磨の國より、赤松のなにがし入道圓心とかやいふもの、先帝後醍醐の勅に従ひて攻め來るなりとて、都の中あわてまどふ。例の六波羅へ光嚴行幸なり。兩院後伏見・花籠も御幸とて、上下立ち騒ぐ。馬車走りちがひ、武士どものうち混みののしりたるさまいと恐ろし。されど六波羅の軍強くて、その夜は、かの者ども引き返しぬとて、少し静まれるやうなれど、かやうに言

(一) 東宮の御車に陪乗される。
 (二) 大體は表むき員に備はつてゐるだけで。

(三) 上達部や殿上人までから、身分分に應じて、相當數の武士を御徵發になるから、しまひには弓ひく道にもたよりない若侍までをさし出した。

(四) ほんたうに、白樂天の詩にもあるやうに、自分の腕を折りでもしなければ、徵兵を免れなし形勢だ。(白樂天の長慶集、新樂府にわざと大石を以て臂を折り征蠻の徵發を免れ、天命を全うしたといふ、新豐折臂翁の故事による)

(五) 幕府に對してやましい異心を持たないといふ、並でない誓文を立てて置いて來たけれども、腹の底の所存はどうであらうかと、色色瞻するむきもあつた。

(六) 清和源氏鎮守府將軍頼義の子孫。

頼義—義家—義國—

義軍 (新田氏)
 義康 (足利氏)

ひ立ちぬれば、なほ心ゆるびなきにや、そのまま院後伏見・花園も帝光殿もおはしませば、春宮康仁も離れたまへる、よろしからぬこととて、二十六日六波羅へ行啓なる。内の大臣通顯御車にまわりたまふ。傳は久我の右の大臣長通にいますれど、おほかたの儀式ばかりにて、よろづ、この内大臣通顯御後見つかまつりたまへば、未だきびはなる御ほどをうしろめたがりて、宿直にもやがてさぶらひたまふ。御修法のために法親王たちもさぶらはせたまへり。ここもかしこも軍とのみきこえて、日數ふるに、院よりの仰せとて、上達部・殿上人までもほどほどに従ひて、兵を召せば、弓ひく道もおほおほしき若侍などをさへぞ奉りける。げに臂も折りぬべき世の中なり。かやうにいひしろふほどに、三月も暮れぬ。

卯月の十日あまり、またあづまより武士多く上る中に、一昨年笠置へも向ひたりし、治部大輔源高氏上れり。院後伏見にも頼もしくきこしめして、かの伯耆の船上へ向ふべきよし院宣賜はせけり。東を立ちし時も、うしろめたく二心あるまじきよし、おろかならず誓文書き置きてけれども、底の心やいかがあるらん、とかくきこゆるすぢもありけり。この高氏はいにしへの頼義の朝臣の名殘

(七)内密に噂があつたが、案の條。
(八)山城國葛野郡、丹波へ通ふ路。

(九)一條大宮。

(一〇)二條通りから下、八條通りまで、七條の大路を東にむかつて、七部隊に分かれて、旗を立て續けて、雲霞のやうにおし寄せ、なだれ込むと、さらに刃向ふ者もない

(一一)都の幕府がたを。

(一二)前後左右がわからなくなつて、正氣の人もあない。

(一三)天地に鳴り響くときの聲は初めて、御經驗で、氣味が悪いからただ呆然としてゐられた。

(一四)六波羅廳の武士どもも、半分はわけて金剛山へ向つたから、後の残りで、都にあるだけの軍勢が合戦する。

なりければ、もとのねざしはやんごとなき武士なれど、承久よりこのかた頭さしいだす源氏もなくて埋もれすぎしながら、類ひろく、勢ひ四方にみちて、國に心よせの者多ければ、かやうに國の危きを得て思ひ立つ道もやあらんなど、したにささめくも著く、伯耆國へ向ふべしと言ひなして、まづ西山大原わたりに一泊りして、五月七日ほのぼのと明くるほどより、大宮の木戸どもを押し開きて、二條より下、七條大路を東さまに、七手に分けて、旗をさしつづけて、六波羅をさして雲霞の如くたなびき入るに、さらに面をむかふるものなし。この治部大輔はやうより先帝後醍醐の勅を承はりてければ、さかさまに都を亡ぼさんとするなりけり。関つくとかやいふ聲は雷の落ちかかるやうに、地の底も響き、梵天の宮の中も聞き驚きたまふらんと思ふばかり、とよみあひたるさま、來し方行くさき暮れて、もの覺ゆる人もなし。

帝光嚴・春宮康仁・院の上後伏見・花園・宮たちなど、まして一人さかしきもおはしませず。絲竹のしらべをのみきこしめしならひたる御心どもに、めぐらかにうとましければ、ただあきれたまへり。武士どもなかばを分けて、金剛山へ向ひたれば、さらぬ残り、都にある限りは戦をなす。今を限りの軍なれ

(一) 一日一晩入り亂れ、阿鼻叫喚で明かすに、南北の兩六波羅はあらゆる手をつくして防戦に努めたけれども、つひに警戒線を突破されて、今はいよいよ滅亡と見えた。

(二) 今日が滅亡の時であると豫期してゐたらう者さへ、わが主君のおいで遊ばす限りは、どうして御前を退散したりしよう。

(三) それに、まじてかねてからこんなことを企らんでゐたのも御存じなくて、昨日であつたか、當代の官旨を賜はつた武將が裏切りをしたのだから、誰が豫知しようか

(四) 山城國綾喜郡。

(五) 同國乙訓郡。

(六) 同國紀伊郡。

(七) 同國久世郡。

(八) 近江國栗田郡。

(九) 山城國紀伊郡。

(一〇) 同國愛宕郡。

(一一) 六波羅。

(一二) 六波羅後方の敵の陣。

ば、手をつくしてののしるほど、まねびやらんかたなし。雨の脚あしよりも繁く走りちがふ矢にあたりて、目の前に死をうくるもの數を知らず。一日一夜いりもみとよみあかすに、兩六波羅、残る手なく防ぎつれど、つひに陣のうちやぶれて、今はかくと見えたり。日ごろさぶらひこもりたまへる上達部・殿上人なども、今日と思ひまうけたらんだに、君のおはしまさん限りはいかでかまかでも散らん。まして、かねてよりかく構へけるをも知ろし召さで、昨日かとよ、當代光嚴の官旨を賜はりしものの、かくうらがへりぬれば、誰か思ひよらん。すべて上下となくひとつに立ちこみて、あわてまどひたり。

日ぐらし八幡・山崎・竹田・宇治・勢多・深草・法性寺など、燃えあがる煙ども四方よこの空にみちみちて、日の光も見えず、墨をすりたるやうにて暮れぬ。

ここにも火かかりて、いとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣うしろを辛うじて破りて、それよりまぬがれ出でさせたまふ御心地ども、夢路を辿るやうなり。内の上光嚴も、いとあやしき御姿にことさらやつし奉る。いとまがまがしく、兩院後伏見・花園御手を取りかはすといふばかりにて、人に助けられつつ出でさせたまふ。上達部・大臣たちは榜のそば取りて、冠かんむりなどの落ちゆく

(三)空を歩くやうな夢遊状態で。
(四)巴續史愚抄に「五月七日巳刻、子刻、主上・院・新院・東宮ら六波羅を公御し、車駕を東宮に廻らさる。出御日野中納言(資明卿)右衛門督(經顯)冷泉前中納言(頼定)右兵衛督(隆蔭)ら供奉、六波羅武士越後守仲時、左近將監時益巳下守護し奉る。内侍所は女官の沙汰のため、西園寺大納言(公宗)の北山の第に遷し奉らる。大納言(公宗)東國行幸に従はずして第に歸ると云ふ。(内侍所守護のため申請か)と見ゆ。
(五)下文によると、御幸に供奉して、近江で出家したのであらう。ここは風聞のまま記したのであらう。
(六)はつきりそれとわかつた。
(七)御子の別當は、道道人目を忍ぶために、せんかたなく折烏帽子に布直垂を著て、ほつそりした若い人ではまり、先驅の者共に入りまじつてをられたから、急にはそれと見分けが出来なかつた。
(八)それに松明なども、わざとほさなかつたから、暗い中でもものあやめも知れないから、夫人は早やどうかおなりなかつたのでは

も知らず、空を歩む心地して、あるは河原を西へ東へ、さまざまちりちりになりたまふ。兩六波羅仲時・時益東をさして東へと心がけて落ちければ、御幸も同じさまになる。西園寺の大納言公宗は北山へおはしにけり。右衛門督經顯・左衛門督隆蔭・資明の宰相などは御幸の御供にまゐる。按察の大納言資名は足をそこなひて、東山わたりにとまりぬなどいひしは、いかがありけん。内大臣殿通顯は御子の別當通冬をともしたまひて、八日のあけぼののいまだ暗きほどにわが御家の三條坊門萬里小路におはしまし著きたるに、歩み入りたまふほども心もとなくて、北の方門へ走り出でて、平らかに歸りおはしたると思ふ嬉しさに、急ぎて見れば、大臣通顯は御直衣に指貫ひきあげたまへれば、著く見えたまふ。別當通冬は道のほどのわりなさに、折烏帽子に布直垂といふものうち著て、細やかに若き人の御前どもにまぎれたるは、とみにも見えず。火などもわざとなければ、暗きほどのあやめわかれぬに、はやういかにもなりたまへるにやと心地まどひて、北方「御かたはいかに、いかに」と聲もわななきて聞えける、いとことわりにいみじうあはれなり。

さて御幸は近江國におはしますほどに、伊吹といふほとりにて、なにがしの

ないかと、おろおろされて「吾子はどうかされたか。どうかされたか」と聲もぶるぶる慄へながらおつしやつた。

(二九)近江國坂田郡伊吹山。

(三〇)龜山院皇子兵部卿守良親王。法名覺靜、五辻宮といふ。

(三一)かういふ戰の方面も、いくらか心得てをられたのか。

(三二)北六波羅探題。

(三三)近江國坂田郡。

(三四)部下の者。

(三五)近江國滋賀郡。

(三六)まことにあつけない、えらいことさまだ。

(三七)兩院・主上・東宮たちの供奉には。

(三八)後伏見院からも、都に還御せられれると、直ちに花園院や主上に御文奉られて、御めいめいに御出家あるやうにとまでお勧め遊ばされたけれども、主上は、思ひも寄らないよしを、はつきりお答へ申されたといふお噂であつた。

(三九)梅松論に、「五月中旬に上野國

宮守良とかや、法師にていましけるが、先帝後醍醐の御心よせにて、かやうのかたもほの心え侍りけるにや、待ちうけて矢を放ちたまふ。また京よりも追手かかると聞えければ、六波羅の北といひし仲時、内光嚴・春宮康仁・兩院後伏見・花園具し奉り、番馬といふ所の山の上に入れ奉りけり。手の者どももなほ残りて従ひ附きけれども、戦もかなはずありけん、つひにこの山にて腹切りにけり。同じき雨時益といひしは、これまでもまゐらず、守山のほとりにて失せにけるとぞきこえし。あやなくいみじきことさまなり。御ところどころの御供には、俊實の大納言・經顯の中納言・頼定の中納言・資名の大納言・資明の宰相・隆蔭などぞ残りさぶらひける。俊實・資名・頼定などはやがてそにて鬚切りてけり。一院後伏見よりも、歸り入らせたまふ帝光嚴に御文を奉りたまひて、「面面に御出家あるべし」などまで申されけれども、思ひもよらぬよしを、固く申されけるとかやとぞきこえし。

伯耆後醍醐の御所へは人人まゐりつどふ。上達部・殿上人數知らず。さるほどに、東にもかねて心しけるにや、尊氏の末の一族なる新田小四郎義貞といふもの、今の尊氏の子義詮四つになりけるを大將軍にして、武藏國より軍をおこ

より新田左衛門佐義貞、君の御方として當國世良田に討ち出て陣をはる。これも清和天皇御後胤陸奥守義家三男式部大輔義國子息大炊助義重、陸奥新判官義康の連枝なり。ひそかに勅を承るによつて、義貞の氏族みな打ち立ちけり」とある。

(二〇)高時入道の一族、及びそれに付き従ふ家の子郎黨は一面にはびこつて、鎌倉幕府のはじまつた頼朝の時代の時政から當時に到るまで長年月を經過してゐる。

(二一)ちやうもできない者だけ。

(二二)世の中が騒ぐ。

(二三)前關白太政大臣。

してけり。このころの東の將軍は守邦親王にておはします。御後見つかうまつる高時入道・貞顯入道・城介入道圓明・長崎入道圓基などいふものども、驚き騒ぎて、高時入道弟に四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ大將に下しける。五月十四日、鎌倉を立ちて向ふ。その勢十萬餘騎。高時入道の一族、付き従ふものそこら滿ち廣がりて、鎌倉はじまりし頼朝の世、時政より今に至るまで、多くの年月をつめり。僅かなる新田などいふ國人にたやすくいかでかは亡ぼさるべきとおぼえしに、ほどなく十五日に敵既に鎌倉に近づくよしきこえて、家を毀ち騒ぎののしる。世のすでに滅するにやとおぼえしとぞ人は語り侍りし。四郎左近大夫入道軍にうち負けけるにや、従ふ武士ども残りなく新田がかたへ付きぬれば、えさらぬ者どもばかり五六百騎にて、十六日の夜に入りて鎌倉へ引き返る。僅かに中一日にて、かくなりぬること夢かとぞおぼえし。かくて、日に軍うち負けければ、同じき二十二日、高時以下腹切りて失せにけり。

さて都には、伯耆よりの後醍醐還御とて世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせたまひて、ことども定めらる。二條の前の大臣道平召しありてまゐりたまへ

(一) 天子の再即位。

(二) 御親政の儀。

(三) 藤原一族の氏の上、すなはち上首で、攝政關白の詔をかうむつた者がそれにあたることとなつてゐたが、今は攝關を置かれなから、特に宣下があつた。

(四) 京都のことを管掌すべき旨。

(五) それで天下のことは専ら公の御取りはからひのままであらうといふので、この御一族のかたがたは喜びあつた。

(六) 一年の春は大變ひどく情なかつたわいと思ひ出るにつけても比較しやうない拔群の相違だ。(七) ひどく不氣味な様子であるけれども、今度は厭はしいものに見えず、頼もしい結構な護衛であるよと思はれるのも、現金な觀察である。

(八) 鹵簿の先鋒の護衛部隊。

(九) 後方の護衛の兵。

(一〇) かの名和又太郎長年は伯耆守に任ぜられて、それも衛府の武官のうちに加へられたなど、稀代な光景で、世の中を擧げて歡呼の聲をあげる様子を見て。

(一一) かういふおめでたい還御も

り。こたみ内裏へ入らせたまふべき儀、重祚などにてあるべけれども、聖の箱を御身に添へられたれば、ただ遠き行幸の還御の式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條の大^{おとど}臣、氏長者^{うぢのちやうじや}を宣下せられて、都のこ^{くわ}と管領^{くわんりやう}あるべきよし承はる。天の下ただこの御はからひなるべしと、このひとつ御あたり喜びあへり。六月六日、東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせたまひける。めでたしとも言の葉もなし。去年^{こぞ}の春いみじかりしはや」と思ひ出づるもたとしへなし。今も御供の武士ども、ありしよりはなほ幾重ともな^なくうち圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず。頼もしく、めでたき御まぼりかなと覺ゆるも、うちつけ目なるべし。世の習ひ、時につけて移る心なれば、みなさぞあるらし。

先陣^{せんじん}は二條富小路の内裏に著かせたまひぬれど、後陣^{ごじん}の兵^{つは}はなほ東寺の門まで續きひかへたるとぞきこえしは、まことにやありけん。正成もつかうまつれり。かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛府の者どもにうちまぜたる、めづらしくさまかはりて、ゆすりみちたる世の氣色^{けしき}、かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにか」と、めでたきにつけても、なほ前

あらせられるのに、どうして去年はあんなにお嘆かせ申したことが」と、おめでたいにつけても、やはり主上の御前世が、ひたすらお知り申したい。

(二) 鹵簿拜觀者の車などが、立ち續いた有様は、去年の隱岐遷幸のときとは比較にならないほど多かつた。

(三) 王法のなほ盛んであつた昔でさへ、後鳥羽上皇が恨みを抱いて隱岐の島で崩ぜられたのに、未法の今日、今上が隱岐の島から再び都に還御あらせられたのは、その御稜威のほど、かしこい極みである。おきの海——恨みを置きと、隱岐とをかけ、沈む・波立ち返る(都へ還る)の縁語とした。

(四) 承久の昔。

(五) すつかり頭を垂れて、争つて降参して来る有様は、漢の高祖が關中に入つた時、秦の將兵が降服して見たのも、このやうであつたかと來えた。(史記參照)

(六) 元弘二年八月三十日。

(七) 還俗して護良親王といふ。

(八) 主上の還幸あらせられた時の御護衛の武士どもにもほとんど劣

の世のみゆかし。車など立ち續きたるさま、ありし御くだりにはこよなくまさり。もの見る人の中に、

昔二だに沈むうらみをおきの海に波たち返る今ぞかしこき

昔一のことなど思ひあはするにやありけん。

金剛山なりし東武士どもも、さながら頭を垂れてまわりきほふさま、漢のはじめもかくやと見えたり。禮成門院龜子もまた中宮ときこえさす。六日の夜、やがて内裏へ入らせたまふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なみなほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせたまふ。昔の人人残りなくまわりつどふ。

十三日、大塔一七の法親王尊雲都に入りたまふ。この月ごろに、御髪かみおほして、えもいはず清らかなる男おとこになりたまへり。唐の赤地あかぢの錦の御鏡直垂ゆかたといふもの奉りて、御馬にてわたりたまへば、御供にゆゆしげなる武士どもうち圍みて、帝みかど後襲衛の御供なりしにもほとほと劣るまじかめなり。速かに將軍みかどの宣旨をかうぶりたまひぬ。流されし人人、ほどなく競かひ上るさま、枯れにし草木の春に逢へる心地す。その中に、季房の宰相入道のみぞ、あづかりなりける者の、情

らぬ御威勢であつた。

(二) 屯直ちに征夷大將軍の宣旨を。

(一) 鎌倉の騒動のどさくさまぎれに。

(二) もとから俗塵を出離しようとい念發起したのではない。ただ、敵の目をくらすために假りに刺つたばかりであるから、今また愁眉のひらける時節になつて、さらに還俗するのは、なんの速慮が入らう。

(三) 墨染の衣まで脱ぎ棄てて、滯俗して華やかな美衣に着かへてしまつた。時勢が移れば、それに従つて變る人心の習ひに。(月草の枕詞)

なき心ばへやありけん、東^{とう}のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言宣房、母の尼上など歎きつきせず、胸あかぬ心地してけり。四條中納言隆資といふも、頭おろしたりしまた髪おほしぬ。もとより噓^{うそ}を出づるにはあらず、敵のために身を隠さんとして、かりそめに刺りしばかりなれば、今はたさらに眉をひらく時になりて、男^{をとこ}にならん、なにの憚りかあらんとぞ、同じ心なるどち言ひあはせける。天台座主にていませし法親王無學だにかくおはしませば、まいてとぞ。誰にかありけん、そのころ聞きし、

墨^{すず}染めの色をもかへつ月草のうつればかはる花の衣に